

京都府遺跡調査報告書

第 20 冊

AMA WAKA

天 若 遺 跡

1 9 9 4

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 調査地全景 (1990.1. 北東から)



(2) 調査地全景 (1991.3. 北西から)

卷頭図版2 天若遺跡



(1) 調査地全景 (1992.7. 南西から)



(2) 調査地全景 (1992.7. 南東から)



(1) 陥穴状遺構復原（南西から）



(2) 竪穴式住居跡SH9121周辺（南から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。

今回報告いたします天若遺跡も、「淀川水系における水資源開発基本計画」に基づき、日吉ダムの建設に伴って水没する地区の発掘調査を実施したものです。日吉ダムが建設される河川は大堰川といい、下流域では桂川とも称される、京都府内では由良川に次ぐ大きな河川の一つであります。この大堰川の流域には数多くの遺跡が分布していますが、天若遺跡もその一つで、発掘調査が行われる以前は、中世の集落が存在した可能性が考えられていました。天若遺跡の発掘調査は、平成3年度から試掘調査が始まり、平成2年度から4年度にかけて本調査を実施し、古墳時代の竪穴式住居跡が多数見つかりました。この調査の成果は、当時の集落のあり方を考えるうえに貴重な資料を提供するものと思われます。本書を関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与することができましたら幸いです。

現地での発掘調査にあたりましては、調査を依頼された水資源開発公団をはじめ、京都府教育委員会・日吉町教育委員会などの関係諸機関のご協力を受けました。また、現地及び内部での各作業についても、多くの方々の献身的なご協力を受けました。最後になりましたが、ここに記し感謝いたします。

平成6年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

例 言

1. 本書は、京都府船井郡日吉町に所在する天若遺跡の発掘調査報告書である。
2. 天若遺跡は、水資源開発公団の依頼を受けて、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成元年度から平成4年度にかけて現地調査を実施した。
3. 現地調査及び報告書にかかる経費は、水資源開発公団が負担した。
4. 本報告書の作成は、調査第2課調査第2係調査員三好博喜が行い、編集には大島紀子・田中美恵子の協力をえて、調査第1課辻本和美・土橋 誠が行った。
5. 本書に掲載した遺構図の方位は、すべて国土座標北を指す。
6. 写真撮影は、遺構を各年度の調査担当者が行った。遺物写真は調査第1課田中 彰が行った。また、航空写真は、関西航測株式会社・(株)スカイサーベイが行った。
7. 本書の執筆は、三好博喜が行った。
8. 花粉分析は、株式会社パレオ・ラボに、脂肪酸分析は、株式会社ズコーシャに依頼した。
9. 付表3の計測値の単位はcm、口径・底径の（）内数値は復原値、器高の（）内数値は現存高を表す。残存率については、口縁部から底部まで残存する資料は全体の残存度を大まかな百分率で示し、口縁部のみ残存するものは分数で示した。方向は、ロクロ回転方向を示す。
10. 付表4の長さ・径の計測値の単位はmm、重さの単位はg、長さの（）内数値は現存長、重さの（）内数値は現存重量を表わす。
11. 付載2中の土坑j 40SK1は、本文中の土坑SK40j-P4と同一遺構である。

本文目次

はじめに	1
第1章 調査要綱	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 位置と環境	4
第3節 調査経過	6
第4節 基本層位	17
第2章 検出遺構	19
第1節 竪穴式住居跡	19
第2節 掘立柱建物跡	27
第3節 土坑	28
第4節 陥穴状遺構	29
第5節 井戸跡	33
第3章 出土遺物	34
第1節 出土遺物の概要	34
第2節 遺構出土遺物	35
第3節 遺構外出土遺物	46
第4章 考察	48
第1節 古墳時代集落の時期区分	48
第2節 住居の系譜	52
第3節 古墳時代集落の構造	56
第4節 陥穴状遺構	58
第5章 調査の総括	60
付載1 天若遺跡の花粉化石	77
付載2 天若遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析	81

挿 図 目 次

第 1 章 調査要綱	
第 1 図	調査地位置図-----5
第 2 図	トレンチ配置図-----7
第 3 図	平成 2 年度検出遺構平面実測図-----9
第 4 図	平成 3 年度検出遺構平面実測図-----11
第 5 図	条里状地割り調査トレンチ平面図及び断面図-----14
第 6 図	平成 4 年度検出遺構平面実測図-----15
第 7 図	土層柱状図-----18
第 4 章 考察	
第 8 図	竪穴式住居跡分布図-----48
第 9 図	主要遺構変遷図(1)-----53
第 10 図	主要遺構変遷図(2)-----54
第 11 図	縄文時代遺構分布図-----59

付 表 目 次

第 1 章 調査要綱	
付表 1	試掘調査結果一覧表-----6
第 4 章 考察	
付表 2	竪穴式住居跡出土須恵器類型表-----49
付表 3	遺物観察表-----63
付表 4	土錘一覧表-----75

図 版 目 次

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 図版第 1 | S H9121実測図 |
| 図版第 2 | S H9128実測図 |
| 図版第 3 | S H9127実測図 |
| 図版第 4 | S H9118実測図 |
| 図版第 5 | S H9106実測図 |
| 図版第 6 | S H9113・S H9115実測図 |
| 図版第 7 | S H9111・S H9130実測図 |
| 図版第 8 | S H9114・S H9141実測図 |
| 図版第 9 | S H9112・S H9140実測図 |
| 図版第10 | S H9204・S H9205実測図 |
| 図版第11 | S H9003・S H9122実測図 |
| 図版第12 | S H9123・S H9116実測図 |
| 図版第13 | S H9002・S H9005実測図 |
| 図版第14 | S H9004・S H9203実測図 |
| 図版第15 | S H9001・S H9104実測図 |
| 図版第16 | S H9201・S H9202実測図 |
| 図版第17 | S H9120・S H9125実測図 |
| 図版第18 | S H9101・S H9117実測図 |
| 図版第19 | S H9103・S H9124実測図 |
| 図版第20 | S H9136・S H9126実測図 |
| 図版第21 | S H9105・S H9131・S H9102・S H9119実測図 |
| 図版第22 | S B9022・S B9021・S B9024・S B9023実測図 |
| 図版第23 | S B9025・S B9142・S B9026実測図 |
| 図版第24 | S B9212・S B9211実測図 |
| 図版第25 | 土坑実測図 |
| 図版第26 | 陥穴状遺構実測図(1) |
| 図版第27 | 陥穴状遺構実測図(2) |

- 図版第28 陥穴状遺構実測図(3)
- 図版第29 S E9015実測図
- 図版第30 S H9003出土遺物実測図(1)
- 図版第31 S H9003(2)・S H9122出土遺物実測図
- 図版第32 S H9111・S H9121出土遺物実測図
- 図版第33 S H9128・S H9113出土遺物実測図
- 図版第34 S H9112・S H9116出土遺物実測図
- 図版第35 S H9203・S H9118出土遺物実測図
- 図版第36 S H9205・S H9201・S H9204出土遺物実測図
- 図版第37 竪穴式住居跡出土遺物実測図(1)
- 図版第38 竪穴式住居跡出土遺物実測図(2)
- 図版第39 S K9006出土遺物実測図
- 図版第40 S H9106・S H9002・S E9015出土遺物実測図
- 図版第41 遺構及び包含層出土遺物実測図
- 図版第42 縄文土器拓影
- 図版第43 石製品実測図
- 図版第44 鉄製品・土錘実測図
- 図版第45 (1)空中写真(南西から) (2)空中写真(南東から)
- 図版第46 1次調査区・2次調査区空中写真(南東上空から)
- 図版第47 (1)調査前風景(西から・天稚神社を望む)
(2)調査前風景(南東から・集落を望む)
- 図版第48 (1)第2次調査検出住居跡(北から) (2)竪穴式住居跡S H9001(南から)
- 図版第49 (1)竪穴式住居跡S H9002(南西から) (2)竪穴式住居跡S H9003(西から)
- 図版第50 (1)竪穴式住居跡S H9004(南から) (2)竪穴式住居跡S H9005(北東から)
- 図版第51 (1)第3次調査区遠景(北西から) (2)竪穴式住居跡S H9101(北から)
- 図版第52 (1)竪穴式住居跡S H9102(北西から) (2)S H9102竈(北西から)
- 図版第53 (1)竪穴式住居跡S H9103(南西から)
(2)竪穴式住居跡S H9104(南西から)
- 図版第54 (1)竪穴式住居跡S H9106(南西から) (2)S H9106竈(南西から)
- 図版第55 (1)竪穴式住居跡S H9111(南から) (2)S H9111竈(南から)
- 図版第56 (1)竪穴式住居跡S H9112(西から) (2)S H9112竈(西から)
- 図版第57 (1)竪穴式住居跡S H9113(南から) (2)S H9113竈(南から)

- 図版第58 (1) 竪穴式住居跡 S H9113・S H9115(西から)
(2) 竪穴式住居跡 S H9115(南西から)
- 図版第59 (1) S H9115竈検出状況(南西から) (2) S H9115竈(南西から)
- 図版第60 (1) 竪穴式住居跡 S H9114(南東から) (2) S H9114竈(南東から)
- 図版第61 (1) 竪穴式住居跡 S H9116(南から) (2) 竪穴式住居跡 S H9117(西から)
- 図版第62 (1) 竪穴式住居跡 S H9118(西から) (2) S H9118竈(西から)
- 図版第63 (1) 竪穴式住居跡 S H9122(南東から) (2) S H9122竈(南東から)
- 図版第64 (1) 竪穴式住居跡 S H9127(南東から) (2) S H9127竈(南東から)
- 図版第65 (1) 竪穴式住居跡 S H9128(北東から) (2) S H9128竈(南東から)
- 図版第66 (1) 竪穴式住居跡 S H9130(南から) (2) S H9130竈(南から)
- 図版第67 (1) 竪穴式住居跡 S H9140(西から) (2) S H9140竈(西から)
- 図版第68 (1) 竪穴式住居跡 S H9141(東から) (2) S H9141竈(南から)
- 図版第69 (1) 竪穴式住居跡 S H9105(南東から)
(2) 竪穴式住居跡 S H9119(南東から)
- 図版第70 (1) 竪穴式住居跡 S H9120(南東から)
(2) 竪穴式住居跡 S H9121(南東から)
- 図版第71 (1) 竪穴式住居跡 S H9123(南から)
(2) 竪穴式住居跡 S H9124(北西から)
- 図版第72 (1) 竪穴式住居跡 S H9125・S H9126(東から)
(2) 竪穴式住居跡 S H9131(北西から)
- 図版第73 (1) 4次調査区全景(南東から) (2) 竪穴式住居跡 S H9201(北東から)
- 図版第74 (1) 竪穴式住居跡 S H9202(南東から)
(2) 竪穴式住居跡 S H9203(南東から)
- 図版第75 (1) 竪穴式住居跡 S H9204(南東から) (2) S H9204竈(南東から)
- 図版第76 (1) 竪穴式住居跡 S H9205(南から) (2) S H9205竈(南から)
- 図版第77 (1) 条里状地割り調査トレンチ(北から)
(2) 掘立柱建物跡 S B9021(北西から)
- 図版第78 (1) 掘立柱建物跡 S B9022(南東から)
(2) 掘立柱建物跡 S B9023(南東から)
- 図版第79 (1) 掘立柱建物跡 S B9221(南西から)
(2) 掘立柱建物跡 S B9222(北西から)
- 図版第80 (1) 井戸跡 S E9015上層(北西から) (2) 井戸跡 S E9015中層(東から)

- 図版第81 (1)井戸跡 S E 9015下層(南東から)
(2)井戸跡 S E 9015完掘状況(南東から)
- 図版第82 (1)土坑 S K 9006・井戸跡9015(北東から) (2)土坑 S K 9011(北西から)
- 図版第83 (1)土坑 S K 9129(西から) (2)土坑38 d - S K 10(西から)
- 図版第84 (1)土坑 S K 40 j - P 4(南西から) (2)土坑35 e - S K 4(西から)
- 図版第85 (1)陥穴復原風景(南から) (2)陥穴状遺構 S K 40 b - P 2(南東から)
(3)陥穴状遺構 S K 40 b - P 1(北から)
(4)陥穴状遺構 S K 41 b - P 9(南東から)
- 図版第86 (1)陥穴状遺構 S K 36 i - P 2(東から)
(2)陥穴状遺構 S K 37 i - P 3(北西から)
(3)陥穴状遺構40 a - S K 3土層断面(東から)
(4)陥穴状遺構40 a - S K 3(北から)
- 図版第87 (1)陥穴状遺構 S K 46 i - P 1土層断面(南から)
(2)陥穴状遺構 S K 46 i - P 1(南から)
(3)陥穴状遺構38 d - S K 1・38 d - S K 2(北から)
(4)陥穴状遺構 S K 40 h - P 7(東から)
- 図版第88 (1)陥穴状遺構41 d - S K 1(南西から)
(2)陥穴状遺構 S K 42 b - P 2(南から)
(3)陥穴状遺構 S K 42 e - P 2(北から)
(4)陥穴状遺構 S K 42 h - P 1(南西から)
- 図版第89 S H 9002・S H 9003・S H 9130出土遺物
- 図版第90 S H 9122・S H 9121出土遺物
- 図版第91 S H 9128・S H 9113出土遺物
- 図版第92 S H 9112・S H 9140出土遺物
- 図版第93 S H 9118・S H 9131・S H 9117・S H 9203(その1)出土遺物
- 図版第94 S H 9203(その2)・S H 9204・S H 9116・S H 9111・S H 9106・S H 9102出土遺物
- 図版第95 S H 9201・S H 9101・S H 9124・S H 9104・S K 9006(その1)出土遺物
- 図版第96 S K 9006(その2)・S H 9105・S E 9015(その1)出土遺物
- 図版第97 S E 9015(その2)・その他の遺構・包含層出土遺物
- 図版第98 縄文土器・石製品(その1)
- 図版第99 石製品(その2)
- 図版第100 天若遺跡の花粉化石

天若遺跡発掘調査報告書

はじめに

天若遺跡は、大堰川上流部の小盆地に営まれた複合集落遺跡である。天稚神社が鎮座する森を中心に、その東側及び南東側に世木林の集落、南西側に条里地割りをとどめる水田が展開する、典型的な近世村落としての景観を近年までとどめてきた。ところが、日吉ダムの建設計画に伴い、当地域全体がダム湖の水面下に沈むことが明らかとなったため、事前の発掘調査が計画・実施されることとなった。

この天若遺跡を対象とする発掘調査は、日吉ダムの建設事業に伴って、水資源開発公団の依頼を受けて、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、平成元年度以降、平成5年度にわたる計5か年をかけて実施してきたものである。このうち、初年度にあたる平成元年度は、事業地全体を対象とする試掘調査を行い、遺跡の広がり具合や埋没状況を確認した。平成2年度から平成4年度までの3年間は、上記の試掘結果にもとづく本調査を計画的に実施し、最終年度にあたる平成5年度は、調査全体の整理と正報告書の作成にあてた。

調査計画の策定にあたっては、全体計画・各年度計画ともに、京都府教育庁指導部文化財保護課の立案・指導のもとに当調査研究センターが主体となって計画・実施した。こうして実施された各年度の調査成果の概要については、『京都府遺跡調査概報』及び『京都府埋蔵文化財情報』に逐次掲載してきたところである。

5か年の長期に及ぶ発掘調査事業を実施するにあたり、水資源開発公団日吉ダム建設所には、経費負担のほか、さまざまな面で便宜をはかっていただいた。また、京都府教育委員会、日吉町教育委員会、世木財産区管理会、調査参加者をはじめとする関係各位には多大なるご協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げるしだいである。

(奥村清一郎)

第1章 調査要綱

第1節 調査に至る経過

1. 調査の経緯

今回報告する天若遺跡は、京都府船井郡日吉町天若小字森形他に所在する。天若遺跡の調査は、日吉ダム建設事業に伴うもので、遺跡周辺が水没地となることから実施した。

昭和47年、「淀川水系における水資源開発基本計画」が公示され、日吉ダムの建設計画が明らかにされた。その後、ダム建設に伴い、水没する地区における文化財の総合調査が昭和60年から63年にわたり実施された^(注1)。天若遺跡は、この調査によって集落遺跡として認知された。事業を行う水資源開発公団は、京都府教育委員会文化財保護課との協議の結果、遺跡の広がり把握するための試掘調査を当調査研究センターに依頼した。当調査研究センターは、水資源開発公団の依頼を受けて、平成元年度に遺跡の範囲を確認する調査を行った。この試掘調査の成果をもとに協議が行われ、3か年をかけて本調査を実施し、整理報告作業を1年間行うことが決定した。

調査に係る費用は、全額、水資源開発公団が負担した。

天若遺跡の調査にあたっては、まず試掘調査を平成元年度に実施し、本調査を平成2年度から4年度にかけて行った。平成5年度には整理報告作業を行った。以上の調査においては、周到的準備を行うとともに、調査に伴う組織を決定して、調査を実施した。

調査にあたっては、地元の方々や学生諸氏に多数参加していただいた。また、依頼者である水資源開発公団ならびに京都府教育委員会・日吉町教育委員会・世木財産区管理会をはじめ、多くの方々の協力を得た。以上の多くの方々に感謝の意を表します。

2. 調査体制

調査主体者 福山 敏男(理事長 平成元年度～5年度)

調査責任者 荒木昭太郎(事務局長 平成元年度)

堤 圭三郎(事務局長 平成2年度)

松阪 寛支(事務局長 平成2年度・3年度)

城戸 秀夫(事務局長 平成4年度・5年度)

調査担当責任者 中谷 雅治(次長 兼調査第1課長 平成元年度～5年度)

	杉原	和雄(調査第2課長 平成元年度)
	安藤	信策(調査第2課長 平成2年度～5年度)
事 務 局	山本	勇(次長 兼総務課長 平成元年度)
	小林	将夫(次長 兼総務課長 平成2年度・3年度)
	佐伯	拓郎(次長 兼総務課長 平成4年度・5年度)
	安田	正人(総務係長 平成元年度～3年度 総務課長補佐 兼総務係長 平成4年度・5年度)
	杉江	昌乃(主事 平成元年度～5年度)
	上田	幸正(主事 平成2年度～4年度)
	藤原	寛志(主事 平成5年度)
	今村	正寿(主事 平成元年度～5年度)
	林	淳次(主事 平成元年度)
	鍋田	幸世(主事 平成元年度～5年度)
	松尾	幸枝(主事 平成元年度～5年度)
調 査 担 当 者	平良	泰久(課長補佐 平成4年度・5年度)
	水谷	壽克(調査第2係長 平成元年度)
	辻本	和美(調査第2係長 平成2年度)
	奥村清一郎	(調査第2係長 平成3年度～5年度)
	鍋田	勇(調査員 平成元年度)
	三好	博喜(調査員 平成2年度～5年度)
	野島	永(調査員 平成3年度)
	柴	暁彦(調査員 平成3年度)
	八木	政明(調査員 平成4年度)

調 査 参 加 者(順不同・敬称略)

平成元年度 寺田昌文・林田登之・中内田佳子・浅井義久・田畑光雄・吉田龍一・中川美津江・中川幸三・和田 豊・和田正子・森内みどり・西村香代子

平成2年度 橋本 稔・寺田昌文・土井淳史・浅井義久・中川美津江・中川幸三・和田豊・中川亀三・近藤久雄・西田チヅル・俣野加代子・栃下 緑・谷彦三郎・西川悦子・西村香代子・和田正子・疋田季美枝

平成3年度 橋本 稔・寺田昌文・浅井義久・中川美津枝・中川幸三・和田 豊・中川亀三・近藤久雄・俣野加代子・谷 春子・山本則子・上手安一・野瀬 弘・中野久子・松本久美子・山口春夫・土井正文・田村末雄・湯浅義雄・明田安男・広瀬辰次・広瀬作二・

石橋愛子・山田きん子・西村寿子・村上政子・片山八重子・中川君代・平野すまえ・山本祐樹・吉田 靖・吉田八重子・水谷幸子・山本弥生・小滝初代・松崎才枝・新谷幸子・針尾紀代・丹新千晶・国重和江・疋田季美枝・友井川十三代

平成4年度 橋本 稔・吉田 靖・木村隆之・水谷幸子・吉田八重子・浅井義久・中川美津枝・和田 豊・中川幸三・俣野加代子・中川亀三・近藤久雄・谷 春子・野瀬 弘・上手安一・寺田あき・香川友子・栃下富江・木村恵子・横井裕子・栃下 緑・井上恵子・田村末雄・石橋愛子・山田きん子・湯浅義雄・中川君代・平野すまえ・片山八重子・湯浅彭朗・西田笑子・山本弥生・小滝初代・松崎才枝・新谷幸子・森川敦子・針尾紀代・丹新千晶・田中文美・国重和江・疋田季美枝・友井川十三代

平成5年度 山本弥生・山中道代・小滝初代・森川敦子・友井川十三代・林 秀子

第2節 位置と環境

1. 地理的環境

天若遺跡は、海拔数百mの比較的起伏が少なく定高性のある丹波山地内に位置している。京都府の中部から南部にかけて流れる桂川(大堰川)は、準平原のなごりを残す丹波山地を侵食しながら東から西へと流れ、各所で河岸段丘を形成している。この桂川(大堰川)の上流域に位置する天若遺跡は、舌状に残る河岸段丘上に立地しており、桂川(大堰川)上流域では比較的広い耕地面積を有している。

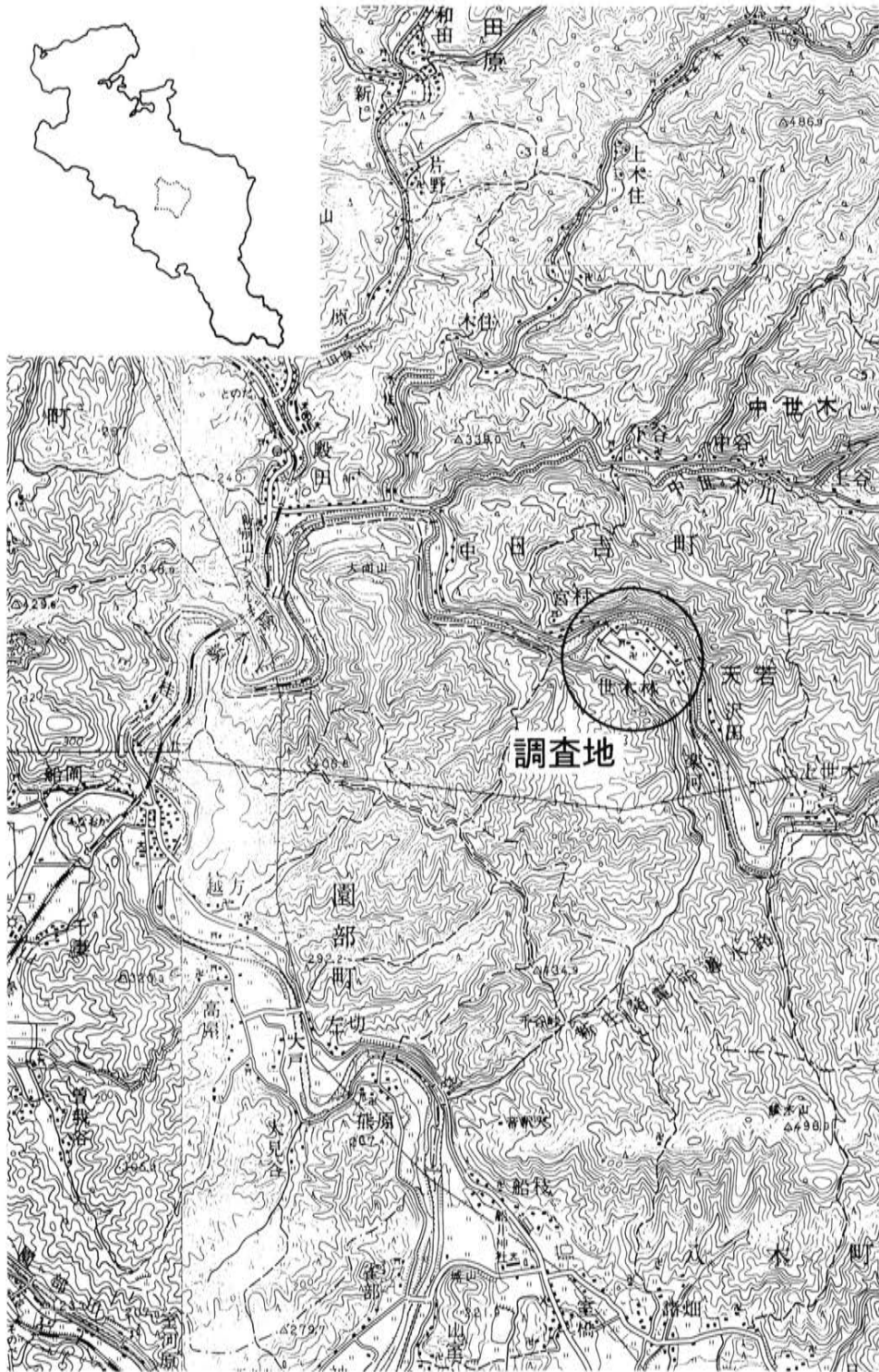
地質的には丹波層群が基盤をなしており、輝緑凝灰岩層を挟んでチャートの特徴とする粘板岩層(天若層)と砂岩を特徴とする粘板岩層(殿田層)とが存在する。遺跡のある世木林地区周辺は天若層が広く分布している。

気象的には山陰内陸性気候に属しており、夏場は高温多湿で、晩秋から冬場にかけては時雨れる日が多く、10~30cm程度の積雪がある。特徴的なのは、山間部に位置するため、日照時間が年平均5.3時間と短い。

2. 歴史的環境

天若遺跡の範囲は、天稚神社を中心とした旧世木林集落にあたる。周辺地域での埋蔵文化財の分布密度は希薄であり、古代における具体的なようすは明らかではない。中世以後、文献史料に散見するようになるが、史料が豊富となるのは近世以後である。

天稚神社については、応永29(1422)年に修理の記述があることから、少なくとも中世にはその存在が知られる。現状においても、天稚神社を鎮守の杜とする集落形態が中世の景



第1図 調査地位置図(1/50,000 京都西北部・園部・四ッ谷)

観をとどめていることから、それ以後は、集落が継続して営まれていたものと思われる。

桂川(大堰川)の上流域にまで視野を広げてみると、天若遺跡の上流側には北桑田郡北北町周山に盆地が広がる。この地域は、銅鐸の出土や愛宕山古墳をはじめとする古墳群の存在、周山廃寺にみられる仏教文化の成立など、古くから優れた文化の流入があった。これらの文化伝播の経路は、地形的な制約で非常に限られた交通路しかなかったであろう当時において、桂川(大堰川)を遡上する経路が最も確実かつ安全であったものと思われる。また、この地域は、奈良・平安時代を通じて大量の木材を都へ供給していた。木材の搬出にあたっては桂川(大堰川)を利用して、筏流しを行っていたものと考えられる。天若遺跡は、こうした文物の往来を間近に見てきたのである。^(注2)

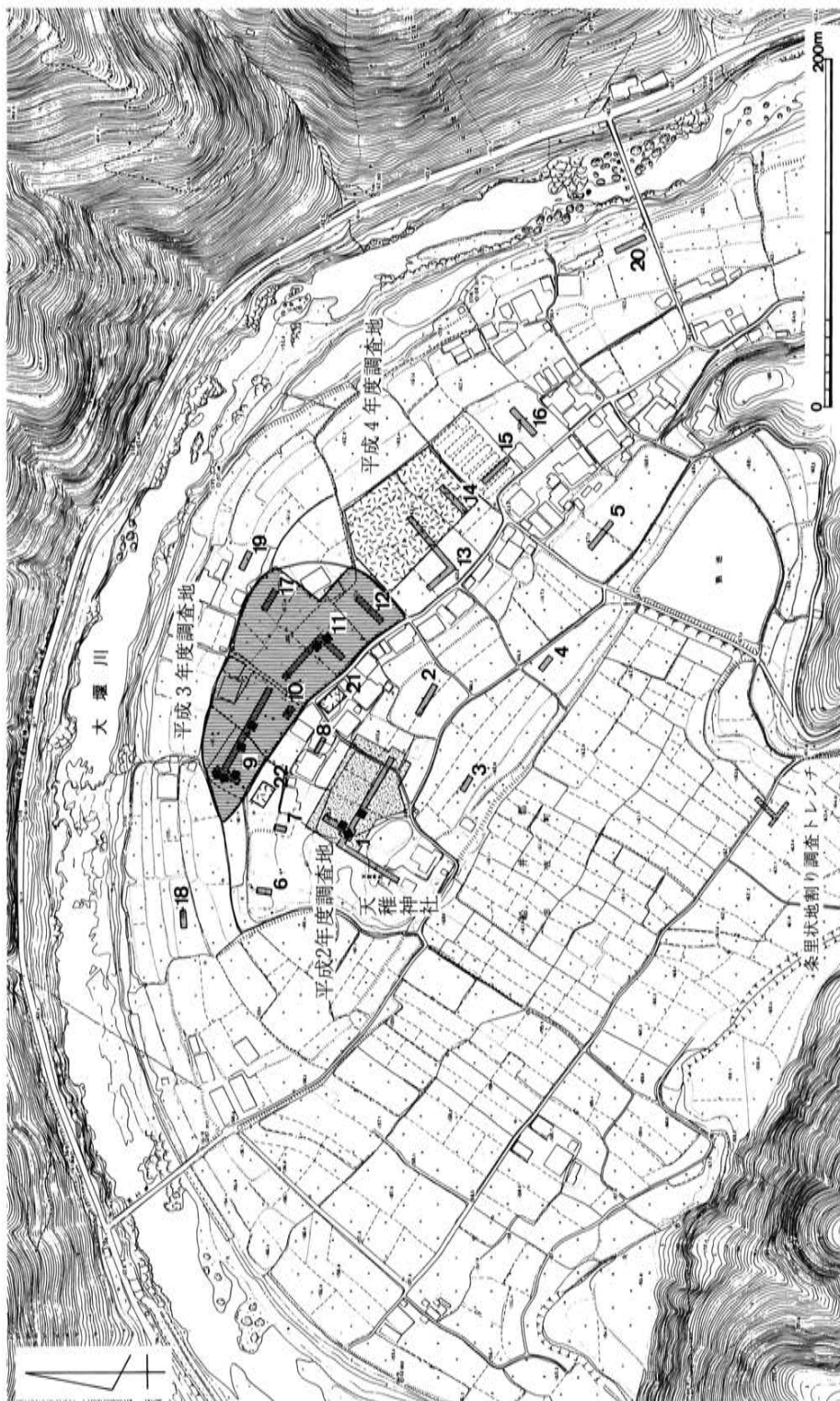
第3節 調査経過

1. 平成元年度

平成元年度の調査は、遺跡全域を調査対象地とし、平成元年12月8日から平成2年2月23日まで行った。調査は、遺構・遺物の有無及び分布状況の把握を主な目的とした試掘調

付表1 試掘調査結果一覧表

トレンチ名	検出遺構	出土遺物	時代
1トレンチ	竪穴式住居跡3棟・ピット多数	土師器・須恵器・瓦器	古墳・奈良・江戸
2トレンチ	ピット	土師器・土錘	?
3トレンチ	ピット2	なし	?
4トレンチ	なし	なし	—
5トレンチ	土坑1	土師器	?
6トレンチ	溝1	土師器・須恵器	古墳
7トレンチ	ピット4・溝?	須恵器・陶磁器	古墳・江戸
8トレンチ	なし	なし	—
9トレンチ	竪穴式住居跡5棟・土坑	土師器・須恵器	古墳
10トレンチ	ピット2	土師器ほか	古墳
11トレンチ	竪穴式住居跡3棟・大溝?	土師器・須恵器	古墳～鎌倉
12トレンチ	土坑5～6基・ピット	土師器	古墳?
13トレンチ	ピット多数	土師器・須恵器・瓦器ほか	古墳～鎌倉
14トレンチ	土坑5～6基・ピット・溝1	土師器・須恵器・瓦器	古墳～鎌倉
15トレンチ	ピット多数	土師器・須恵器・瓦器ほか	古墳～鎌倉
16トレンチ	土坑5	土師器	古墳?
17トレンチ	溝?	土師器	古墳?
18トレンチ	なし	なし	—
19トレンチ	土坑	—	—
20トレンチ	?	土師器・須恵器	古墳～鎌倉



第2図 トレンチ配置図(■印;元年度試掘時想定竪穴式住居跡)

査で、調査対象面積は約20,000m²の広範囲にわたる。掘削面積は、約1,200m²である。

まず、10か所にトレンチを設定したが、各所で遺構・遺物とも確認されたことから、最終的に20か所のトレンチを設定した。各トレンチについては、遺構の検出状況に応じて拡張を行った。また、調査期間などの関係から、検出した遺構の掘削は最小限にとどめ、遺構の存在する範囲の確認を重点的に行った。

設定したトレンチは、現地表面のレベルから、1～8トレンチを含むA地区、9～16トレンチを含むB地区、17～20トレンチを含むC地区の3地区に区分される。A地区は、調査地の南東から天稚神社にかけて延びる尾根上にあたるが、現状では安定した平坦面を有し、集落の最高所を占めている。ここでは、天稚神社北側の1トレンチで多くの遺構が検出されたものの、2～5トレンチでは、表土直下が黄色粘質土の地山となり、遺構の密度が低い。B地区は、A地区から一段下がった位置にあたり、最も広い安定した平坦面を有している。ここでは、すべてのトレンチにおいて遺構・遺物とも確認した。C地区は、桂川(大堰川)に向かって段状に水田が営まれている。18トレンチでは、遺構・遺物ともなく、この周辺までは遺跡の広がらないことが確認された。19トレンチは、B地区よりもやや低い位置にあたるが、土坑などの遺構が検出された。20トレンチでは、遺物は出土したものの顕著な遺構は存在しない。

以上の結果から、本調査の必要と考えられる範囲が、天稚神社を含む1トレンチ周辺及び9トレンチ～17トレンチ、19トレンチの周辺の約10,000m²となった。

2. 平成2年度

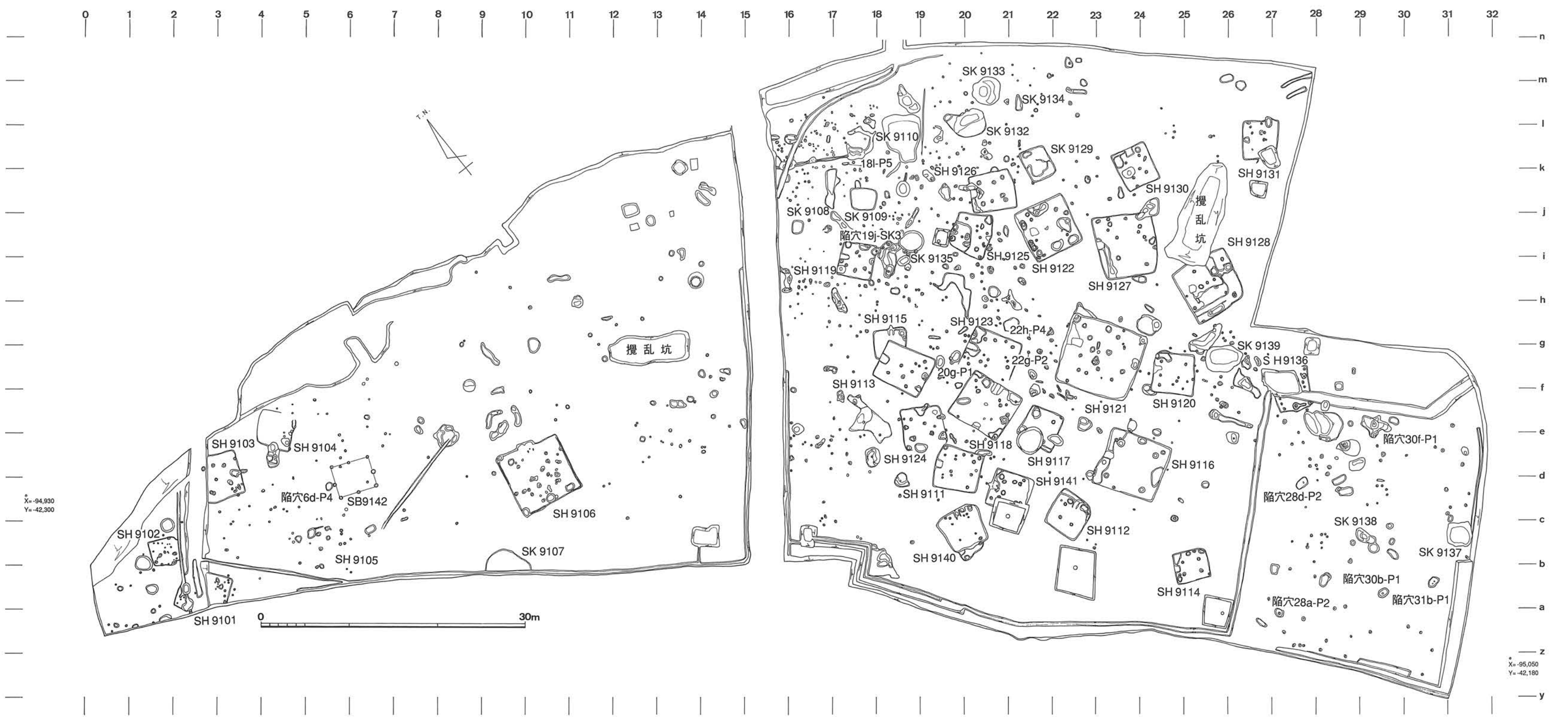
平成2年度は2次調査^(註4)として、元年度試掘調査の結果判明した遺跡範囲のうち、A地区の1トレンチ周辺を約2,000m²について拡張し、本調査を実施した。

現地での調査は、平成2年8月6日から平成3年1月30日まで行った。重機掘削は、平成2年8月6日から8月22日までのうちの8日間で行い、その後人力で掘削を行った。遺構面は、黄褐色土地山面上にあり、ほぼ全域で耕作土・床土を除去した時点で現われた。また、調査地周辺で石器や石片が採集できることが明らかとなったため、一部人力による深掘りも試みた。これら人力による掘削作業は、平成3年1月28日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成3年1月30日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。なお、平成2年12月18日に現地説明会を実施し、約40名の参加を得ている。

調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡5棟、7世紀から8世紀にかけての掘立柱建物跡6棟以上、奈良時代の井戸跡1基、飛鳥時代の土坑2基などのほか、時期不明の土坑やピットなどを多数検出した。2次調査では、古墳時代集落が形成されて以降、飛鳥時代、奈



第3図 平成2年度検出遺構平面実測図



第4図 平成3年度検出遺構平面実測図

良時代、平安時代と引き続いて集落が営まれていたことを確認できた。

2次調査の調査地の地区割りは、1 A 杭を起点とした任意の5 m方眼を用いた。ラインの名称は、北西—南東方向軸に算用数字を、北東—南西方向軸にアルファベットの大字を付した。地区名称は、北側交点を地区名とした。なお、12 H 杭の座標値は、 $X=-95,048.539$ ・ $Y=-42,278.551$ である。

3. 平成3年度

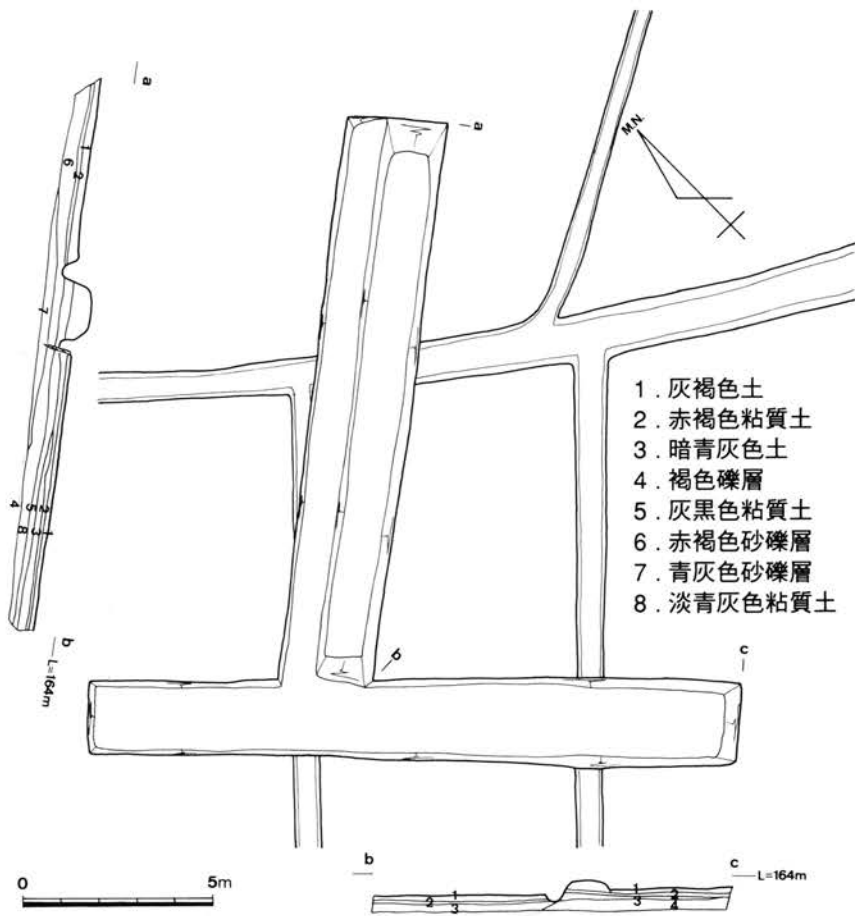
平成3年度は、3次調査^(注5)として、元年度試掘調査のうちB地区、9～12トレンチ及び17トレンチ周辺を約6,900m²にわたって拡張した。

調査は、平成3年4月15日から平成4年2月7日まで行った。重機掘削は、平成3年4月15日から5月24日までのうちの21日間で行い、その後人力で掘削を行った。基本的な層位は、耕作土・床土・茶褐色土・黄褐色土・礫層の順であり、遺構はほぼ全域で耕作土・床土を除去した時点で現われた。ただし、茶褐色の存在しない部分も多かった。茶褐色土の存在する部分では、竪穴式住居跡の埋土も茶褐色に近い土色を呈しているため、明確に住居跡として判断がついたのは黄褐色土地上面まで掘削した時点である。本来の住居跡は、茶褐色土層中から掘り込まれているものと思われる。これら人力による掘削作業は、平成4年2月6日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成4年2月7日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。なお、平成3年11月1日に現地説明会を実施し、約70名の参加を得ている。

調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡29棟、掘立柱建物跡1棟、縄文時代の土坑2基などのほか、時期不明の土坑やピットなどを多数検出した。

また、条里状の水田地割りの残る地域についても、調査の可能な地点にトレンチを設け、調査を行った。条里状遺構の調査は、平成3年度調査地からほぼ280m南方に「T」字形のトレンチを設定した。主に条里地割りの遺存状況を調べるために重機によって表土を剝いだ後に精査を行ったが、明確な条里地割りの遺構を検出するには至らなかった。遺物の包含層も認められず、二枚の耕作土層の下層には青灰色の粘質土や砂礫層が堆積していた(第5図・図版第77-(1))。

3次調査の調査地の地区割りは、1 a 杭を起点とした任意の5 m方眼を用いた。ラインの名称は、北西—南東方向軸に算用数字を、南西—北東方向軸にアルファベットの小文字を付した。地区名称は、東側交点を地区名とした。なお、31 d 杭の座標値は、 $X=-95,029.523$ ・ $Y=-42,172.600$ である。



第5図 条里状地割り調査トレンチ平面図及び断面図

4. 平成4年度

平成4年度は、4次調査^(注6)として、元年度試掘調査のうちC地区の13・14トレンチ周辺を約3,200㎡にわたって拡張した。また、現代まで家屋が建ち並んでいた地域についても調査可能な地点にトレンチを設け、調査を行った(21・22トレンチ)。

調査は、平成4年4月20日から平成4年9月18日まで実施した。重機掘削は、平成4年4月20日から6月16日までのうちの26日間で行い、その後人力で掘削を行った。基本的な層位は、耕作土・床土・茶褐色土・黄褐色土・礫層の順で、遺構はほぼ全域で耕作土・床土を除去した時点で現われた。ただし、北東側を中心として茶褐色土の存在しない部分も多かった。茶褐色土の存在する部分では、竪穴式住居跡の埋土も茶褐色に近い土色を呈するため、明確に住居跡として判断がついたのは、黄褐色土地山上面まで掘削した時点である。このことから、本来の遺構は、茶褐色土層中から掘り込まれていたものと思われる。



第6図 平成4年度検出遺構平面実測図

これら人力による掘削作業は、平成4年9月11日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成4年9月18日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。なお、平成4年9月4日に現地説明会を実施し、約90名の参加を得た。現地調査は4次調査をもって終了した。

調査の結果、竪穴式住居跡5棟・掘立柱建物跡2棟、縄文時代の土坑2基・陥穴状遺構18基をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した。

調査地の地区割りは、3次調査の地区割りを踏襲し、1a杭を起点とした任意の5m方眼を用いた。

第4節 基本層位

2次調査区の基本層位は、耕作土・床土の直下が黄褐色粘質土となる。一部、竪穴式住居跡SH9005付近で段丘礫層が露出している。

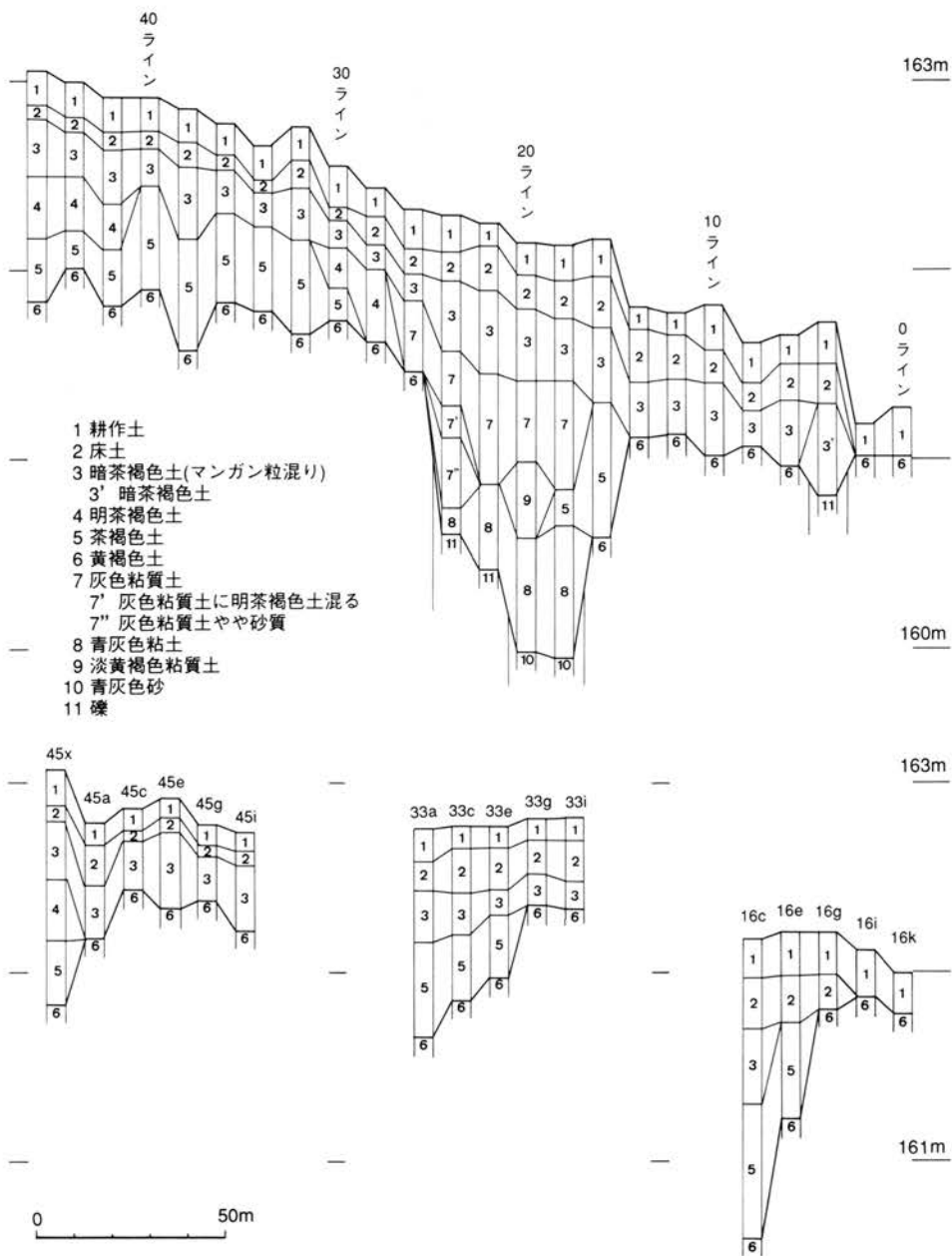
3次調査区及び4次調査区の基本層位は、耕作土・床土・マンガン粒混じりの暗茶褐色土・明茶褐色土・茶褐色土・黄褐色粘質土と続いている(第7図)。

14ラインより西側では明茶褐色土層や茶褐色土層はみられない。4ライン付近では段丘礫層が露出している。

18ラインから26ラインにかけては耕作土・床土・マンガン粒混じりの暗茶褐色土に続いて灰色粘質土層が0.5m前後みられるようになり、黄褐色粘質土の位置がかなり低くなる。特に、18ラインから26ラインでは、青灰色粘土が厚く堆積しており、さらに礫層や青灰砂層へと続いていく。黄褐色粘質土は検出できなかった。また、黄褐色土のレベルを16ラインでみると、16e地点から16g地点にかけて急激に高くなり、16i地点で最高となる。ここから16k地点にかけては次第に低くなっており、桂川(大堰川)へと向けて急激に落ちていく地形になっている。33ラインや45ラインでも同様の地形がみられる。

こうした堆積状況は、18ラインから26ラインにかけて沼状の地形が存在していたことを示している。また、2次調査区と3次調査区の間に位置する21トレンチでも黄褐色粘質土を検出できていない。おそらく古墳時代には2次調査区と3次調査区の間に小さな谷地形が存在し、奥まった位置が沼状の地形となっていたものと思われる。

堆積の状況から、古墳時代の竪穴式住居跡は、第5層の茶褐色土層から掘り込まれたものと考えられる。埋土が非常に似通っていたため、検出を困難にした。こうした沼状の地形も平安時代にはほぼ消滅し、中世になって集落の中心が移動してきたものと考えられる。



第7図 土層柱状図

第2章 検出遺構

第1節 竪穴式住居跡

1. 2次調査区検出竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H9001(図版第15・第48-(2)) 3 F 地区付近で検出した一辺約4.8mを測る正方形の竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約17cmを測る。竈の残欠と考えられる焼土を住居跡北壁の中央で検出した。主柱穴は4本である。南東隅がやや張り出す。遺物の出土量は、整理箱に1/3程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9002(図版第13・第49-(1)) 4 E 地区付近で検出した一辺約4.8mを測る正方形の竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。埋土は3層で、下層外側に黄褐色混じりの黒茶褐色土、内側に黄褐色土及び炭化物混じりの黒褐色土、上層に黒褐色土を認める。検出面から床面までは深さ約22cmを測る。炉跡と考えられる焼土を中央部で検出した。主柱穴は4本である。北側中央部に貯蔵穴がある。住居跡内には周壁溝がめぐり貯蔵穴に取り付く。遺物の出土量は、整理箱1箱程度である。天若Ⅰ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9003(図版第11・第49-(2)) 3 C 地区付近で検出した長辺約5.4m×短辺約4.3mを測る長方形の竪穴式住居跡である。基本的な埋土は2層で、下層が茶褐色土、上層が灰茶褐色土である。下層の茶褐色土は、黄褐色土や炭化物の混じり具合からさらに細分できる。検出面から床面までの深さは、約45cmを測る。住居跡西壁中央には造り付けの竈をもつが、検出できたのは焼土と煙出し部である。南西隅と南東隅とに貯蔵穴をもつ。主柱穴は4本で、部分的に周壁溝がめぐる。作業台としたと考えられる石が数点床面から出土した。遺物の出土量は、整理箱6箱程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9004(図版第14・第50-(1)) 5 D 地区付近で検出した長辺5.5m×短辺4.5～5.0m程度を測る長方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約7cmを測る。竈の残欠と考えられる焼土を住居跡北壁の中央で検出した。住居跡内には2か所、焼土が認められる。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9005(図版第13・第50-(2)) 6 F 地区付近で検出した長辺約7.5m×短辺約5.2mを測る長方形の竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。埋土は暗茶褐色

土である。検出面から床面までの深さは、約3cmを測る。炉跡と考えられる焼土を住居跡の中央部で検出した。主柱穴は、攪乱により欠除するものもあるが、4本と考えられる。南西壁中央部に貯蔵穴がある。北側は段丘礫層が露出している。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅰ期に位置づけられる。

2. 3次調査区検出竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H9101 (図版第18・第51-(2)) 3b地区付近で検出した。長辺約5.5m×短辺約4.9mを測る方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.1mを測る。大半を現代の水路によって攪乱されたうえ、一部がトレンチ外となっているため、全容はわからない。竈の有無は特定できない。主柱穴も特定できない。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9102 (図版第21・第52) 3c地区付近で検出した。長辺約2.8m×短辺約2.6mを測る不整形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。住居跡の南東側隅に竈が設けられている。構造は、焚口にチャートの立石を「ハ」の字状に並べている。主柱穴の数は不明である。東側壁付近は、現代の水路によって攪乱を受けている。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅴ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9103 (図版第19・第53-(1)) 4d地区付近で検出した方形の竪穴式住居跡で、西側は攪乱されている。規模は、完存する一辺が5mで、検出面から床面までの深さは約0.2mを測る。床面には段丘礫層が露出する。竈の有無は特定できない。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9104 (図版第15・第53-(2)) 5e地区付近で検出した。北半部は段丘礫層が露出してきており、壁の立ち上がりは不明確である。一辺4m程度の方形の竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.1mを測る。竈は北東側壁の中央付近に設けられており、焼土のみを確認した。主柱穴の数は不明である。南西側は、時期不明の土坑によって攪乱されている。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9105 (図版第21・第69-(1)) 6c地区付近で検出した削平された竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。床面まで削平されているため、形状や規模は不明である。一部残る埋土は暗茶褐色土である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にあり、焼土のみ確認した。焼土の北側、住居跡の北側隅に貯蔵穴と思われる土坑がある。主柱穴と考えられるピット4か所が方形に並ぶ。このため、規模などは全

く確認できなかったが、北西側壁中央部に造り付けの竈をもつ方形の竪穴式住居跡と推定した。長辺4.7m×短辺3.2m程度の規模に復原できる。北側隅の土坑内からは須恵器の杯身が出土した。遺物の出土量は、整理箱に1/12程度である。天若Ⅷ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9106(図版第5・第54) 12d 地区付近で検出した。長辺約7.5m×短辺約6.8mを測る方形の竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。検出面から床面までの深さは約0.2mを測る。埋土は暗茶褐色土である。主柱穴は4本で、部分的に周壁溝が認められる。北壁中央部に約2.0m×約0.5mの張り出し部があり、この張り出し部のやや東寄りに造り付けの竈が設けられている。竈の構造は、焚口の両側に立石を配し、支脚に置石を利用している。いずれの石材もチャートを用いたものである。住居跡の東隅にチャート系の比較的大きな石材があり、焚口部に架けられていた可能性がある。住居内の土坑は、比較的大きなものが南壁寄りに3基が並び、北西隅付近にも1基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/12程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9111(図版第7・第55) 20d 地区付近で検出した。長辺約5.0m×短辺約5.0mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.3mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。竈の構造は、焚口の両側に立石を配し、支脚に置石を利用している。いずれの石材もチャートを用いている。竈の前面には炭化物が広範囲にわたって検出できた。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/3程度である。天若Ⅴ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9112(図版第9・第56) 22d 地区付近で検出した。輪郭は明確には押さえていないものの、一辺4.0m程度の方形の竪穴式住居跡である。埋土は灰色を帯びた暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは約0.3mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北東壁の中央付近にある。竈の内には支脚に利用したと思われる置石が残る。主柱穴は4本である。竈の両側に貯蔵穴と考えられる住居内土坑が2基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/2程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9113(図版第6・第57・第58-(1)) 18g 地区付近で検出した。埋土は薄く、暗茶褐色土である。長辺5.8m×短辺4.7mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北壁の中央付近にある。竈の内には支脚に利用したと思われる置石が残る。また、住居跡の中央部付近にも径30cmほどの床面が焼けた焼土の広がり認められる。主柱穴の数は不明である。南壁に沿って、住居内土坑が2基ある。なお、竪穴式住居跡 S H9115と重複しており、竪穴式住居跡 S H9115に後続する竪穴式住居跡である。遺物の出土量は、整理箱に1/3程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9114(図版第8・第60) 26c 地区付近で検出した。埋土は薄く、暗茶褐色土である。長辺3.8m×短辺3.4mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.1mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。竈の内には支脚に利用したと思われるチャート系の置石が残る。主柱穴は4本である。北東壁に沿った中央に住居内土坑が1基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9115(図版第6・第58・第59) 19h 地区付近で検出した。埋土は茶褐色土が基本で、黄褐色土及び炭化物を含む部分が認められる。長辺3.8m×短辺3.2mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。造り付けの竈が北東壁の中央付近にある。竈は、崩壊した壁体も遺存しており、支脚として用いられたと考えられる川原石や煙出し部も検出できた。壁体はよく焼け締まっている。他の竈をもつと考えられる住居跡で、壁体がよく焼け締まった竈もしくは崩壊した竈の壁体が遺存する例はない。主柱穴の位置は不明である。竪穴式住居跡 S H9113と重複しており、竪穴式住居跡 S H9113に先行する竪穴式住居跡である。東隅に貯蔵穴と考えられる住居内土坑が1基ある。竈脇に作業台と思われる石が置かれている。遺物の出土量は、整理箱に1/2程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9116(図版第12・第61-(1)) 試掘調査で確認した住居跡で、23e 地区付近で検出した。長辺約7.1m×短辺約6.5mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは約0.3mを測る。埋土はやや青灰色がかった暗茶褐色土である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。焼土のみを検出した。主柱穴は4本である。床面は非常に踏み固められている。住居内土坑が北東壁中央付近に1基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/2程度である。天若Ⅴ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9117(図版第18・第61-(2)) 23f 地区付近で検出した。長辺約3.9m×短辺約3.7mを測る方形の竪穴式住居跡である。試掘調査で検出した。埋土はやや灰色がかり、黄褐色土が混じる暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。南西側が攪乱を受けているため、竈の位置や方向位置・構造などは全く不明である。主柱穴も不明な部分があるが、4本と思われる。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9118(図版第4・第62) 20f 地区付近で検出した。長辺約6.3m×短辺約5.6mを測る方形の竪穴式住居跡である。埋土はやや灰色がかり、黄褐色土が混じる暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北東壁の中央付近にある。竈の内には支脚に利用したと思われる置石が

残る。また、住居跡の南西壁中央付近にも非常に焼け締まった部分があり、住居跡内中央部にも2か所焼け締まった部分がある。主柱穴は不明である。住居内土坑は、3基ある。これらのうち、北西壁西寄りにある土坑は、P-3住居跡の主軸とは異なる方向を向き、時期の下がる遺物が出土していることから、住居跡廃棄後に構築された土坑である。遺物の出土量は、整理箱に1/3程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9119(図版第21・第69-(2)) 18j 地区付近で検出した。長辺約4.0m×短辺約3.7mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは約0.1mを測る。埋土は暗茶褐色土である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。焼土のみを検出した。主柱穴は不明である。貯蔵穴と考えられる住居内土坑は、南東壁中央付近に1基、西隅に1基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9120(図版第17・第70-(1)) 26g 地区付近で検出した。埋土は暗茶褐色土である。長辺約4.5m×短辺約4.4mを測る方形の竪穴式住居跡で、検出面から床面までの深さは約0.1mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央やや北寄りにある。焼土のみを検出した。貯蔵穴と考えられる住居内土坑が北隅にある。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅴ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9121(図版第1・第70-(2)) 23g 地区付近で検出した。方形の竪穴式住居跡である。埋土は2層認められる。下層は周囲に黄褐色味がかかった暗茶褐色土が広がり、上層は炭化物や焼土の混じる暗茶褐色土となっている。長辺約8.2m×短辺約8.0mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.4mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央やや北寄りにある。焼土のみを検出した。主柱穴は4本である。住居内土坑は、南東壁中央付近に1基、北隅及び東隅に1基ずつある。遺物の出土量は、整理箱1箱程度である。天若Ⅱ期からⅢ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9122(図版第11・第63) 22j 地区付近で検出した。方形の竪穴式住居跡である。長辺約6.0m×短辺約5.9mを検出面から床面までの深さは、約0.3mを測る。埋土は、黄褐色土ブロックや炭化物を含んだ暗茶褐色土である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央やや北寄りにある。焼土のみを検出した。また、住居跡の中央部にも床面が非常に焼け締まった部分がある。主柱穴は4本である。住居内土坑は、南側に2基ある。これらの土坑内からは紡錘車の未製品や破損品などが出土した。住居内土坑 S K08及び S K15から、住居跡 S H9128出土遺物と接合できる破片が出土していることから、住居跡 S H9122廃棄後しばらくして住居跡 S H9128が廃棄されるにあたり、掘り込まれた土坑である。遺物の出土量は、整理箱1箱程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9123(図版第12・第71-(1)) 20 g 地区付近で検出した。方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、残りのよい北東側で約0.1mを測り、南西側は削平を受けて不明確となっている。このため、規模は、短辺側が測定不能となっているが、長辺約5.8m×短辺約4.8m程度である。埋土は暗茶褐色土である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。焼土のみを検出した。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9124(図版第19・第71-(2)) 20 f 地区付近で検出した。長辺約4.5m×短辺約4.3mを測る方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.1mを測る。南側は削平を受けて不明確となっている。竈の位置や方向・構造などは不明である。ただし、北東隅付近と東壁中央西寄りの2か所で床面が非常に焼け締まった部分がある。また、北壁中央やや東寄りにある窪みにも焼土が認められた。いずれかが竈の痕跡になるものと思われる。主柱穴は不明である。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9125(図版第17・第72-(1)) 21 i 地区付近で検出した。埋土は暗茶褐色土である。長辺約5.2m×短辺約4.5mを測る不整形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.1mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が南東壁の中央付近にある。焼土のみを検出した。主柱穴は不明である。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅵ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9126(図版第20・第72-(1)) 21 k 地区付近で検出した。長辺約5.0m×短辺約4.2mを測る方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは約0.1mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。焼土のみを検出した。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9127(図版第3・第64) 25 j 地区付近で検出した。長辺約6.9m×短辺約6.6mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。埋土は暗茶褐色土である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が西壁の中央付近にある。竈の内には支脚に利用したと思われる置石が残る。主柱穴は4本である。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9128(図版第2・第65) 26 i 地区付近で検出し、4次調査で一部拡張を行った。長辺約6.8m×短辺約6.3mを測る方形の竪穴式住居跡である。北壁は一部攪乱を受けている。埋土は暗茶褐色土で、一部に炭化物や焼土が混じる。検出面から床面までの深さは約0.2mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が西壁の中央北寄りにあ

る。竈の内には支脚に利用したと思われる置石が残る。主柱穴は不明である。住居跡内には約5m方形の窪みが認められ、竈痕跡が西壁の中央に位置することになる。遺物の出土量は、整理箱1箱程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9130(図版第7・第66) 25 l 地区付近で検出した。埋土は暗茶褐色土で、炭化物が混じる。長辺約4.5m×短辺約4.1mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土が北西壁の中央付近にある。竈の構造は、焚口の両側に河原石で立石を配し、支脚に河原石を利用している。主柱穴は4本である。住居内土坑が南西壁中央付近に1基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9131(図版第21・第72-(2)) 27m地区付近で検出し、4次調査で一部拡張を行った。長辺約4.5m×短辺約4.0mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。埋土は暗茶褐色土である。南隅が攪乱を受けているため、竈の有無、位置や方向・構造などは全く不明である。主柱穴は不明である。貯蔵穴と考えられる住居内土坑が北西壁中央付近に1基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9136(図版第20) 28 f 地区付近で検出した。多くを現代の用水路によって寸断されており、住居跡かどうかの判断もつきにくい。おそらく長辺約4.7m×短辺約3.9mを測る方形の竪穴式住居跡と思われる。埋土は暗茶褐色土である。検出面から床面までの深さは、約0.1mを測る。攪乱を受けているため、竈の有無、位置や方向・構造などは全く不明である。主柱穴は不明である。遺物の出土量は、整理箱に1/9程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9140(図版第9・第67) 21 d 地区付近で検出した。埋土は4層が認められる。最下層は暗茶褐色粘質土で、下層が灰茶褐色粘質土、次いで暗茶褐色粘性砂質土が堆積し、上層が灰茶褐色粘性砂質土となる。長辺約5.2m×短辺約4.5mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは約0.5mを測る。造り付けの竈が北東壁の中央付近にある。竈自体はあまり火を受けてはいないが、残存状況は比較的よいものである。竈の内には支脚に利用したと思われる置石が残る。主柱穴は4本である。貯蔵穴と考えられる住居内土坑が東隅に2基ある。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅲ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9141(図版第8・第68) 21 e 地区付近で検出し、4次調査で掘削を行った。埋土は暗茶褐色土である。長辺4.5m×短辺4.3mを測る方形の竪穴式住居跡である。東隅を溝によって攪乱され、南西壁は既存施設保護のため一部が未掘である。検出面

から床面までの深さは、約0.3mを測る。造り付けの竈が北西壁の中央付近にある。竈の構造は、焚口の両側にチャート系の立石を配し、支脚に置石を利用している。また、焚口の立石に架けられていたと思われるチャート系の石材が竈の前面にある。支柱穴は4本と考えられる。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

3. 4次調査区検出竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H9201(図版第16・第73-(2)) 44 a 地区付近で検出した一辺4.6mを測る正方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。遺存状況は悪い。支柱穴は4本で、南西側壁中央に竈を設けている。竈は焼土だけを検出した。北側支柱穴脇には甕を据えたピットがある。東隅付近で部分的に周壁溝を検出した。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅴ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9202(図版第16・第74-(1)) 43 a 地区付近で検出した長辺約4.8m×短辺約4.0mを測る方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。遺存状況はきわめて悪く、壁はほとんど残っていない。支柱穴は4本で、北西側壁中央に竈を設けている。竈は焼土だけを検出した。支脚として用いられたチャート系の置石がある。遺物の出土量は、整理箱に1/12程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9203(図版第14・第74-(2)) 43 c 地区付近で検出した一辺約6.2mを測る正方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色土である。遺存状況はきわめて悪く、壁はほとんど残っていない。支柱穴は4本で、北西側壁中央に竈を設けている。竈は焼土だけを検出した。南東壁に沿って土坑が掘られており、遺物がまとまって出土した。遺物の出土量は、整理箱に1/3程度である。天若Ⅳ期からⅤ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9204(図版第10・第75) 38 e 地区付近で検出した長辺約5.1m×短辺約4.8mを測る方形の竪穴式住居跡である。遺存状況は悪い。埋土は暗茶褐色土である。支柱穴は4本で、西側壁中央に竈を設けている。竈はチャート系の石材を焚口に2石立て、さらにチャート系の石材を架けて構築している。支脚として用いられたチャート系統の立石もある。遺物の出土量は、整理箱に1/3程度である。天若Ⅴ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H9205(図版第10・第76) 37 g 地区付近で検出した東西辺約4.5mを測る方形の竪穴式住居跡である。遺存状況は悪く、南側の壁を検出することができなかった。遺存状況は悪い。埋土は灰褐色粘質土で、中央付近に黒褐色土を埋土とする攪乱が入る。支柱穴は4本で、北側壁中央に竈を設けている。竈はチャート系の石材を焚口に2石立て、さらにチャート系の石材を架けて構築している。支脚として用いられたチャート系統の立石もある。遺物の出土量は、整理箱に1/6程度である。天若Ⅳ期に位置づけられる。

第2節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 S B 9021 (図版第22・第77-(2)) 2次調査区の10G地区付近に存在する2間(3.62m)×4間(7.88m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.81m(約6尺)・桁行1.97m(約6.5尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約123°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径30~40cmを測る。柱根痕跡は径20cm前後である。柱穴内から杯蓋Ⅱ類・杯身Ⅱ類が出土していることから、天若Ⅶ期前後に位置づけられる。

掘立柱建物跡 S B 9022 (図版第22・第78-(1)) 2次調査区の13E地区付近に存在する2間(4.83m)×3間(5.9m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間2.41m(約8尺)・桁行1.97m(約6.5尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約126°振る。柱の掘形は不整円形もしくは隅丸方形を呈し、径もしくは一辺30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径15cm前後である。一部の柱穴内には柱根の残るものもある。S B 9021と主軸線と方向をほぼ同じくすることから、天若Ⅶ期前後に位置づけられる。

掘立柱建物跡 S B 9023 (図版第22・第78-(2)) 2次調査区の9F・9G地区付近に存在する2間(3.33m)×3間(4.65m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間2.41m(約8尺)・桁行1.55m(約5尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約147°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径10~15cm程度の大きさである。井戸跡 S E 9015の井戸枠の主軸線と方向をほぼ同じくすることから、天若Ⅷ期前後に位置づけられる。

掘立柱建物跡 S B 9024 (図版第22) 2次調査区の10F地区付近に存在する1間(2m)以上×3間(5.71m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間2m(約6.6尺)・桁行1.9m(約6.3尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約123°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径30~40cmを測る。また、柱根痕跡は径10~15cmを測る。S B 9021と主軸線と方向をほぼ同じくすることから、天若Ⅶ期前後に位置づけられる。

掘立柱建物跡 S B 9025 (図版第23) 2次調査区の8D地区付近に存在する3間(5.01m)×3間(6.78m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.67m(約5.6尺)・桁行2.26m(約7.5尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約144°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径15cm前後を測る。井戸跡 S E 9015の井戸枠の主軸線と方向をほぼ同じくすることから、天若Ⅷ期前後に位置づけられる。

掘立柱建物跡 S B 9026 (図版第23) 2次調査区の10C地区付近に存在する2間(4.83m)×3間(6.91m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間2.42m(約8尺)・桁行2.3m(約7.6尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約136°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径40cm前後を測る。なお、柱根痕跡は径15~20cm程度である。井戸跡 S E 9015

の井戸枠の主軸線と方向をほぼ同じくすることから、天若Ⅷ期前後に位置づけられる。

掘立柱建物跡 S B 9142(図版第23) 6 d 地区付近に存在する2間(3.6m)×2間(4.3m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.98m(約6尺)及び1.65m(約5尺)・桁行2.15m(約6.5尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約124°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径35cm前後を測る。時期は不明である。

掘立柱建物跡 S B 9211(図版第24・第79-(1)) 4次調査区の38 b 地区付近で検出した。2間(3.6m)×3間(4.1m)の総柱の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.8m(約6尺)・桁行1.37m(約4.5尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約63°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径40cm前後を測る。なお、柱根痕跡は径15cm程度である。時期は不明である。

掘立柱建物跡 S B 9212(図版第24・第79-(2)) 4次調査区の45 f 地区付近で検出した。不明な部分もあるが3間(4.8m)×5間(6.7m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.6m(約5.3尺)・桁行1.34m(約4.4尺)を測る。主軸の向きは、国土座標軸の北方向から東へ約137°振る。柱の掘形は不整円形を呈し、径40cm前後を測る。なお、柱根痕跡は径20cm程度である。時期は不明である。

第3節 土坑

土坑 S K 9006(図版第25・第82-(1)) 2次調査区の9 H 地区付近で検出した。長径3.5m×短径2.3mを測る不定形の土坑である。検出面からの深さは約40cmを測る。埋土は2層で、下層が暗黒褐色粘質土で、上層が暗黒褐色土となっている。出土遺物には、須恵器や土師器がある。ある程度埋没した段階で井戸跡 S E 9015が構築されている。天若Ⅷ期に位置づけられる。

土坑 S K 9011(図版第25・第82-(2)) 2次調査区の10 I 地区で検出した。大半がトレンチ外であるため、全容は不明である。径約1.3m・深さ0.4m程度の円形に近い土坑と思われる。出土遺物には、須恵器や土師器がある。天若Ⅶ期に位置づけられる。

土坑 S K 9129(図版第25・第83-(1)) 3次調査区の22 l 地区で検出した長辺約3.7m×短辺約3.0m・深さ約0.1mを測る隅丸方形の土坑である。遺物、ピット、焼土などは認められず、遺構の年代や性格は不明である。

土坑 S K 9133 3次調査区の21 m 地区で検出した土坑 S K 9133は、直径約1.5m・検出面から床面までの深さは、約1.1mを測る比較的大型の土坑であり、上層から縄文時代後期の土器片が数点出土した。縄文時代後期の土坑である。

土坑 S K 9139 3次調査区の26 g 地区で検出した長辺約4.2m×短辺約3.0m・深さ約0.4mを測る隅丸方形に近い土坑である。土坑内には人頭大の河原石が多量に積み重ねられていた。同様の形態の土坑は、他にも3次調査区18 k 地区付近で検出した土坑 S K 9109、3次調査区19 l 地区付近で検出した土坑 S K 9110など数か所で確認している。いずれもほぼ同時期のもので、鎌倉時代前後に形成されたものと考えられる。

土坑 S K 20 g -P 1 (図版第25) 3次調査区の20 g 地区で検出した20 g -P 1 は、長径1.5m×短径0.8m・検出面から床面までの深さ約0.7mを測る土坑で、縄文時代後期の土器片が20数点出土した。埋土は茶褐色土である。縄文時代後期の土坑である。

土坑 S K 40 j -P 4 (図版第25・第84-(1)) 4次調査区の40 j 地区で検出した土坑で、長さ約1.7m・幅約1.0m・深さ約0.4mを測る。土坑底は平坦である。埋土は大きく2層に分かれ、下層が黄褐色土混じりの暗灰褐色土で、上層が暗灰褐色土となっている。上層上部に自然石が置かれており、土壙墓となる可能性が高い。土坑底付近から縄文土器が出土した。花粉分析・脂肪酸分析を行っている。縄文時代後期の土坑である。

土坑35 e - S K 4 (図版第25・第84-(2)) 4次調査区の35 e 地区付近で検出した土坑で、長さ約2.7m・幅約1.4m・深さ約0.6mを測る。土坑底は平坦である。土坑内からは縄文土器に酷似した胎土をもつ土器片が出土している。埋土は3層で、最下層が暗茶褐色土、下層が茶褐色土、上層が淡茶褐色土となっている。縄文時代後期の土坑である。

土坑38 d - S K 10 (図版第25・第83-(2)) 4次調査区の38 d 地区付近で検出した不整形の土坑で、長径約1.1m・短径約0.9m・深さ約0.6mを測る。埋土は2層で、下層が黄褐色土混じりの淡茶褐色土、上層が黄褐色土混じりの茶褐色土で、部分的に炭化物が混じる。花粉分析・脂肪酸分析を行っている。時期は不明である。

第4節 陥穴状遺構

1. 概要

土坑底面にピットをもつものを陥穴状遺構として認識した。32基を検出している。ほとんどの陥穴状遺構は、径1.5m前後・現存する深さ1m前後を測る円形土坑状を呈し、土坑底に径30cm程度・深さ30~50cm程度のピットを一つもつ。長楕円形を呈するものには陥穴状遺構37 i -P 3と陥穴状遺構40 a -S K 3とがある。

出土遺物はほとんどないが、陥穴状遺構39 j -P 4 及び陥穴状遺構42 h -P 1 内から縄文土器に近似する胎土をもつ土器片が出土したことや周辺から縄文時代後期前半期の土器片が出土していることから、縄文時代後期前半期に構築された可能性が高い。

2. 2次調査区検出陥穴状遺構

陥穴状遺構 3 G-P 4 (図版第26) 3 G 地区で検出した。長径約1.58m×短径約1.05m、現存する深さ0.9mを測る隅丸長方形に近い不整楕円形の土坑で、土坑底中央に直径約20～30cm・深さ約32cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 3 A-P 2 (図版第26) 3 A 地区で検出した。長径約1.1m×短径約0.95m、現存する深さ約0.08mを測る不整円形の土坑で、土坑底中央に直径約30cm・深さ約35cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 4 C-P 2 (図版第26) 4 C 地区で検出した。長径約1.1m×短径約1.0m、現存する深さ約0.25mを測る不整円形の土坑で、土坑底北寄りに直径約23cm・深さ約40cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 6 G-P 2 (図版第26) 6 G 地区で検出した。長径約0.9m×短径約0.67m、現存する深さ約0.45mを測る隅丸長方形の土坑で、土坑底西寄りに直径20～25cm程度・深さ約10cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 10A-P 1 (図版第26) 10A 地区で検出した。長径約0.95m×短径約0.62m、現存する深さ約0.33mを測る隅丸長方形の土坑で、土坑底北西寄りに直径約23cm・深さ約8cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 6 E-P 5 (図版第26) 6 E 地区で検出した。長径約1.1m×短径約0.72m、現存する深さ0.55mを測る不整円形の土坑で、土坑底中央に直径約34cm・深さ約29cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 10B-P 8 (図版第26) 10B 地区で検出した。長径約0.8m×短径約0.8m、現存する深さ0.35mを測る隅丸方形に近い不整円形を呈する土坑で、土坑底中央に直径約24cm・深さ約44cmのピットをもつ。

3. 3次調査区検出陥穴状遺構

陥穴状遺構 6 d-P 4 (図版第26) 6 d 地区で検出した。長径約1.02m×短径約0.82m、現存する深さ0.52mを測る卵形を呈する土坑で、土坑底中央に直径約30cm・深さ約17cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 19 j-S K 3 (図版第26) 19 j 地区で検出した。竪穴式住居跡 S H9119と重複している。長径約1.2m×短径約0.7m、現存する深さ0.5mを測る小判形を呈する土坑で、土坑底中央に直径約25cm・深さ約20cmのピットをもつ。

陥穴状遺構 28 a-P 1 (図版第26) 28 a 地区で検出した。長径約1.1m×短径約0.85m、現存する深さ0.55mを測る不整円形の土坑で、土坑底中央に直径約36cm・深さ約50cmのピットをもつ。

ットをもつ。

陥穴状遺構28 d - P 2 (図版第26) 28 d 地区で検出した。長径約1.53m×短径約1.0m、現存する深さ0.06mを測る不整形の土坑で、土坑底やや東寄りに直径約21～26cm・深さ約17cmのピットをもつ。

陥穴状遺構30 f - P 1 (図版第26) 30 f 地区で検出した。上部は広い範囲にわたって土色変化が認められ、約0.6m掘り下げた段階で長径約1.1m×短径約0.8m、隅丸方形に近い不整形の土坑を検出した。現存する深さ1.1mを測る。土坑底中央に直径約18cm・深さ約17cmのピットをもつ。

陥穴状遺構31 b - P 1 (図版第26) 31 b 地区で検出した。長径約1.4m×短径約0.97m、現存する深さ0.42mを測る不整形の土坑で、土坑底中央に2つのピットがある。一方のピットは直径約15cm・深さ約5cmで、浅い窪み状を呈しており、本来の機能は直径約15cm・深さ約20cmの西寄りのピットにあるものと考えられる。

陥穴状遺構30 b - P 1 (図版第26) 30 b 地区で検出した。長径約1.15m×短径約0.9m、現存する深さ0.62mを測る隅丸長方形に近い不整形を呈する土坑で、土坑底中央に直径約21cm・深さ約30cmのピットをもつ。

4. 4次調査区検出陥穴状遺構

陥穴状遺構36 i - P 2 (図版第27・第86-(1)) 36 i 地区で検出した。長径約0.98m×短径約0.8m、現存する深さ0.51mを測る不整形の土坑で、土坑底中央に直径約15cm・深さ約19cmのピットをもつ。

陥穴状遺構37 i - P 3 (図版第27・第86-(2)) 37 i 地区で検出した。長径約0.96m×短径約0.6m、現存する深さ約0.5mを測る。長楕円形の土坑で、土坑底の中央に直径16～24cm・深さ約15cmのピットをもつ。

陥穴状遺構38 d - S K 1 (図版第28・第87-(3)) 38 d 地区で検出した。長径約1.18m×短径約0.8m、現存する深さ約0.55mを測る小判形を呈する土坑で、土坑底中央に直径17～20cm・深さ約30cmのピットをもつ。陥穴状遺構38 d - S K 2と重複する。前後関係は不明である。

陥穴状遺構38 d - S K 2 (図版第28・第87-(3)) 38 d 地区で検出した。長径約1.1m×短径約0.9m、現存する深さ約0.58mを測る卵形を呈する土坑で、土坑底中央に直径20～23cm程度・深さ約30cmのピットをもつ。陥穴状遺構38 d - S K 1と重複する。前後関係は不明である。

陥穴状遺構39 j - P 4 (図版第27) 39 j 地区で検出した。上部は調査の過程で崩れてお

り、本来の形状を失っているが、径1.1m程度の円形の土坑である。現存する深さ約0.51mを測る。土坑底中央に直径約19cm・深さ約37cmのピットをもつ。埋土は黄褐色土混じりの暗茶褐色砂質土で、炭化物を含む。

陥穴状遺構40h-P 7 (図版第27・第87-(4)) 40h地区で検出した。長径約1.03m×短径約0.82m、現存の深さ約0.72mを測る不整円形の土坑で、北辺部がやや直線的である。土坑底中央に直径約24cm・深さ約30cmのピットをもつ。埋土は暗茶褐色砂質土である。

陥穴状遺構40a-S K 3 (図版第28・第86-(3)・(4)) 40a地区で検出した。長さ約1.9m・幅約1.0m、現存する深さ約0.8mを測る長楕円形の土坑である。土坑底に径25cm程度・深さ50cm程度のピットをもつ。埋土は最下層に黒茶褐色土があり、下層に暗茶褐色土、茶褐色土が堆積する。この段階でも黒茶褐色土がみられ、上層に淡茶褐色土が堆積する。

陥穴状遺構40b-P 1 (図版第27・第85-(3)) 40b地区で検出した。長径約1.3m×短径約1.2m、現存する深さ約0.66mを測る隅丸方形に近い不整円形の土坑で、土坑底中央に直径30~40cm程度・深さ約45cmのピットをもつ。

陥穴状遺構40b-P 2 (図版第27・第85-(2)) 40b地区で検出した。南側には土色変化が認められ、本来の形状が押さえられなかったが、長径約1.5m程度×短径約1.25m、現存する深さ約0.83mを測る小判形の土坑になるものと思われる。土坑底中央に直径25~30cm程度・深さ約45cmのピットをもつ。

陥穴状遺構41b-P 9 (図版第27・第85-(4)) 41b地区で検出した。長径約1.48m×短径約1.38m、現存する深さ約0.46mを測る不整円形の土坑で、土坑底の中央に直径30cm程度・深さ約30cmのピットをもつ。

陥穴状遺構41d-S K 1 (図版第28・第88-(1)) 41d地区で検出した。長径約0.94m×短径約0.77m、現存する深さ約0.6mを測る卵形を呈する土坑で、土坑底中央に直径約13cm・深さ約20cmのピットをもつ。

陥穴状遺構42h-P 1 (図版第28・第88-(4)) 42h地区で検出した。径1.3m程度、現存する深さ約0.75mを測る不整円形の土坑で、土坑底南寄りに直径約25cm・深さ約23cmのピットをもつ。埋土は、下層が黄褐色土混じりの淡茶褐色土で、上層に暗茶褐色土及び黄褐色土混じりの茶褐色土である。花粉分析・脂肪酸分析を行っている。

陥穴状遺構42e-P 2 (図版第28・第88-(3)) 42e地区で検出した。長径約1.0m×短径約0.8m、現存する深さ約0.69mを測る卵形を呈する土坑で、土坑底中央に直径約20cm・深さ約30cmのピットをもつ。

陥穴状遺構42b-P 2 (図版第28・第88-(2)) 42b地区で検出した。長径約1.06m×短径約0.9m、現存する深さ約0.68mを測る不整円形の土坑で、土坑底に直径約17cm・深さ

約38cmのピットをもつ。

陥穴状遺構43 a-S K 1 (図版第27) 43 a 地区で検出した。長径約1.35m×短径約1.15m、現存する深さ約0.55mを測る不整円形の土坑で、土坑底中央に直径約25cm・深さ約38cmのピットをもつ。

陥穴状遺構43 i-S K 1 (図版第28) 43 i 地区で検出した。径約0.8m、現存する深さ約0.04mを測る円形の土坑で、土坑底中央に直径約20cm・深さ約30cmのピットをもつ。

陥穴状遺構44 b-S K 1 (図版第27) 44 b 地区で検出した。長径約1.15m×短径約0.96m、現存する深さ約0.65mを測る不整円形の土坑で、土坑底中央に直径25～30cm程度・深さ約27cmのピットをもつ。

陥穴状遺構46 i-P 1 (図版第28・第87-(1)・(2)) 46 i 地区で検出した。長径1.2m×短径1.1m、現存する深さ0.5mを測る不整円形の土坑で、土坑底に直径20cm・深さ50cmのピットをもつ。埋土は、土坑底付近に黄茶褐色土があり、その上を茶褐色土が覆い、上層に淡茶褐色土がのる。

第5節 井戸跡

井戸跡 S E 9015 (図版第29・第80・第81) 2次調査区の9 H地区で検出した。井戸の掘形は長辺1.5m×短辺1.25mを測る長方形で、検出面から井戸底までの深さは、約80cmを測る。土坑 S K 9006がある程度埋もれた段階で掘削されている。井戸枠の構造は、縦板の下端を横板で止めている。横板は、柄で組み合わせている。遺物は上層から下層まで各所で出土した。上層で検出した須恵器の壺は、底部が打ち欠かれており、逆位で出土した。出土遺物は、須恵器がほとんどで、土師器は破片が少量出土しただけである。縦板は164.8m以下で残存しており、この位置までが湿潤であったことがわかる。また、164.7m付近に縦板の残欠が水平に倒れ込んでおり、この位置までは自然に埋没したものと思われる。倒れ込んだ縦板から長さを復原すると1.1m程度になる。おそらく164.7mまで埋没した段階で、井戸が廃棄されて一気に埋め立てられ、上部では井戸廃棄に伴う作業が行われたのであろう。なお、最上部は黄褐色土で覆われていた。井戸枠の長軸方向は、国土座標軸の北方向から東へ約143°振る。天若Ⅷ期に位置づけられる。

第3章 出土遺物

第1節 出土遺物の概要

1. 須恵器

須恵器は、調査地のほぼ全域から出土している。杯蓋・杯身が多く、時期区分の指標となるため、いくつかに分類した。

杯蓋は、肩部の形態、内面の返りの有無などで大きく4タイプに分けた。

杯蓋Ⅰ類 肩部に稜をもつもの。

杯蓋Ⅱ類 肩部に稜をもたないもの。

杯蓋Ⅲ類 宝珠つまみをもち内面に返りをもつもの。

杯蓋Ⅳ類 宝珠つまみをもち内面に返りをもたないもの。

杯身は、受け部の有無、立ち上がりの内傾^(注7)の仕方、高台の有無などで5タイプに分けた。

杯身Ⅰ類1型 受け部をもち、立ち上がりの内傾度の弱いもの。

杯身Ⅰ類2型 受け部をもち、立ち上がりの内傾度の強いもの。

杯身Ⅰ類3型 受け部をもち、立ち上がりが貧弱なもの。

杯身Ⅱ類 受け部がなく、高台をもたないもの。

杯身Ⅲ類 受け部がなく、高台をもつもの。

2. 土師器

土師器は、調査地のほぼ全域から出土した。古墳時代に始まり、ほぼ全時代にわたるものがみられる。古墳時代のものは住居跡出土の甕が多いが、復原のできるものは少ない。

3. 瓦器

瓦器は、調査地のほぼ全域から出土している。特に、4次調査で設定した21トレンチ及び22トレンチからは数多く出土した。

4. 縄文土器

縄文土器は、すべてが小片で、3次調査区東側から4次調査区にかけての地域で出土した。遺構出土のものは土坑及び陥穴状遺構からである。時期はほとんどが後期前半期である。

5. 陶器・磁器

陶器・磁器は、調査地のほぼ全域からわずかずつ出土している。図示できなかつたが、緑釉陶器は小片ばかりで、多くが3次調査区の東寄りの30地区付近から出土した。

6. 石製品

古墳時代の竪穴式住居跡内からいくつかの石製品が出土しているが、埋土中に混入したと思われるものも多い。縄文時代の石製品は大半を地表に露出したものを採集した。

7. 鉄製品

鉄製品は、古墳時代の竪穴式住居跡内から出土した。形状から機能が予測できるものはわずかで、ほとんどが角柱状のものである。

8. 土錘

土錘は、総計165点出土した。形態から5タイプに分かれる。

- A型 中央に最大径があり、紡錘形を呈する比較的小型のものである。
- B型 円筒を呈するものである。小口は面をなす。
- C型 最大径の位置が明瞭ではなく、棒状を呈し、小口に面をもたない。
- D型 くびれが数段あり、粘土を握ったまま成形したと考えられるものである。
- E型 紡錘形を呈する比較的大型のものである。

第2節 遺構出土遺物

S H9001出土遺物(図版第38;162) 須恵器杯身1点を図示した。I類1型のものである。底部のヘラケズリは89%に及ぶ。破片のため細部は不明である。住居跡内のP-10から出土した。I類1型でも古い要素を示す。土錘は、埋土中からC型が1点出土している。

S H9002出土遺物(図版第40;227~238、図版第44;330) 須恵器杯蓋は、1点図示した。227は、肩部に明瞭な稜線をもち、天井部を92%ヘラケズリする。I類でも古い様相を示す。須恵器杯身は、1点図示した。228は、底部の85%をヘラケズリする。I類1型でも古い様相を示す。須恵器甕は、1点図示した。229は、口縁部のみの破片である。頸部に波状文をめぐらす。土師器は、9点図示した。甕(238)は、頸部が「く」の字状に屈曲する。高杯は、いずれも裾部で明瞭に屈曲する。杯部には明瞭な屈曲は認められず、ゆるやかに立ち上がる。235は、円形の透かし穴をもつ。椀(230)は、小さな底部をもち、半

球状の体部から口縁部が内傾ぎみに立ち上がる。底部3点は、いずれも平底である。鉄製品は、埋土中から1点出土している。330は、扁平な円柱状を呈するもので、実体は不明である。土鍾は、埋土中から5点出土した。A型が1点、C型が3点ある。

S H9003出土遺物(図版第30・31; 1~23) 須恵器杯蓋は、6点図示した。I類が5点・Ⅲ類が1点ある。しかし、Ⅲ類は住居跡検出時に埋土上部から出土しており、主体は床面付近から出土したI類が占める。天井部の低いものが3点(1・3・4)ある。いずれも肩部に稜線が鋭くめぐる1・4では、天井部のヘラケズリが全体の80%前後にまで及ぶ。I類でも古い様相を示す。天井部の高いものは2点(2・5)ある。5は、肩部に稜線が鋭くめぐり、天井部のヘラケズリは全体の70%に及ぶ。2は、肩部の稜線は沈線へと退化し、天井部のヘラケズリも全体の50%に満たない。I類でも新しい様相を示す。須恵器杯身は、6点図示した。I類1型が5点、Ⅲ類が1点ある。しかし、Ⅲ類は住居跡検出時に埋土上部から出土したものであり、主体は床面付近から出土したI類が占める。底部の浅いものは3点(6・7・9)ある。ヘラケズリは、いずれも底部全体の70%前後に及ぶ。I類1型でも古い様相を示す。底部の深いものは2点(8・10)ある。10の受け部は、鈍さを増す。ヘラケズリは底部全体の35%程度である。I類1型でも新しい様相を示す。須恵器有蓋高杯(11)は、住居跡床面付近で小破片となって出土した。杯部は、鉢形を呈し、中央付近に鋭い稜線を2本めぐらし、その下に波状文を施す。杯底部にはカキメを施す。脚部には4方向に方形透かしをもつ。体部波状文帯上につまみ一つ貼り付けられていた痕跡が認められる。須恵器甕は、2点図示した。15は、住居跡検出時に埋土上部から出土した。14は、住居跡床面付近出土である。土師器は、8点図示した。甕4点は、口縁部が「く」の字状に屈曲する。16は、口縁部内面を肥厚させている。底部は、直接の接点はないが、丸底になる。外面はハケ調整を行い、内面はヘラケズリする。内面下半には指頭圧痕が残る。布留式土器の甕の系譜を引いている。甕(23)は、底部に円孔とこれを取り巻く4つの隅丸長方形の孔が開けられている。他に、高杯(20)、鉢(22)、ミニチュア土器(21)が出土した。土鍾は、埋土中から79点出土した。A型40点、B型2点、C型32点、D型2点、E型1点である。B型は、いずれも住居跡検出時に出土したが、住居跡に伴うものではない。

S H9004出土遺物(図版第38; 166・167、図版第43; 321) 須恵器杯身を2点図示した。I類1型1点(166)とII型(167)1点である。166は、細片である。167は、住居跡内P-11から出土したものである。ただし、住居跡に伴うピットであるかどうかは不明である。石製品では、P-3から有孔磨製石鏃(321)が出土した。基部は、凹基無柄式で、ていねいな研磨によって鋭い刃縁部を形成している。長さ4.8cm・幅2.7cm・厚さ0.3cmを測り、重さ5.46gを量る。穿孔は両側から行っている。粘板岩系統の石材を使用している。土鍾は、

埋土中からA型が1点出土した。

S H9101出土遺物(図版第38; 163) 須恵器杯身を1点図示した。Ⅱ型のものである。163は、底部にヘラ切り痕を明瞭に残す。

S H9102出土遺物(図版第38; 160) 須恵器杯蓋1点を図示した。Ⅱ類のもので天井が高い。160は、口縁端部にやや焼け歪みを生じている。口縁に沿って、指頭で強く押さえて鈍い段をつくり出している。Ⅱ類でも新しい様相を示す。

S H9103出土遺物(図版第38; 173~175) 須恵器杯身2点を図示した。Ⅰ類2型(173)とⅡ類(174)とがある。173は、底部が深く、立ち上がりが短く退化する。底部のヘラケズリは20%余りで、Ⅰ類2型でも新しい様相を示す。いずれも埋土上部から出土した。土師器は、甕1点を図示した。175は、頸部が「く」の字状に屈曲するもので、口縁部内側を肥厚させている。土錘は、埋土中から3点出土した。A型が1点、D型が1点ある。

S H9104出土遺物(図版第38; 184~189) 須恵器杯蓋(185)は、1点図示した。Ⅲ類のものである。185は、明瞭な肩部をもつ。頂部を欠くが、宝珠つまみをもつと思われる。須恵器杯身は、4点を図示した。Ⅰ類3型が1点(184)とⅡ類が3点(186~188)である。184は、焼け歪みが生じている。186は、全体に粗雑なつくりで、外面のケズリによる稜線は不明瞭である。187は、焼け歪みが激しく、楕円形を呈している。土師器は、小型甕1点を図示した。189は、球形の体部からゆるやかに外反する口縁部が付く。土錘は、埋土中から3点出土した。A型が1点、C型が2点ある。

S H9105出土遺物(図版第38; 190) 須恵器杯身は、1点図示した。Ⅱ類である。全体に作りは粗雑である。

S H9106出土遺物(図版第40; 239~247、図版第42; 301、図版第43; 331・332) 須恵器杯身は、2点図示した。Ⅱ類である。239の肩部には円形の打撃痕が残る。土師器は、7点図示した。高杯3点、小型壺2点、皿1点、底部1点がある。243は、高杯脚部である。杯部と脚部を別に作り、接合は粘土の充填によると思われる。器面は荒れ、調整は不明である。241は漏斗状、242は碗形を呈する杯部である。他に、手づくねの小型壺244・245、皿247がある。底部246は、平底である。鉄製品は、埋土中から2点出土した。331は、刀子状の形態であるが、大きく屈曲しているため実体は不明である。332は、角柱状の小片である。縄文土器が埋土中から1点出土した。301は、橋状把手の部分である。先端には2か所の窪みをつけ、上部には5mm程度の円形刺突を施す。土錘は、埋土中からC型が3点出土した。

S H9111出土遺物(図版第32; 38~46) 須恵器杯身1点を図示した。Ⅰ類2型の底部の浅いもの(38)である。ヘラケズリは、底部全体の40%余りに及ぶ。Ⅰ類2型でも新しい

様相を示す。土師器は、8点を図示した。甕7点と鉢1点がある。甕7点はいずれも「く」の字状に頸部が屈曲する。45・46は、同一個体と考えられる。鉢42は、頸部に段をもって口縁部が屈曲し、口縁端部に段をめぐらす。土錘は、埋土中からC型が2点出土した。

S H9112出土遺物(図版第34; 80~96) 須恵器杯身を3点図示した。1類1型で、底部の浅いもの(80・81)と深いもの(82)とがある。底部の浅い80は、底部に平坦面をもち、ヘラケズリは全体の50%近くに及ぶ。1類1型でも古い様相を示す。81は、浅い丸底で底部のヘラケズリは全体の25%に留まる。1類1型でも新しい様相を示す。82は、底部が深く、狭い平坦面をもつ。底部のヘラケズリは全体の40%に及ぶ。1類1型でも新しい様相を示す。土師器は、14点図示した。椀4点、壺1点、甕9点がある。83・84は、底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部でわずかに屈曲をつける。85・86は、底部からゆるやかに立ち上がり、やや内傾させ、しほり込んだのち、「く」の字状に外反する。器面調整は、表面が剥落しているため不明である。底部中央は、指頭分だけわずかに盛り上がる。小型壺89は、算盤玉状の胴部に大きく開く口縁部がのる。小型甕87・88・90~92は、体部が球形を呈し、中央付近に最大径をもつ。甕は、頸部を「く」の字状に外反させる。

S H9113出土遺物(図版第33; 76~79) 須恵器杯身は、1点図示した。1類1型のもので底部は深い(76)。76は、底部が深い丸底を呈する。底部のヘラケズリは、全体の50%である。底部にはヘラ記号が刻まれている。1類1型でも新しい様相を示す。有蓋高杯の蓋は、1点図示した。77は、高い天井部に中央部が窪んだ扁平なつまみがつく。肩部にヘラ状工具による凹線を施し、ケズリとナデとを区分している。端面内面には凹線をめぐらす。土師器は、甕を2点図示した。いずれも頸部を「く」の字状に屈曲させるものである。土錘は、埋土中からC型が1点出土した。

S H9115出土遺物(図版第37; 158・159) 須恵器杯身1点を図示した。1類1型のもので(158)である。底部の85%をヘラケズリする。破片のため細部は不明である。土師器は、小型甕159を1点図示した。

S H9116出土遺物(図版第34; 97~102、図版第43; 329) 須恵器杯身は、1点図示した。1類2型で底部が浅い。97は、口径の割に器高の低い扁平な杯身である。1類2型でも新しい様相を示す。有蓋高杯の蓋を1点図示した。98は、有蓋高杯の杯蓋である。天井部には扁平なつまみが付く。比較的ていねいな作りである。須恵器甕99は、1点図示した。軟質の須恵器である。口縁端部を外側に肥厚させ、体部外面に格子タタキ、内面に青海波文を残す。土師器は、甕3点図示した。100は、体部下半に最大径をもつ。101・102は、頸部が「く」の字状に屈曲する。また、紡錘車が1点(329)出土した。下部径約3.9cm・上部径約2.4cm・高さ約1.4cmを測る。中心に0.8cm程度のやや歪んだ穿孔がある。滑石を用

いる。側縁には鋸歯文が描かれている。土錘は、埋土中からB型が1点出土した。

S H9117出土遺物(図版第37; 150~153) 須恵器杯蓋は、1点図示した。Ⅱ類で天井の高いもの(150)である。天井部はやや丸みをおび、ヘラケズリは器高の60%に及ぶ。Ⅱ類でも古い様相を示している。須恵器杯身は、1点図示した。Ⅰ類2型で底部の深いもの(151)である。底部は、丸みをおびており、ヘラケズリは40%に及んでいる。内面にはタキ痕を残す。Ⅰ類2型でも古い様相を示している。土師器は、小型甕2点を図示した。

S H9118出土遺物(図版第35; 118~125、図版第43; 325) 須恵器杯蓋は、3点図示した。Ⅰ類2点とⅡ類1点とがある。Ⅰ類は、天井の高いものである。118は、肩部には明瞭な段を設けている。天井部のヘラケズリは全体の40%に及ぶ。頂部には直線的なヘラ記号が刻まれている。焼き歪みによる変形が著しい。119は、肩部の稜線が鈍く、天井部はかなり高い。ヘラケズリは全体の43%に及ぶ。Ⅰ類でも新しい様相を示す。120は、Ⅱ類で天井の高いものである。口縁端部内面に一条の沈線がめぐる。Ⅱ類でも古い様相を示す。120は、住居跡廃絶後掘り込まれたと思われる土坑(P-3)底から出土したもので、直接住居跡とは関連しないものと考えられる。須恵器杯身は、1点図示した。121は、Ⅰ類1型で、底部の深いものである。底部のヘラケズリは全体の35%に及ぶ。Ⅰ類1型でも新しい様相を示す。有蓋高杯の蓋1点を図示した。122は、扁平で中央部分が窪んだつまみが付く軟質の有蓋高杯の杯蓋である。土師器は、3点を図示した。123は、椀である。口縁部を強くナデて、段を形成する。124・125は、頸部が「く」の字状に屈曲する小型甕である。また、床面直上から砥石(325)が出土した。土錘は、埋土中からB型が1点出土した。

S H9121出土遺物(図版第32; 47~59、図版第43; 318、図版第44; 333・334) 須恵器杯蓋は、2点図示した。Ⅰ類が2点ある。天井部の丸みの弱いものが2点(47・48)ある。47は肩部にめぐる稜線が鋭く、天井部のヘラケズリは70%に及ぶ。Ⅰ類でも古い様相を示す。48は、肩部にめぐる稜線がやや鈍く、天井部のヘラケズリは高さの50%に及ぶ。Ⅰ類でも新しい様相を示す。須恵器杯身は、4点図示した。Ⅰ類1型が4点ある。底部の浅いもの(49・51)がある。いずれも底部は平坦面をもち、ヘラケズリが高さの45%程度に及ぶ。Ⅰ類1型でも古い様相を示す。底部の深いもの(50・52)がある。52は、底部が深く、やや丸みを帯びるものの、平坦面をもち、ヘラケズリは全体の47%に及ぶ。底部にはヘラ記号が刻まれている。Ⅰ類1型でも古い様相を強く残す。50は、底部が深い丸底を呈する。底部のヘラケズリは全体の55%である。Ⅰ類1型でも新しい様相を示す。有蓋高杯は、2点図示した。54は、3方に円形透かしをもつ有蓋高杯である。杯部の上半を欠く。脚部には横方向のカキメが施される。53は、3方に方形透かしをもつ有蓋高杯である。脚部には横方向のカキメが施される。無蓋高杯は、1点図示した。杯蓋Ⅰ類の新しい様相を示す個体

を杯部に用いている。提瓶・甕は、それぞれ1点を図示した。提瓶56は、体部の前面のみ出土した。肩の両側には鈎状に屈曲する耳がつくものと思われる。前面は、カキメが施される。甕(57)は、体部に2本の沈線で区画し、櫛描き列点文をめぐる。肩部は明瞭に屈曲する。土師器は、2点図示した。甕(59)は、口縁部が「く」の字状に屈曲する。他に、ミニチュア土器(58)がある。石製品は、石鏃(318)が埋土中から出土した。サヌカイトを石材とした石鏃で、平基無柄式である。混入したものである。鉄製品は、埋土中から2点出土している。334は、床面上から出土した。角柱状を呈するものであるが、実体は不明である。333は、埋土中からの出土で、角柱状から次第に先細りしていくもので、釘である。土錘は、埋土中から3点出土した。A型が1点、C型が2点ある。

S H9122出土遺物(図版第31; 24~37・61、図版第43; 319・324・326~328、図版第44; 335~337) 須恵器杯蓋は、8点図示した。I類が7点・II類が1点ある。I類には天井部の低いものが2点(26・29)、高いものが5点(24・27・28・30・61)ある。天井部の低い26・29は、肩部にめぐる稜線が鋭く、天井部に平坦面をもつ。天井部のヘラケズリは全体の50~60%に及ぶ。I類でも古い様相をもつ。天井部の高い24・27・28・30・61は、天井部が丸みをもつ。特に、天井部の高い30・61は、肩部にめぐる稜線は鈍いものが多く、沈線を伴うまでに退化しているものもある。天井部のヘラケズリはほとんどが60%前後に及んでいるが、30は全体の30%余りに留まる。I類でも新しい様相をもつ。II類は、天井部の高いもの(25)である。天井部のヘラケズリは全体の30%に満たない。II類でも古い様相をもつ。なお、61は、住居内土坑S K08・S K15から出土したものであるが、S H9128出土土器と接合することから、S H9128に帰属するものと考えられる。須恵器杯身は4点図示した。I類1型が2点(31・32)、I類2型が2点(33・34)ある。I類1型では底部の浅いもの(32)と深いもの(31)とがある。32は、底部に平坦面をもつ。底部のヘラケズリは全体の45%である。I類1型でも古い様相を示す。31は、底部が深い丸底を呈する。底部のヘラケズリは全体の58%である。I類1型でも新しい様相を示す。I類2型では底部の深いもの(33)と浅いもの(34)とがある。33は、ヘラケズリが底部全体の30%余りに留まる。I類2型でも古い様相を示す。34は、ヘラケズリが底部全体の30%に留まる。I類2型でも新しい様相を示す。有蓋高杯(35)は、1点図示した。杯底部にカキメを施す。新しい様相をもつ25・33・34は、住居跡検出時に出土したもので、床面から30cm近く遊離しており、住居跡の埋没段階の混入と考えられる。したがって、住居の年代は、杯蓋のI類及び杯身のI類1型の時期に当たる。土師器は、2点図示した。甕2点(36・37)で、口縁部が「く」の字状に屈曲するものである。36は、口縁部内面を肥厚させている。石製品は、砥石や紡錘車、有孔石製品が出土した。砥石324は、いわゆる鳴滝石を用いたもので、中央部が使

い込まれている。紡錘車(326~328)は、住居内土坑から未製品(326)や破損品(327・328)が出土している。326は、住居跡内のP-9から出土した。緑泥片岩を用いている。長径約5.8cm×短径約5.5cm・高さ約1.3cmを測る。中心の穿孔は行われていない。工具痕が明瞭に残り、荒仕上げ段階で抛棄されている。327・328は、同一個体と思われる。327は住居内のS K09、328は住居内のS K10から出土した。緑泥片岩を用いている。直径5.2cm程度・高さ約1.0cmを測る。中心に直径0.9cmの穿孔がなされている。仕上げは、細かいケズリで行われている。有孔石製品(319)は、住居跡内のS K10から出土した。一部を破損する。長方形の石板に径1mmの穿孔を行っている。穿孔の数は不明である。装飾品と思われる。鉄製品は、埋土中から1点、土坑S K6から2点出土した。337は、小刀の切先部分である。335・336は、角柱状を呈するもので、釘と思われるが実体は不明である。

S H9123出土遺物(図版第44; 338・339) 鉄製品がP-3内から小片4点が出土した。いずれも角柱状を呈しており、同一のものと思われる。338はやや屈曲し、339は先端がヘラ状になる。本来の形態は不明である。なお、図示はできなかったが、須恵器杯蓋のⅢ類と、須恵器杯身のⅠ類3型が小片で出土している。

S H9124出土遺物(図版第38; 164・165) 須恵器杯身を2点図示した。Ⅱ型のものである。164は、軟質の須恵器である。

S H9126出土遺物(図版第38; 161) 須恵器杯蓋1点を図示した。Ⅱ類のもので天井が高い。天井は平坦で、頂部のみをヘラケズリする。Ⅱ類でも古い要素を示す。

S H9127出土遺物(図版第38; 176~178) 須恵器杯身1点を図示した。176は、Ⅰ類2型で、底部は深く、ヘラケズリは65%に及んでいる。Ⅰ類2型でも古い様相を示す。土師器は、頸部が「く」の字状に屈曲する甕2点を図示した。177は、口縁部が大きく外反し、178は、やや内湾する。

S H9128出土遺物(図版第33; 60~75) 須恵器杯蓋は、2点図示した。Ⅰ類が1点、Ⅱ類が1点ある。Ⅰ類は天井部の高いもの(61)である。S H9122出土資料と接合する。天井部のヘラケズリは全体の40%余りで、Ⅰ類でも新しい様相を示す。Ⅱ類は天井部の高いもの(60)で、天井部のヘラケズリは全体の30%に及ぶ。Ⅱ類でも古い様相をもつ。須恵器杯身は4点図示した。Ⅰ類1型が1点(62)、Ⅰ類2型が3点(63~65)ある。Ⅰ類1型は、底部の深いもの(62)である。62は、底部が深い丸底を呈する。底部のヘラケズリは全体の30%である。Ⅰ類1型でも新しい様相を示す。Ⅰ類2型では底部の深いもの(63・64)と浅いもの(65)とがある。ヘラケズリは、65が底部全体の50%前後に及び、64は30%余りである。64は、内面にタタキ痕が認められる。Ⅰ類2型でも古い様相を示す。土師器は、10点図示した。小型甕2点、小型壺1点、鉢1点、甕6点がある。小型甕66・68は、体部中央

部付近に最大径をもつ。いずれも球形に近い体部に「く」の字状に折れる口縁が付く。外面に不整方向のハケ調整を施す。内面は、66がナデ仕上げ、68がヘラケズリを行う。66は、体部中央部付近に最大径をもつ土師器の小型壺である。口縁部を欠くが、球形に近い体部に「く」の字状に折れる口縁が付くと思われる。外面は、ヘラミガキを施すようである。鉢(69)は、口縁部下を強くなで、口縁部の屈曲を出す。甕の口縁部は、75が二重口縁に仕上げるのを除くと、いずれも「く」の字状に屈曲させる。72は、口縁内面を肥厚させる。

S H9130出土遺物(図版第38; 168~172) 須恵器杯蓋は、1点図示した。I類(168)である。肩部の稜線は鋭い。I類でも古い様相を示す。須恵器杯身は、2点図示した。I類1型が2点で、底部の深いもの(170)と浅いもの(169)とがある。170は、底部の25%をヘラケズリし、受け部までをナデている。169は、底部の55%をヘラケズリする。I類1型でも新しい要素を示す。土師器は、甕1点(172)とミニチュア1点(171)を図示した。

S H9131出土遺物(図版第38; 179~183) 須恵器杯身は1点図示した。I類1型で、底部の深いものである。179は、体部をかなり厚手に仕上げている。底部は36%ヘラケズリする。I類1型でも新しい様相を示す。土師器は、高杯を4点図示した。180・181は杯部で、杯底部から強く屈曲して立ち上がる。182・183は、胎土などから同一個体の可能性が高い。裾部で、明瞭に屈曲する。

S H9140出土遺物(図版第37; 139~149) 須恵器杯蓋は、2点図示した。I類のもので、天井の低いもの(140)と高いもの(139)とがある。いずれも天井部に平坦面をもち、肩部の稜線が鈍い。天井部のヘラケズリは、140で20%余り、139で50%程度である。I類でも新しい様相を示す。須恵器杯身は、3点図示した。I類1型が2点とII型が1点である。II型(143)は、埋土上部から出土したものであり、直接住居跡と関係するものではない。杯身I類1型(141・142)は、底部が丸みをもち、深いものである。底部のヘラケズリは、142で60%余り、141で20%余りである。I類1型でも新しい様相を示す。土師器は、6点図示した。小型甕274は、球形の体部に外反する口縁部がのる。壺145は、偏球状の体部にやや内傾して立ち上がる口縁部が付く。146~149は、甕である。147・148は、「く」の字状に頸部が屈曲する。148は、口縁端部を短く立ち上げる。146・149は、体部中央付近に最大径があり、口縁部は頸部で屈曲したのち内側へ立ち上げる。149は、内側へ立ち上げが強く、二重口縁状となる。口縁端部はいずれも外側へ摘みあげている。

S H9141出土遺物(図版第37; 154~157、図版第43; 320) 須恵器杯蓋は、1点図示した。II類で天井の高いもの(154)である。全体に丸みを帯びており、ヘラケズリは全体の33%に及ぶ。II類でも古い様相を示す。須恵器杯身は、1点図示した。I類2型で底部の低いもの(155)である。全体に丸みを帯びている。I類2型でも新しい様相を示す。石製

品では磨製石鏃(320)が埋土中から出土した。基部を欠いている。ていねいな研磨によって鋭い刃縁部を形成しているが、先端及び先端部付近の両側縁は面取りを行っている。粘板岩系統の石材を使用している。土師器は、小型甕2点(156・157)を図示した。

S H9201出土遺物(図版第36; 126~130) 須恵器杯蓋は1点を図示した。126は、Ⅱ類のもので、天井がやや高い。天井部のヘラケズリは器高の10%に満たない。Ⅱ類でも新しい様相を示す。須恵器杯身は、2点図示した。Ⅰ類2型で、底部の深いもの(128)と浅いもの(127)とがある。いずれも立ち上がりは短く、底部のヘラケズリも40%程度である。Ⅰ類2型でも新しい様相を示す。須恵器甕は、1点図示した。須恵器甕の底部である。平行タタキの後に細かいカキ目を施す。色調は淡青灰色である。住居内のピット中に据えられた状態で出土したため、口縁部を打ち欠き再利用した可能性もある。土師器は、小型甕1点図示した。口縁端部に段をめぐらせ、外面を粗いハケ、内面をヘラケズリで調整する。

S H9203出土遺物(図版第35; 103~117) 須恵器杯蓋は4点図示した。Ⅱ類が4点ある。天井部の高いものが2点(104・105)、低いものが2点(103・106)ある。104・105は、天井部が高く丸みをおび、天井部のヘラケズリは全体の30%余りに及ぶ。Ⅱ類でも古い様相を示す。103・106は、天井部が低く、偏平な蓋である。天井部のヘラケズリは全体の20%程度に留まる。Ⅱ類でも新しい様相を示す。須恵器杯身は、7点図示した。Ⅰ類2型である。Ⅰ類2型では底部の深いもの(107・112)と浅いもの(108~111・113)とがある。底部が深く丸底の112は、底部のヘラケズリが全体の35%程度に及ぶ。107は、底部のヘラケズリが全体の45%程度に及ぶ。受け部下端にはヘラにより、波状の文様を刻む。底部中位には、強い横ナデにより段が生じている。Ⅱ類でも古い様相を示す。底部が浅く丸底の111は、底部のヘラケズリが全体の58%に及び、Ⅱ類でも古い様相を残す。底が浅く偏平な108~110は、底部のヘラケズリが全体の30%に及ばない。Ⅱ類でも新しい様相を示す。須恵器横瓶1点を図示した。体部の片方に穴ふさぎの痕跡を残す。体部は、大半を左上がりにタタキを施し、ふさいだ部分のみ垂直方向にタタキを施す。口縁部は、全体を完成した後、貼付けている。口縁部にヘラ記号を残す。土師器は、甕3点を図示した。115・116は、頸部で短く直立してから大きく外反する。117は、単純「く」の字状に屈曲する。

S H9204出土遺物(図版第36; 132~138) 須恵器杯身を3点図示した。Ⅰ類2型で、底部の深いもの(134)と浅いもの(132・133)とがある。134は、底部が中位より強く屈曲して立ち上がるのが特徴で、底部のヘラケズリは、134が40%に及び、133が50%に及ぶ。132は、外面が内面に比べて荒れており、蓋をしたまま焼成している。底部のヘラケズリは38%に及ぶ。Ⅰ類2型でも新しい様相を示す。土師器は、4点を図示した。135・137・138は、頸部が「く」の字状に屈曲する長胴の甕である。136は、口縁部で強く外反する鉢

である。土錘は埋土中からA型が1点出土した。

S H9205出土遺物(図版第36; 131) 土師器1点を図示した。頸部が「く」の字状に屈曲する。

その他住居跡出土遺物 図示できなかった遺物のなかにも、時期決定に意味のあるものがある。S H9119からは須恵器杯蓋のI類の古い様相を示すものと、須恵器杯身のI類1型の古い様相を示すもののが出土している。S H9114からは、須恵器杯身のI類1型の新しい様相を示すもののが出土している。S H9120からは、須恵器杯身のI類2型の新しい様相を示すもののが出土している。S H9136からは、須恵器杯蓋のII類の新しい様相を示すもののが出土している。

土坑S K 9006出土遺物(図版第39; 193~226) 須恵器では杯蓋6点、杯身16点、壺2点、甕1点、高杯3点、甕2点を図示した。杯蓋(193~197)は、宝珠つまみと口縁部内面にかえりをもつ。193・197は宝珠つまみが高く、195・194では偏平な宝珠つまみが付く。198は、粗雑な胎土をもつ大型の蓋で、かえりをもたず口縁部を折り曲げる。つまみの有無は不明。杯身は、立ち上がりをもつI類3型が1点、高台をもたないII類が12点、高台をもつIII類が3点ある。I類3型(199)は、立ち上がりが短く鋭い。底部はヘラケズりする。II類には、底部からの立ち上がりが漸次的で半球形を呈するもの(201・205・207・209など)と、平底で外反しながら立ち上がる口縁部をもつもの(202・203)などがある。215・216は、壺である。215は算盤玉状、216は円筒状の胴部をもつ。217は、甕である。扁球状の体部から口縁部が大きく開く。体部下半を粗ケズりする。218は高杯の杯部、219・220は脚部である。221・222は甕の口縁部で、221は乱れた沈線の間を刺突で埋めている。222は、沈線のみである。土師器は、甕3点と底部1点を図示した。甕には球形の胴部をもつ小型のもの(224・225)がある。土錘は、埋土中から23点出土した。A型9点、B型1点、C型8点、E型4点である。

井戸跡S E 9015出土遺物(図版第40; 248~263) 井戸底から出土したものに248・251・257・258がある。杯蓋248は、偏平な宝珠つまみをもつ。かえりはなく、口縁端部を下方へ折り曲げる。杯身251は、高台をもたず、やや丸みを帯びた底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。杯身258・257は、「ハ」の字状に開く高台をもつ。口縁部は短く外傾する。高台は底部周縁より内側に入れて貼り付ける。廃棄時を示すものに249・255・262がある。杯蓋249は、ボタン状の宝珠つまみをもつ。かえりはなく、口縁端部を軽くつまみ出す。焼け歪みが大きい。杯身255は、「ハ」の字状に開く高台をもつ。高台は底部周縁より内側に入れて貼り付ける。長頸壺262は、底部を欠く。出土状況から故意に打ち欠いたと考えられる。体部は肩が張り、明確な屈曲をみせる。ほかに、埋土中からは須恵器

の杯蓋1点、杯身5点、壺1点、薬壺蓋1点、平瓶1点、土師器の甕1点などが出土している。土錘は、埋土中から2点出土した。C型が1点ある。

掘立柱建物跡S B 9021出土遺物(図版第38; 191・192) 須恵器杯蓋を1点図示した。Ⅱ類で、天井は低い。191は、偏平な蓋で、頂部のみ10%に満たないヘラケズリが施されている。Ⅱ類でも新しい様相を示す。須恵器杯身を1点図示した。Ⅱ類である。192は、口縁部が平坦な底部から屈曲して立ち上がるものである。

土坑S K 9133出土遺物(図版第42; 297~300) 土坑S K 9133は、3次調査区の21m地区で検出した直径約1.5m・深さ約1.1mを測る比較的大型の土坑である。上層から縄文時代後期の土器片が7点出土し、4点を図示した。297・298は、内外面に条痕文を施す。299・300は、LRの細かい縄文を施すもので、299は沈線をめぐらす。

土坑20g-P 1出土遺物(図版第42; 288~296) 土坑20g-P 1は、3次調査区の20g地区で検出した長径約1.5m×短径約0.8m・深さ約0.7mを測る土坑である。縄文時代後期の土器片が20数点出土し、9点を図示した。289は、口縁部の破片である。口縁部端部をやや肥厚させ、端面に半截竹管状工具で2列の刺突列をめぐらす。口縁部下には隆帯をめぐらせ、数か所にボタン状の貼り付けを行っている。隆帯上には半截竹管状工具で刺突を施す。体部外面には縄文を施していると思われ、さらに、沈線文で文様を構成している。295・296は、同一の個体である。RLの細かい縄文を地文とし、沈線で文様を構成する。291は、口縁部の破片である。沈線のみで文様を構成している。293は、体部の小片で、外面に数条の条線が認められ、288と同様の胎土をもつ。288は、口縁部の破片である。口縁部端部を大きく肥厚させ、端面に2条の沈線をめぐらす。体部外面の調整は不明である。294は、体部の小片で、外面に数条の条線が認められ、内面には条痕を施す。288と同様の胎土をもつ。290は、口縁部の破片である。口縁部下に幅広のナデを施し、低い隆帯を貼り付ける。体部外面にはRLの縄文を施し、沈線を数条めぐらす。292は、体部破片で、文様は認められず、内外面ともにナデ仕上げしている。

土坑40j-P 4出土遺物(図版第42; 302) 302は、土坑40j-P 4から出土した。RLの縄文を施し、上部に沈線が1条認められる。裏面には条痕調整が施されている。縄文時代後期前半期、北白川上層式土器に類似する土器である。

土坑44d-S K 2出土遺物(図版第42; 306) 306は、内外面ともにナデが施される小片である。胎土に長石・石英などを含み、縄文土器に近い胎土を示す。

土坑35e-S K 4出土遺物(図版第42; 307) 307は、土坑35e-S K 4から出土した。施文は、認められない。胎土に金雲母などを含み、縄文土器に近い胎土を示す。

陥穴状遺構39j-P 4出土遺物(図版第42; 303・304) 303・304は、陥穴状遺構39j-P

4から出土した。施文は、認められない。いずれも胎土に金雲母・長石・石英などを含み、縄文土器に近い胎土を示す。

陥穴状遺構42h-P 1出土遺物(図版第42; 305) 305は、陥穴状遺構42h-P 1から出土した。施文は、認められない。胎土に長石・石英などを多量に含み、縄文土器に近い胎土を示す。

ピット13G-P 4出土遺物(図版第41; 264) 264は、土師器甕である。口縁部が大きく外反し、内外面をハケメ調整する。

土坑S K 9139出土遺物(図版第41; 265) 265は、龍泉窯系の青磁碗で、13世紀頃のものと思われる。見込み部分には判押しによる印刻花文がある。

ピット18I-P 5出土遺物(図版第41; 266) 266は土師器皿で、14世紀頃嵯峨野付近で生産されていた白土器を模倣したものである。

ピット22h-P 4出土遺物(図版第41; 267) 267は、口縁端部を面取りせず、とがったまま終わらせる土師器皿で、13世紀後半から14世紀にかけてのものである。

ピット22g-P 2出土遺物(図版第41; 268・269) 268・269は、土師器皿で、13世紀頃のものである。

土坑S K 9011出土遺物(図版第41; 270・271) 270は、須恵器の皿である。271は、土師器の把手付き鍋である。磨滅しており、調整は不明である。

土坑S K 9137出土遺物(図版第41; 272・273) 272は、土師器甕の口縁部である。端部を上方へ摘み上げている。273は、土師器甕の底部である。内外ともにハケメ調整を施す。

第3節 遺構外出土遺物

1. 包含層出土遺物

(1) 21トレンチ出土遺物(図版第41; 274)

274は、丹波焼の壺である。徳利形で平底を呈する。体部下半には粗いハケ目がみられる。肩部にヘラ記号を残す。一方に注ぎ口が付き、その内面にヘラで溝を作る。16世紀後半のものと考えられる。

(2) 22トレンチ出土遺物(図版第41; 275~287)

275は、土師器の甕である。球形の体部に短く外反する口縁部をもつ平底の土器である。体部下半は右上がり、上半は左上がりの斜めのハケを施す。両者の境目の内面には接合痕が残り、分割成形の可能性がある。片面には下半に、その反対側には上半に煤が付着する。年代は古墳時代前期にさかのぼる可能性がある。

276～279は、土師器皿である。276は、ヘソ皿である。15世紀後半のもので、平安京から持ち込まれた可能性が強い。278は、口縁部を強く横ナデして立ち上げている。13世紀後半から14世紀にかけてのものである。

280は、瀬戸焼きの鉢ないしは向付けの底部破片である。鉄釉がかかる。底部は糸切底で、粘土粒を3か所に貼り付けて足としている。近世初頭の陶器である。

281～284は、瓦器碗である。口縁部下半にやや膨らみをもつ。内面には粗い暗文が認められるが、外面にミガキはみられない。貼り付けの高台は非常に退化している。13世紀後半頃のものである。

285・286は、瓦器の播鉢である。285は、口縁部が内湾し、端面内側をやや摘み出している。286は、口縁部が外反し、端面両側を若干摘み出している。いずれも内面をハケメ調整し、卸目を一本描きする。卸目は、交叉させている。15世紀のものである。

287は、瓦器の羽釜あるいは鼎の口縁部破片である。13世紀頃のものである。

(3) 3次調査区出土遺物(図版第42; 308～310)

308～310は、17トレンチ付近の包含層から3次調査の際に出土した。

309は、口縁部の破片である。口縁下部は、やや屈曲させて無文体を形成している。屈曲部は、RLの細かい縄文を施し、沈線で幾何学文様を施したのち、一部の縄文をナデ消している。310は、体部破片で、外面にはLRの細かい縄文を施し、内面に条痕を施す。308は、体部破片で、内外面ともに条痕文を施す。

2. 採集遺物(図版第42; 311～313、図版第43; 314～317・322・323)

314～317・322・323は、調査地周辺で採集した石器である。314・315は、サヌカイトを石材とした楔形石器である。一側面に裁断面がみられる。316は、チャートを石材とした円錐形石核である。打面調整は行わず、摂理面を打面としている。また、剥片剥離は正面に限られている。317は、サヌカイトを石材とした石鏃である。基部は、凹基無柄式である。322は打製石斧、323は大型蛤刃石斧である。

312は、36 i 採集の縄文土器の小片である。外面に数条の条線が施される。311・313は、30 b 採集の縄文土器の小片である。313は、口縁部の小破片で、口縁端部を前面へやや折り返す。内外面ともに条痕調整を施す。311は、口縁部の破片で、磨滅が著しい。口縁下部をやや屈曲させており、浅鉢と思われる。口縁端部から隆帯を垂下させ、屈曲部で水平にめぐらす。屈曲部には沈線で文様を構成している。また、補修孔が穿たれている。

第4章 考 察

第1節 古墳時代集落の時期区分

1. 住居区域の広がり

天若遺跡をのせる台地は、古墳時代には小さな谷により南北に2分されていることがわかった。したがって、2次調査区がある南側平坦面と3次・4次調査区がある北側平坦面との間は傾斜面となり、住居の存在した可能性は少ない。また、北側から西側にかけても桂川(大堰川)へと向かって傾斜していき、住居の存在した可能性は少ない。3次・4次調査区がある北側平坦面では、4次調査区以東で住居の密度が極端に希薄となっている。試掘トレンチの15トレンチ・16トレンチ・20トレンチで住居跡が検出できなかったことからすれば、4次調査区付近が住居域の東限であろう。

2次調査区がある南側平坦面では、住居跡は西側にまとまっており、東側へ広がるよう



第8図 竪穴式住居跡分布図

すは認められない。試掘トレンチの2トレンチ・3トレンチ・4トレンチ・5トレンチで住居跡が検出できなかったことからすれば、南側平坦面では西端に集中していることがわかる。住居域は限定されるものの、さらに南側に数棟存在する可能性が高い。この付近は集落成立期の住居が集中する地域であり、存在するとすれば集落内最古段階のものと予測される。おそらく、後に述べる天若Ⅰ期に属する住居であろう。

以上のことから、天若遺跡における古墳時代集落の住居区域については、ほとんど調査できたものと理解される。台地東側については、畑地などの生産区域や墓域として利用され、台地下に広がる湿地帯は水田などの生産区域として利用されていたのであろう。

2. 時期区分の指標

住居跡の時期区分にあたっては、編年作業のある程度確立していて変化の捉えやすい須恵器の杯身・杯蓋を指標とし、以下のように8時期区分した。実際には複数時期にまたが

付表2 竪穴式住居跡出土須恵器類型表

遺構	面積 m ²	蓋						身						時期		
		I 古	I 新	II 古	II 新	III	IV	I 古	I 新	I 古	I 新	I 古	I 新		II	III
SH9002	22	1						1								I
SH9005	30															I
SH9001	23							1								II
SH9003	22	3	2				1	3	2						1	II
SH9004	27							1						1		II
SH9115	13							1								II
SH9119	16	○						○								II
SH9122	37	2	5	1				1	1	1	1					II
SH9130	19	1							2							II
SH9121	74	1	1					3	1							II III
SH9112	19							1	2							III
SH9113	27								1							III
SH9114	14							○								III
SH9118	36		2	1				1								III
SH9128	44		1	1				1	3							III
SH9131	18							1								III
SH9140	21		2					2					1			III
SH9117	18			1					1							IV
SH9126	22			1												IV
SH9127	42								1							IV
SH9141	19			1						1						IV
SH9202	19										1					IV
SH9205	(14)															IV

SH9203	38	2 2	2 5	IV V
SH9102	11	1		V
SH9111	24		1	V
SH9116	50		1	V
SH9120	21		○	V
SH9136	18	○		V
SH9201	21	1	2	V
SH9204	22		3	V
SH9101	27		1	VI
SH9103	(27)		1 1	VI
SH9104	17	1	1 3	VI
SH9106	53		2	VI
SH9123	30	○	○	VI
SH9124	21		2	VI
SH9125	20			VI
SB9021		1	1	VII
SK9006		6	1 12 3	VII
SH9105	(16)		1	VIII
SE9015		3	4 4	VIII

る住居が存在することが予測されるが、原則として1棟1時期として位置づけた。各住居の系譜の中で歪みは解消できるものと考えられる。各期には7棟程度の住居が存在する。

天若Ⅰ期；杯蓋Ⅰ類及び杯身Ⅰ類1型のうち古相を指標とする。竈をもたない住居。

陶邑編年TK208前後の時期。

天若Ⅱ期；杯蓋Ⅰ類及び杯身Ⅰ類1型のうち古相を指標とする。竈をもつ住居。

陶邑編年TK23～TK47前後の時期。

天若Ⅲ期；杯蓋Ⅰ類及び杯身Ⅰ類1型のうち新相を指標とする。

陶邑編年MT15前後の時期。

天若Ⅳ期；杯蓋Ⅱ類及び杯身Ⅰ類2型の古相を指標とする。

陶邑編年TK10～TK43前後の時期。

天若Ⅴ期；杯蓋Ⅱ類及び杯身Ⅰ類2型の新相を指標とする。

陶邑編年TK209前後の時期。

天若Ⅵ期；杯蓋Ⅲ類及び杯身Ⅰ類3型・杯身Ⅱ類古相を指標とする。竪穴式住居。

陶邑編年TK217前後の時期。

天若Ⅶ期；杯蓋Ⅲ類及び杯身Ⅰ類3型・杯身Ⅱ類古相を指標とする。掘立柱建物。

陶邑編年TK217前後の時期。

天若Ⅷ期；杯蓋Ⅳ類及び杯身Ⅱ類新相・杯身Ⅲ類を指標とする。

平城京Ⅱ・Ⅲ前後の時期。

3. 各時期の概要

天若Ⅰ期 この台地に住居が営まれた最初の時期に当たる。ほとんどの住居跡は、造り付けの竈をもつが、杯蓋Ⅰ類及び杯身Ⅰ類Ⅰ型の古相が出土する住居には住居跡中央に炉を設けるものがある。炉をもつ住居形態が天若遺跡での最初の住居形態と認識できることから、天若Ⅰ期として分離した。SH9002・SH9005が相当する。この時期の集落は、台地先端部の中でも比較的高い位置にある平坦面(調査区西部地区)に立地する。

天若Ⅱ期 住居が台地上の他の場所(調査区北部地区東側)へも展開し始める時期に当たる。Ⅰ期の立地に比べ一段下がった平坦地にあたる。この時期の住居にはSH9001・SH9003・SH9004・SH9119・SH9115・SH9121・SH9122・SH9130がある。SH9121は集落を通じて最も大きい74㎡という居住空間をもつ。SH9122は37㎡で、SH9121には及ばないがⅡ期としては大型といえる。次いで27㎡のSH9004があり、以下20㎡前後のSH9001・SH9003・SH9130の一群と15㎡前後のSH9119・SH9115の一群とがある。

天若Ⅲ期 調査区西部地区から住居がなくなり、調査区北部地区東側で拡散する時期で、この時期の住居にはSH9128・SH9131・SH9113・SH9118・SH9140・SH9112・SH9114がある。SH9128が44㎡で大型といえる。次いで36㎡のSH9118がある。25㎡程度のSH9113・SH9140の一群と20㎡未満のSH9131・SH9114・SH9112の一群とがある。

天若Ⅳ期 再び台地上の他の場所(調査区南部地)へ展開し始める時期に当たる。この時期の住居にはSH9127・SH9126・SH9117・SH9141・SH9203・SH9204・SH9202がある。SH9127が42㎡で大型といえる。次いで38㎡のSH9203があり、以下22㎡のSH9126・SH9204の一群と20㎡に満たないSH9202・SH9117・SH9141の一群とがある。

天若Ⅴ期 天若Ⅳ期と大差なく、同じ地域内で移動を行う時期である。この時期の住居にはSH9116・SH9120・SH9111・SH9136・SH9203・SH9204・SH9201・SH9102がある。SH9116が50㎡で大型といえる。次いで38㎡のSH9203があり、以下25㎡程度のSH9201・SH9111の一群と20㎡程度のSH9120・SH9136・SH9204の一群とがある。SH9102は、11㎡と集落内最少の面積をもつ。

天若Ⅵ期 天若Ⅴ期の住居群がそろって北西側(調査区北部地区)へ移動する時期である。この時期の住居には竪穴式住居としてSH9106・SH9124・SH9123・SH9125・SH9104・SH9103・SH9101がある。SH9106が53㎡で大型といえる。次いで30㎡のSH9123があり、以下27㎡のSH9103・SH9101の一群と20㎡程度のSH9124・SH9125・SH9104の一群とがある。

天若Ⅶ期 掘立柱建物が住居としてⅠ期と同じ台地高所(調査区西部地区)に構築される時期である。天若Ⅵ期のいくつかの竪穴式住居跡と同時共存していた可能性が高い。SB

9021・S B9022・S B9024などがあり、周辺に土坑S K9006・S K9011を構築する。

天若Ⅷ期 集落がほとんど掘立柱建物で構成されるようになり、竪穴式住居はS H9105のみになる。この時期の住居にはS B9023・S B9025・S B9026などがあり、天若Ⅶ期の掘立柱建物群とは主軸方向を若干異にしている。附属施設として井戸跡S E9015がある。

第2節 住居の系譜

1. 核となる住居の系譜の抽出

天若Ⅰ期をのぞき、各時期7～8棟の住居が存在することから、住居の系譜をたどることは可能と思われる。以下では天若Ⅱ期から天若Ⅵ期にかけての系譜を予想する^(注8)。

住居を面積の大きい順に並べると、S H9121(74m²・Ⅱ期)・S H9106(53m²・Ⅵ期)・S H9116(50m²・Ⅴ期)・S H9128(44m²・Ⅲ期)・S H9127(42m²・Ⅳ期)・S H9203(38m²・Ⅳ期Ⅴ期)・S H9122(37m²・Ⅱ期)・S H9118(36m²・Ⅲ期)となる。

S H9121(74m²・Ⅱ期)は、住居跡群の中でも際だって大きく、時期的に古いものの前後の系譜にはのらない住居であり、一般の住居とは区別して考える必要があろう。

これらを時期別に整理し、各時期大きな住居を抽出すると、S H9122(37m²・Ⅱ期)→S H9128(44m²・Ⅲ期)→S H9127(42m²・Ⅳ期)→S H9116(50m²・Ⅴ期)→S H9106(53m²・Ⅵ期)という系譜がたどれる。これをa1系列とする。

同様に残る住居を順に並べると、S H9203(38m²・Ⅳ期Ⅴ期)・S H9118(36m²・Ⅲ期)・S H9123(30m²・Ⅵ期)・S H9113(27m²・Ⅲ期)・S H9103(27m²・Ⅵ期)・S H9004(27m²・Ⅱ期)・S H9101(27m²・Ⅵ期)となる。

これらを時期別に整理し、各時期大きな住居を抽出すると、S H9004(27m²・Ⅱ期)→S H9118(36m²・Ⅲ期)→S H9203(38m²・Ⅳ期Ⅴ期)→S H9123(30m²・Ⅵ期)という系譜が予想される。これをb1系列とする。

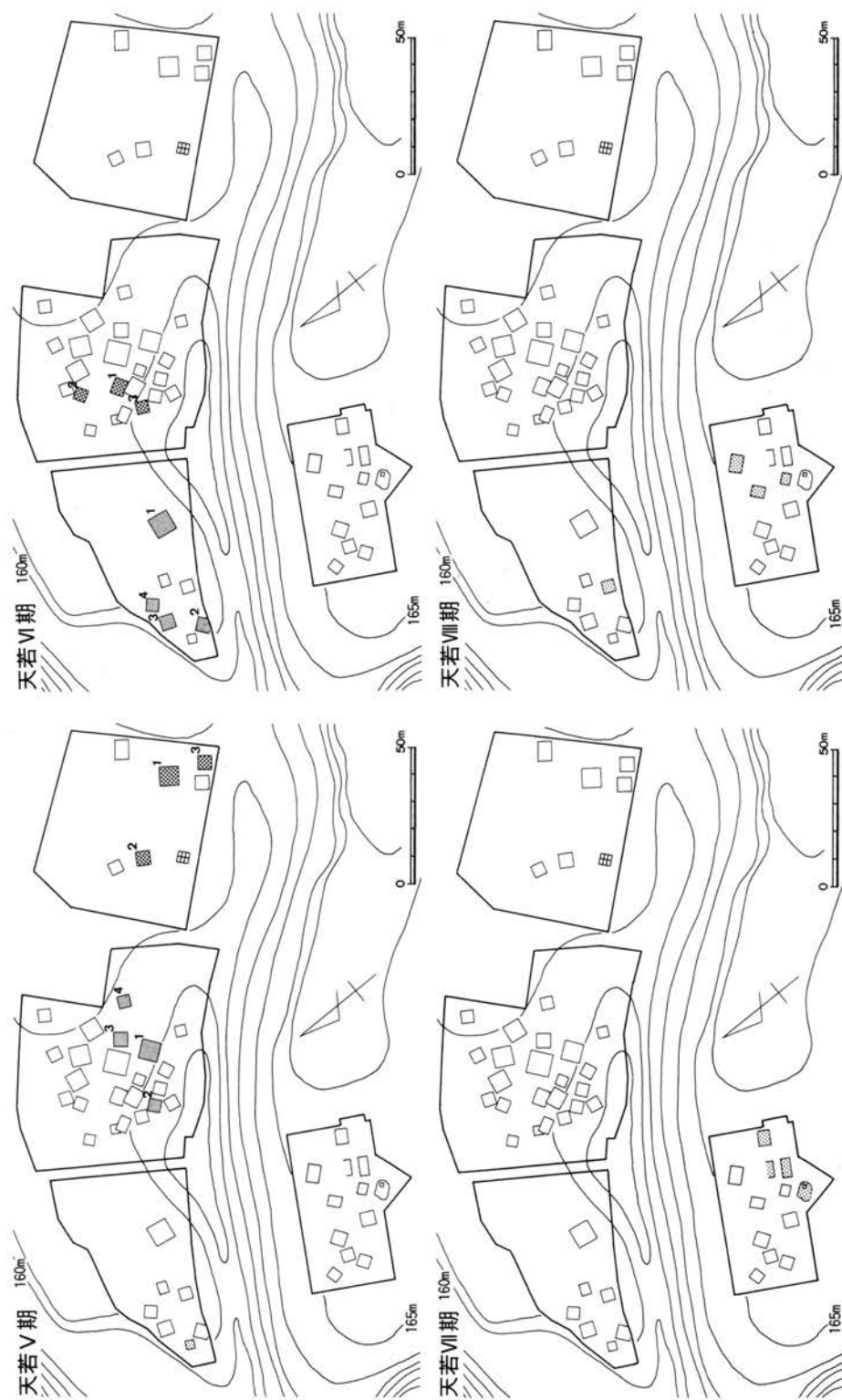
2. 単位集団の設定

ここで、a1系列・b1系列を各時期での位置関係をみると、天若Ⅲ期をのぞき一定の距離を置いていることがわかる。また、天若Ⅱ期・天若Ⅳ期・天若Ⅴ期・天若Ⅵ期をみると、a1系列ではほかに3棟が近接して存在し、b1系列ではほかに2棟が近接して存在する。このことから、a1系列を核として4棟で一群をなす住居群A、b1系列を核として3棟で一群をなす住居群Bが単位集団として設定できる。

天若Ⅲ期は、住居が近接しており、住居群A・住居群Bの抽出に若干の作業を必要とす



第9図 主要遺構変遷図(1)



第10図 主要遺構変遷図(2)

る。各時期の住居群Bは、b 1系列を中心に「L」字状に配置されるが、住居群Aは統一された住居配置は読みとれない。前段階の天若Ⅱ期ではa 1系列を核に「Y」字状の、後段階の天若Ⅳ期ではa 1系列を核に「L」字状の住居配置となる。こうした観点から天若Ⅱ期の住居配置をみると、b 1系列は「L」字状に配置されていることがほぼ確実なことから、b 1系列のSH9118を核としてSH9113・SH9140で構成される「L」字状の一群が抽出できる。残るSH9128・SH9131・SH9112・SH9114は、a 1系列のSH9128を核とし「Y」字状の配置となり、前段階の天若Ⅱ期の配置を踏襲していることがわかる。

3. 各系譜の復原

住居群Bにはb 1系列のほかにb 2系列及びb 3系列が設定できる。住居配置の位置関係からb 2系列としてSH9003(22m²・Ⅱ期)→SH9113(27m²・Ⅲ期)→SH9205(? m²・Ⅳ期)→SH9204(22m²・Ⅴ期)→SH9125(20m²・Ⅵ期)、b 3系列としてSH9001(23m²・Ⅱ期)→SH9140(21m²・Ⅲ期)→SH9202(19m²・Ⅳ期)→SH9201(21m²・Ⅴ期)→SH9124(21m²・Ⅵ期)という変遷が予想される。いずれも20m²程度の住居で構成されている。

住居群Aにはa 1系列のほかにa 2系列及びa 3系列・a 4系列が設定できる。既述したように、住居配列には一貫性がみられない。「Y」字状の配置をとる天若Ⅱ期と天若Ⅲ期との位置関係からa 2系列としてSH9130(19m²・Ⅱ期)→SH9131(18m²・Ⅲ期)、a 3系列としてSH9119(16m²・Ⅱ期)→SH9112(19m²・Ⅲ期)、a 4系列としてSH9115(13m²・Ⅱ期)→SH9114(14m²・Ⅲ期)の流れが押さえられる。

天若Ⅳ期では「Y」字状の配置こそ乱れるが、a 1系列を核として一方にa 2系列が位置し、離れてa 3系列・a 4系列が位置する図式は変わらない。また、住居の相対的な大きさはある程度守られていることからすれば、a 2系列にSH9126(22m²・Ⅳ期)、a 3系列にSH9141(19m²・Ⅳ期)、a 4系列にSH9117(18m²・Ⅳ期)が対応する。

天若Ⅴ期でも同様に考えると、a 2系列にSH9111(24m²・Ⅴ期)、a 3系列にSH9120(21m²・Ⅴ期)、a 4系列にSH9136(18m²・Ⅴ期)が対応する。

天若Ⅵ期では配置の関係は崩れており、住居の相対的な大きさから求めざるを得ない。面積の小さいSH9104(17m²・Ⅵ期)がa 4系列に対応する。これまでa 3系列とa 4系列は非常に近い位置にあったことからa 3系列にSH9103(27m²・Ⅵ期)が対応し、a 2系列にSH9101(27m²・Ⅵ期)が対応すると考えられる。

以上のことから、a 2系列としてSH9130(19m²・Ⅱ期)→SH9131(18m²・Ⅲ期)→SH9126(22m²・Ⅳ期)→SH9111(24m²・Ⅴ期)→SH9101(27m²・Ⅵ期)、a 3系列としてSH9119(16m²・Ⅱ期)→SH9112(19m²・Ⅲ期)→SH9141(19m²・Ⅳ期)→SH9120(21m²・Ⅴ

期)→S H9103(? m²・Ⅵ期)、a 4系列としてS H9115(13m²・Ⅱ期)→S H9114(14m²・Ⅲ期)→S H9117(18m²・Ⅳ期)→S H9136(18m²・Ⅴ期)→S H9104(17m²・Ⅵ期)という流れが押さえられる。なお、集落内最大の面積をもつS H9121(74m²・Ⅱ期Ⅲ期)と最小の面積をもつS H9102(11m²・Ⅴ期)及び時期の遅れるS H9105(? m²・Ⅷ期)はこうした系譜に乗せることはできなかった。これを整理すると、以下のようになる。

	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期
a 1系列	S H9122(37m ²)	→ S H9128(44m ²)	→ S H9127(42m ²)	→ S H9116(50m ²)	→ S H9106(53m ²)
a 2系列	S H9130(19m ²)	→ S H9131(18m ²)	→ S H9126(22m ²)	→ S H9111(24m ²)	→ S H9101(27m ²)
a 3系列	S H9119(16m ²)	→ S H9112(19m ²)	→ S H9141(19m ²)	→ S H9120(21m ²)	→ S H9103(? m ²)
a 4系列	S H9115(13m ²)	→ S H9114(14m ²)	→ S H9117(18m ²)	→ S H9136(18m ²)	→ S H9104(17m ²)
b 1系列	S H9004 (27m ²)	→ S H9118(36m ²)	→ S H9203(38m ²)		→ S H9123(30m ²)
b 2系列	S H9003(22m ²)	→ S H9113(27m ²)	→ S H9205(? m ²)	→ S H9204(22m ²)	→ S H9125(20m ²)
b 3系列	S H9001(23m ²)	→ S H9140(21m ²)	→ S H9202(19m ²)	→ S H9201(21m ²)	→ S H9124(21m ²)

第3節 古墳時代集落の構造

1. 各系譜間の関係

竪穴式住居の構成は、各時期とも住居群A及び住居群Bの単位集団から成り立つことを予想した。各群は、比較的大きな住居である1系列を中心に展開する。各群内の2系列・3系列は、20～25m²付近にまとまりをみせ、普遍的な住居であることをうかがわせる。

また、15m²程度の比較的小きな住居で変遷を追える4系列は住居群Aだけにみられる。基本的には3棟で一群をなすところへ、付屬的に加わっていると理解できる。こうした観点でa 1系列とa 2系列及びa 3系列の位置関係をみると、天若Ⅱ期・天若Ⅲ期にはa 1系列を核として対峙する位置にa 2系列・a 3系列が直線的に並び、天若Ⅳ期・天若Ⅴ期にはa 1系列を核としてa 2系列・a 3系列が「L」字状に配されている。天若Ⅵ期になると、a 1系列を位置的な核として考えることはできなくなる。付屬的に存在する4系列が住居群Aにみられるのは、住居群Aに存在するa 1系列がb 1系列をも凌ぎ、集落内では最も大きな住居の系譜であることと関係するものと思われる。すなわち、集落内最大系列のa 1系列のみが集落内最小系列のa 4系列を従属させていた可能性が高い。

2. 大型住居の性格

細片も含めて鉄製品が出土した住居跡には、S H9121(Ⅱ期Ⅲ期・系列不明)、S H9122(Ⅱ期・a 1系列)、S H9106(Ⅱ期・a 1系列)、S H9123(Ⅱ期・b 1系列)、S H

9002(I期・系列不明)がある。また、鉄製品の研ぎに用いられた砥石は、SH9122(Ⅱ期・a1系列)、SH9123(Ⅵ期・b1系列)から出土している。

こうした遺物をもつ住居は、a1系列及びb1系列に限られていることがわかる。1系列は、住居群A及び住居群Bの核となる住居で、単位集団における有力者の住居とするのが妥当であろう。また、a1系列は集落内においても他を凌ぐ広さを有する系譜であり、2系統の単位集団を統率する有力者の住居とすることができよう。

3. 竪穴式住居跡SH9121の性格

SH9121(74m²・Ⅱ期Ⅲ期)は、集落内では際立った大きさを持ち、a1系列及びb1系列にはのらない。SH9121の集落内での位置関係をみると、SH9121を中心として東側に隣接してa1系列のSH9122(Ⅱ期)・SH9128(Ⅲ期)・SH9127(Ⅳ期)が並び、西側に隣接してa1系列のSH9116(Ⅴ期)そしてb1系列のSH9118(Ⅲ期)・SH9123(Ⅵ期)が並ぶ。2系列・3系列及び4系列は、1系列のさらに外側に位置する。

すなわち、長い期間にわたって続いた単位集団の移動の結果として、超大型住居であるSH9121を取り囲むように大型住居が位置し、外側を一般の住居が取り囲むという図式がみえる。この同心円の広がり、住居群A及び住居群Bという個々の単位集団には縛られない集落内全体の動きである。このことは、超大型住居SH9121が単なる大型住居の性格を超越した集落の象徴的位置を占めていることを表している。また、SH9121は天若Ⅱ期からⅢ期という集落の展開期に存在し、前後の時期に系譜を追えないことから、a1系列やb1系列のような単なる単位集団の有力者の住居とは考えにくい。出土遺物には須恵器の高杯3点や甕、紡錘車など他の住居とは様相を異にするものがみられることから、集落内における中心的性格、おそらく祭祀の場というような性格が考えられよう。

4. 倉庫の有無

竪穴式住居跡群のなかに復原できた掘立柱建物跡は2棟あり、古墳時代の倉庫となる可能性もある。しかし、柱穴内からは時期を知り得る資料は出土しなかったため、時期を特定することはできない。

天若遺跡では集落成立以降、集落を構成する単位集団の数や単位集団内の住居の数にはほとんど増減が認められない。天若遺跡の古墳時代集落は、他の地域からは隔絶された集落でもあり、可耕面積も極めて限られている。耕地面積の拡大があまり進まず、生産性が上がらなかったことによるものと考えられる。このため、労働力が低下しない程度に住居数の減少を抑え、食糧が不足することがない程度に住居数の増加を抑える、という規制が

集落内に働いていたのであろう。また、近辺には横穴式石室をもつような古墳はみられない。おそらく、この集落では有力者であっても木棺墓に葬られていたと思われる。こうした環境の下では余剰生産物もそれほど確保はできなかつたと予測される。

こうしたことから、天若遺跡に成立した古墳時代の集落は一般農民層の集落であり、しかもかなり下層に位置づけられる。したがって、倉庫として復原できる掘立柱建物跡を積極的に古墳時代の集落内に位置づけることはできない。古墳時代の集落は堅穴式住居のみから成り立っていると考えておきたい。^(注9)

第4節 陥穴状遺構

1. 陥穴状遺構の構造

土坑底にピットをもつものを陥穴状遺構として認識し、抽出した。土坑の残りが悪いため浅いものや土坑自体が小さいなど、陥穴状遺構として認知しがたいものも何基か含んでいる。また、土坑底にピットをもたないものの中にも陥穴状遺構となるものも含まれていると思われるが、他の時代の土坑との識別が困難な面もあり、除外している。

基本的な構造は、直径1m前後・深さ1m程度の不整円形を呈する土坑の底に直径15cm程度・深さ30cm前後の小穴を掘り、逆茂木を設けるというものである。逆茂木の設置方法はほとんどがこうした掘形をつくるもので、打ち込みによるものはないと思われる。形状には長楕円形のものや卵形のものなども若干ある。また、土坑底の小穴のあり方にも異なる形態をとるものもあるが、数は非常に少ない。比較的画一化された構造をとっており、西日本的に通有なあり方をみせている。^(注10)

2. 陥穴状遺構の分布

2次調査区では7基、3次調査区では北西寄りでは2基、南東寄りでは5基、4次調査区では18基検出している。陥穴状遺構の大半が4次調査区付近に集中していることがわかる。この状態は、もう少し東側にかけても続いていると考えられる。

陥穴状遺構がまばらにある2次調査区の位置は尾根筋に沿って直線的に下りてきた位置に広がる平坦面にあたっている。しかし、桂川(大堰川)にいたるまでにはまだ多少距離がある。陥穴状遺構のほとんどない3次調査区北西寄りにあたる台地先端部は桂川(大堰川)を眼下に望むことができる平坦地ではあるが、尾根筋からはずれ、かつ非常に離れた位置にある。陥穴状遺構の密集する4次調査区付近は尾根筋から少しはずれて桂川(大堰川)に下りる間に広がる平坦地にあたる。陥穴状遺構を設ける適当な場所としては、急な山腹か

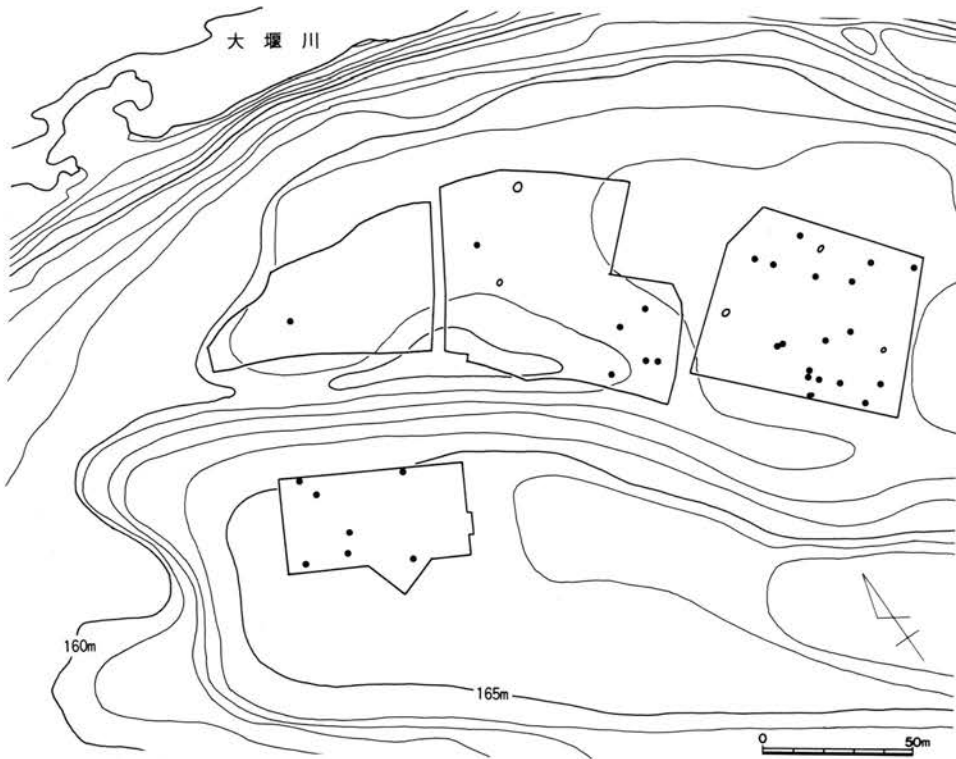
ら下りた位置に広がる平坦地で、水場にも程近いという場所を選んでいるようである。

陥穴状遺構が長軸方向をそろえるかについては、多くの陥穴状遺構が不整形円形を呈するため、不明な点が多い。楕円形または卵形を呈する陥穴状遺構の大半は等高線に沿って長軸を向ける。陥穴状遺構には全体として列配置が認められず、散漫な広がりをみせる。

3. 陥穴状遺構の時期

陥穴状遺構内から出土した遺物は非常に少なく、あっても小破片に限られ、時期の特定はむずかしい。数少ない陥穴状遺構内出土の土器片を観察すると、石英や長石・雲母といった鉱物を胎土の中に含むものが多く、縄文土器の胎土に近い。これだけでは時期はわからないが、遺跡内で縄文土器が出土した土坑や採集した縄文土器片をみると、縄文時代後期前半期のものが圧倒的に多い。このことは、縄文時代後期前半期に活発な活動が行われていたことを示しており、陥穴状遺構もこうした活動の中で構築された可能性が高い。

また、陥穴状遺構のなかには重複するものがみられる。このことから陥穴状遺構は短時間に構築されたものではなく、ある程度の時間をもって形成されたことが予想される。



第11図 縄文時代遺構分布図(○印；土坑、●印；陥穴状遺構)

第5章 調査の総括

調査成果 この調査で、縄文時代の土坑5基・陥穴状遺構32基、6世紀から7世紀前半期にかけての竪穴式住居跡39棟、7世紀後半期の土坑2基、8世紀前半期の井戸跡1基、7世紀から8世紀前半にかけてと思われる掘立柱建物跡を少なくとも6棟を検出した。特に、古墳時代後期では居住区域を面的に確認することができた。

縄文時代 陥穴状遺構を多数検出したことで、この台地が狩猟の場所であったことが判明した。また、縄文時代の土坑を検出し、土器片が出土したことから単なる狩場ではないと思われる。しかし、試掘調査や今までの調査で縄文時代の住居跡が検出されていないことからすれば、大規模な集落跡ではなく、キャンプ・サイトのな遺跡と予想される。

縄文時代の陥穴状遺構は、関東及び中部や東北・北海道といった東日本地域や九州・中国といった西日本地域では数多く調査されている。しかし、これまで近畿でのまとまった調査例は稀であった。この調査により、陥穴を用いた狩猟方法は地域的な狩猟方法ではなく、縄文時代を通じて日本各地で行われていた狩猟方法であることが確認できた。

台地上では縄文時代の住居跡は検出できておらず、縄文時代の集落は別地点に求めざるをえない。台地前面を流れる桂川(大堰川)沿いでは、周山盆地もしくは園部盆地まで出なければ定住できるようなまとまった平地はなく、いずれも5km以上の距離がある。縄文時代のテリトリーを考えるうえでは、こうした地域での調査成果が期待される。

古墳時代 古墳時代後期の集落を確認したことにより、天若遺跡が丹波山地の谷間に位置するにもかかわらず、この地域の開発が比較的早くから行われていたことが確かめられた。桂川(大堰川)の最上流地域である周山盆地の地域は、遅くとも弥生時代には開発が行われていたことが知られている。天若遺跡は、この周山盆地と亀岡盆地とを繋ぐ交通の要衝にあっていたものと考えられる。

検出した古墳時代の竪穴式住居跡は39棟にのぼる。これらの住居跡は、出土遺物からみて、5世紀末から7世紀半ば頃まで間断なく数棟ずつの単位で存在していた。住居の規模からランクづけがあったことを予測し、一集落内における住居の変遷や居住域内での住居の構成などがある程度理解できる。

竪穴式住居跡は竈をもつものがほとんどである。竈を良好な状態で検出できた例はごくわずかで、大半は焼土を検出しただけである。竈には焚口部に立石を設けたものや、支脚

として石を置いたものがある。焚口部の立石は、チャート系の石材2石を並立させるものが大半で、川原石2石を並立させるものが1例ある。チャート系の石材2石を用いるものは、直方体の石材を並立させるものが大半で、上部に架けた石材が残るものもある。また、板状の石材を「ハ」の字状に配置したものが1例ある。竈内の支脚には、チャート系の石材を置いたものや、川原石を置いたものがあり、焚口部に立石を伴うものと伴わないものがある。

重複する竈穴式住居跡にはSH9113とSH9115とがある。両者の前後関係は、SH9115がある程度埋まってからSH9113が造られたものと考えられる。このことは、SH9113の竈と考えられる焼土がSH9115との境界上に存在するにもかかわらず、SH9115によって削り取られていないことから裏付けられる。

SH9115の竈は、崩壊した壁体も遺存しており、支脚として用いられたと考えられる川原石や煙出し部も検出できた。壁体はよく焼け締まっている。他の竈をもつと考えられる住居跡で、壁体がよく焼け締まった竈もしくは崩壊した竈の壁体が遺存する例はない。竈の使用頻度の差によるものか、竈の廃棄の際の行為に係わるものか、もしくは、移動式の竈を使用していたのか、問題を残す点である。

7世紀・8世紀 7世紀後半期の土坑SK9006や8世紀前半期の井戸跡SE9015の存在から、同時期の住居跡が付近に存在することが予想される。特に、検出された数棟の掘立柱建物跡のなかには土坑SK9006や井戸跡SE9015に伴う掘立柱建物跡がある可能性が高い。現時点までに復原できた掘立柱建物跡の棟軸方向は、大きく2分することができ、土坑SK9006や井戸跡SE9015の時期に対応する。

奈良時代から平安時代以降には周山地域から長岡京や平安京にむけて木材を搬出していたことが知られているが、この木材の運搬方法は桂川(大堰川)を利用した筏流しであったと考えられる。筏流しは、ごく最近まで行われていた木材運搬の方法であり、天若遺跡は、この筏流しの中継地点ないしは木材の搬出拠点であったものと思われる。

農耕区域 条里状地割りを残す水田跡の調査は、期待した成果を挙げるができなかった。しかし、周囲の状況から判断すると、古墳時代以降主たる水田耕作地は、居住域の南側を流れる千谷川を利用した谷水田であったものと思われる。

最後に また、遺物には、縄文時代の土器及び石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器や陶器・磁器などがある。このことから古くから人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことが確認できた。そして、天若遺跡は谷間に位置していることから、他の地域とはある程度隔絶された小宇宙を形成していると考えられる。しかし、集落の内の居住区域は確認したものの、墓

域や農耕区域については調査が及ばなかった。

(三好博喜)

- 注1 日吉ダム水没地区文化財等調査委員会『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』 京都府日吉町
1988
- 注2 参考文献
日吉ダム水没地区文化財等調査委員会『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』 京都府日吉町
1988
日吉町誌編さん委員会『日吉町誌』上巻 日吉町 1987
『京都府の地名』 日本歴史地名大系26 平凡社 1981
- 注3 三好博喜・鍋田 勇「天若遺跡平成元・2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42
冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注4 注3に同じ。
- 注5 三好博喜・柴 暁彦・野島 永「天若遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』
第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注6 三好博喜・八木政明「天若遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注7 $\text{内傾度} = (\text{受け部半径} - \text{口縁部半径}) / \text{受け部高}$ とした。内傾度1.00未満の一群と内傾度1.00以上
2.00未満の一群、内傾度3.00前後の一群の3グループにわかれる。それぞれI類1型、I類2
型、I類3型とした。
- 注8 小笠原好彦「古墳時代の竪穴住居集落にみる単位集団の移動」(『国立歴史民俗博物館研究報
告』第22集 共同研究「古代の集落」 国立歴史民俗博物館) 1989
- 注9 広瀬和雄「畿内の古代集落」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 共同研究「古代の集
落」 国立歴史民俗博物館) 1989
- 注10 稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴猟」(『論苑 考古学』 天山舎) 1993

付表3 遺物観察表

掲載No. 実測No.	種類 器種	出土遺構/ 層位	口径	調整 外/内	色調外 色調内	方向/残存率/ 焼成/胎土			備考
			器高						
1 (018)	須恵器 杯蓋	SH9003 No. 9	(11.9) 3.9	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	黒灰色 黒灰色	右 密	1/4	堅緻	自然釉
	2 (009)	須恵器 杯蓋	SH9003/No. 8・中～下層	12.6 (4.8)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色	左 密	40%	
3 (013)	須恵器 杯蓋	SH9003/No. 30・14・下層	(13.0) (4.1)	ヘラクス [°] リ ヨコナテ [°]	灰色 灰色	左 密	1/4	堅緻	
	4 (235)	須恵器 杯蓋	SH9003 No. 21	13.6 4.0	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色 灰白色	左 密	50%	
5 (017)	須恵器 杯蓋	SH9003 No. 6	(11.9) (4.8)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色	左 密	1/4	堅緻	
	6 (010)	須恵器 杯身	SH9003/No. 7・中～下層	(12.1) 5.2	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	黒灰色 黒灰色	右 密	40%	
7 (008)	須恵器 杯身	SH9003 中層	(11.6) 4.9	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色	左 密	1/3	堅緻	内傾度0.45
	8 (011)	須恵器 杯身	SH9003 中層	(9.8) (4.2)	ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色		1/2	堅緻
9 (239)	須恵器 杯身	SH9003 No. 11	(12.0) (4.7)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色	右 密	1/12	堅緻	内傾度0.48
	10 (241)	須恵器 杯身	SH9003 No. 10	10.4 5.2	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色	左 密	100%	堅緻
11 (227)	須恵器 高杯	SH9003 中～下層	16.8 12.0	タキメ+波状文/ ヨコナテ [°]	灰色 灰色		90%	堅緻	内外自然釉・透孔4・ 把手1・写真No. 2E-8
	12 (271)	須恵器 杯蓋	SH9003 (19.0) (2.6)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] +タ キ/ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色 灰色		1/7	堅緻	
13 (012)	須恵器 杯身	SH9003 No. 2	(11.7) 5.0	ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰色 灰色		1/3	堅緻	底径7.8cm
	14 (019)	須恵器 甕	SH9003 No. 13	(19.5) (5.7)	タキメ+ヨコナテ [°] / ヨコナテ [°]	灰白色 灰白色		1/6	堅固
15 (025)	須恵器 壺	SH9003 No. 1・上部	(11.3) 18.7	タキメ+ヨコナテ [°] +タキ メ/青海波文+ヨコナテ [°]	灰色 灰色		2/3	堅緻	自然釉・歪みあり
	16 (074)	土師器 甕	SH9003 No. 22・下層	16.3 (28.7)	ハク/ タス [°] リ・指ナテ [°]	赤褐色 赤褐色		60%	良好
17 (007)	土師器 甕	SH9003 No. 17・22	16.8 (14.5)	ハク/ ?	茶褐色 淡茶褐色		3/4	良好	良好・2mm砂多
	18 (014)	土師器 甕	SH9003 (9.0)	14.5 (9.0)	ハク/ タス [°] リ	淡黄褐色 淡黄褐色		3/4	良好
19 (015)	土師器 甕	SH9003 No. 20	15.5 12.5	ハク/ タス [°] リ	淡茶褐色 淡茶褐色		1/1	不良	良好・2mm砂
	20 (020)	土師器 高杯	SH9003 No. 16・18?	13.0 10.4	?/ ?	黄褐色 黄褐色		90%	不良
21 (016)	土師器 ミチユア	SH9003 中層	(5.8) (3.7)	ナテ [°] / 指ナテ [°] ・ナテ [°]	黄褐色 黄褐色		1/4	良好	良好
	22 (021)	土師器 鉢	SH9003 中層	(21.5) (8.6)	ハク/ タス [°] リ	黄褐色 灰褐色		1/3	良好

23	土師器	SH9003/No.	23.5	ハケ/	淡黄褐色		90%	良好	写真No. 5D-56
(356)	甌	19・中～下層	24.0	?	淡黄褐色	密・3mm砂多			
24	須恵器	SH9122	(13.2)	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	1/5	堅固	写真No. 5D-7
(354)	杯蓋	No. 14	4.7	ヨコナテ [*]	灰色	密			
25	須恵器	SH9122	14.3	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色	右	80%	堅固	写真No. 5D-9
(357)	杯蓋	No. 1・SK8	4.0	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰白色	密			
26	須恵器	SH9122	13.5	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	右	70%	堅緻	写真No. 5D-4
(353)	杯蓋		4.2	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
27	須恵器	SH9122	(12.6)	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	1/6	堅固	
(049)	杯蓋		4.5	ヨコナテ [*]	赤褐色	密			
28	須恵器	SH9122	13.4	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	右	100%	堅緻	写真No. 3I-3
(327)	杯蓋	No. 17・P7	4.4	ヨコナテ [*]	灰紫色	密			
29	須恵器	SH9122	(12.3)	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色		3/8	堅緻	写真No. 5D-6
(350)	杯蓋	SK08	(4.0)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
30	須恵器	SH9122	12.6	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	80%	堅緻	写真No. 5D-3
(352)	杯蓋		4.9	ヨコナテ [*]	灰色	密			
31	須恵器	SH9122	11.0	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	100%	堅緻	内傾度0.40
(328)	杯身	No. 15	5.2	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
32	須恵器	SH9122	(10.7)	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	1/3	堅緻	内傾度0.55
(361)	杯身	No. 13	4.4	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
33	須恵器	SH9122	13.2	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	80%	堅緻	内傾度1.38
(360)	杯身	No. 7・8	3.8	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
34	須恵器	SH9122	(13.6)	ハラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	右	1/3	堅緻	内傾度1.33
(047)	杯身	No. 2	3.9	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
35	須恵器	SH9122	(11.8)	ヨコナテ [*] +カキメ/	黒灰色		1/3	堅緻	
(048)	高杯	No. 10	(4.3)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
36	土師器	SH9122	(16.8)	ハケ/	黄褐色		1/5	良好	口縁部内面肥厚
(050)	甕	SK9	(6.9)	?	黄褐色	良好・1mm砂			
37	土師器	SH9122	(18.0)	ハケ/	黄褐色		1/7	良好	
(060)	甕	No. 4	(17.0)	ナテ [*]	黄褐色	良好・3mm砂			
38	須恵器	SH9111	12.4	ハラス [*] リ/	灰黄色	右	5/8	堅固	内傾度1.39
(355)	杯身	No. 6	3.7	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
39	土師器	SH9111	(12.3)	?/	黄褐色		1/5	良好	
(083)	甕		(5.7)	?	黄褐色	良好・2mm砂多			
40	土師器	SH9111	(13.6)	ハケ/	黄褐色		1/7	良好	
(080)	甕	No. 4	(5.8)	ハケ	淡赤褐色	良好・2mm砂			
41	土師器	SH9111	(15.9)	?/	淡赤褐色		1/8	良好	
(081)	甕		(3.1)	?	淡赤褐色	良好・1mm砂多			
42	土師器	SH9111	23.1	?/	橙褐色		80%	良好	写真No. 5D-60
(334)	鉢	No. 4・5	14.3	ナス [*] リ	黒色	良好・2mm砂多			
43	土師器	SH9111	(14.4)	?/	茶褐色		1/3	良好	
(079)	甕	No. 5	(10.9)	ナス [*] リ	茶褐色	良好・3mm砂			
44	土師器	SH9111	(12.5)	ハケ/	茶褐色		1/3	良好	
(082)	甕	No. 2	(13.4)	ナス [*] リ	黄褐色	良好・1mm砂			
45	土師器	SH9111	15.4	ハケ/	淡赤褐色		2/3	良好	
(055)	甕	No. 1	(6.2)	ナス [*] リ	淡赤褐色	良好・1mm砂多			
46	土師器	SH9111/No.	-	ハケ/	淡赤褐色		1/4	良好	45と同一か?
(057)	甕	5・6・竈内	(9.9)	?	淡茶褐色	良好・1mm砂多			

47	須恵器	SH9121	(12.7)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	1/3	堅緻	
(359)	杯蓋		4.3	ヨコナテ [*]	灰色	密			
48	須恵器	SH9121	12.2	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色		3/5	堅緻	写真No. 5D-5
(311)	杯蓋	P7	(4.2)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
49	須恵器	SH9121	(11.0)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	3/10	堅緻	内傾度0.58
(309)	杯身	No. 3	4.5	ヨコナテ [*]	灰色	密			
50	須恵器	SH9121	(10.7)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	3/10	堅緻	内傾度0.74
(310)	杯身	No. 7	(4.8)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
51	須恵器	SH9121	(11.0)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	1/5	堅緻	内傾度0.53
(045)	杯身		(4.5)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
52	須恵器	SH9121	11.6	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	60%	堅緻	ヘラ記号?・内傾度
(312)	杯身	No. 4	5.2	ヨコナテ [*]	灰紫色	密			0.43・写真No. 5D-24
53	須恵器	SH9121	(10.9)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] ・カキ	灰色	右	80%	堅緻	透孔3・裾径8.4cm
(314)	高杯	No. 5	9.4	メ/ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			写真No. 5D-53
54	須恵器	SH9121		ヨコナテ [*] ・カキメ/	黒灰色		60%	堅緻	透孔3・裾径9.2cm
(315)	高杯		(7.7)	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
55	須恵器	SH9121	13.1	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色	左	60%	不良	蓋のような杯部
(313)	高杯		(5.8)	ヨコナテ [*]	灰白色	密			・裾径(8.8)cm
56	須恵器	SH9121	-	ヨコナテ [*] +カキメ/	灰色		1/2	堅緻	自然釉
(054)	提瓶		20.7	ヨコナテ [*]	灰色	密			
57	須恵器	SH9121	-	ヨコナテ [*] /	黒灰色		1/4	堅緻	内外自然釉・円孔1
(046)	甕		(4.4)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			・櫛歯状工具刺突文
58	土師器	SH9121	(4.8)	ナテ [*] /	赤褐色		70%	不良	底径3.8cm
(059)	ミニチュア		4.1	ナテ [*]	赤褐色	良好	・5mm砂		
59	土師器	SH9121	(16.6)	?/	黄褐色		1/4	良好	
(056)	甕	No. 1	(4.4)	?	黄褐色	良好	・1mm砂多		
60	須恵器	SH9128	13.7	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*]	灰色		95%	堅緻	写真No. 3I-2
(324)	杯蓋	No. 8	4.2	/ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
61	須恵器	SH9128	12.5	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	80%	堅固	SH9122のSK15・SK8
(221)	杯蓋	No. 22	(5.0)	ヨコナテ [*]	淡灰色	密			出土・写真No. 5D-8
62	須恵器	SH9128	11.8	ヘラクス [*] リ/	淡赤褐色	右	80%	堅固	内傾度0.47
(222)	杯身	No. 25・下層	5.3	ヨコナテ [*]	淡灰色	密			写真No. 5D-32
63	須恵器	SH9128	(12.2)	ヘラクス [*] リ/	灰色		1/4	堅緻	内傾度1.64
(223)	杯身	No. 3	(4.3)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
64	須恵器	SH9128	12.2	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色	右	100%	堅固	内傾度1.50
(323)	杯身	No. 1	4.3	ヨコナテ [*] ・ナキ	灰白色	密			写真No. 3I-7
65	須恵器	SH9128	(13.3)	ヘラクス [*] リ/	淡灰色	右	70%	堅固	内傾度1.00
(224)	杯身	No. 11・12	4.2	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	淡灰色	密	・3mm砂少		写真No. 5D-20
66	土師器	SH9128		粗いミカキ/	赤褐色		90%	良好	口縁部を欠く
(326)	壺	No. 5	(10.7)	粗いケス [*] リ	黄褐色	良好			
67	土師器	SH9128	9.7	ハケ/	赤褐色		100%	良好	写真No. 3I-10
(325)	甕	No. 21	10.6	ナテ [*]	赤褐色	良好	・2mm砂		
68	土師器	SH9128	(11.0)	ハケ/	赤褐色		1/4	良好	
(219)	壺	P1	(9.7)	ナテ [*]	赤褐色	良好	・3mm砂		
69	土師器	SH9128	(20.8)	?/	淡赤褐色		1/3	良好	
(162)	鉢	No. 4・13	(6.2)	ケス [*] リ	淡赤褐色	良好	・2mm砂多		
70	土師器	SH9128/No.	13.8	ハケ/	淡黄褐色		70%	良好	写真No. 5D-57
(220)	甕	19・23・下層	25.0	ナテ [*]	淡黄褐色	良好	・3mm砂多		

71	土師器	SH9128	(18.0)	ハク/	淡赤褐色		1/3	良好	写真No. 5D-61
(169)	甕	No. 15	(12.0)	クスリ	淡赤褐色	良好	・3mm砂		
72	土師器	SH9128/No.	(19.3)	？/	淡赤褐色		1/2	良好	
(218)	甕	20・23・下層	(11.1)	クスリ・指ナエ	淡赤褐色	良好	・3mm砂多		
73	土師器	SH9128	17.4	ハク/	淡黄褐色		4/5	良好	
(159)	甕	No. 7-1	(8.1)	？	淡黄褐色	良好	・2mm砂多		
74	土師器	SH9128	18.0	？/	淡赤褐色		4/5	良好	
(160)	甕	No. 15	(8.5)	？	淡赤褐色	良好	・2mm砂多		
75	土師器	SH9128	16.0	？/	淡黄褐色		1/1	良好	
(161)	甕	No. 24	(5.5)		淡黄褐色	良好	・4mm砂		
76	須恵器	SH9113	11.3	ハラクスリ+ヨコナテ /	灰色	右	1/2	堅緻	内傾度0.57 写真No. 5D-29
(304)	杯身	No. 2	(5.7)	ヨコナテ	灰色	密			
77	須恵器	SH9113	12.2	ハラクスリ+ヨコナテ /	灰色		50%	堅緻	写真No. 5D-12
(303)	高杯蓋	No. 8-9	5.7	ヨコナテ	灰色	密			
78	土師器	SH9113	(14.8)	ハク/	茶褐色		1/4	良好	
(087)	甕	No. 3	(15.3)	クスリ	茶褐色	良好	・2mm砂多		
79	土師器	SH9113	(12.0)	ハク/	淡黄褐色		1/4	良好	
(088)	甕	竈内	(7.5)	？	淡黄褐色	良好	・2mm砂		
80	須恵器	SH9112	11.1	ハラクスリ+ヨコナテ /	黒灰色	左	95%	堅緻	内傾度0.60 写真No. 5D-26
(320)	杯身	No. 14	4.7	ヨコナテ タキ	淡青灰色	密			
81	須恵器	SH9112	(11.8)	ハラクスリ+ヨコナテ /	灰色	左	1/4	堅緻	内傾度0.53
(133)	杯身	No. 16	(4.5)	ヨコナテ	灰色	密			
82	須恵器	SH9112	(11.4)	ハラクスリ+ヨコナテ /	灰色	右	1/4	堅固	内傾度0.50
(261)	杯身		5.1	ヨコナテ	灰色	密			
83	土師器	SH9112	(9.5)	？/	赤褐色		1/6	不良	
(115)	椀	竈埋土	(3.0)	？	赤褐色	良好			
84	土師器	SH9112	(11.1)	？/	淡赤褐色		1/5	良好	
(113)	椀		(3.5)	？	淡赤褐色	良好			
85	土師器	SH9112	11.0	？/	赤褐色		95%	不良	写真No. 3I-8
(321)	椀	No. 11	4.5	？	赤褐色	良好			
86	土師器	SH9112	(13.0)	？/	淡黄褐色		1/5	良好	
(114)	椀		(3.6)	？	淡黄褐色	良好	・2mm砂		
87	土師器	SH9112	(11.5)	ハク/	黄褐色		1/6	良好	
(130)	甕		15.3	ハク・クスリ？	黄褐色	良好	・2mm砂多		
88	土師器	SH9112	10.8	ハク/	黄褐色		90%	不良	写真No. 5D-66 赤色砂粒含む
(322)	甕	No. 2	11.2	ハク？	黄褐色	良好	・2mm砂		
89	土師器	SH9112	10.4	？/	淡赤褐色		1/1	良好	
(023)	壺		(7.0)	？	淡赤褐色	良好			
90	土師器	SH9112	(11.3)	ハク/	赤褐色		1/5	良好	
(132)	甕		(7.0)	クスリ	茶褐色	良好			
91	土師器	SH9112	11.3	ハク/	淡茶褐色		1/1	良好	
(380)	甕	竈内	(11.3)	クスリ	淡茶褐色	良好	・2mm砂多		
92	土師器	SH9112	10.8	ハク/	淡茶褐色		1/1	良好	
(024)	甕	No. 13	(9.5)	クスリ	淡茶褐色	良好	・2mm砂		
93	土師器	SH9112	(13.0)	？/	淡茶褐色		1/2	不良	
(131)	甕		(5.7)	？	淡茶褐色	良好			
94	土師器	SH9112	(13.2)	？/	黄褐色		1/4	良好	
(129)	甕	No. 10	(8.0)	？	黄褐色	良好	・2mm砂多		

95	土師器	SH9112	(18.3)	?/	黄褐色		1/3	良好	
(022)	甕	No. 9	(10.5)	クズリ	淡茶褐色	良好	3mm砂		赤色砂粒含む
96	土師器	SH9112	(22.3)	ハケ	黄褐色		1/3	良好	
(112)	甕	No. 4	(16.0)	?	黄褐色	良好			
97	須恵器	SH9116	12.8	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色		1/2	堅固	内傾度1.15
(306)	杯身	No. 3	3.2	ヨコナテ [*]	灰白色	密			写真No. 5D-22
98	須恵器	SH9116	13.4	ヨコナテ [*] +カキメ/	灰色	左	90%	堅緻	自然釉
(307)	高杯蓋	No. 1	4.9	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			写真No. 5D-11
99	須恵器	SH9116	(15.6)	クサキ+カキメ/	黒色		1/3	不良	
(144)	甕	No. 5・11	(6.3)	青海波文	黒色	密			
100	土師器	SH9116	(16.6)	?/	淡茶褐色		1/3	良好	
(143)	甕	No. 4	(10.6)	クズリ	淡茶褐色	良好	2mm砂多		
101	土師器	SH9116	14.3	ハケ	茶褐色		2/3	良好	
(142)	甕	No. 6・10	(11.0)	クズリ	淡茶褐色	良好	2mm砂		
102	土師器	SH9116	(16.4)	ハケ	赤褐色		1/2	良好	
(141)	甕		(9.0)	クズリ	赤褐色	良好	細砂多		
103	須恵器	SH9203	(16.5)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	1/10	堅緻	
(199)	杯蓋		(4.1)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
104	須恵器	SH9203	(15.5)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色		1/5	堅緻	
(198)	杯蓋	No. 7	(4.0)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
105	須恵器	SH9203	14.8	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	95%	堅緻	写真No. 4J-1
(247)	杯蓋	No. 3・4	4.6	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰紫色	密	2mm砂		
106	須恵器	SH9203	(13.9)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	1/4	堅緻	
(197)	杯蓋		(3.0)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
107	須恵器	SH9203	13.0	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	95%	堅緻	内傾度1.31
(249)	杯身	No. 11	4.8	ヨコナテ [*]	灰色	密			写真No. 4J-3
108	須恵器	SH9203	(13.2)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	1/3	堅緻	内傾度1.33
(375)	杯身		(3.6)	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
109	須恵器	SH9203	12.9	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	100%	堅固	内傾度1.11
(248)	杯身	No. 1	3.8	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			写真No. 4J-4
110	須恵器	SH9203	(12.8)	ヘラクス [*] リ/	黒灰色	右	1/4	堅緻	内傾度1.44
(206)	杯身		(3.8)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
111	須恵器	SH9203	(12.9)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色		1/4	堅緻	自然釉・内傾度1.44
(376)	杯身		(3.9)	ヨコナテ [*]	灰白色	密			
112	須恵器	SH9203	12.5	ヘラクス [*] リ/	青灰色	左	90%	堅緻	内傾度1.44
(205)	杯身	No. 5・6・7	4.3	ヨコナテ [*]	青灰色	密			写真No. 5D-18
113	須恵器	SH9203	(13.1)	?/	黄褐色		1/4	不良	内傾度1.83
(196)	杯身	No. 10	(3.6)	?	黄褐色	密	2mm砂		
114	須恵器	SH9203	14.9	クサキ/	灰白色		90%	不良	口縁部にヘラ記号
(260)	横瓶	No. 2	34.3	青海波文	灰白色	密			写真No. 4J-2
115	土師器	SH9203	(13.8)	?/	茶褐色		1/2	良好	
(195)	甕	No. 8	(4.4)	クズリ	茶褐色	良好	2mm砂		
116	土師器	SH9203	(13.6)	ハケ	橙褐色		1/5	良好	
(207)	甕	No. 13・P1	(9.5)	クズリ	茶褐色	良好	2mm砂		
117	土師器	SH9203	14.7	ハケ	橙褐色		5/6	良好	
(208)	甕	No. 12	(8.6)	クズリ	茶褐色	良好	2mm砂多		
118	須恵器	SH9118	12.0	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	80%	堅緻	自然釉・写真No. 5D-1
(316)	杯蓋	No. 11	5.2	ヨコナテ [*]	灰色	密			焼け歪みあり

119	須恵器	SH9118	(12.9)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	左	1/2	堅緻	写真No. 5D-2
(346)	杯蓋	No. 7	5.3	ヨコナテ [*]	灰色	密	3mm砂		
120	須恵器	SH9118	13.8	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	90%	堅緻	内面に沈線がめぐる 写真No. 5D-10
(317)	杯蓋	No. 2	4.4	ヨコナテ [*]	灰色	密			
121	須恵器	SH9118	11.2	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	100%	堅緻	内傾度0.72 写真No. 5D-30
(347)	杯身	No. 8	5.1	ヨコナテ [*]	灰色	密			
122	須恵器	SH9118	(14.0)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色	左	1/2	不良	写真No. 3I-9
(318)	高杯蓋	No. 6	4.8	ヨコナテ [*]	灰白色	密			
123	土師器	SH9118	11.2	? /	黄褐色		100%	良好	写真No. 3I-9
(333)	椀	No. 7	4.2	?	黄褐色	良好			
124	土師器	SH9118	(11.9)	ハケ /	黄褐色		1/3	良好	赤色砂粒含む 写真No. 5D-62
(275)	甕	竈内	(8.0)	?	黄褐色	良好	3mm砂		
125	土師器	SH9118	13.5	ハケ /	橙褐色		80%	良好	写真No. 5D-62
(319)	甕	No. 10	(17.2)	ナテ [*] ?	淡黄褐色	良好	5mm砂多		
126	須恵器	SH9201	(13.0)	ヘラクス [*] リ /	黒灰色	右	1/5	堅緻	内傾度1.06
(204)	杯蓋	No. 1	3.8	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
127	須恵器	SH9201	(13.1)	ヘラクス [*] リ /	灰色	右	1/4	堅緻	内傾度1.05
(202)	杯身	No. 4	(3.6)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
128	須恵器	SH9201	(16.0)	? /	灰白色		1/5	不良	内傾度1.05
(203)	杯身	No. 2	(3.6)	ヨコナテ [*]	灰白色	密			
129	須恵器	SH9201		タタキ+カキメ /	灰白色		底部	堅緻	写真No. 5D-59
(255)	甕	No. 3	(18.6)	青海波文+ナテ [*]	灰白色	密			
130	土師器	SH9201	(10.4)	ハケ /	茶褐色		60%	良好	写真No. 5D-59
(053)	甕	No. 4	14.6	クス [*] リ	赤褐色	良好			
131	土師器	SH9205	13.4	ハケ /	橙褐色		1/1	良好	自然釉・内傾度1.05
(209)	甕	No. 1・2	(9.5)	クス [*] リ後ナテ [*]	茶褐色	良好	3mm砂		
132	須恵器	SH9204	(12.7)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	1/8	堅緻	自然釉・内傾度1.36 写真No. 5D-21 重ね焼き痕
(254)	杯身		3.7	ヨコナテ [*]	灰色	密			
133	須恵器	SH9204	12.7	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	2/5	堅緻	自然釉・内傾度1.36 写真No. 5D-21 重ね焼き痕
(252)	杯身	No. 2	(3.5)	ヨコナテ [*]	青灰色	密			
134	須恵器	SH9204	(11.9)	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色	右	1/6	堅緻	内傾度1.50
(253)	杯身	No. 1	(4.0)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
135	土師器	SH9204	19.6	ハケ /	淡茶褐色		1/1	良好	写真No. 5D-55
(175)	甕	No. 3	(27.9)	クス [*] リ	淡茶褐色	良好	2mm砂		
136	土師器	SH9204	(25.6)	ハケ /	黄褐色		1/5	良好	写真No. 5D-55
(140)	鉢	No. 2-3	(9.1)	ナテ [*]	黄褐色	良好	2mm砂多		
137	土師器	SH9204	14.1	ハケ /	淡赤褐色		1/1	良好	写真No. 5D-55
(170)	甕	No. 3	(10.4)	クス [*] リ	淡赤褐色	良好	2mm砂		
138	土師器	SH9204	18.2	ハケ /	淡黄褐色		70%	良好	写真No. 5D-55
(201)	甕	No. 3	35.4	クス [*] リ	淡黄褐色	良好	2mm砂		
139	須恵器	SH9140	(13.1)	ヘラクス [*] リ /	灰色	右	1/9	堅緻	内傾度0.64 写真No. 5D-28
(216)	杯蓋		4.5	ヨコナテ [*]	灰色	密			
140	須恵器	SH9140	(12.0)	ヘラクス [*] リ /	青灰色		1/5	堅緻	内傾度0.64 写真No. 5D-28
(215)	杯蓋		(3.8)	ヨコナテ [*]	青灰色	密			
141	須恵器	SH9140	11.1	ヘラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	100%	堅緻	内傾度0.64 写真No. 5D-28
(349)	杯身	No. 3	5.2	ヨコナテ [*]	灰色	密			

142	須恵器	SH9140	10.7	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰色	右	95%	堅緻	内傾度0.56
(348)	杯身	No. 2	5.3	ヨコナテ ^ノ	灰色	密			写真No. 5D-27
143	須恵器	SH9140	9.6	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰白色		60%	堅緻	焼け歪みあり
(358)	杯身	No. 1	3.6	ヨコナテ ^ノ +仕上ナテ ^ノ	灰白色	密			写真No. 5D-39
144	土師器	SH9140	10.6	? /	茶褐色		60%	良好	写真No. 5D-67
(274)	甕		(12.0)	?	茶褐色	良好			
145	土師器	SH9140	11.3	ナテ ^ノ /	橙褐色		90%	良好	写真No. 5D-63
(211)	壺	No. 4	17.0	クス ^リ ・ナテ ^ノ	黄褐色	良好・3mm砂			
146	土師器	SH9140	18.2	ハク /	淡黄褐色		9/10	良好	
(213)	甕	No. 6	(21.0)	クス ^リ	淡黄褐色	良好・3mm砂多			
147	土師器	SH9140	(20.2)	? /	淡黄褐色		1/3	良好	
(212)	甕		(13.1)	?	淡黄褐色	良好・3mm砂多			
148	土師器	SH9140	(19.4)	ハク /	淡黄褐色		1/3	良好	
(217)	甕		(15.0)	ハク・クス ^リ	淡黄褐色	良好・3mm砂			
149	土師器	SH9140	15.9	ハク /	淡茶褐色		80%	良好	写真No. 5D-54
(214)	甕	No. 6	29.5	ハク・クス ^リ	淡茶褐色	良好・2mm砂多			
150	須恵器	SH9117	15.0	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰紫色	左	95%	堅緻	写真No. 3I-1
(301)	杯蓋	No. 2	4.1	ヨコナテ ^ノ +仕上ナテ ^ノ	灰紫色	密			
151	須恵器	SH9117	13.0	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /ヨコ	黒灰色	左	100%	堅緻	内傾度1.25
(302)	杯身	No. 1	4.2	ナテ ^ノ +仕上ナテ ^ノ タキ	灰紫色	密			写真No. 3I-5
152	土師器	SH9117	8.7	ハク /	淡黄褐色		2/3	良好	
(073)	甕	No. 4	(5.6)	ナテ ^ノ	黄褐色	良好・2mm砂			
153	土師器	SH9117	11.6	ハク /	黄褐色		1/2	不良	
(072)	甕		(5.8)	クス ^リ	黄褐色	良好・5mm砂			
154	須恵器	SH9141	(14.4)	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰色	右	1/4	堅固	
(075)	杯蓋		(4.1)	ヨコナテ ^ノ	灰色	密・3mm砂			
155	須恵器	SH9141	13.4	? /	赤褐色		2/3	不良	内傾度1.71
(238)	杯身		3.6	?	赤褐色	密			
156	土師器	SH9141	(11.4)	? /	茶褐色		1/5	不良	
(076)	甕		(4.8)	?	黄褐色	良好・3mm砂			
157	土師器	SH9141	13.2	ハク /	茶褐色		2/3	良好	
(078)	甕	No. 1	(5.4)	クス ^リ	茶褐色	良好			
158	須恵器	SH9115	(12.8)	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰色		1/10	堅緻	内傾度0.61
(070)	杯身		(3.8)	ヨコナテ ^ノ	灰色	密			
159	土師器	SH9115	12.0	ナテ ^ノ /	淡茶褐色		1/2	良好	
(071)	甕		(5.8)	ナテ ^ノ	淡黄褐色	良好			
160	須恵器	SH9102	11.6	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰色	右	95%	堅緻	写真No. 3I-4
(343)	杯蓋		3.7	ヨコナテ ^ノ	灰色	密			
161	須恵器	SH9126	13.5	ヨコナテ ^ノ +ハラクス ^リ /	灰白色		30%	堅固	
(189)	杯蓋	No. 1	4.6	ヨコナテ ^ノ	灰白色	密			
162	須恵器	SH9001	(10.0)	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰色		1/5	堅緻	内傾度0.61
(240)	杯身	P10	(3.4)	ヨコナテ ^ノ	灰色	密			
163	須恵器	SH9101	(9.8)	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰白色	右	30%	堅緻	自然釉・底径(6.6)cm
(342)	杯身	上部	3.1	ヨコナテ ^ノ	灰白色	密			写真No. 5D-43
164	須恵器	SH9124	10.6	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰白色		60%	不良	底径7.5cm
(337)	杯身	No. 2	3.5	ヨコナテ ^ノ	灰白色	密			写真No. 5D-33
165	須恵器	SH9124	10.2	ハラクス ^リ +ヨコナテ ^ノ /	灰色		90%	堅固	写真No. 5D-37
(336)	杯身	No. 1	3.3	ヨコナテ ^ノ	灰色	密			

166	須恵器	SH9004	(10.4)	ヨコナテ ⁺ /	黒灰色		1/10	堅緻	内傾度0.59
(229)	杯身		(3.3)	ヨコナテ ⁺	灰色	密			
167	須恵器	SH9004	14.5	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰色		80%	堅緻	写真No. 5D-38
(200)	杯身	P11	3.2	ヨコナテ ⁺	灰色	密			
168	須恵器	SH9130	(12.5)	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	黒灰色		1/3	堅緻	
(134)	杯蓋		(3.7)	ヨコナテ ⁺	黒灰色	密			
169	須恵器	SH9130	(11.2)	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰色	左	1/3	堅緻	内傾度0.68
(135)	杯身	No. 4	4.3	ヨコナテ ⁺	灰色	密			
170	須恵器	SH9130	(10.2)	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰紫色	左	70%	堅緻	内傾度0.57
(345)	杯身	No. 1・2・3	4.7	ヨコナテ ⁺	黒灰色	密			写真No. 5D-25
171	土師器	SH9130	(4.7)	ナテ ⁺ /	淡赤褐色		50%	良好	
(136)	ミコチュア		2.6	ナテ ⁺	淡茶褐色	良好			
172	土師器	SH9130	(12.8)	?/	赤褐色		2/5	良好	
(137)	甕	竈	(5.1)	?	赤褐色	良好・1mm砂多			
173	須恵器	SH9103	(11.0)	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰褐色		1/8	堅緻	内傾度1.64
(193)	杯身	上層	(3.6)	ヨコナテ ⁺	灰褐色	密			
174	須恵器	SH9103	(10.4)	ヨコナテ ⁺ /	灰色		1/6	堅緻	
(192)	杯身	上層	(3.4)	ヨコナテ ⁺	灰色	密			
175	土師器	SH9103	(17.5)	?/	赤褐色		1/5	良好	
(194)	甕		(4.7)	?	赤褐色	良好・1mm砂			
176	須恵器	SH9127	(12.0)	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰白色		1/8	堅固	内傾度1.28
(237)	杯身		(4.0)	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰白色	密			
177	土師器	SH9127	(15.5)	ハケ/	淡赤褐色		1/5	良好	
(179)	甕		(6.0)	クス ⁺ リ	淡黄褐色	良好・細砂多			
178	土師器	SH9127	14.0	ハケ/	赤褐色		1/2	良好	
(262)	甕		(10.5)	クス ⁺ リ	赤褐色	良好・3mm砂			
179	須恵器	SH9131	10.9	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰色	左	90%	堅緻	自然釉・内傾度0.44
(305)	杯身	No. 1	4.9	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰色	密			写真No. 5D-31
180	土師器	SH9131	(25.2)	ナテ ⁺ /	黄褐色		1/5	良好	182・183と
(155)	高杯	No. 5	5.4	ナテ ⁺	黄褐色	良好			同一個体か?
181	土師器	SH9131	(20.0)	ナテ ⁺ /	黄褐色		1/4	良好	刻み模様?あり
(156)	高杯	SK1	(3.3)	ナテ ⁺	黄褐色	良好			
182	土師器	SH9131	-	?/	淡黄褐色		一部	良好	183と同一個体
(138)	高杯	No. 4・床面	(7.0)	?	淡黄褐色	良好			
183	土師器	SH9131	-	?/	淡黄褐色		1/6	良好	182と同一個体
(139)	高杯	No. 5	(1.5)	?	淡黄褐色	良好			裾径(17.0)cm
184	須恵器	SH9104	8.9	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰色		70%	堅緻	内傾度3.00
(344)	杯身		3.1	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰色	密			写真No. 5D-45
185	須恵器	SH9104	(8.8)	ヨコナテ ⁺ +ヘラクス ⁺ リ/	灰色		1/6	堅緻	
(191)	杯蓋	上部	(2.4)	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰色	密			
186	須恵器	SH9104	10.1	ヨコナテ ⁺ /	灰色		60%	堅緻	底径6.3cm
(341)	杯身	No. 1	3.0	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰色	密			写真No. 5D-42
187	須恵器	SH9104	(10.2)	ヨコナテ ⁺ /	灰白色		95%	堅緻	写真No. 5D-41
(340)	杯身	No. 7	3.4	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰白色	密			
188	須恵器	SH9104	(10.6)	ヘラクス ⁺ リ+ヨコナテ ⁺ /	灰色		3/7	堅固	
(190)	杯身	上部	4.0	ヨコナテ ⁺ +仕上ナテ ⁺	灰色	密			
189	土師器	SH9104	(15.1)	ハケ/	淡茶褐色		1/3	良好	
(178)	甕		(13.3)	ハケ	淡黒灰色	良好			

190	須恵器	SH9105	10.8	ヨコナテ [°] /	灰色	左	90%	堅緻	写真No. 5D-40
(335)	杯身		4.3	ヨコナテ [°]	灰色	密			
191	須恵器	SB9021	(16.0)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	黒灰色	右	1/10	堅緻	
(243)	杯蓋	10F P8	3.4	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色	密			
192	須恵器	SB9021	10.8	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色		50%	堅緻	
(242)	杯身	10F P8	3.4	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色	密			
193	須恵器	SK9006	10.5	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色	右	90%	堅緻	写真No. 5D-13
(039)	杯蓋	下層	3.8	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色	密			
194	須恵器	SK9006	11.8	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色	右	80%	堅緻	写真No. 2E-2
(230)	杯蓋		2.7	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色	密			
195	須恵器	SK9006	13.0	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	黒灰色	右	90%	堅緻	焼け歪みあり 写真No. 5D-16
(040)	杯蓋	重機掘削	1.9	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	黒灰色	密			
196	須恵器	SK9006	(14.2)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色	右	1/6	不良	
(038)	杯蓋	上層	(1.7)	ヨコナテ [°]	灰白色	密			
197	須恵器	SK9006	14.4	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰白色	右	60%	堅緻	自然釉・重ね焼き痕 写真No. 5D-17
(257)	杯蓋		2.9	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰白色	密			
198	須恵器	SK9006	(20.9)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色		1/5	堅固	
(041)	杯蓋	中層	(2.8)	ヨコナテ [°]	灰色	密			
199	須恵器	SK9006	(10.0)	ヨコナテ [°] /	灰色		1/6	堅緻	自然釉・内傾度2.83 ・底径(6.8)cm
(037)	杯身	中層	2.9	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色	密			
200	須恵器	SK9006	(8.4)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰白色		1/4	不良	
(005)	杯身	下層	2.7	ヨコナテ [°]	灰白色	密			
201	須恵器	SK9006	11.0	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色	左	95%	堅緻	写真No. 2E-5
(228)	杯身		3.7	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰色	密			
202	須恵器	SK9006	(11.2)	ヘラコシ+ヨコナテ [°] /	灰色		1/5	堅緻	
(031)	杯身		3.3	ヨコナテ [°]	灰色	密			
203	須恵器	SK9006	10.8	ヘラコシ+ヨコナテ [°] /	灰色		60%	堅緻	写真No. 5D-50
(032)	杯身		3.7	ヨコナテ [°]	灰色	密			
204	須恵器	SK9006	9.8	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色		4/9	堅緻	自然釉・底径7.0cm 写真No. 5D-46
(030)	杯身		3.5	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰白色	密			
205	須恵器	SK9006	(11.5)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰白色		60%	不良	底径7.0cm
(003)	杯身	床面・下層	4.1	ヨコナテ [°]	灰白色	密			
206	須恵器	SK9006	(10.4)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰白色		70%	不良	
(004)	杯身	中層	3.9	ヨコナテ [°]	灰白色	密			
207	須恵器	SK9006	10.0	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰白色		90%	堅固	底径6.0cm 写真No. 5D-36
(029)	杯身	床面	4.3	ヨコナテ [°]	灰白色	密・2~3mm砂			
208	須恵器	SK9006	(10.0)	ヘラコシ+ヨコナテ [°] /	灰色		1/4	堅固	
(034)	杯身	下層	3.5	ヨコナテ [°]	灰色	密・2mm砂少			
209	須恵器	SK9006	10.2	ヘラコシ+ヨコナテ [°] /	黒灰色		70%	堅緻	写真No. 5D-44
(033)	杯身	下層	3.4	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	黒灰色	密			
210	須恵器	SK9006	(9.9)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰白色		1/3	堅固	
(028)	杯身		3.6	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰白色	密			
211	須恵器	SK9006	10.3	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	灰色	左	80%	堅緻	写真No. 5D-49
(026)	杯身	床面	3.8	ヨコナテ [°]	灰色	密・3mm砂少			
212	須恵器	SK9006	19.1	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	青灰色	右	80%	堅緻	底径11.5cm 写真No. 5D-51
(042)	杯身	上部	4.6	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	青灰色	密			
213	須恵器	SK9006	(14.8)	ヘラクス [°] リ+ヨコナテ [°] /	黒灰色		1/6	堅緻	底径8.9cm
(027)	杯身	重機掘削	4.1	ヨコナテ [°] +仕上ナテ [°]	灰白色	密			

214	須恵器	SK9006	(10.8)	ヘラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色		1/4	堅緻	自然釉・底径6.4cm
(035)	杯身	重機掘削	4.1	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			写真No. 5D-47
215	須恵器	SK9006		ヨコナテ [*] /	黒灰色		2/5	堅緻	自然釉
(258)	壺	床面・上層	(9.2)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
216	須恵器	SK9006		ヨコナテ [*] /	灰白色		1/4	堅緻	
(256)	壺	床面・中層	(18.0)	ヨコナテ [*]	灰白色	密			
217	須恵器	SK9006	(9.8)	ヨコナテ [*] +ヘラス [*] リ/	灰色		60%	不良	2本1単位の沈線
(044)	甕		(11.0)	ヨコナテ [*]	灰色	やや密			が2段・円孔1
218	須恵器	SK9006	12.2	ヨコナテ [*] /	灰色		1/1	堅緻	写真No. 5D-52
(036)	高杯	床面	(4.9)	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色	密			
219	須恵器	SK9006	-	ヨコナテ [*] /	灰白色		1/3	堅固	裾径(8.1)cm
(043)	高杯	下層	(3.4)	ヨコナテ [*]	灰白色	密			
220	土師器	SK9006	-	?/	淡黒灰色		1/1	不良	
(052)	高杯		(7.0)	?	淡黒灰色	良好			
221	須恵器	SK9006	(29.5)	ヨコナテ [*] +カキメ/	灰色		1/5	堅緻	外面に沈線3段
(002)	甕	中層	(12.2)	ヨコナテ [*]	灰色	密			・工具による刺突列
222	須恵器	SK9006	(16.4)	ヨコナテ [*] /	灰色		1/10	堅固	外面に沈線2条
(001)	甕		(7.8)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
223	土師器	SK9006		-/	黄褐色		3/4	良好	底径4.4cm
(006)	底部	下層	(2.2)	-	黄褐色	良好・3mm砂			
224	土師器	SK9006	15.4	ハケ/	淡黄褐色		90%	良好	写真No. 5D-65
(225)	甕		(14.9)	ハケ	淡黄褐色	良好・2mm砂			
225	土師器	SK9006	14.2	?/	淡黄褐色		40%	良好	写真No. 5D-64
(226)	甕	上層	(13.6)	ハケ	淡黄褐色	良好			
226	土師器	SK9006	(16.3)	ハケ/	淡茶褐色		1/2	良好	
(051)	甕	中層・床面	(12.6)	カス [*] リ	淡茶褐色	良好・2mm砂多			
227	須恵器	SH9002	(11.8)	ヘラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	黒灰色		1/13	堅緻	自然釉
(068)	杯蓋	中層・下層	(3.5)	ヨコナテ [*]	黒灰色	密			
228	須恵器	SH9002	(10.6)	ヘラス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色	左	1/2	堅固	内傾度0.58
(464)	杯身	上層	(4.2)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
229	須恵器	SH9002	(10.0)	ヨコナテ [*] /	灰色		1/10	堅緻	波状文
(069)	甕	中～下層	(4.2)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
230	土師器	SH9002	(11.4)	?/	赤褐色		60%	不良	底径4.3cm
(061)	鉢	床面	7.7	?	赤褐色	良好・5mm砂			
231	土師器	SH9002	-	?/	茶褐色		1/1	良好	底径5.1cm
(065)	底部	中～下層	(2.6)	?	黄褐色	良好			
232	土師器	SH9002	-	?/	濁赤褐色		1/1	良好	底径4.5cm
(066)	底部	上層	(1.8)	?	茶褐色	良好・5mm砂			
233	土師器	SH9002	-	ハケ/	淡黄褐色		1/1	良好	底径3.2cm
(067)	底部	下層	(3.1)	ナテ [*]	淡茶褐色	良好・2mm砂多			
234	土師器	SH9002	(13.4)	?/	赤褐色		60%	不良	裾径10.3cm
(058)	高杯		10.2	?	赤褐色	良好・1mm砂			写真No. 5D-69
235	土師器	SH9002	-	?/	黄褐色		1/1	良好	円孔3
(064)	高杯	中層	(5.6)	?	赤褐色	良好			
236	土師器	SH9002	-	?/	赤褐色		50%	良好	
(063)	高杯	中～下層	(8.2)	?	赤褐色	良好・1mm砂			
237	土師器	SH9002		?/	淡黄褐色			良好	
(473)	高杯	上層	(8.5)	?	淡黄褐色	良好・2mm砂			

238	土師器	SH9002	(16.0)	ハク/	淡赤褐色		1/5	不良	
(086)	甕	特殊ピット	(15.0)	?	濁赤褐色		良好・5mm砂多		
239	須恵器	SH9106	10.3	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色		90%	堅固	写真No. 5D-34
(188)	杯身	No. 1	3.0	ヨコナテ [*]	灰色		密		
240	須恵器	SH9106	(11.1)	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色		1/4	不良	底径(8.0)cm
(147)	杯身		3.4	ヨコナテ [*]	灰白色		密		
241	土師器	SH9106	(13.1)	?/	黄褐色		1/7	良好	
(146)	高杯	上層	(5.6)	?	黄褐色		良好		
242	土師器	SH9106	(12.2)	?/	黄褐色		1/4	不良	
(145)	杯	上層	(4.2)	?	黄褐色		良好		
243	土師器	SH9106	9.9	?/	赤褐色		杯欠	不良	
(339)	高杯	No. 2	(7.6)	?	赤褐色		良好		
244	土師器	SH9106	(7.5)	ナテ [*] /	黄灰色		1/5	良好	
(148)	壺	下層	(5.2)	ナテ [*]	黄灰色		良好		
245	土師器	SH9106	-	ナテ [*] /	淡黄褐色		1/2	良好	
(149)	壺	No. 3	(7.0)	ナテ [*]	淡黄褐色		良好・細砂多		
246	土師器	SH9106	-	ナテ [*] /	黒褐色		1/1	良好	底径4.0cm
(151)	底部	No. 4	(3.6)	ナテ [*]	黒褐色		良好		
247	土師器	SH9106	(7.7)	ナテ [*] /	淡黄褐色		1/2	良好	
(150)	ミニチュア	中層	3.0	ナテ [*]	淡黄褐色		良好		
248	須恵器	SE9015	14.6	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	右	80%	堅緻	内外面とも漆付着
(232)	杯蓋	下層	2.9	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色		密・2mm砂		写真No. 5D-15
249	須恵器	SE9015	15.2	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色		100%	堅緻	自然釉・写真No. 2E-1
(244)	杯蓋	上層	1.6	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色		密・細砂		焼け歪みあり
250	須恵器	SE9015	(12.4)	?/	黒灰色		1/2	堅緻	自然釉
(118)	杯蓋	中層	(1.9)	ヨコナテ [*]	灰色		密		
251	須恵器	SE9015	12.3	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色		100%	不良	写真No. 5D-48
(126)	杯身	下層	3.7	ヨコナテ [*]	灰白色		密		
252	須恵器	SE9015	(11.8)	ヨコナテ [*] /	灰色		50%	堅緻	写真No. 5D-35
(119)	杯身	上層	3.6	ヨコナテ [*]	灰色		密		
253	須恵器	SE9015	(10.8)	ハラコシ+ヨコナテ [*] /	灰白色		1/3	堅固	底径(6.8)cm
(128)	杯身		3.3	ヨコナテ [*]	灰白色		密		写真No. 5D-73
254	須恵器	SE9015	(10.2)	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	青灰色		1/20	堅緻	
(120)	杯身	中層	3.5	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	青灰色		密		
255	須恵器	SE9015	12.5	ヨコナテ [*] /	灰色		90%	堅緻	自然釉・底径7.5cm
(245)	杯身	上層	5.7	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色		密・2mm砂少		写真No. 2E-6
256	須恵器	SE9015	(14.4)	ヨコナテ [*] /	灰色		1/3	堅固	底径(9.5)cm
(266)	杯身		4.9	ヨコナテ [*]	灰色		密		
257	須恵器	SE9015	(20.0)	ヨコナテ [*] /	灰白色		1/10	堅固	底径13.0cm
(117)	杯身	下層	4.7	ヨコナテ [*]	灰白色		密		
258	須恵器	SE9015	-	ヨコナテ [*] /	灰色		1/1	堅緻	底径9.0cm
(116)	杯身	下層	(2.1)	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	灰色		密		自然釉
259	須恵器	SE9015	-	ハラクス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰白色		30%	堅緻	胴部径(16.8)cm
(122)	平瓶	上～下層	(10.0)	ヨコナテ [*]	黒灰色		密		
260	須恵器	SE9015	7.7	ヨコナテ [*] /	灰色		100%	堅緻	写真No. 5D-14
(127)	蓋	中層	2.5	ヨコナテ [*]	黒灰色		密		自然釉
261	須恵器	SE9015	(9.8)	ヨコナテ [*] /	黒灰色		3/10	堅緻	
(121)	壺	中層	(6.0)	ヨコナテ [*]	灰色		密		

262	須恵器	SE9015	(15.6)	ヘラケス [*] リ後ヨコナテ [*] /	灰色		90%	堅緻	自然釉・胴部径21.6 cm・写真No. 2E-9
(246)	壺	上～中層	(27.5)	ヨコナテ [*]	灰色	密			
263	土師器	SE9015	(13.8)	ハケ /	黄褐色		1/3	良好	良好・1mm砂
(123)	甕		(5.3)	ケス [*] リ	淡黄褐色				
264	土師器	13G-P4	(24.0)	ハケ /	黄褐色		1/3	良好	良好・2mm砂
(276)	甕		(8.4)	ハケ	黄褐色				
265	青磁	SK9139	(14.6)		青緑色		1/6	良好	密
(381)	椀		6.3		青緑色				
266	土師器	181-P5	12.6	ナテ [*] /	淡黄褐色		60%	良好	写真No. 5D-72
(267)	皿		2.7	ナテ [*]	淡黄褐色			良好	
267	土師器	22h-P4	9.5	ナテ [*] /	赤褐色		60%	良好	良好
(263)	皿		1.6	ナテ [*]	赤褐色				
268	土師器	22g-P2	(9.5)	ナテ [*] /	赤褐色		1/4	良好	良好
(269)	皿		1.8	ナテ [*]	赤褐色				
269	土師器	22g-P2	8.6	ナテ [*] /	赤褐色		95%	良好	写真No. 5D-70
(268)	皿		1.5	ナテ [*]	赤褐色			良好	
270	須恵器	SK9011	(30.2)	ヘラケス [*] リ+ヨコナテ [*] /	灰色	左	1/5	堅固	密
(270)	皿		5.2	ヨコナテ [*]	灰色				
271	土師器	SK9011	(23.2)	? /	黄褐色		1/4	良好	良好・3mm砂
(272)	鍋		(11.0)	?	黄褐色				
272	土師器	SK9137	(14.6)	? /	赤褐色		1/4	良好	良好・3mm砂多
(265)	甕		(3.8)	?	黒灰色				
273	土師器	SK9137		ハケ /	淡赤褐色		1/1	良好	良好
(264)	底部		(2.3)	ハケ	黒灰色				
274	陶器	21tr	5.6	ハケ /	赤褐色		90%	良好	片口?・底径9.9cm 写真No. 4J-6
(250)	踞		12.0	ナテ [*] ?	赤褐色			密	
275	土師器	22tr	(9.8)	ハケ /	赤褐色		90%	良好	口縁部欠く・底径 4.2cm・写真No. 4J-5
(251)	壺		18.9	ナテ [*]	赤褐色			良好	
276	土師器	22tr	6.9	? /	淡赤褐色		80%	良好	写真No. 5D-71
(180)	皿		1.9	?	淡赤褐色			良好	
277	土師器	22tr	(7.8)	? /	赤褐色		2/5	良好	良好
(181)	皿		1.3	?	赤褐色				
278	土師器	22tr	(6.9)	? /	赤褐色		1/3	良好	良好
(182)	皿		1.2	?	赤褐色				
279	土師器	22tr	(8.1)	? /	茶褐色		1/3	良好	良好
(183)	皿	礫層	1.2	ハケ	茶褐色				
280	陶器	22tr	-	ヨコナテ [*] /	淡黄褐色		1/1	良好	糸切り底・鉄釉・ 底径4.8cm
(184)	底部	礫層	(4.8)	ヨコナテ [*] +仕上ナテ [*]	淡黄褐色			密	
281	瓦器	22tr	(12.8)	? /	黒灰色		1/3	良好	良好
(176)	椀		4.5	?	黒灰色				
282	瓦器	22tr	(12.0)	ナテ [*] /	黒灰色		1/2	良好	良好
(157)	椀		3.9	粗いミカキ	黒灰色				
283	瓦器	22tr	(11.8)	ナテ [*] /	黒灰色		1/4	良好	良好
(177)	椀		4.1	ミカキ	黒灰色				
284	瓦器	22tr	(11.8)	ナテ [*] /	黒灰色		1/3	良好	良好
(158)	椀		4.1	粗いミカキ	黒灰色				
285	瓦器	22tr	(29.5)	ヨコナテ [*] +指ササエ /	黒灰色		1/4	良好	良好
(186)	播鉢	礫層	(11.2)	ヨコナテ [*] ハケ 和シメ	黒灰色				

286	瓦器	22tr	(26.0)	ヨコナテ ⁺ 指サシエ/	黒灰色	1/5	良好
(187)	播鉢		(7.1)	ヨコナテ ⁺ ハケロシメ	黒灰色	良好	
287	瓦器	22tr	(12.6)	ヨコナテ ⁺ /	黒灰色	1/6	良好
(185)	羽釜	礫層	(3.2)	ヨコナテ ⁺	黒灰色	良好	

付表4 土鍾一覧表

掲載 No	遺物 No	遺構	地区	層位	長さ	径	重さ	型
-	(451)	SH9003			(24)	12	(2.8)	A
-	(452)	SH9003	下層1		(31)	12	(2.8)	A
-	(433)	SH9003	1区下層1		34	11	3.0	A
-	(444)	SH9003	N022		34	12	3.0	A
-	(443)	SH9003	1区下層2		35	12	3.1	A
343	(418)	SH9003			42	11	3.3	A
-	(430)	SH9003	1区下層2		(32)	11	(3.3)	A
-	(405)	SH9003	3区下層2		(45)	11	(3.4)	A
341	(412)	SH9003	1区下層2		44	10	3.7	A
-	(419)	SH9003	1区下層2		34	13	3.7	A
-	(422)	SH9003			(37)	13	(3.8)	A
-	(424)	SH9003	1区下層2		(38)	11	(3.8)	A
-	(408)	SH9003	1区下層2		(44)	11	(3.9)	A
-	(432)	SH9003	1区下層2		(31)	14	(4.2)	A
-	(423)	SH9003	1区2区畔		(38)	11	(4.2)	A
-	(428)	SH9003	1区中層2		(33)	12	(4.4)	A
-	(409)	SH9003	1区中層3		42	11	4.4	A
-	(445)	SH9003	1区下層2		(30)	14	(4.5)	A
-	(404)	SH9003	1区下層2		(36)	13	(4.6)	A
-	(435)	SH9003	1区		(33)	13	(4.8)	A
-	(421)	SH9003	1区下層1		(35)	13	(4.8)	A
-	(394)	SH9003	1区下層2		(43)	13	(4.8)	A
-	(167)	SH9003	住居付近		(32)	13	(4.9)	A
-	(403)	SH9003			(35)	14	(5.1)	A
-	(425)	SH9003	1区下層2		41	13	5.2	A
-	(387)	SH9003	1区		(39)	12	(5.6)	A
-	(416)	SH9003	2区下層		(38)	14	(5.7)	A
342	(414)	SH9003			51	12	6.2	A
-	(399)	SH9003			(46)	14	(6.7)	A
340	(411)	SH9003	1区下層		(41)	14	(6.7)	A
-	(398)	SH9003	1区下層		(41)	14	(6.8)	A
-	(389)	SH9003			(36)	13	(6.8)	A
-	(388)	SH9003			55	12	7.4	A
-	(385)	SH9003			(46)	13	(7.6)	A
-	(415)	SH9003	1区2区畔		51	13	7.6	A
-	(386)	SH9003	1区		(42)	15	(8.1)	A
-	(390)	SH9003	1区下層2		(52)	14	(8.5)	A
-	(382)	SH9003	下層		(53)	13	(10.4)	A
-	(384)	SH9003	2区下層1		(62)	15	(11.2)	A
-	(438)	SH9003			(28)	11	(3.5)	B
-	(434)	SH9003	付近		(29)	14	(4.3)	B
-	(458)	SH9003			27	10	1.8	C
-	(292)	10D	P13		37	10	2.7	C
-	(300)	10F	P5		52	13	5.9	A
-	(288)	10H	P4		31	15	5.8	B
-	(479)	12トレ			(41)	9	(3.0)	B
-	(299)	14G	Pla		61	10	4.8	C
-	(370)	2D			(27)	13	(2.4)	C
-	(278)	7B	P8		31	11	3.7	C
-	(372)	8A	P1		(19)	10	(1.3)	-
-	(286)	8A	P1		(19)	12	(2.3)	-
-	(371)	8A	P1		20	10	2.0	A
-	(362)	8A	P1		(41)	11	(4.8)	A
-	(281)	8A	P1		63	14	9.0	A
-	(369)	8A	P1		27	9	2.0	C
-	(285)	8A	P1		(29)	10	(2.6)	C
-	(293)	8A	P1		36	10	2.9	C
-	(368)	8A	P1		(35)	11	(3.1)	C
-	(366)	8A	P1		31	11	3.5	C
-	(295)	8A	P1		33	11	3.6	C
-	(365)	8A	P1		32	11	3.8	C
-	(294)	8A	P1		31	12	4.1	C
-	(363)	8A	P1		(37)	13	(4.2)	C
-	(297)	8A	P1		45	11	4.3	C
-	(364)	8A	P1		(35)	11	(4.7)	C
-	(280)	8A	P1		51	11	5.0	C
-	(279)	8A	P1		45	11	5.1	C
-	(298)	8A	P1		47	12	5.6	C
-	(282)	8A	P1		(47)	14	(7.7)	D
-	(284)	8B			(33)	13	(4.3)	A
-	(367)	9B	P6		(30)	10	(2.3)	C
-	(125)	SE9015			32	10	2.7	C
-	(124)	SE9015			62	19	21.3	B
-	(259)	SH9001			(34)	13	(4.0)	C
-	(110)	SH9002	4区下層		(33)	10	(1.7)	A
-	(108)	SH9002	2区下層		(48)	11	(3.5)	C
-	(109)	SH9002	3区下層		(25)	16	(5.0)	C
-	(168)	SH9002			(32)	13	(5.7)	C
-	(111)	SH9002	2区下層		(41)	-	(6.4)	E
-	(442)	SH9003			(23)	13	(3.8)	-
-	(420)	SH9003			(38)	13	(6.8)	-
-	(457)	SH9003			31	11	2.6	A

- (446) SH9003 1区下層2 (25) 10 (2.1) C	- (152) SH9106 28 10 2.1 C
- (450) SH9003 (29) 9 (2.3) C	- (153) SH9106 (32) 12 (3.1) C
- (449) SH9003 1区下層 26 11 2.4 C	- (85) SH9111 3区 (33) 13 (4.1) C
- (453) SH9003 2区下層1 (25) 11 (2.5) C	- (84) SH9111 3区 39 11 4.9 C
- (448) SH9003 1区中層1 31 11 2.8 C	- (273) SH9113 42 12 6.0 C
- (454) SH9003 1区下層2 (25) 11 (2.8) C	- (283) SH9116 35 11 3.7 B
- (455) SH9003 (26) 11 (3.0) C	- (277) SH9118 33 11 4.7 B
- (456) SH9003 4区上部 28 12 3.1 C	- (163) SH9121 3区 50 14 9.5 A
- (436) SH9003 1区下層 41 11 (3.1) C	- (165) SH9121 (32) 13 (4.8) C
- (440) SH9003 N022 (22) 12 (3.2) C	- (164) SH9121 3区 (34) 16 (7.8) C
346 (426) SH9003 1区下層3 41 9 3.2 C	- (210) SH9204 48 15 6.4 A
- (441) SH9003 32 12 3.2 C	- (173) SK9006 1区下層 (23) 14 (2.8) -
- (439) SH9003 (28) 13 (3.6) C	- (104) SK9006 2区中層 (24) 12 (2.2) A
- (407) SH9003 1区下層1 (34) 13 (3.7) C	- (172) SK9006 1区下層 (32) 12 (3.0) A
- (447) SH9003 (33) 11 (3.8) C	- (103) SK9006 4区中層 (28) 13 (4.3) A
- (429) SH9003 (29) 12 (3.8) C	- (100) SK9006 2区中層 (35) 12 (4.4) A
- (437) SH9003 (30) 12 (3.9) C	- (99) SK9006 1区下層 (37) 12 (4.5) A
- (431) SH9003 (37) 11 (3.9) C	- (98) SK9006 2区下層 (32) 13 (4.9) A
347 (413) SH9003 1区下層1 44 12 4.1 C	- (95) SK9006 2区下層 (45) 12 (4.9) A
- (400) SH9003 33 12 4.2 C	- (96) SK9006 2区中層 (43) 13 (6.6) A
- (401) SH9003 1区下層 (41) 12 (4.6) C	- (93) SK9006 2区中層 67 15 10.4 A
- (427) SH9003 (37) 14 (4.7) C	- (174) SK9006 1区下層 (14) 8 (0.9) B
345 (402) SH9003 1区下層1 48 12 5.1 C	- (105) SK9006 床面 (25) 9 (1.9) C
- (395) SH9003 (33) 12 (5.1) C	- (171) SK9006 2区中層 (34) 12 (3.6) C
344 (391) SH9003 1区下層2 41 11 5.2 C	- (102) SK9006 4区中層 (32) 12 (4.0) C
- (417) SH9003 42 13 5.2 C	- (101) SK9006 2区中層 (32) 13 (4.7) C
- (396) SH9003 1区下層2 (47) 11 (5.4) C	- (94) SK9006 1区上層 49 12 5.5 C
- (410) SH9003 1区下層1 47 11 5.6 C	- (97) SK9006 床面 (14) 14 (6.8) C
- (393) SH9003 2区下層1 (43) 13 (5.8) C	- (92) SK9006 3区下層 83 15 12.8 C
- (406) SH9003 付近 (38) 15 (7.0) C	- (91) SK9006 3区中層 62 18 19.1 C
- (397) SH9003 3区下層2 (38) 12 (7.2) C	353 (107) SK9006 南 (34) - (23.5) E
- (392) SH9003 (44) 14 (6.0) D	- (106) SK9006 3区下層 (53) - (28.2) E
351 (383) SH9003 (40) 14 (8.4) D	- (90) SK9006 1区中層 (73) 24 (36.4) E
352 (459) SH9003 N022 (43) - (17.7) E	- (89) SK9006 3区上層 95 22 38.4 E
- (231) SH9004 上層 (51) 14 (10.8) A	- (374) SK9011 (17) 10 (1.2) -
- (379) SH9103 床面 (18) 12 (2.1) -	- (373) SK9011 (17) 9 (1.3) -
- (377) SH9103 (47) 13 (7.0) A	350 (290) SK9110 32 10 3.2 B
- (378) SH9103 (34) 13 4.2 D	349 (289) SK9110 32 11 3.9 B
- (234) SH9104 (36) 13 (5.6) A	348 (287) SK9110 31 11 4.1 B
- (236) SH9104 (27) 11 (3.1) C	- (296) SK9139 35 8 2.4 C
- (233) SH9104 59 13 9.6 C	- (291) 7C-11 (41) 14 (4.1) A
- (154) SH9106 (25) 11 (1.7) C	

天若遺跡の花粉化石

鈴木 茂(パレオ・ラボ)

ここに報告するのは船井郡日吉町大字天若に所在する天若遺跡より採取された堅穴住居、落とし穴及び土坑内の堆積物の花粉分析結果である。それにより天若遺跡周辺の縄文時代あるいは古墳時代の古植生などが明らかになることが期待される。

1. 試料及び分析方法

試料は平成3年度の第3次調査で検出された古墳時代後期の堅穴住居より採取された試料4点(S H9106、S H9117、S H9118、S H9122)、及び平成4年度の第4次調査で確認された縄文時代の落とし穴より採取された2試料(d38 S K10、h42 S K1)と土坑の1試料(j40 S K1)の計7点である。

S H9106は乾燥した土壌で、小さな空隙が多くみられ、炭片が認められる。他の6試料はいずれも砂の混じるシルト質の土壌で、粘性が少し認められる。またh42 S K1を除いて炭片がみられる。なお図表における試料番号はS H9106を9106、S H9117を9117、S H9118を9118、S H9122を9122、d38 S K10をd38、h42 S K1をh42、j40 S K1をj40と一部省略して示してある。

これらの7試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約5~10g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後重液処理(臭化亜鉛溶液、比重2.1を加え遠心分離、750rpm、30分)を行い、浮遊物を回収する。この回収した浮遊物について水洗後、酢酸処理、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランニンにて染色を施した。また花粉化石の単体標本を作成し、各々にPLC. SS番号を付し、形態観察用及び保存用とした。

表 天若遺跡の算出花粉化石一覧表

和名	学名	9106	9117	9118	9122	d38	h42	j40
樹木								
ツガ属	Tsuga	1	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	-	1	-	2	-	-	-
マツ属(不明)	Pinus (Unknown)	1	-	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	Sciadopitys	5	2	-	-	-	-	-
スギ属	Cryptomeria	1	3	-	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	3	1	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	Myrica	1	-	-	-	-	-	-
クルミ属	Juglans	1	-	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	2	1	-	-	-	-	-
カバノキ属	Betula	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	Alnus	2	2	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	3	2	1	1	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	62	51	5	8	11	1	12
シイノキ属-マテバシイ属	Castanopsis - Pasania	9	6	3	1	2	1	7
ニレ属-ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	5	1	-	-	-	-	-
カエデ属	Acer	2	2	-	-	-	-	3
トチノキ属	Aesculus	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	-	-	-	-	-	-
草本								
イネ科	Gramineae	36	49	12	17	2	2	10
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	2	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	1	-	-	-	-
他のタデ属	other Polygonum	-	-	-	-	-	1	-
ソバ属	Fagopyrum	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	-	-	-	1	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	8	1	-	-	-	1
アブラナ科	Cruciferae	4	3	8	1	1	1	3
マメ科	Leguminosae	31	7	1	2	1	-	2
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	Artemisia	17	35	2	4	1	-	3
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	5	-	-	-	-	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	1	-	-	-	-	1
シダ植物								
単条型孢子	Monolete spore	217	176	43	87	53	12	48
三条型孢子	Trilete spore	79	101	12	19	4	-	4
樹木花粉								
樹木花粉	Arboreal pollen	101	72	10	12	13	2	22
草本花粉								
草本花粉	Nonarboreal pollen	99	112	25	25	5	5	24
シダ植物孢子	Spores	296	277	55	106	57	12	52
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	496	461	90	143	75	19	98
不明花粉	Unknown pollen	66	20	9	11	11	2	9

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉17、草本花粉13、形態分類で示したシダ植物胞子2の計32である。これら花粉・胞子の一覧を表に、また主要な花粉・胞子の分布を図に示した。しかしながら多くの試料については検出出来た花粉粒数が非常に少なく、分布図として示すことが出来なかった。なお分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また図及び表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

いずれの試料も花粉の検出数が少なく、樹木花粉総数が100個体(分布図で示す目安)を越えたのはS H9106の試料のみで、しかもやっとのところである。これは地表に落下した花粉が直ちに酸化・分解されることと、もともと樹木花粉については遺構の性格上その供給量が少なかったことも予想される。したがって分布図については参考程度にみて頂きたい。そうした中ではコナラ属アカガシ亜属が最も多く、全試料から検出されている。シイノキ属—マテバシイ属(以下シイ類と略す)が次に多く、やはり全試料から得られている。その他ではコウヤマキ属やスギ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などがS H9106やS H9117から検出されている。草本類ではイネ科が最も多く、全試料から産出している。ヨモギ属も多く、h42S K1(落し穴)を除く他の試料より検出されており、マメ科も同様である。その他ではアブラナ科が全試料から得られており、ナデシコ科はS H9117試料で多く産出している。またS H9122よりソバ属が1点検出されている。

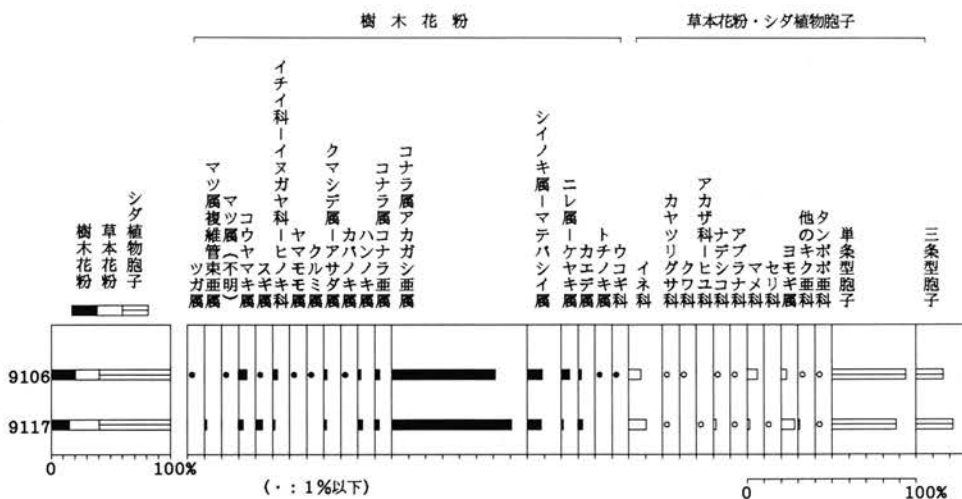


図 天若遺跡の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

3. 天若遺跡周辺の古植生

以上のように花粉化石は余り検出されない結果となり、多くの花粉は酸化・分解されてしまった可能性が強い。こうした条件下で古植生を推定するのは危険であるが、大間かな傾向としてはアカガシ亜属やシイ類が主体の照葉樹林が広がっていたものと思われる。京都市の深泥池では5,000年前～2,000年前がアカガシ亜属の時代で、その後もアカガシ亜属はマツ属やスギ属とともに優占していた(深泥池団体研究グループ 1976)。このように天若遺跡周辺においても縄文時代から古墳時代にかけてアカガシ亜属などの照葉樹類が分布を広げていたものと予想される分析結果が示されているのであろう。

草本類ではイネ科やヨモギ属、アブラナ科、マメ科などが比較的検出されており、おそらく住居跡や土坑の周辺に生育していたこれら雑草類から供給されたものと思われる。またSH9122住居跡よりソバ属が1点ではあるが検出されており、これは古墳時代における天若遺跡周辺地域でのソバの栽培の可能性を示唆していると考えられよう。

4. おわりに

以上のようにほとんどの試料において花粉化石が検出されない結果となった。一般に花粉の外膜は頑強であることが知られており、水域など還元環境下に落下し埋積された花粉は良好な状態で保存される。しかしながら地表に落下した花粉は紫外線やバクテリア、埋積後における酸化などの科学的作用や物理的作用により容易に分解されてしまう。今回の試料は小さな空隙がみられることなどから、かなり土壌化をうけている可能性が高く、多くの花粉が分解されてしまったことが考えられる。また遺構の性格上花粉の供給量についても少なかったのであろう。以上のことから、今後保存状態のよい溝堆積物などの水成層における花粉化石の検討を行ってみたいと考える。

引用文献

深泥池団体研究グループ(1976)深泥池の研究(2). 地球科学, 30, p. 122 - 140.

天若遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野 寛子・明瀬 雅子・長田 正宏
帯広畜産大学生物資源科学科 中野 益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質(炭水化物)及び脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと^(注1)、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子^(注2)、約5千年前のハーゼルナッツ種子^(注3)に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した^(注4)。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質及び複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類及びそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて天若遺跡から出土した土坑の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

京都府船井郡日吉町に所在する天若遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡で、さらに近世、近代、現代に至るまで集落が営まれてきたものと推定されている。この遺跡の第4次調査で縄文土坑や落とし穴が検出された。試料はこの縄文土坑や落とし穴の内外から採取した。土坑や落とし穴の配置状況及び土坑外対照試料の採取地点を図1-1に、各土坑内での試料採取地点を図1-2に示す。試料No. 1は縄文土坑j40SK1、試料No. 2は落とし穴h42SK1のそれぞれ底部から、試料No. 3は対照試料でh40杭の北東、試料No. 4は落とし穴d38SK10底部、試料No. 5は対照試料でd38杭の北から、それぞれ土壌を採取した。

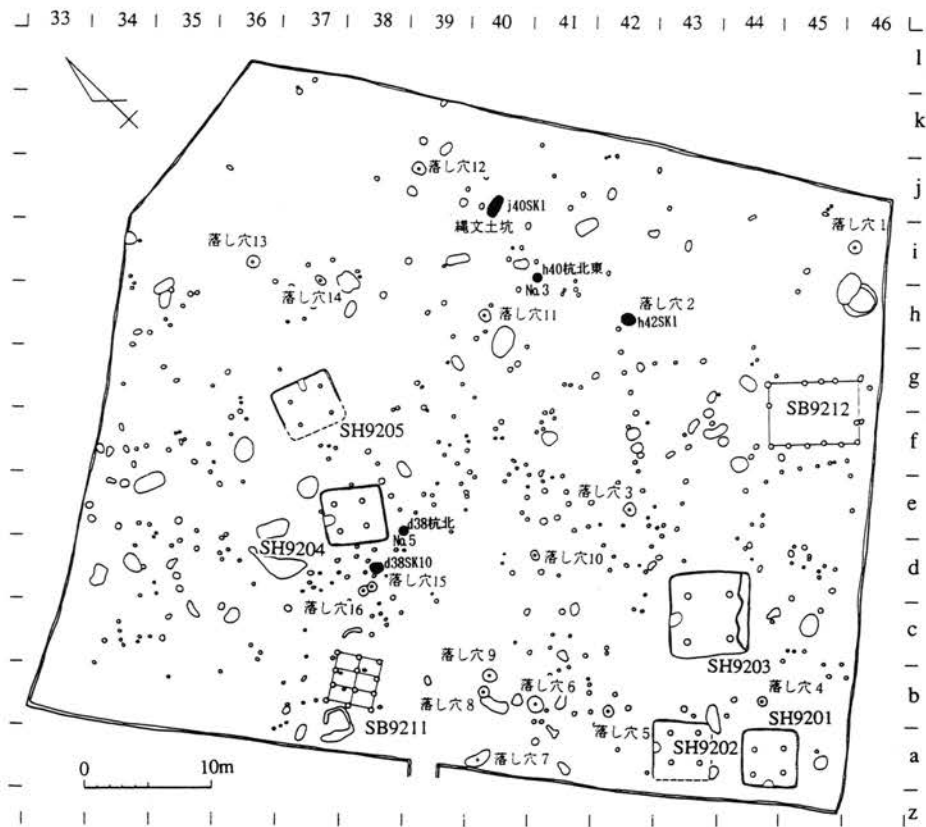


図1-1 土坑の配置状況および土坑外試料採取地点

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料369～550 gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水槽に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0009～0.0017%、平均0.0012%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100%の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

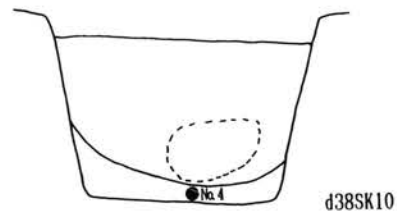
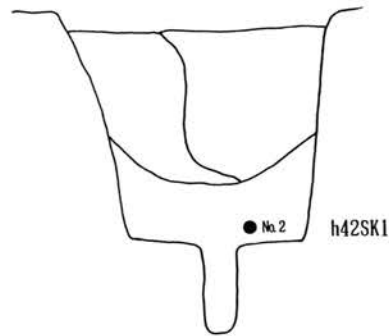
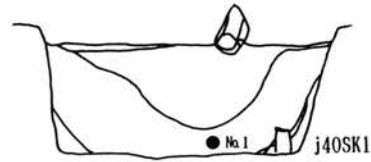


図1-2 土坑内での土壌試料採取地点

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で、2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。^(注5)

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の7種類の脂肪酸をガ

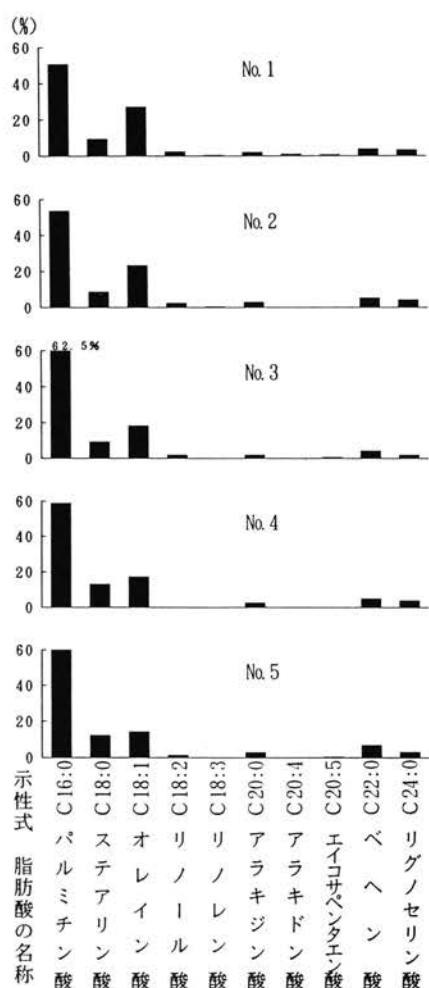


図2 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計で約8~12%分布していた。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの含有量は約4~10%であるから、試料中での高級脂肪酸含量はさほど多いとはいえない。

以上のことから、天若遺跡から出土した試料中にはパルミチン酸が主要な脂肪酸として分布していること、高級脂肪酸含量はさほど多くないこと、土坑の内外で脂肪酸組成パターンに差がないことがわかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケ

スクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

各試料中での炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、主要な脂肪酸はパルミチン酸で約51~63%と大変多く分布していた。次いでオレイン酸、ステアリン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。また、オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。他にステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン

イ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から11~17種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは対照試料No.3を除くすべての試料中で約15~17%、対照試料No.3ではそれらより少なく約9%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4~8%分布している。従って、対照試料No.3を除く他のすべての試料中でのステロール含量は多い。

植物由来のシトステロールは約8~29%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30~40%分布している。従って、試料中のシトステロール含量は少ないといえる。クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カン

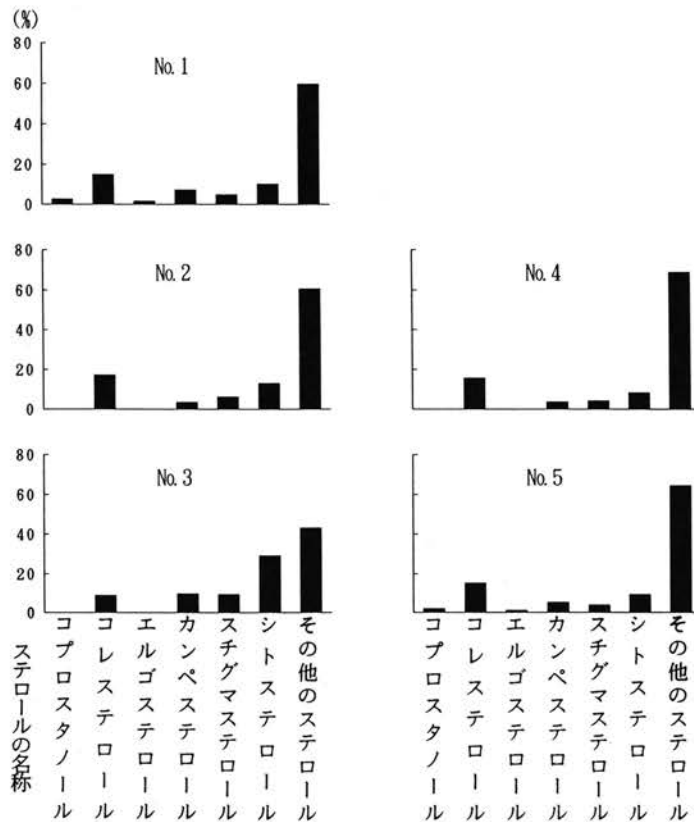


図3 試料中に残存する脂肪のステロール組成

ペステロールが約3～10%、スチグマステロールが約4～9%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料中に含まれている植物性ステロールは、通常の遺跡出土土壌と同程度かシトステロールに関しては少なめといえる。

微生物由来のエルゴステロールは試料No.1とNo.5に約1～2%分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸及び糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1とNo.5で検出され、約2%分布していた。通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別が特定できる場合があるが、今回の含量は3%以下と大変少ないために、それらの特定は不能であった。しかし、土坑内試料No.1で2.5%、対照試料No.5で1.9%と僅かではあるがコプロスタノールが残存しているということは、これらの試料中に哺乳動物の脂肪が残存していたと推測できる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、分布比は試料No.3で0.3、他のすべての試料中で約1.3～1.9を示した。従って、試料No.3を除くすべての試料中に動物遺体が存在していたといえる。

以上のことから、試料中に含まれているコレステロール量や、コレステロールとシトステロールの分布比は、試料No.3を除くすべての試料中に動物性脂肪が残存していることを示唆していた。この結果は先の脂肪酸分析の結果のうち試料No.3で高級脂肪酸含量が最も少ないこととも一致する。他の土坑試料中では検出されないのに、土坑内試料No.1でコプロスタノールが検出されるということは、この土坑内試料中に哺乳動物の脂肪が残存していた可能性がある。対照試料のNo.5でもコプロスタノールが検出されたのは、この周辺で哺乳動物の汚染があったのかもしれない。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に土坑が土壌墓であることや獣用落とし穴であることを想定して、出土土壌を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡^(注10)、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡^(注11)、ヒトの体脂肪、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県摺菰遺跡^(注12)、人間の骨油、イノシシ、ニホンジカ、タヌキ等の動物、クリ、クルミ、ギンナン、トチ等の木の実試料に残存する脂肪酸の類似度と

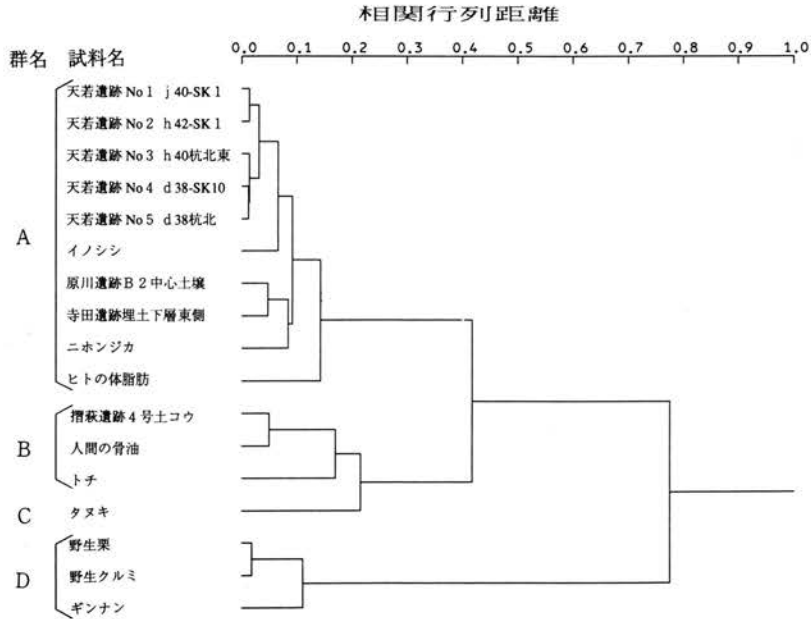


図 4 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

も比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図 4 に示す。図からわかるように、天若遺跡のすべての試料は相関行列距離0.05以内で非常によく類似しており、これらの試料はまた、イノシシ、ニホンジカのような動物、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる原川遺跡、寺田遺跡、ヒトの体脂肪試料とも相関行列距離0.15以内で類似しており、A群を形成した。他の対照試料は各々B～D群を形成し、これらB～D群はA群とは相関行列距離で0.4以上離れており類似していなかった。

以上のことから、天若遺跡の試料はヒト遺体を直接埋葬したと推定した遺跡試料やイノシシ、シカのような動物試料と類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特异性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特异性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれ

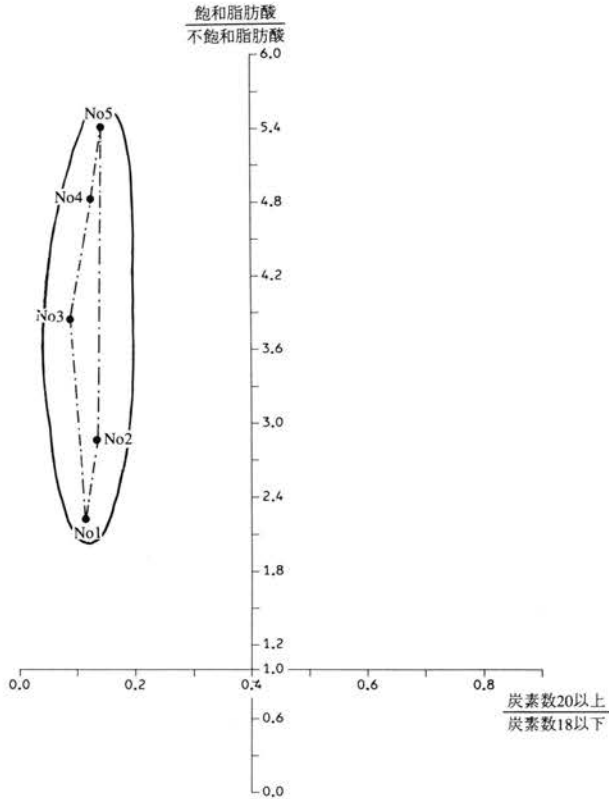


図5 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

の性格を判定するために、土坑内外の試料中の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中にはパルミチン酸が主要な脂肪酸として分布しており、高級脂肪酸含量はさほど多くなく、土坑の内外で脂肪酸組成パターンに差がないことがわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析では天若遺跡の試料はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料やイノシシ、ニホンジカ試料に類似していることがわかった。これらの類似試料がヒトであるか、イノシシ、ニホンジカ等の動物であるかを正確に判定するためには、さらに免疫試験を行い動物種を特定する必要がある。また種特異性相関からも試料中に高等動物の脂肪が残存していることがわかった。

残存するステロール分析の結果、対照試料No. 3を除き、動物性コレステロールの含量も多く、コレステロールとシトステロールの分布比の値も0.6以上で、高等動物遺体の存在を示唆するものであった。試料No. 3は他の試料に比べ高級脂肪酸、ステロールともに他の試料よりも少ない値を示した。これはこの試料が土坑または落とし穴の外の対照試料であるためであろう。対照試料のNo. 5からコレステロールとコプロスタノールが検出されて動物遺体の痕跡を示したのは、この試料周辺で哺乳動物の汚染があったのかもしれない。

ぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。図からわかるように、天若遺跡のすべての試料は第2象限内に分布した。この分布位置は試料中に高等動物の体脂肪や骨油に由来する脂肪が残存していることを示唆している。

7. 総括

天若遺跡から出土した土坑

以上の成績から天若遺跡から出土した土坑や落とし穴にはヒト遺体を直接埋葬した試料もしくはイノシシ、シカ等の動物試料と類似の脂肪が残存していることがわかった。ヒトかイノシシ、シカかの区別にはさらに動物種特有の抗原抗体反応を用いた免疫試験が必要である。

参考文献

- 注1 R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- 注2 D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- 注3 R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, pp33.
- 注4 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.
- 注5 M. Nakano and W. Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』, 358巻, 1977, pp1439.
- 注6 中野益男: 「残存脂肪酸による古代復元」, 『講演収録集-新しい研究法は考古学になにをもたらしただか』, 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, 1989, pp114.
- 注7 中野益男・伊賀 啓・根岸 孝・安本教博・畑 宏明・矢吹俊男・佐原 真・田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- 注8 中野益男: 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡-農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- 注9 中野益男・根岸 孝・長田正宏・福島道広・中野寛子: 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.
- 注10 中野益男・中野寛子・福島道広・長田正宏: 「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.
- 注11 中野益男・幅口 剛・福島道広・中野寛子・長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡 I -昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集, (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- 注12 中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏: 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会

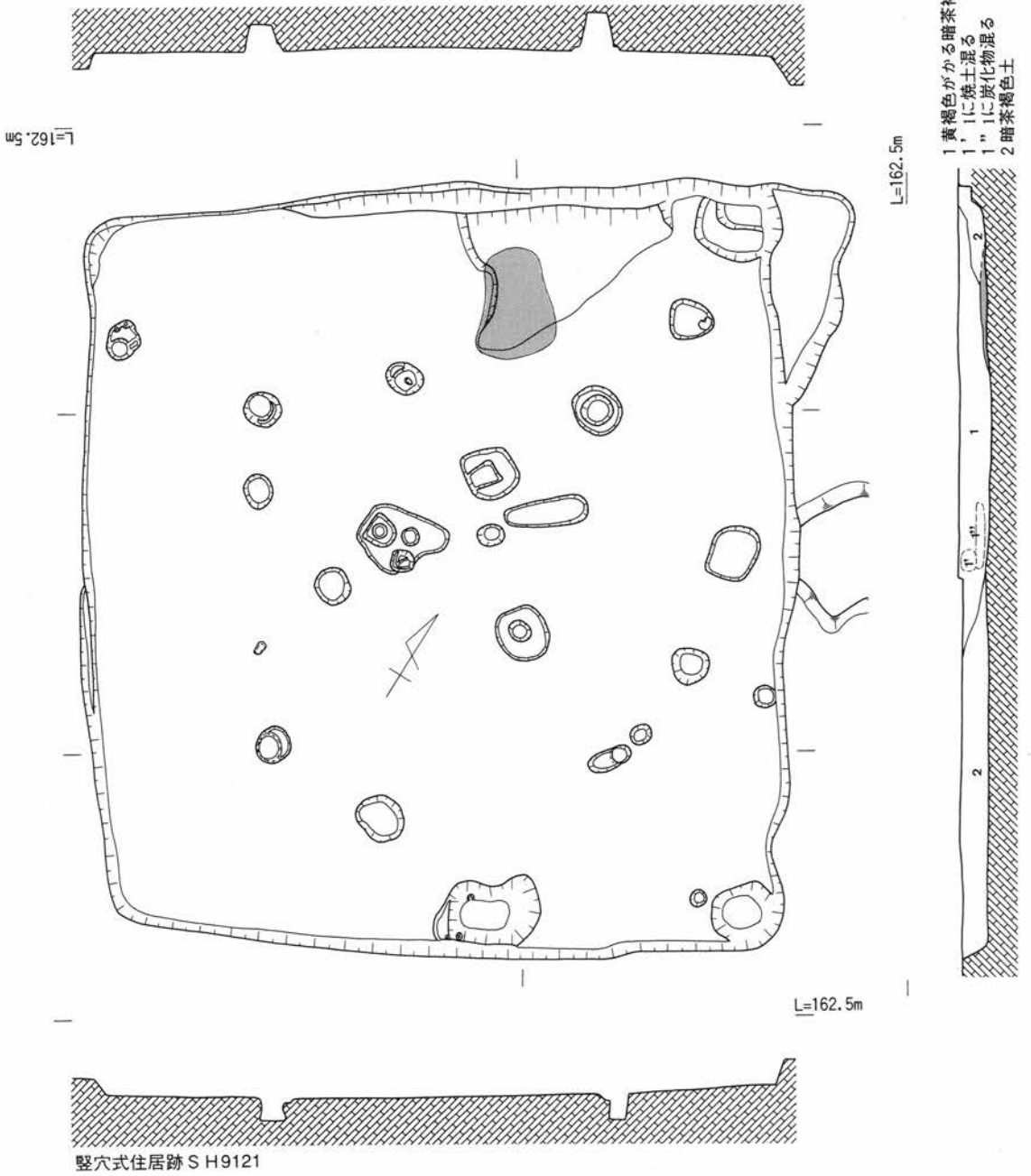
表1 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料 No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	j 40 S K1	549.6	6.6	0.0012
2	h 42 S K1	523.8	4.9	0.0009
3	h 40杭北東	368.6	6.1	0.0017
4	d 38 S K10	540.3	4.8	0.0009
5	d 38杭北	439.0	4.8	0.0011

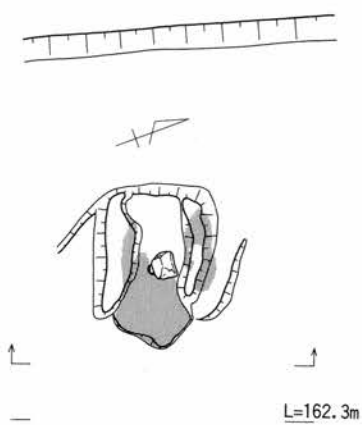
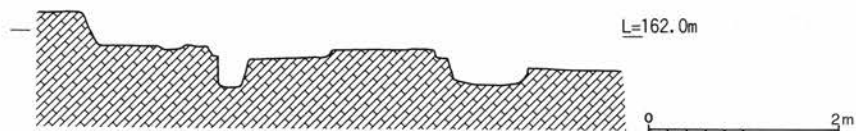
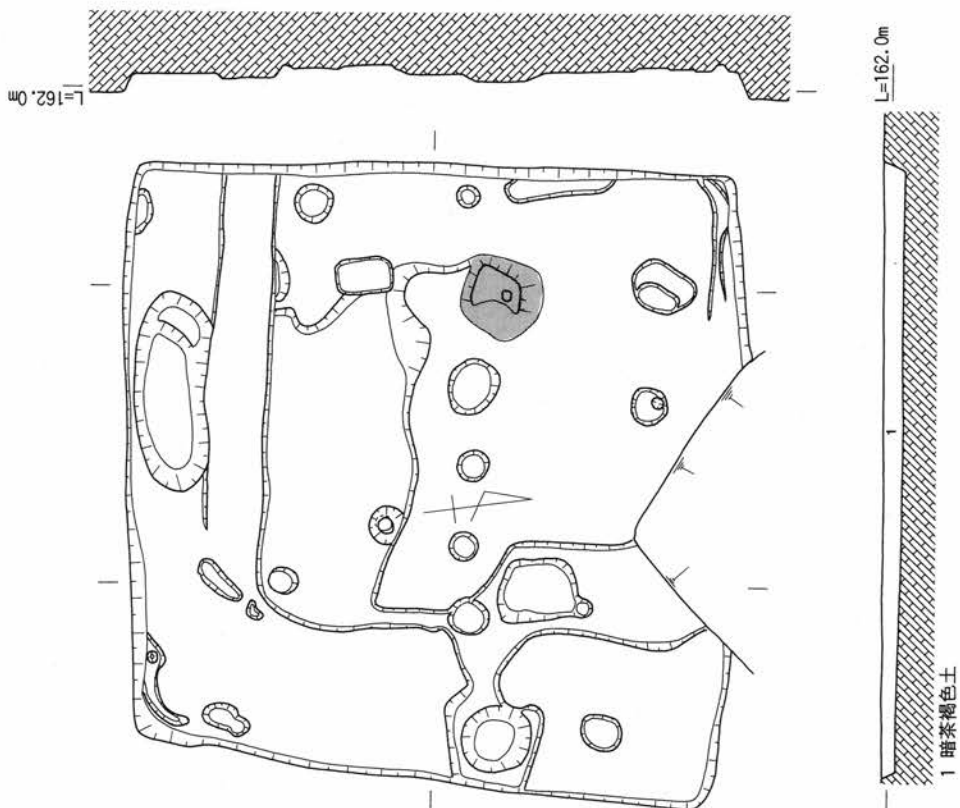
表2 土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料 No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/ シトステロール
1	14.81	9.98	1.48
2	17.14	12.88	1.33
3	8.81	28.98	0.30
4	15.58	8.10	1.92
5	15.19	9.21	1.65

版 圖

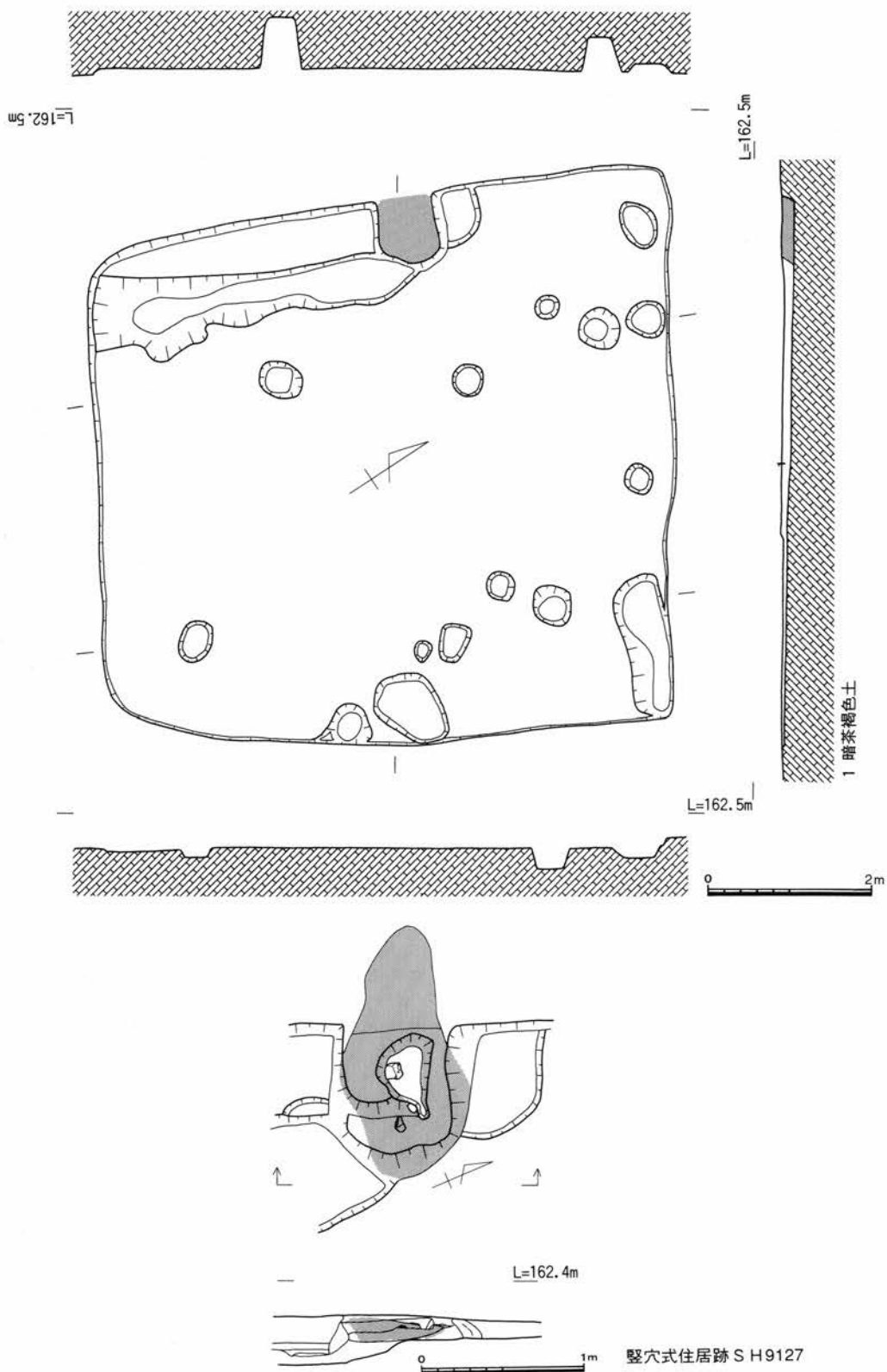


SH9121実測図

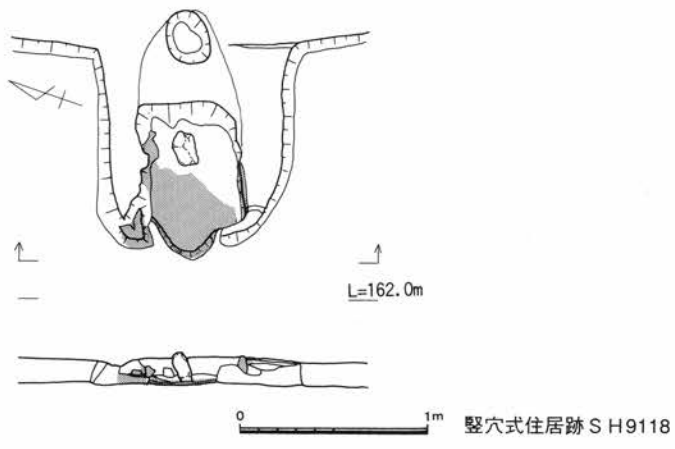
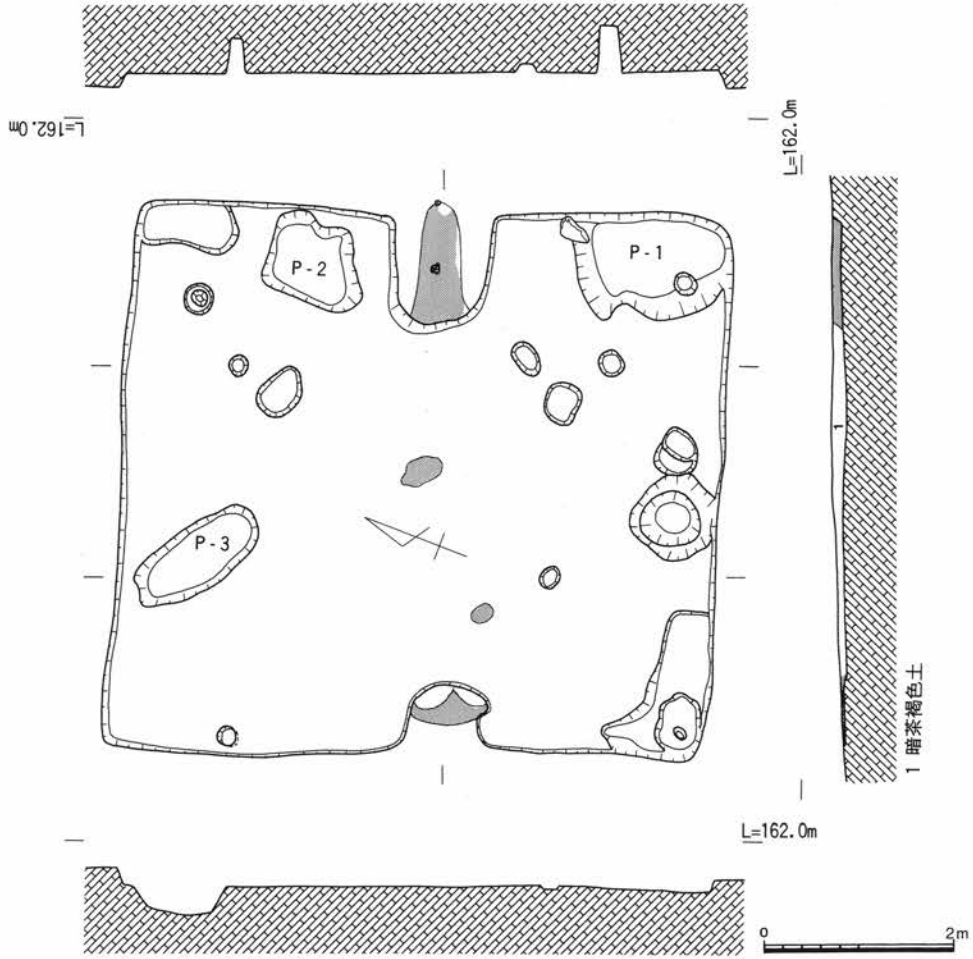


竪穴式住居跡 SH9128

SH9128実測図

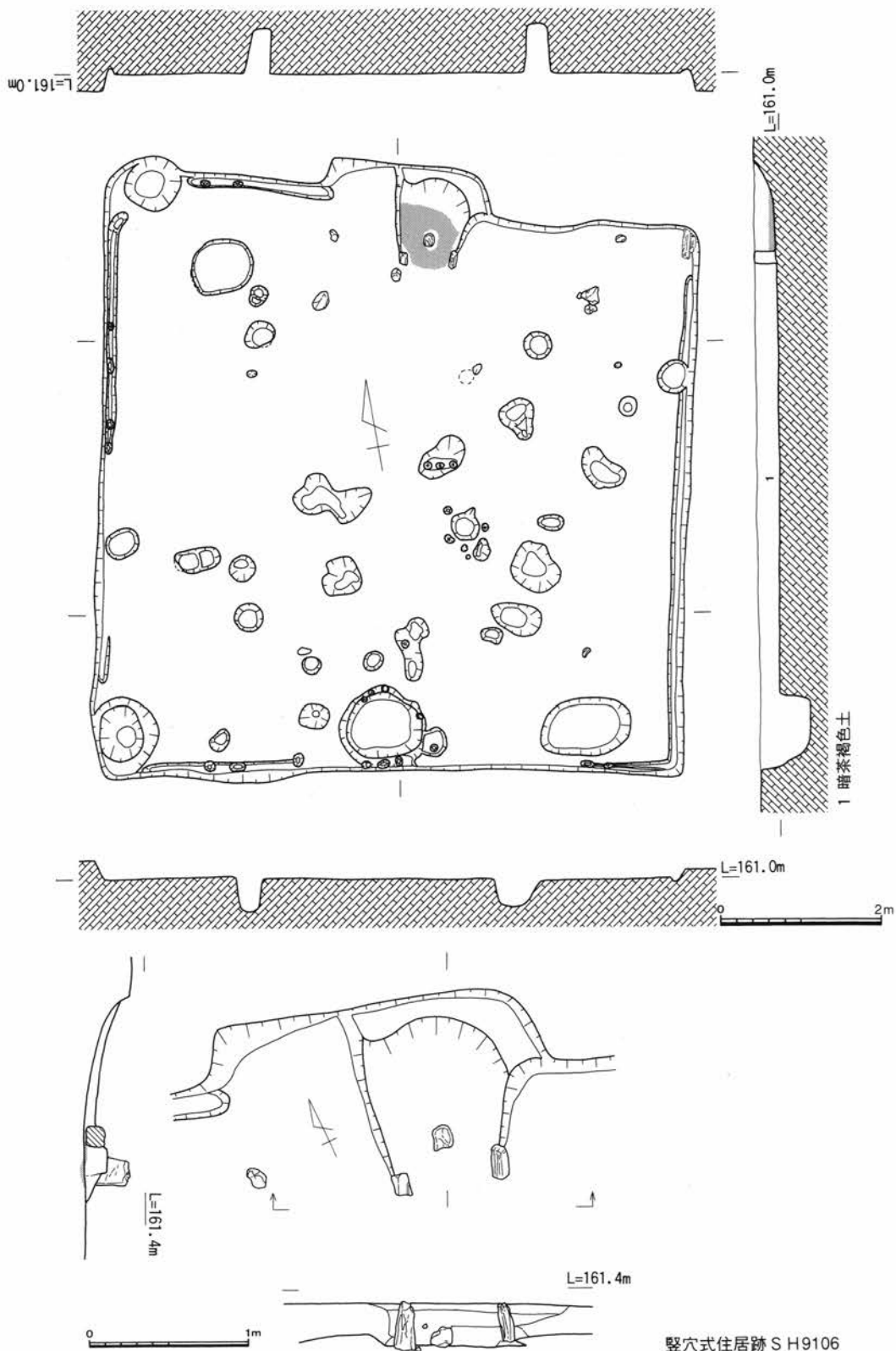


SH9127実測図



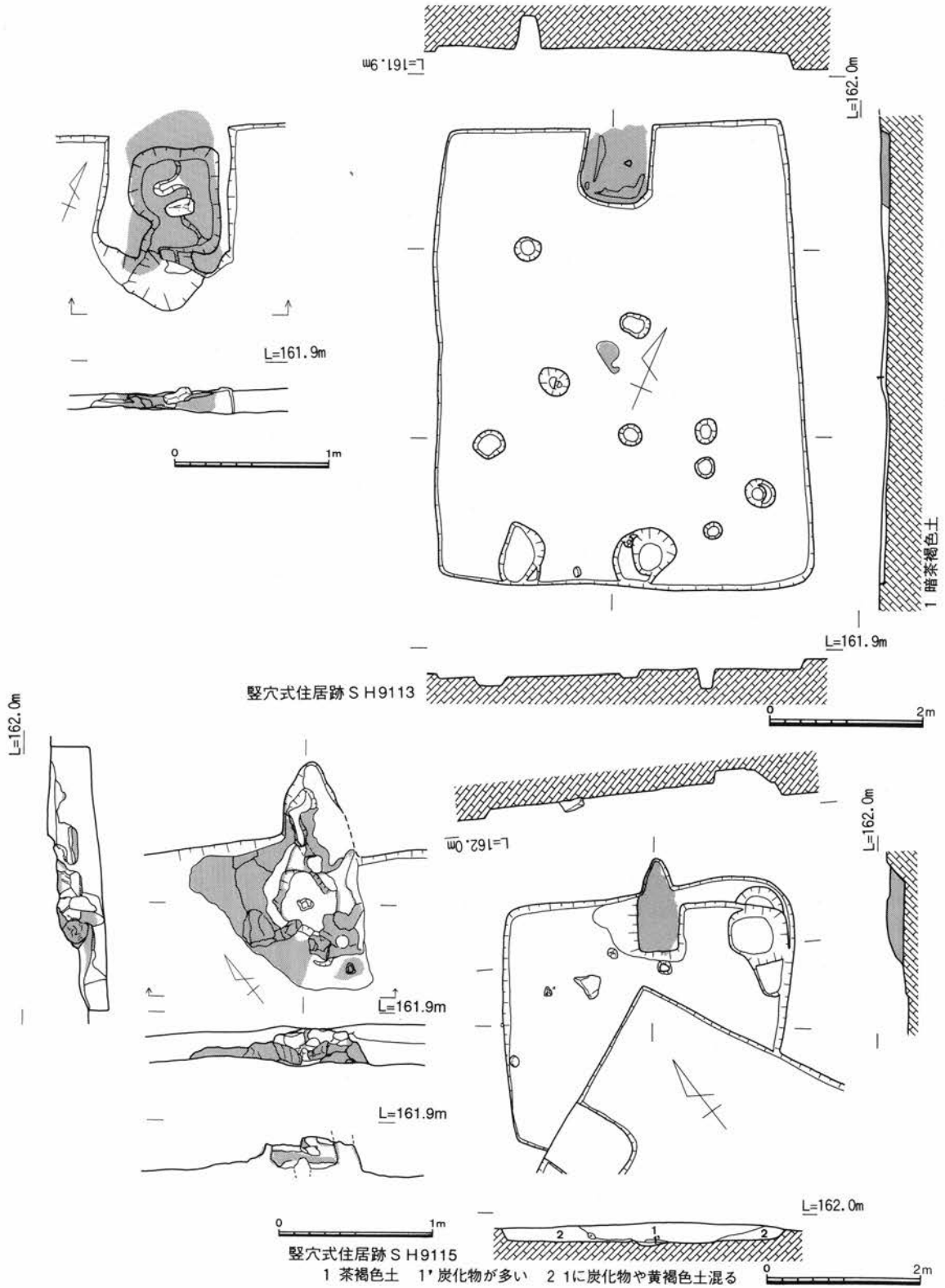
SH9118実測図

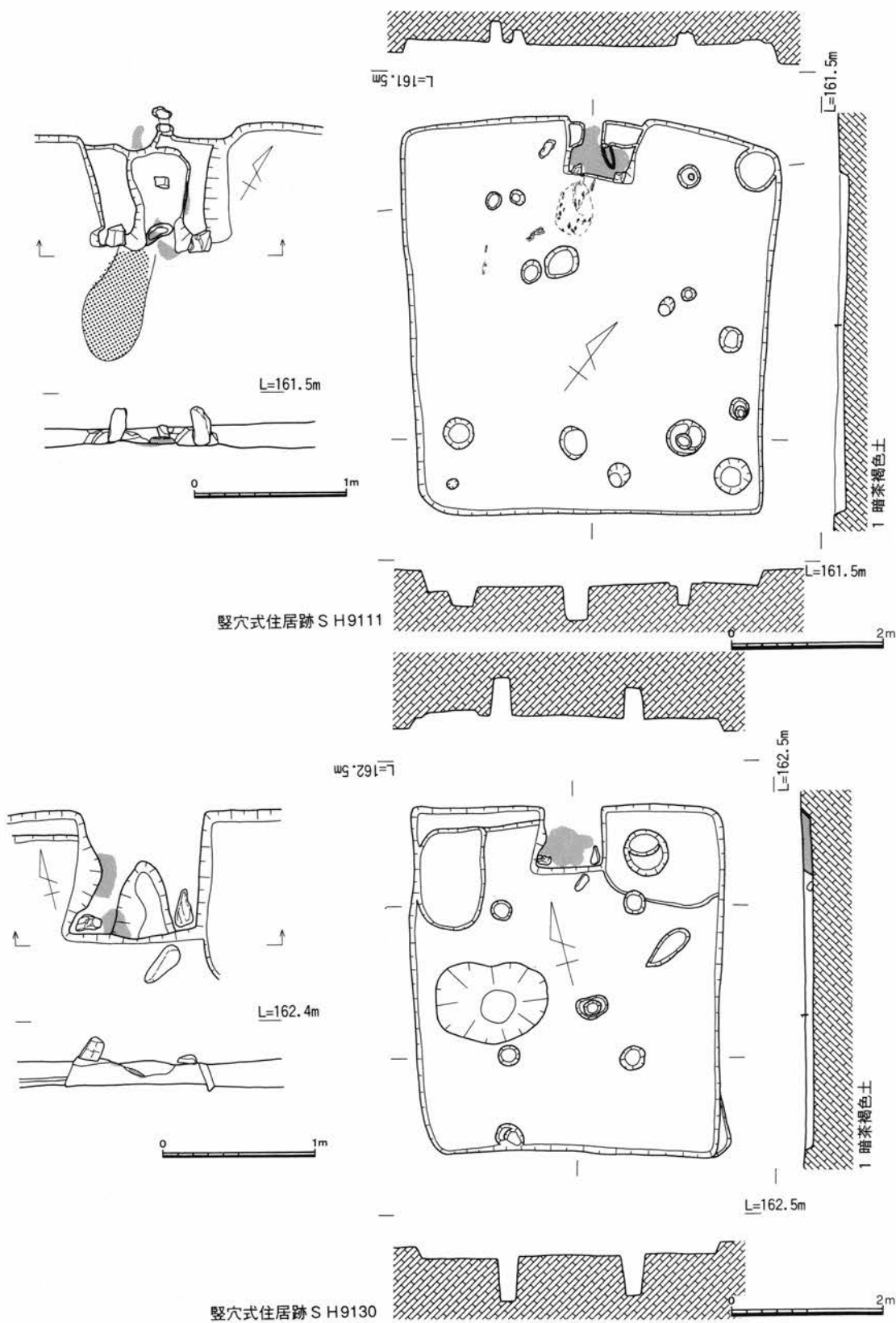
竪穴式住居跡 S H9118



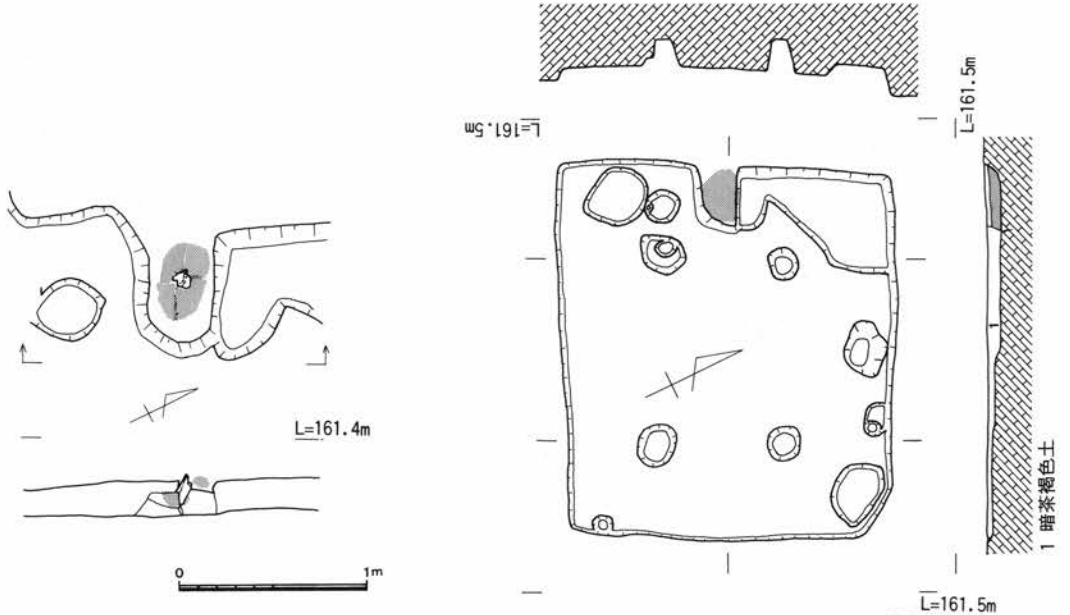
SH9106实测图

竖穴式住居跡 S H9106

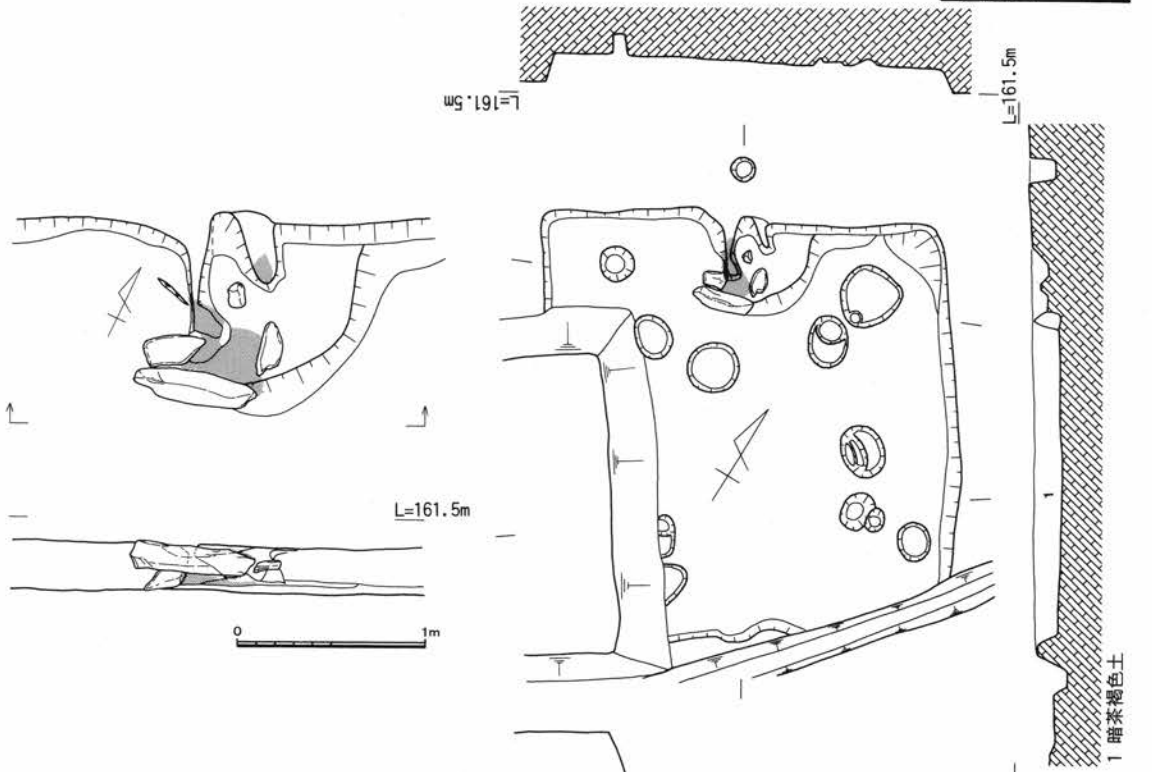




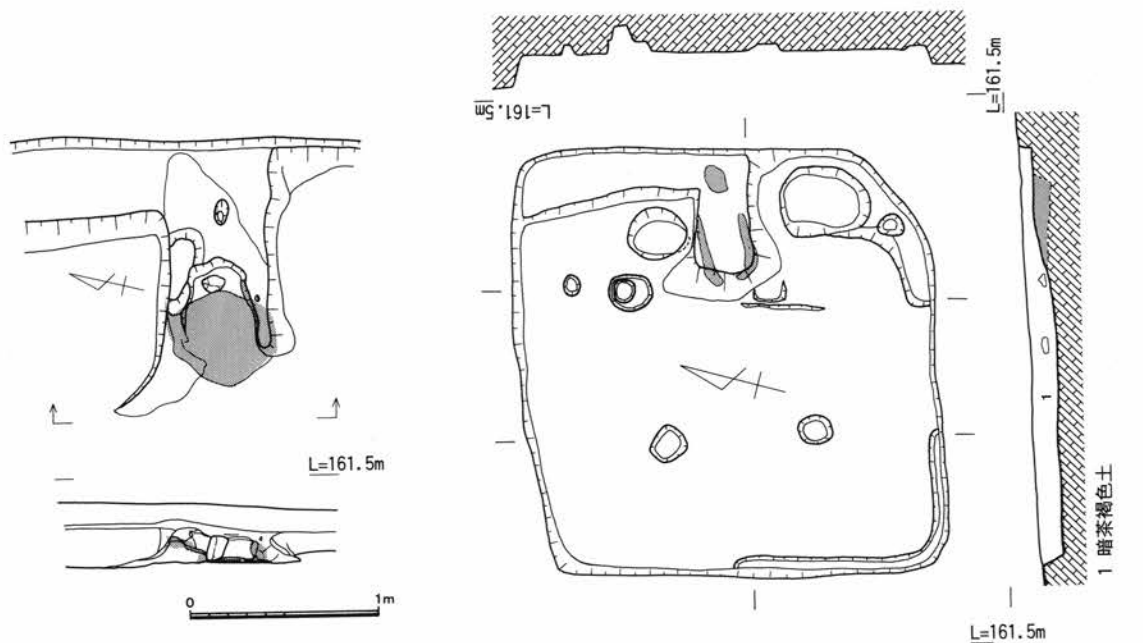
SH9111・SH9130実測図



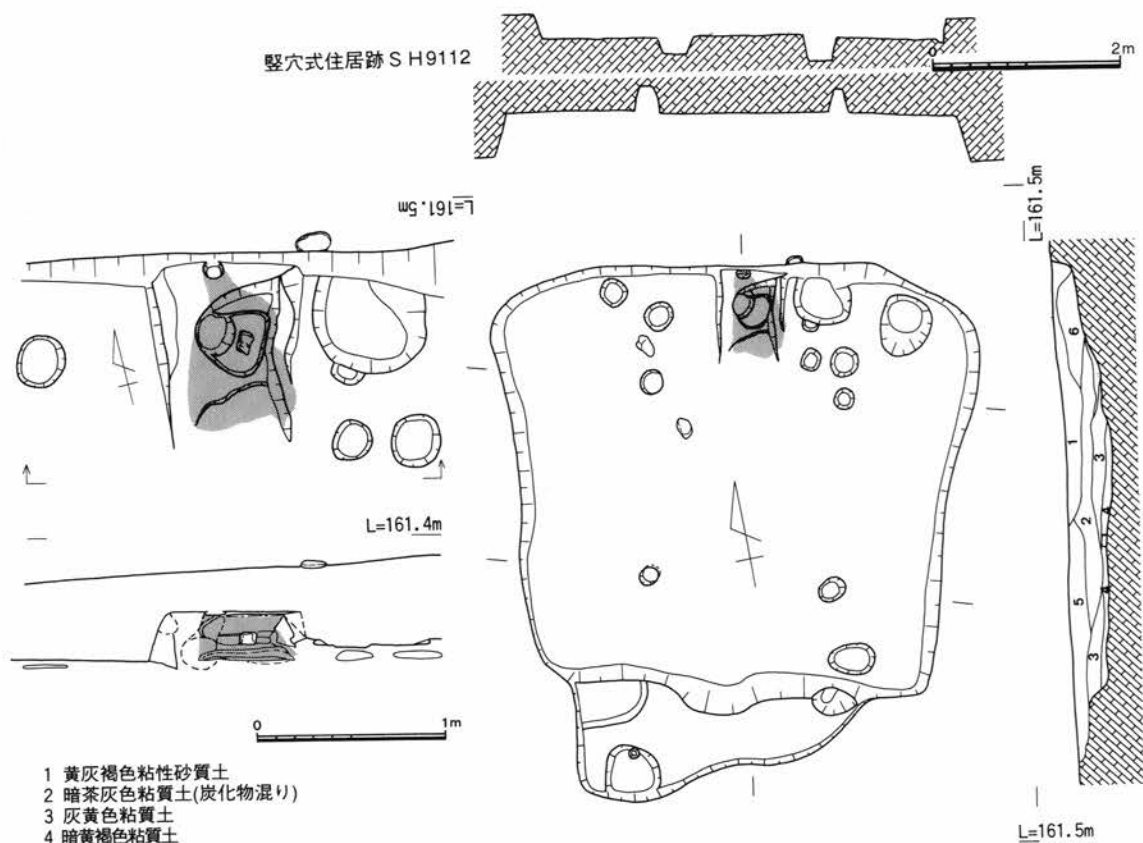
竪穴式住居跡 S H9114



竪穴式住居跡 S H9141

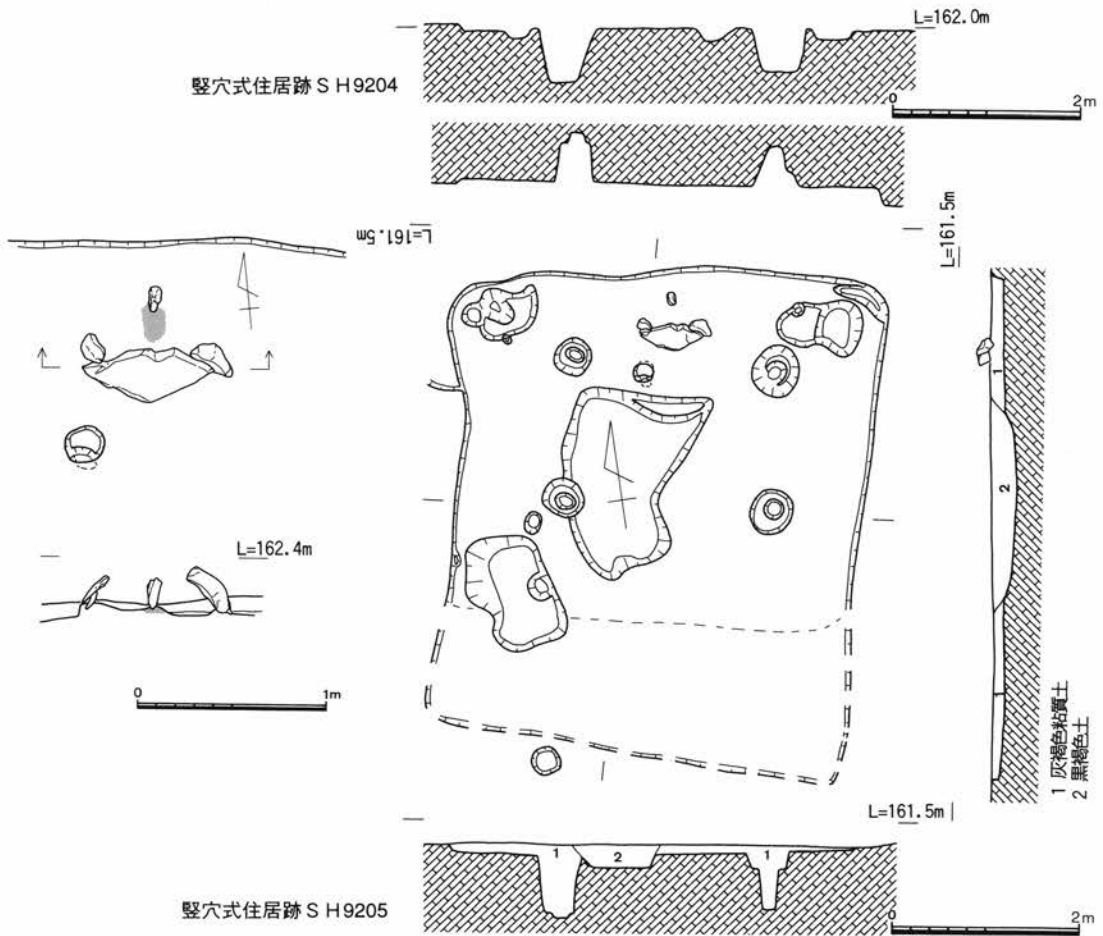
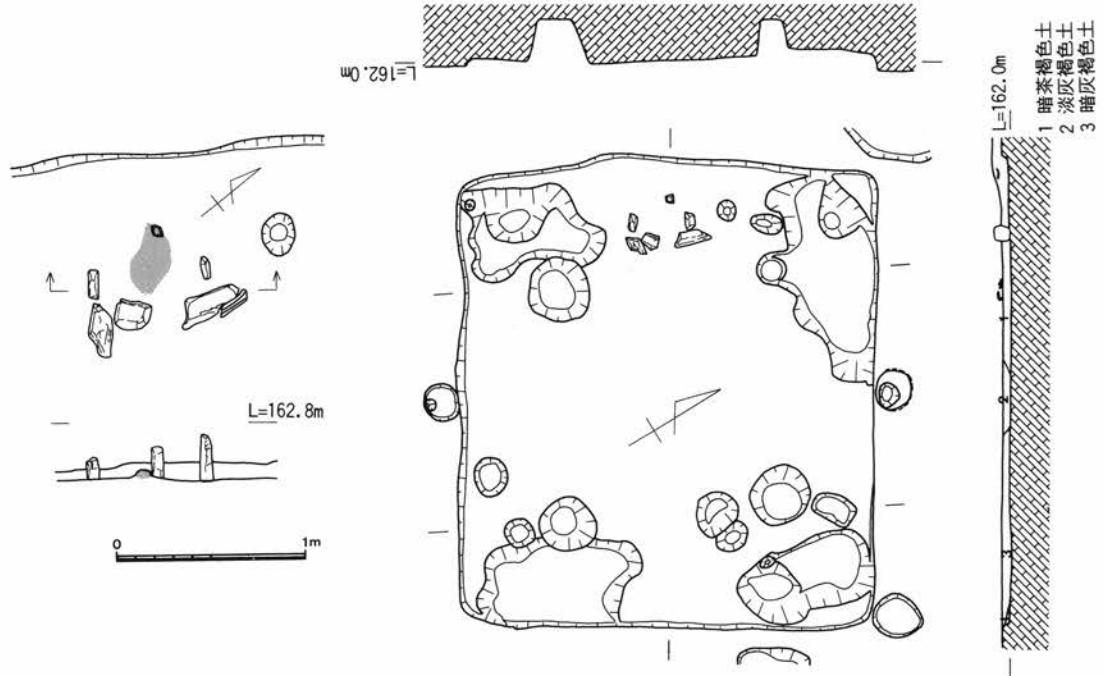


竪穴式住居跡 S H9112

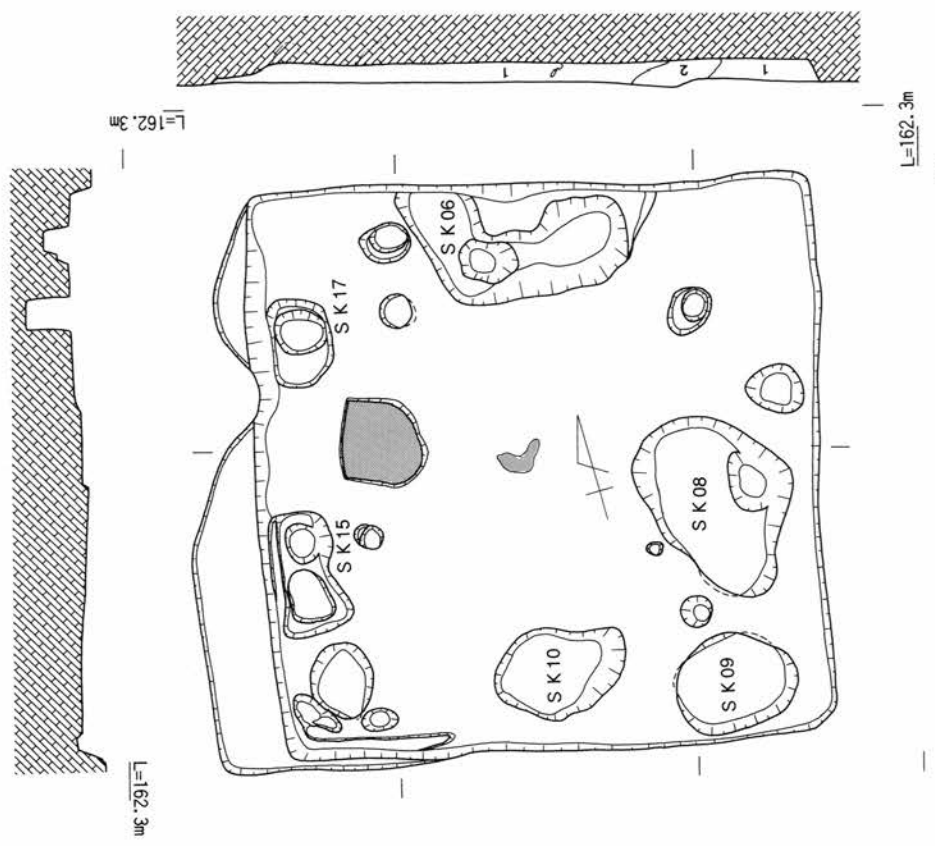
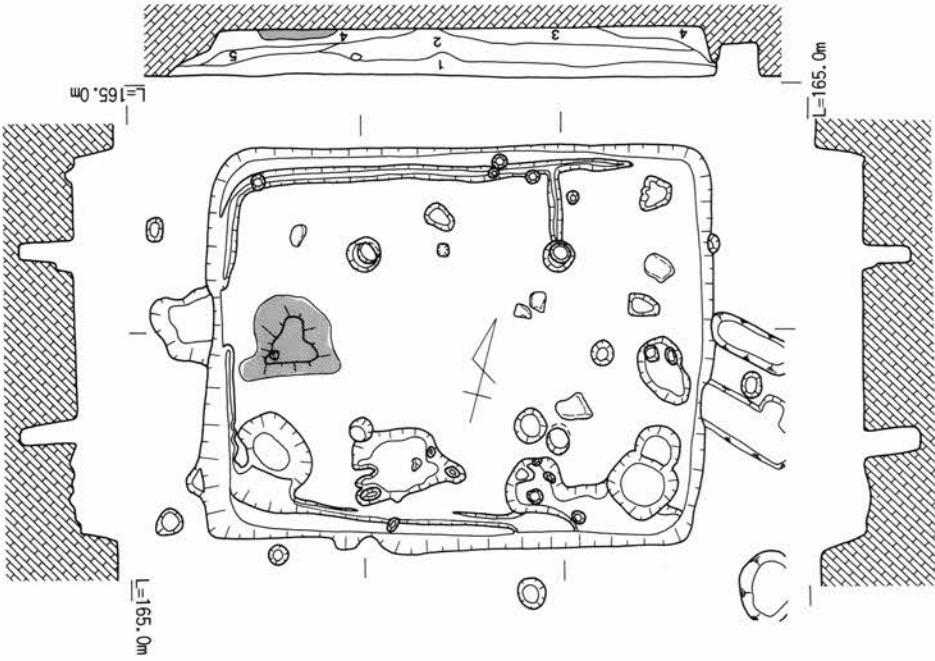


- 1 黄灰褐色粘性砂質土
- 2 暗茶灰色粘質土(炭化物混り)
- 3 灰黄色粘質土
- 4 暗黄褐色粘質土
- 5 暗茶褐色粘性砂質土
- 6 茶灰色粘性砂質土(炭化物含む)

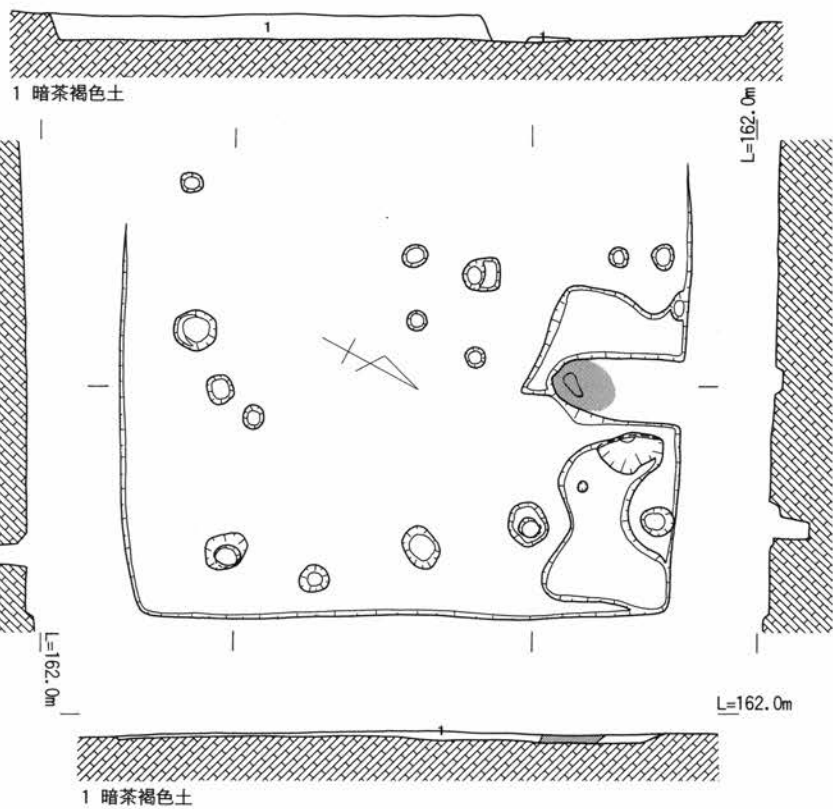
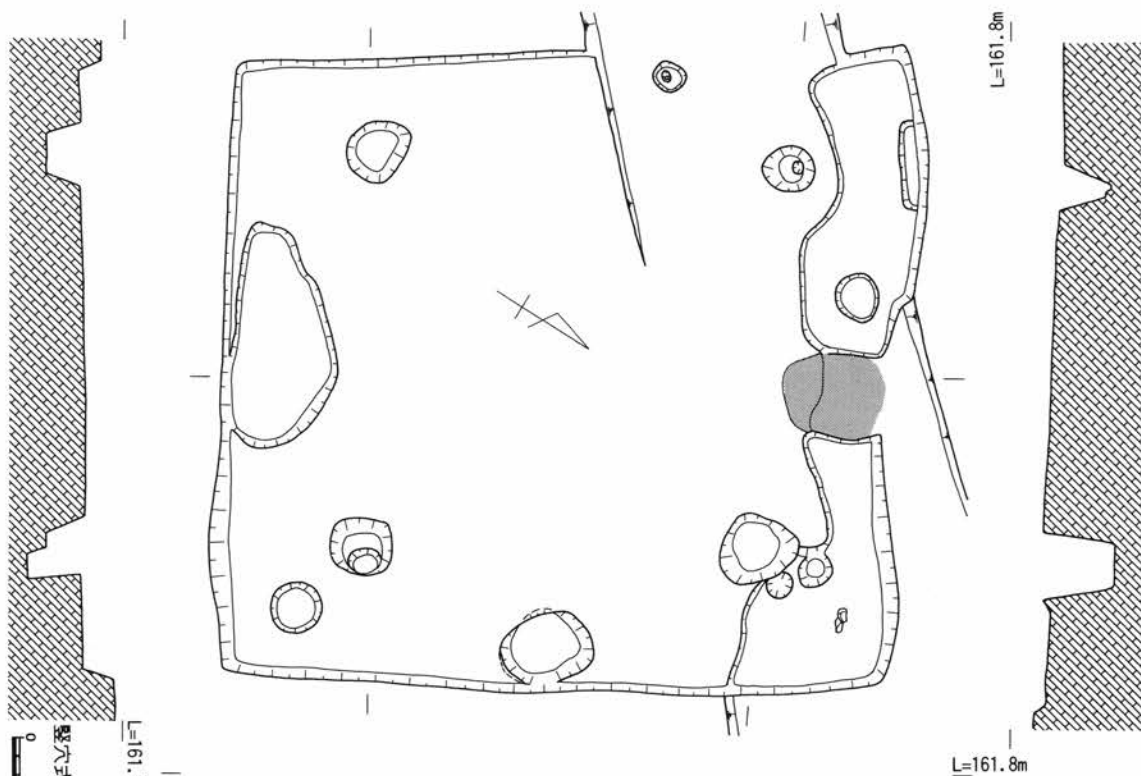
竪穴式住居跡 S H9140



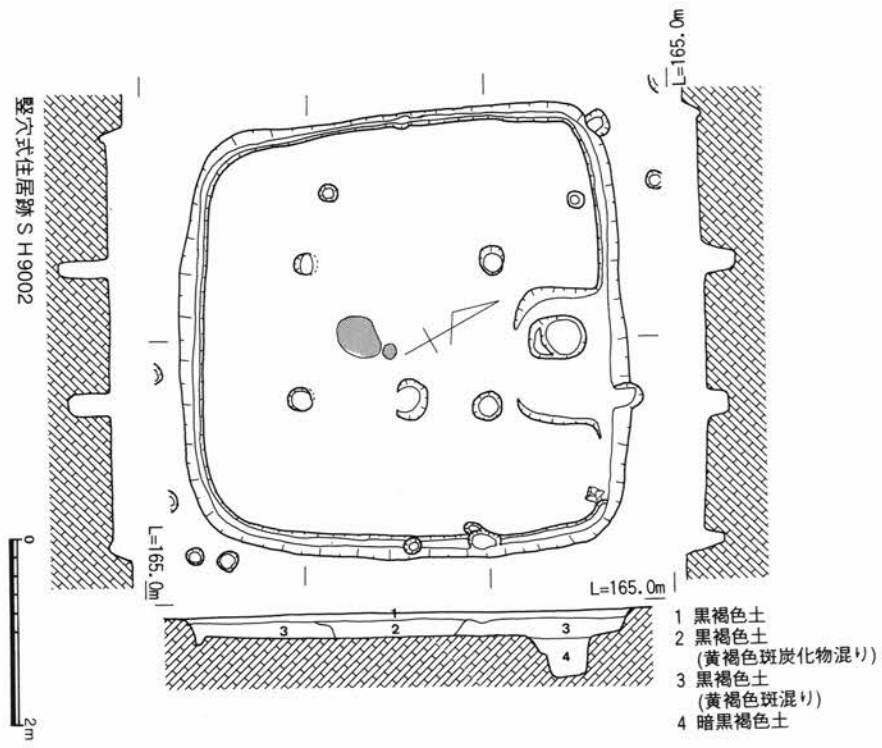
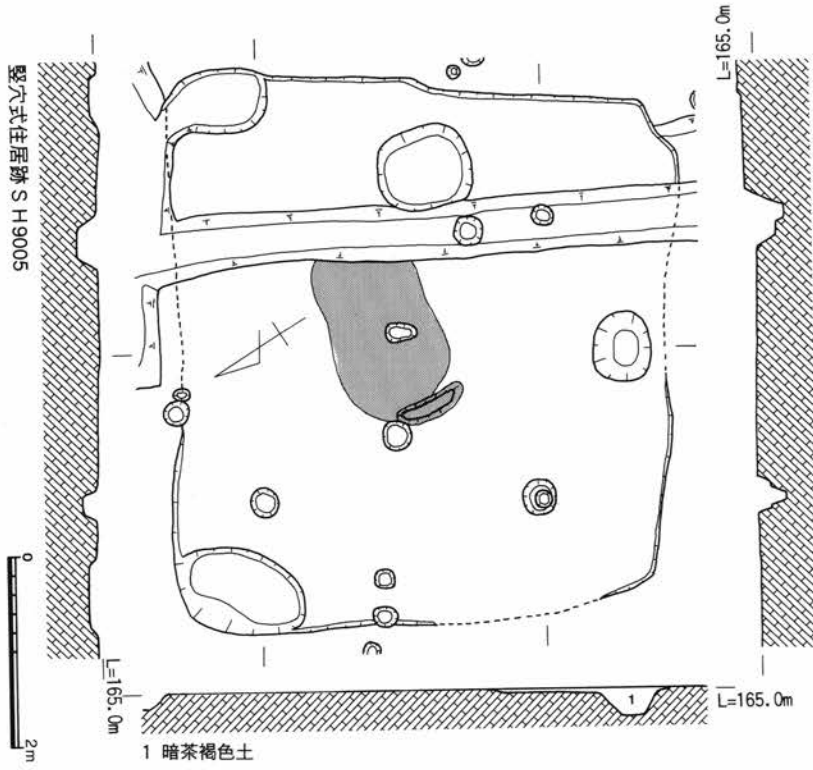
SH9204・SH9205実測図



SH9003・SH9122実測図

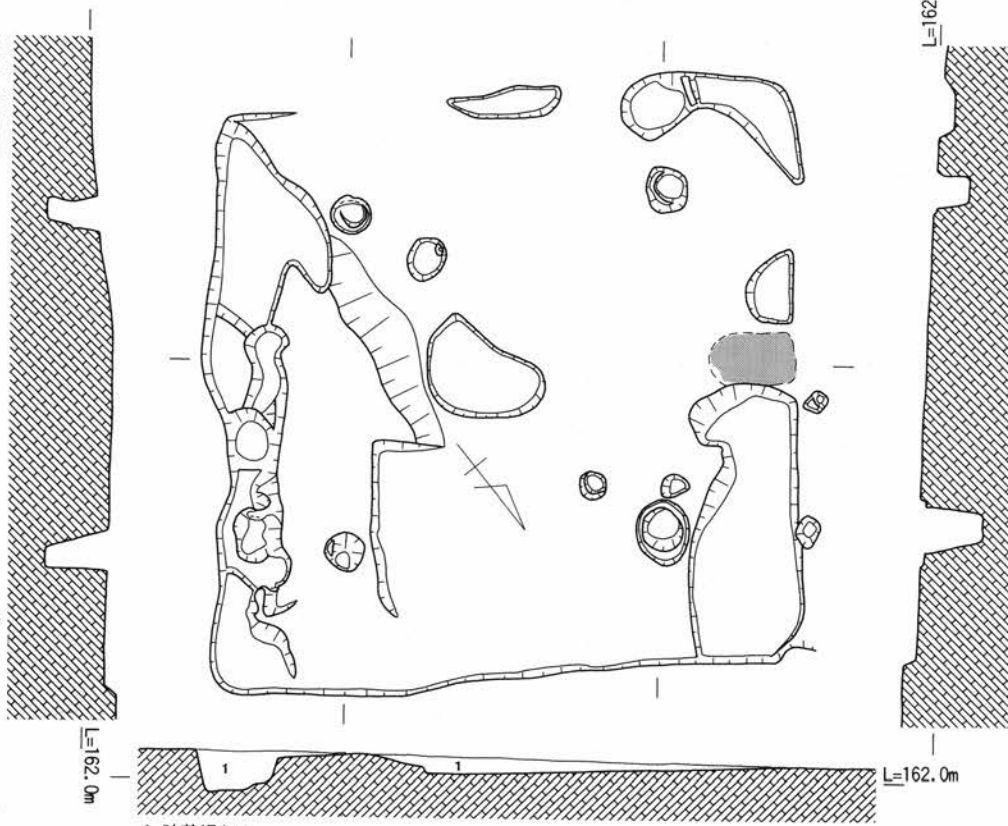


SH9123・SH9116実測図



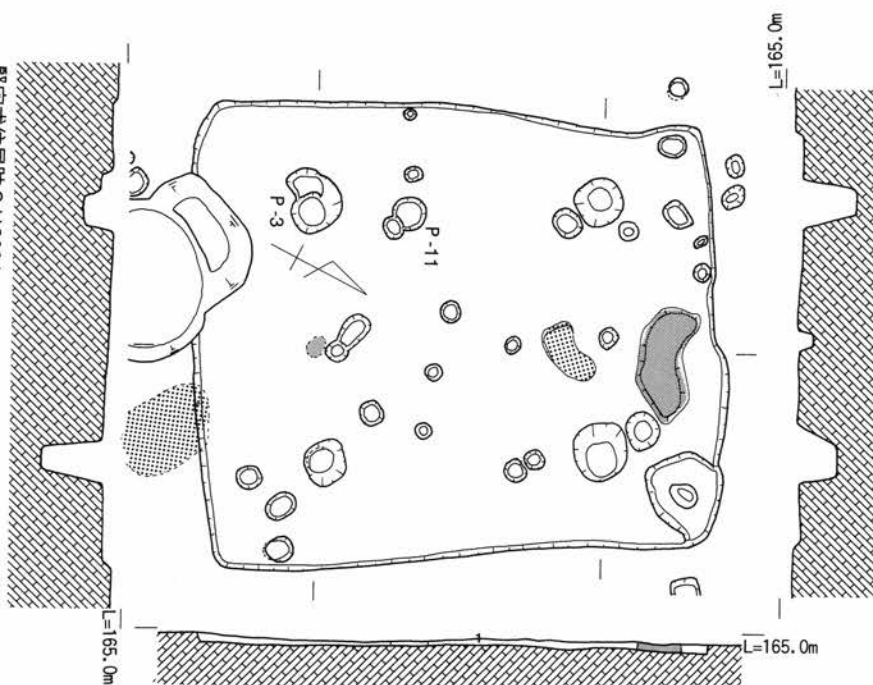
SH9002・SH9005実測図

竖穴式住居跡 S H 9203



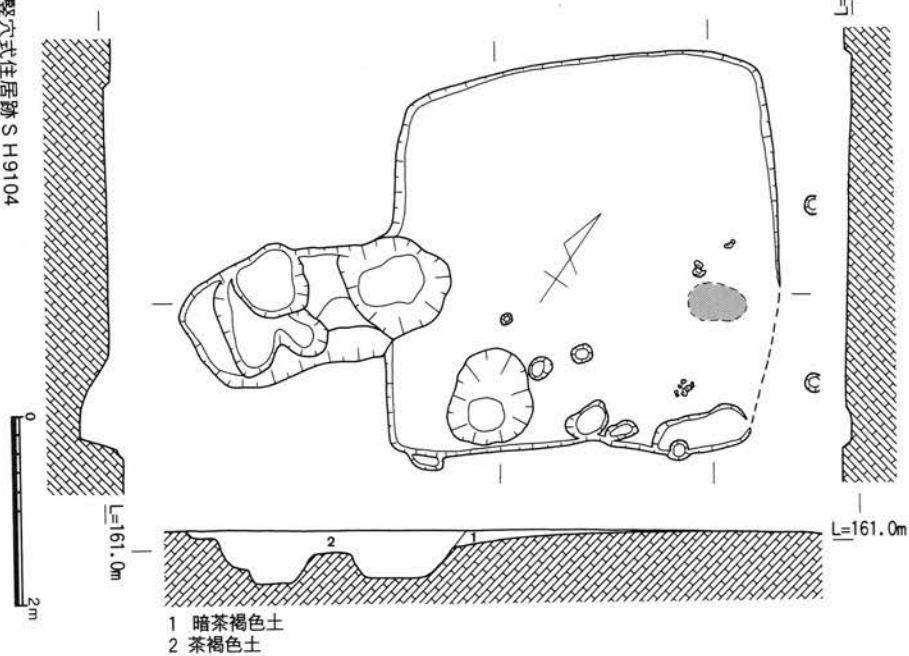
1 暗茶褐色土

竖穴式住居跡 S H 9004

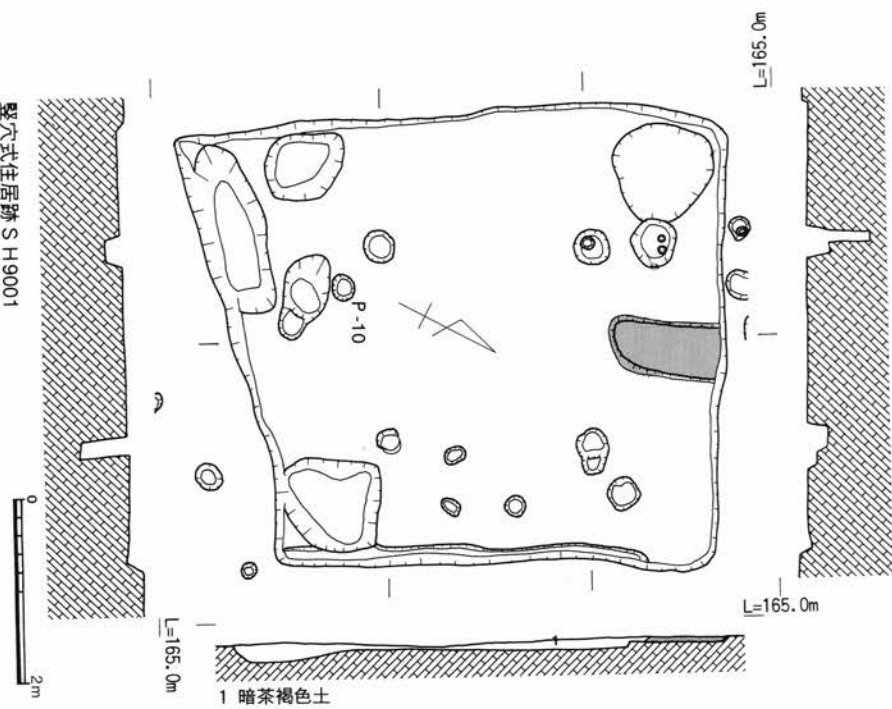


1 暗茶褐色土

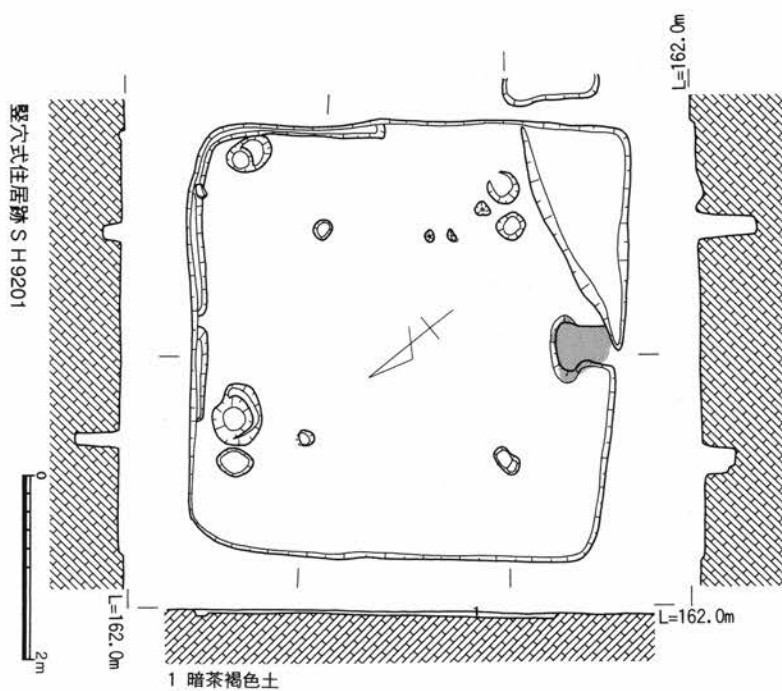
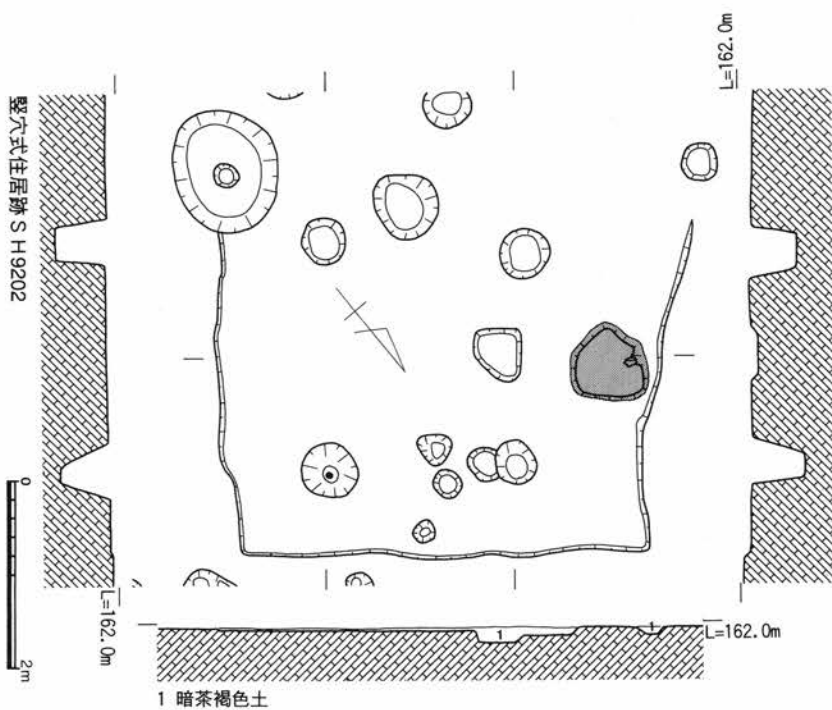
竪穴式住居跡 S H 9104



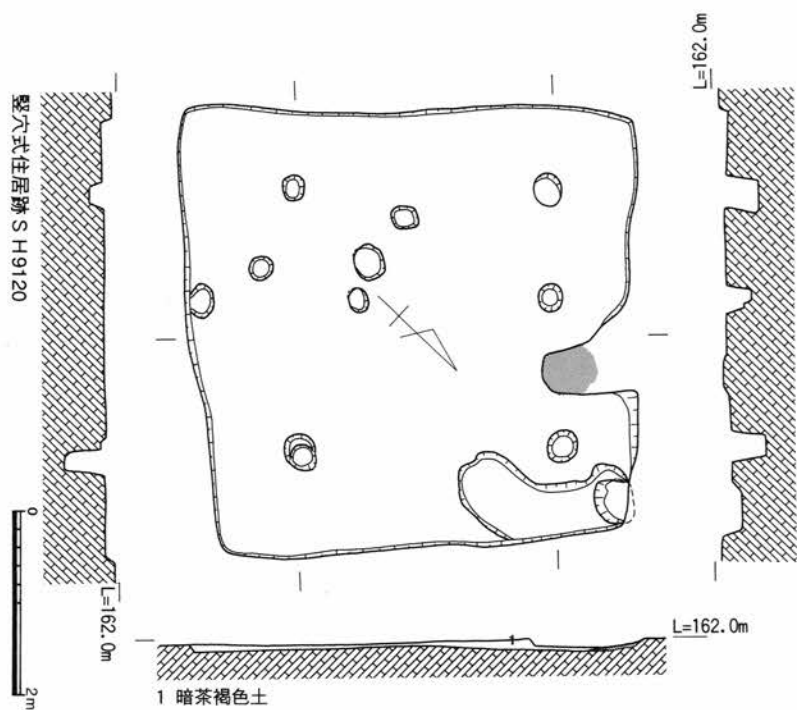
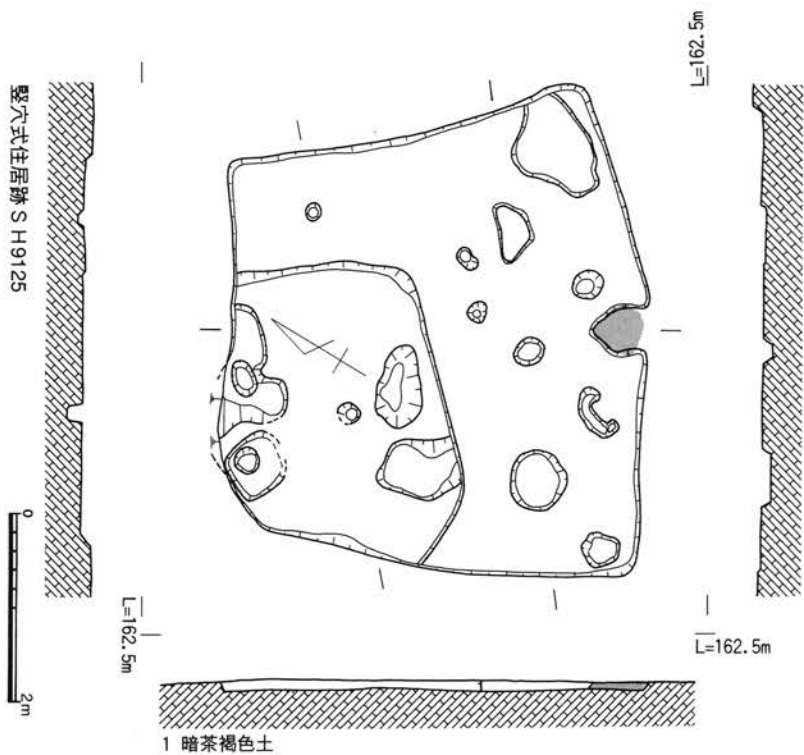
竪穴式住居跡 S H 9001



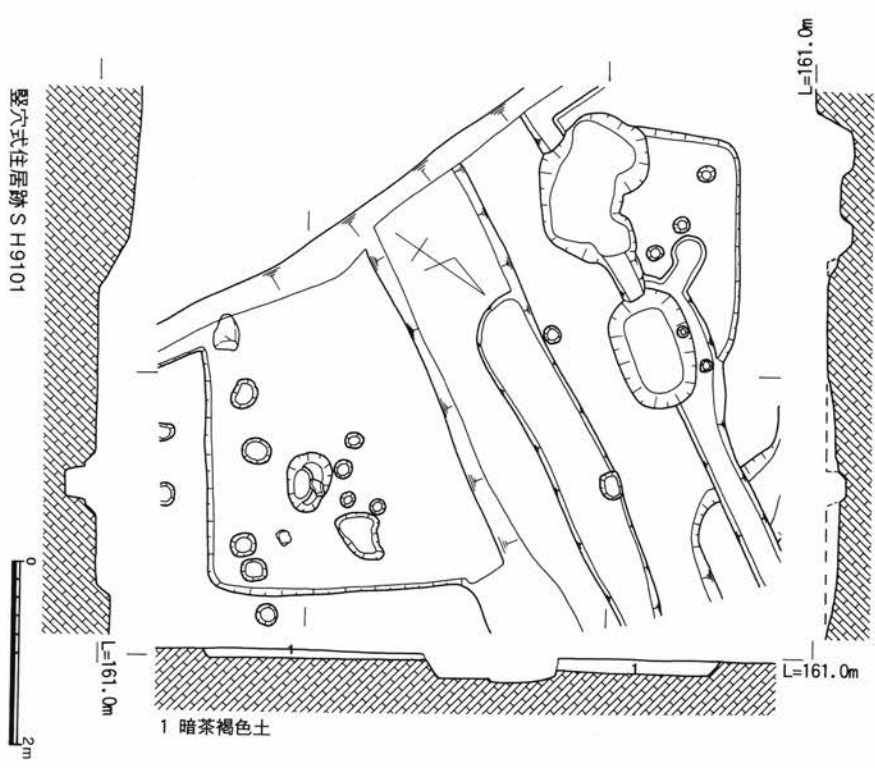
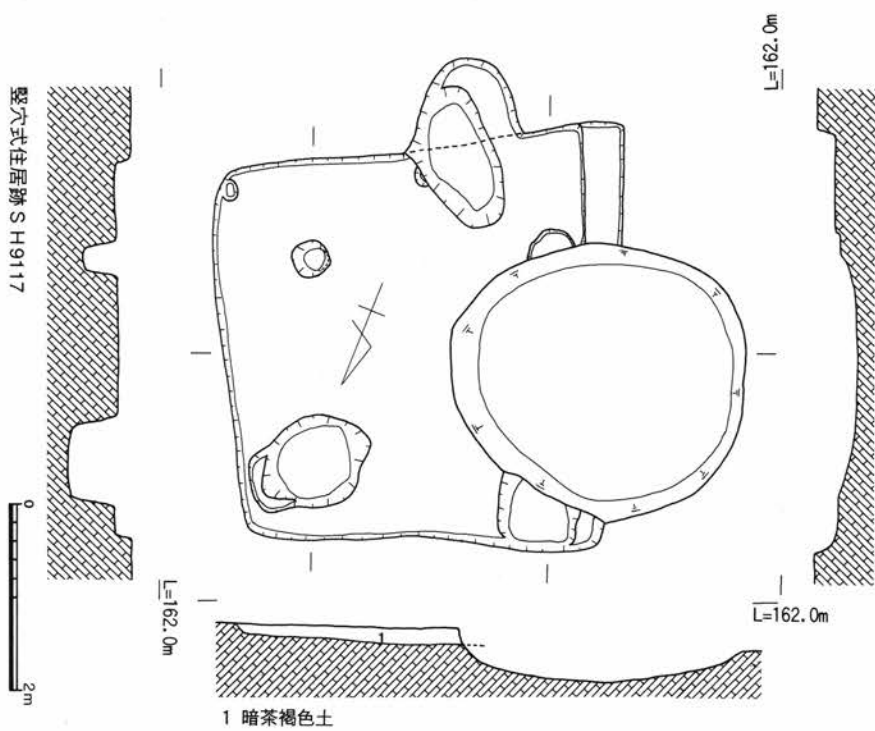
SH9001・SH9104実測図



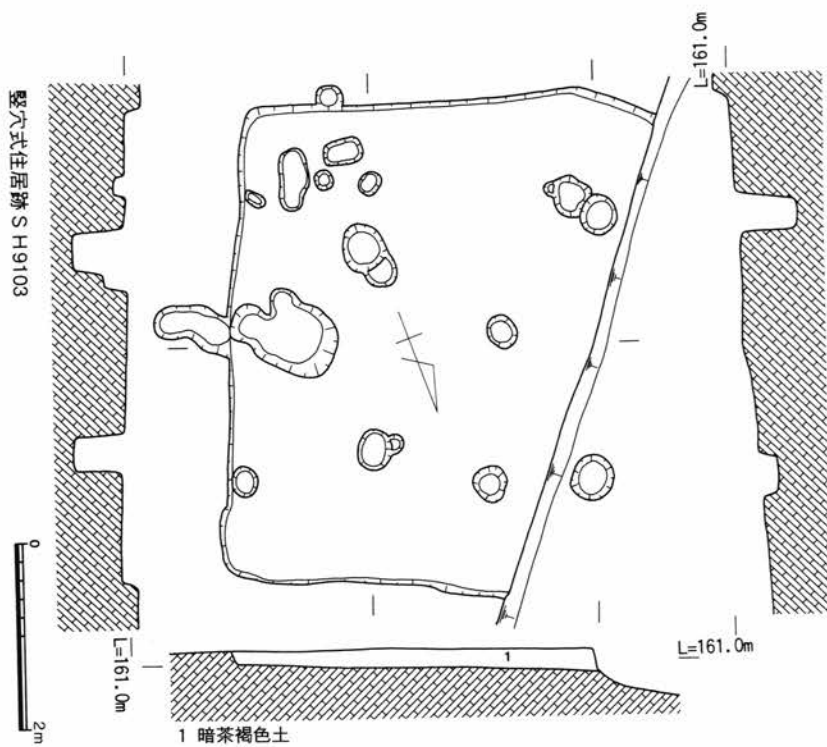
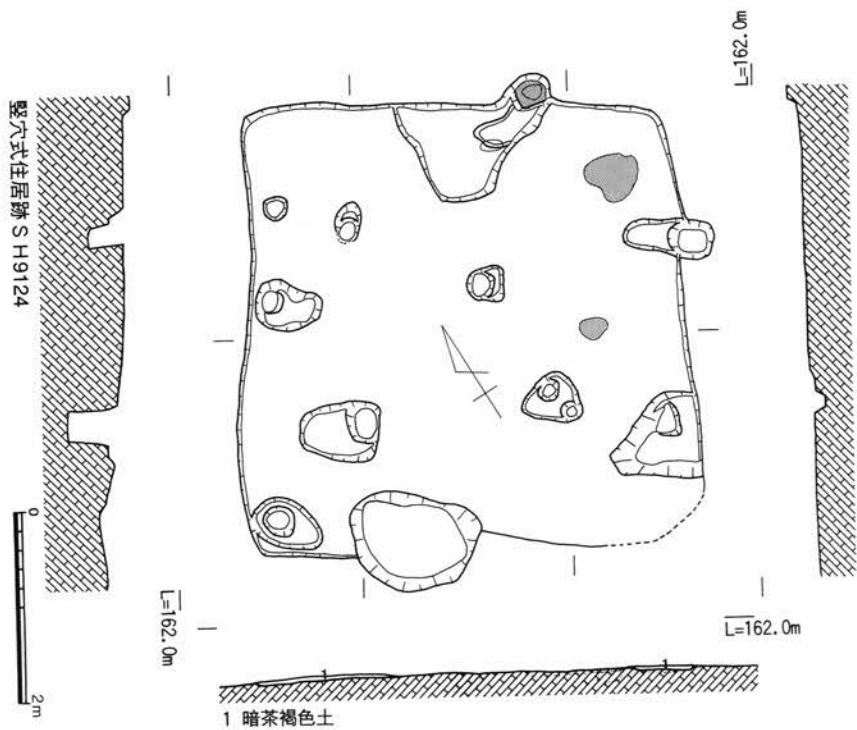
SH9201・SH9202実測図



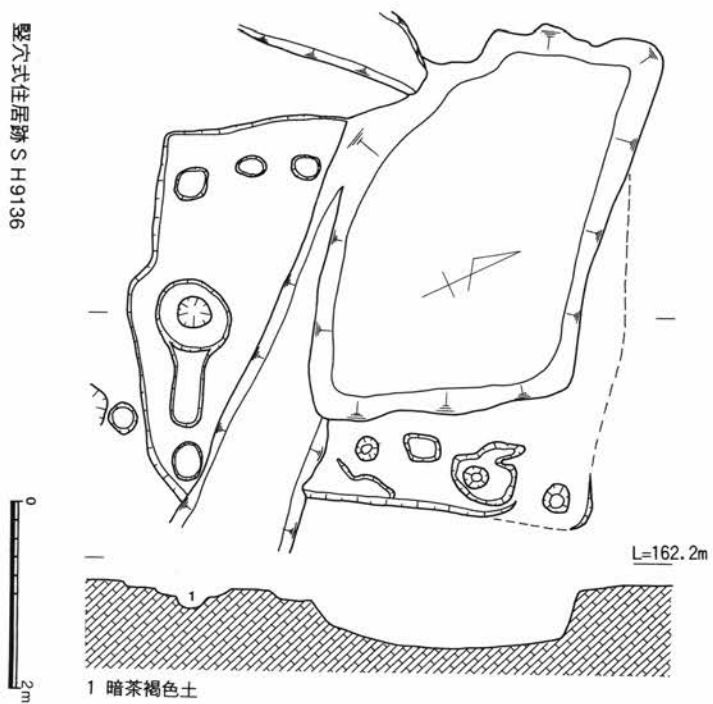
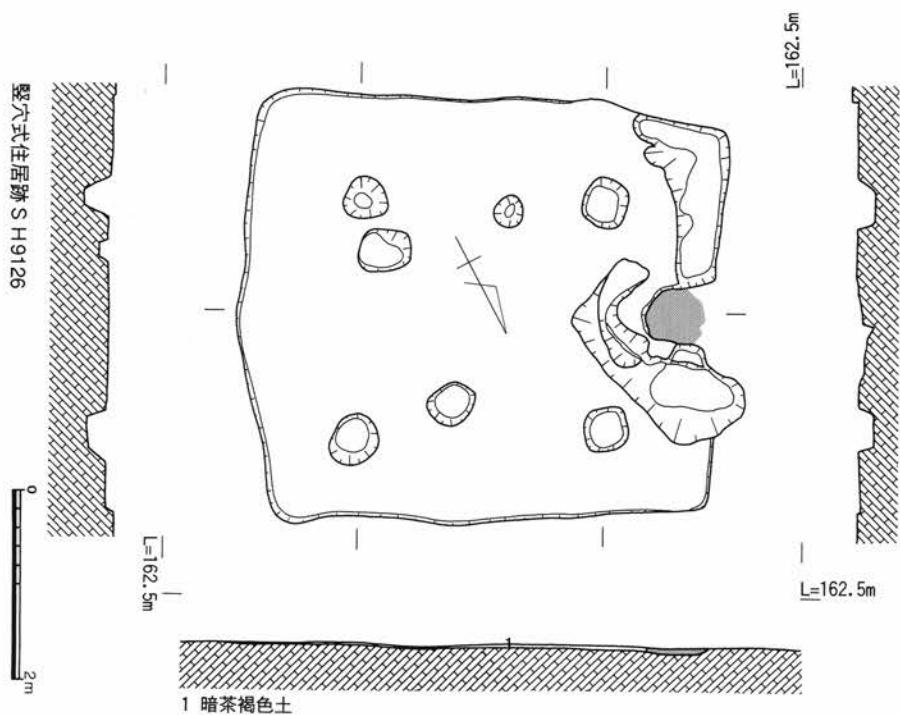
SH9120・SH9125実測図



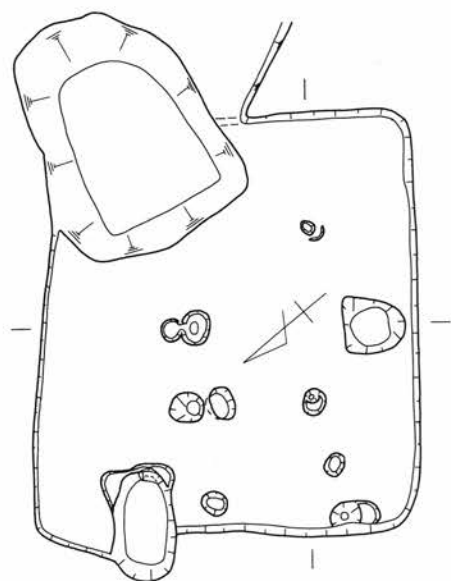
SH9101・SH9117実測図



SH9103・SH9124実測図



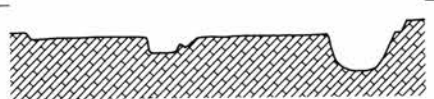
SH9136・SH9126実測図



L=162.5m



暗茶褐色土

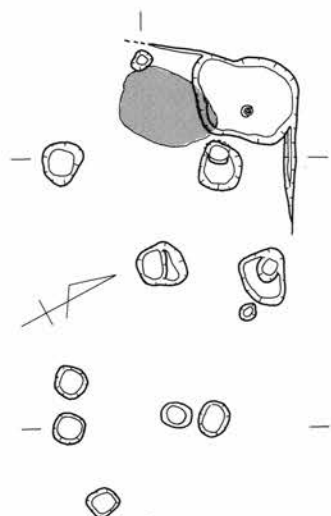


L=162.5m

竪穴式住居跡 S H9131



L=161.0m



L=161.0m

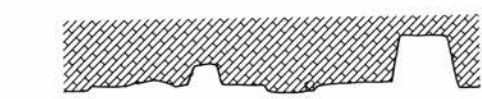


暗茶褐色土

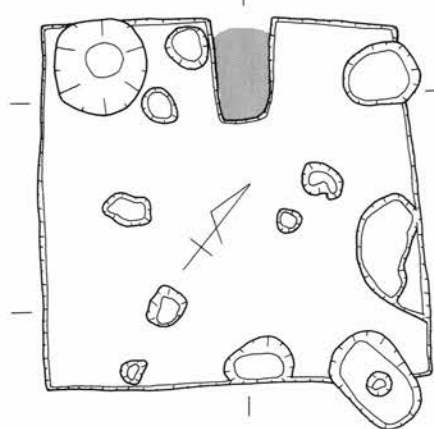


L=161.0m

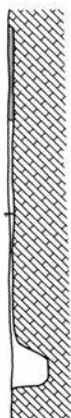
竪穴式住居跡 S H9105



L=162.0m



L=162.0m

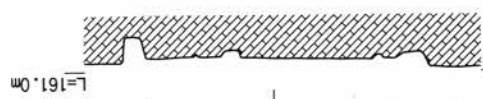


暗茶褐色土

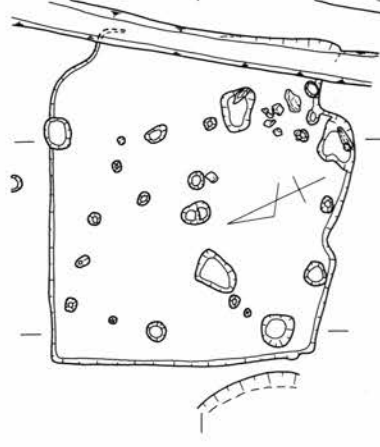


L=162.0m

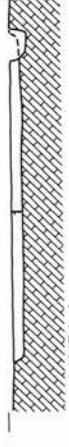
竪穴式住居跡 S H9119



L=161.0m



L=161.0m



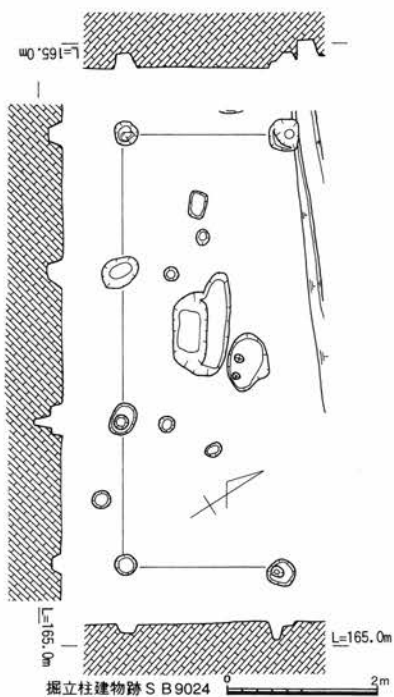
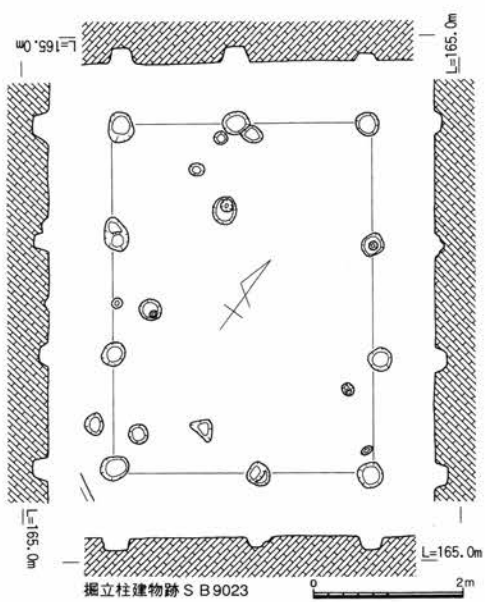
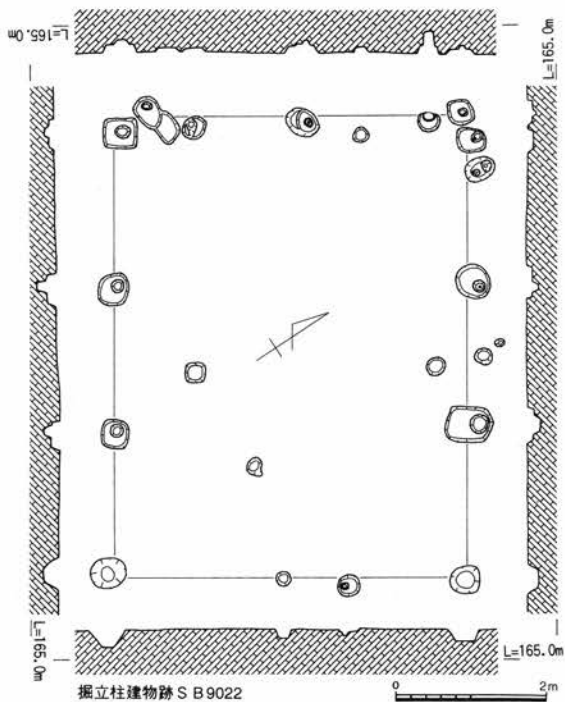
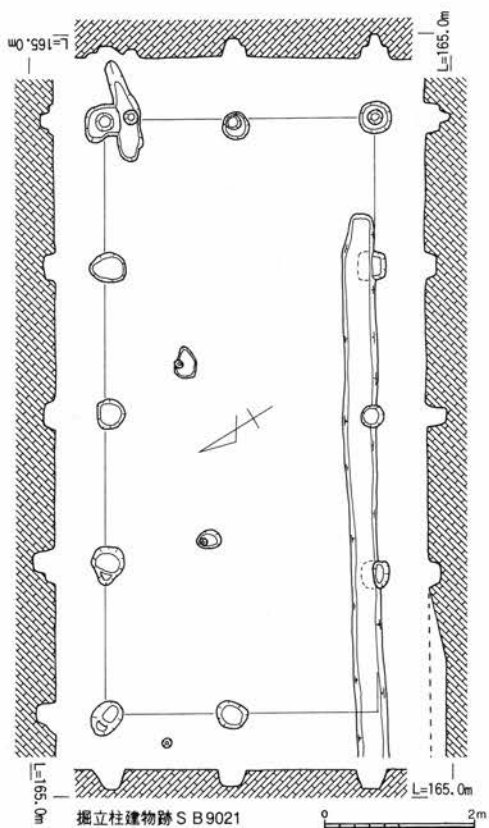
暗茶褐色土



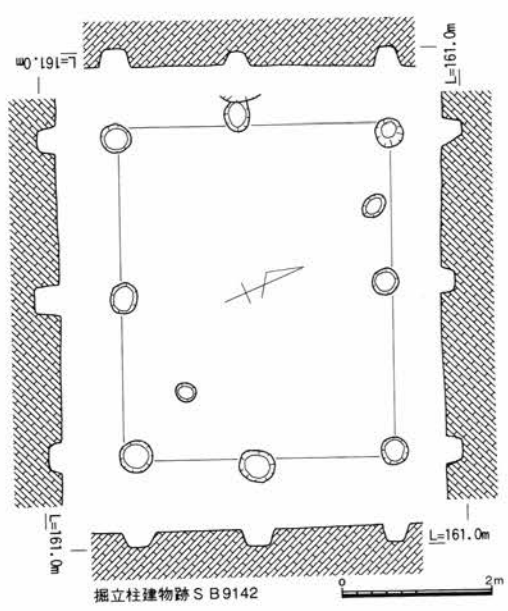
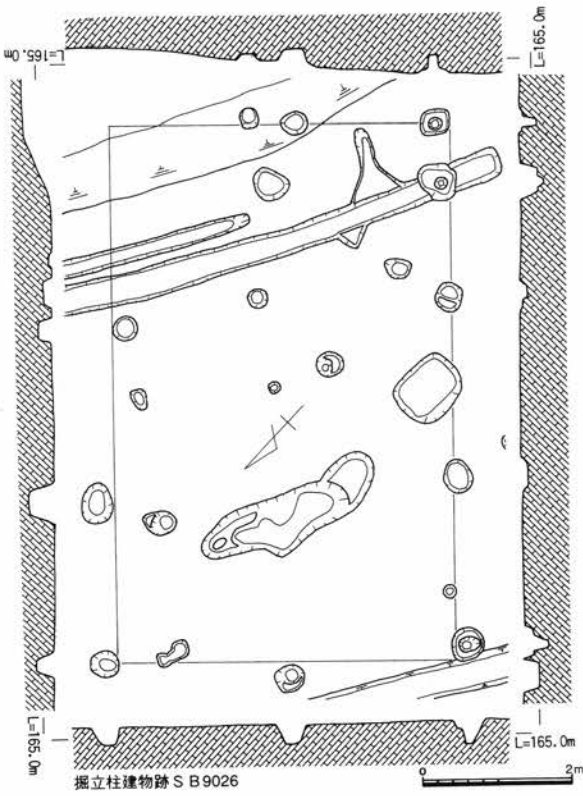
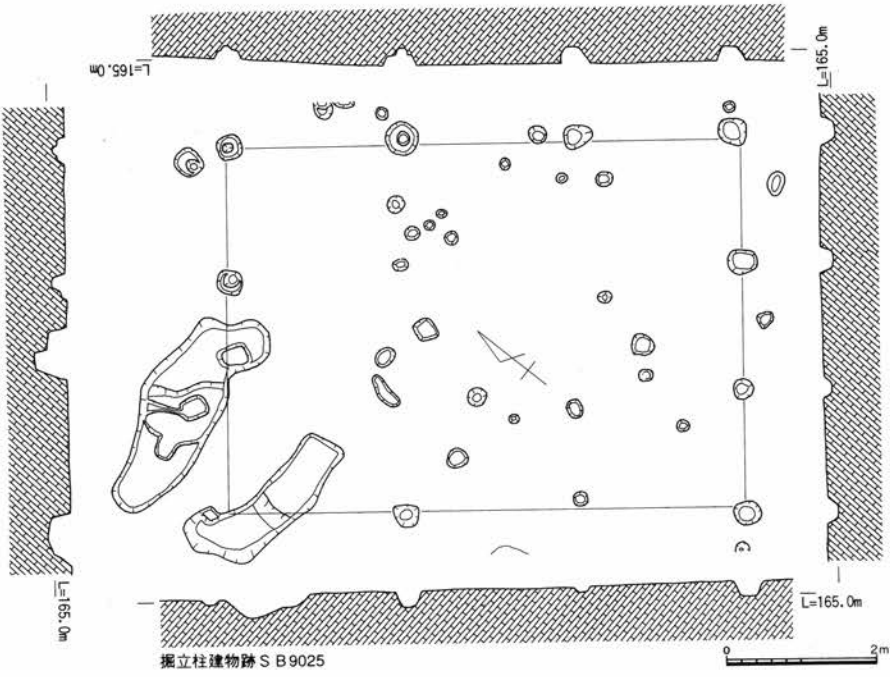
L=161.0m

竪穴式住居跡 S H9102

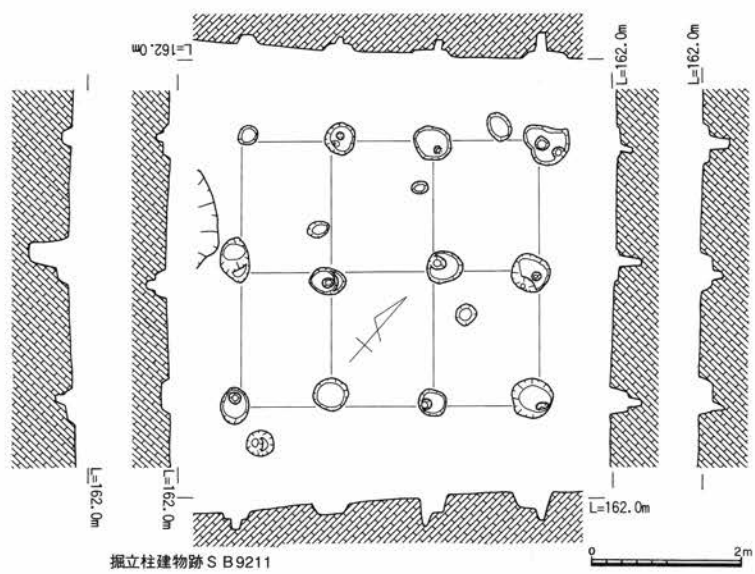
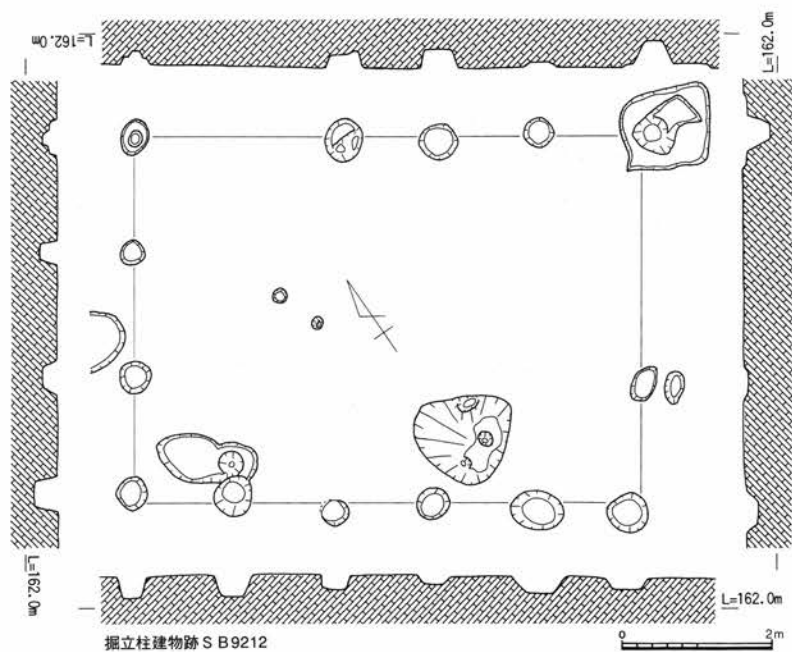




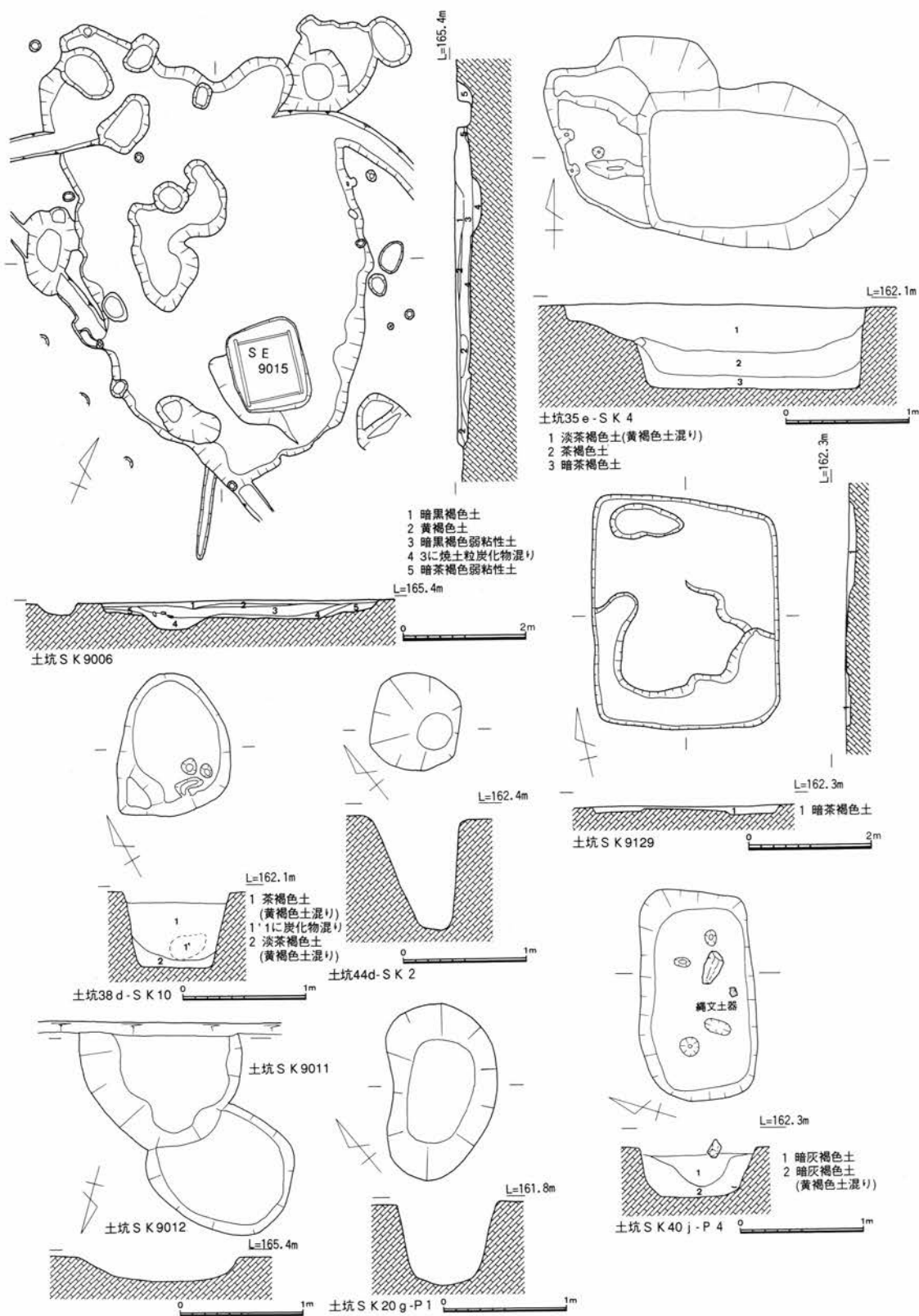
SB9022・SB9021・SB9024・SB9023実測図



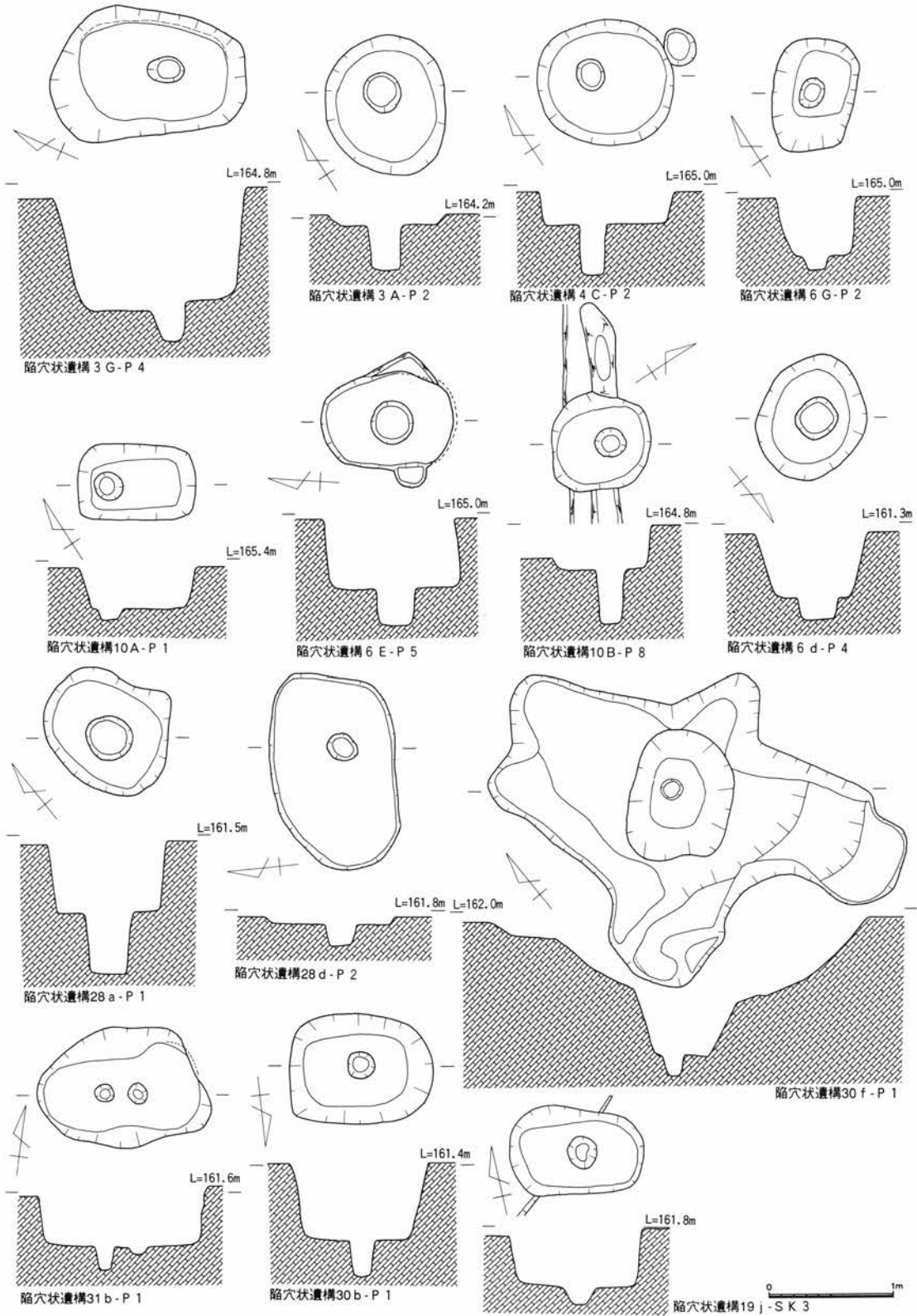
SB9025・SB9142・SB9026実測図



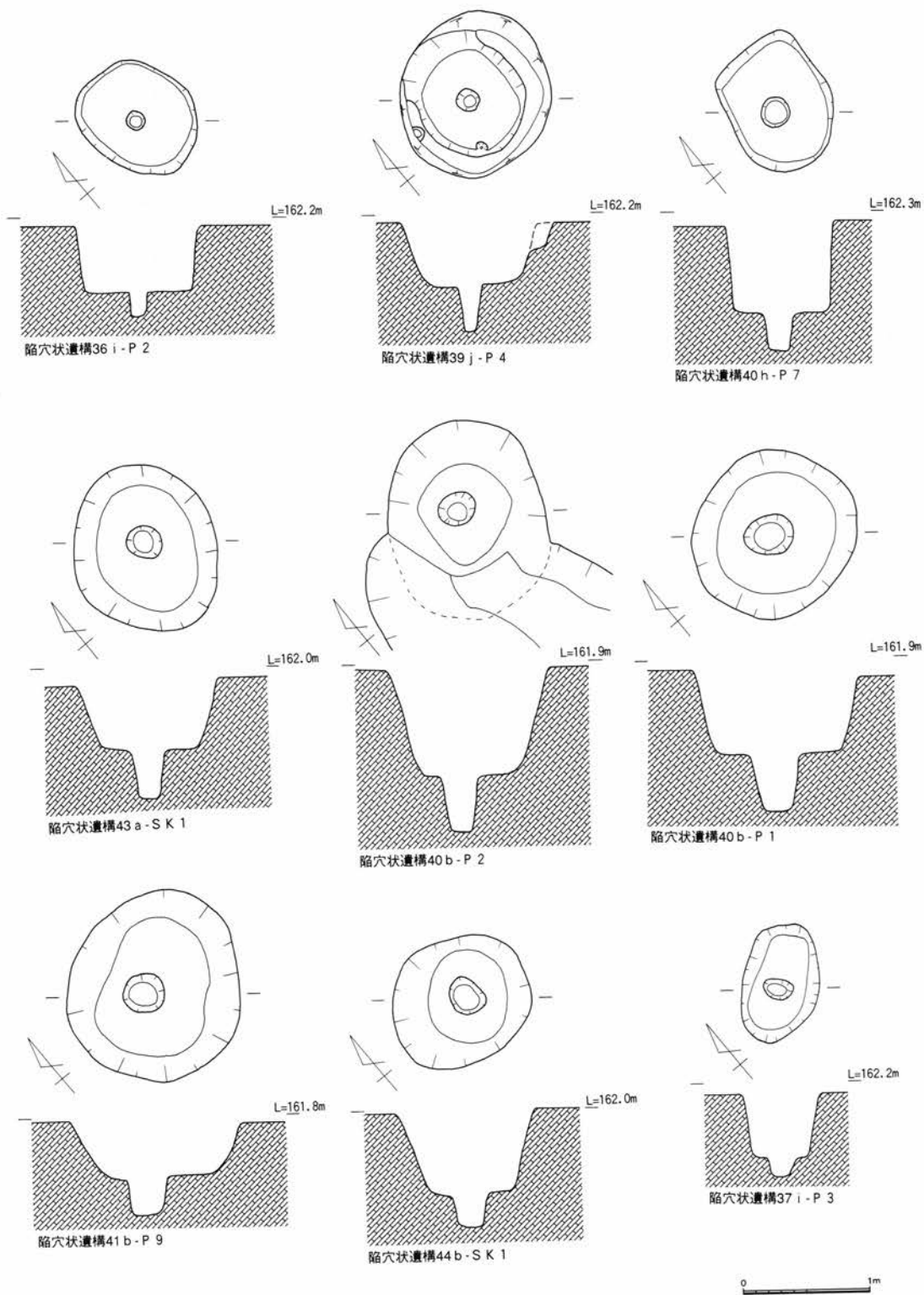
SB9212・SB9211実測図



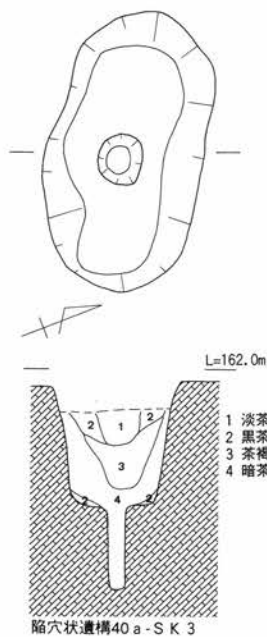
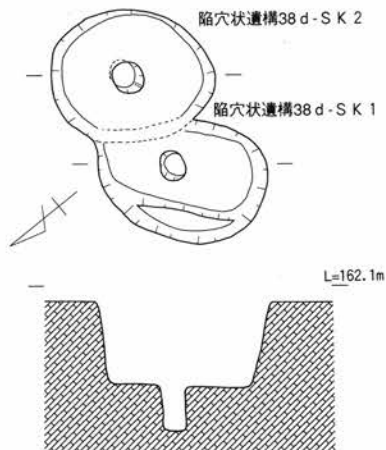
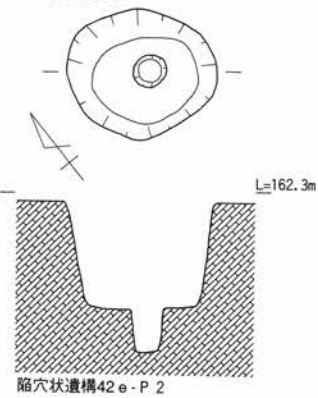
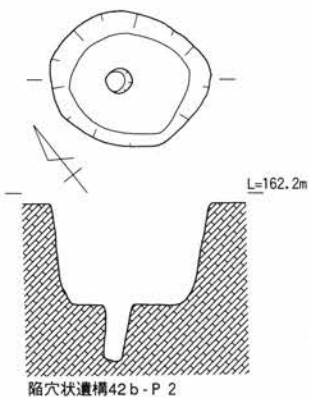
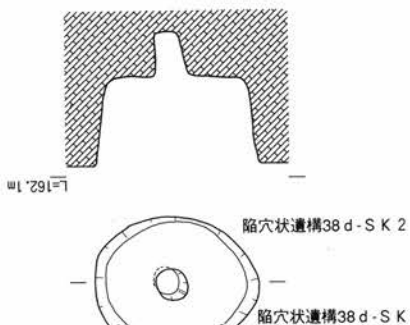
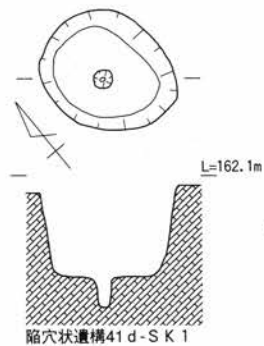
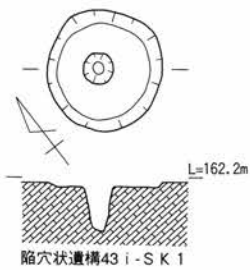
土坑実測図



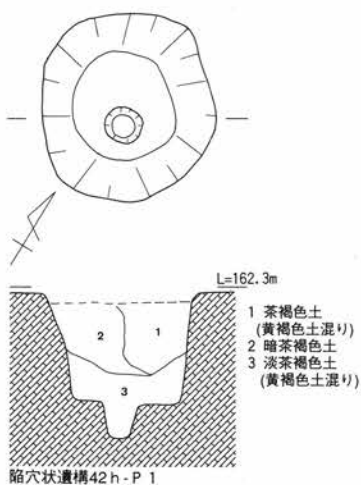
陥穴状遺構実測図 (1)



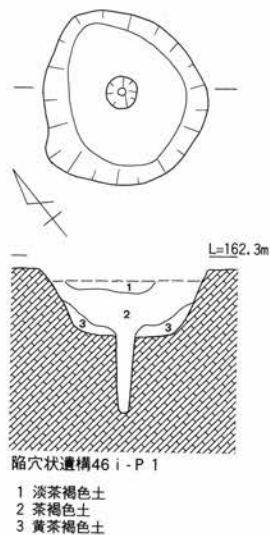
陥穴状遺構実測図 (2)



- 1 淡茶褐色土
- 2 黒茶褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 暗茶褐色土



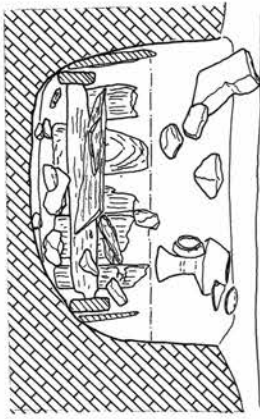
- 1 茶褐色土
(黄褐色土混じり)
- 2 暗茶褐色土
- 3 淡茶褐色土
(黄褐色土混じり)



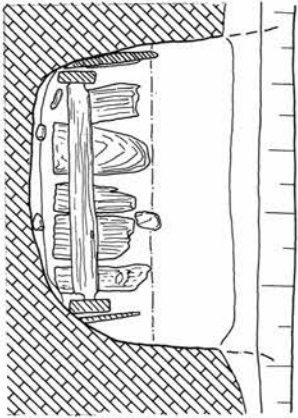
- 1 淡茶褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 黄茶褐色土



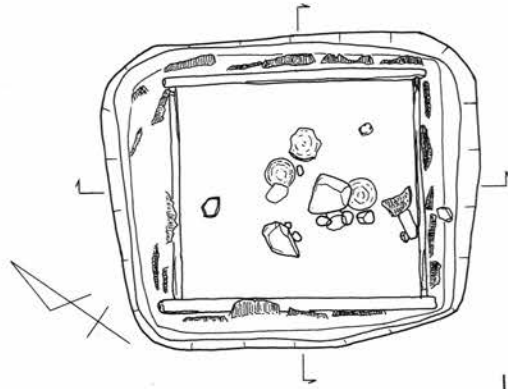
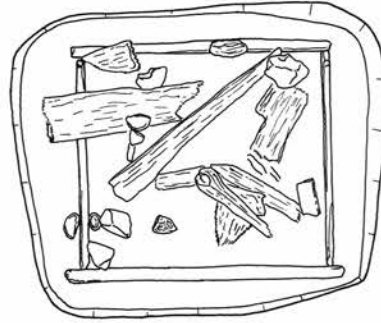
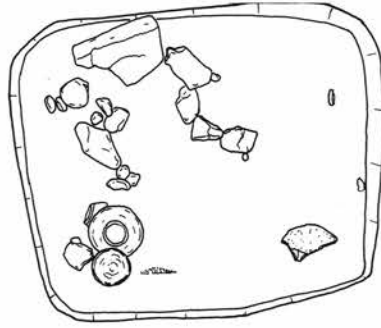
陥穴状遺構実測図 (3)



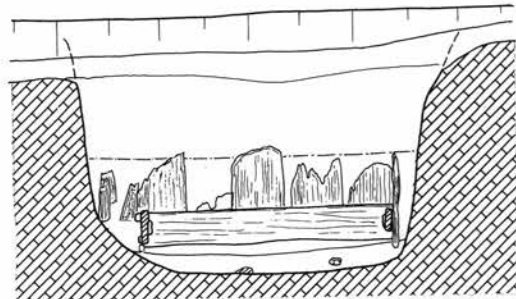
L=165.0m



L=165.0m

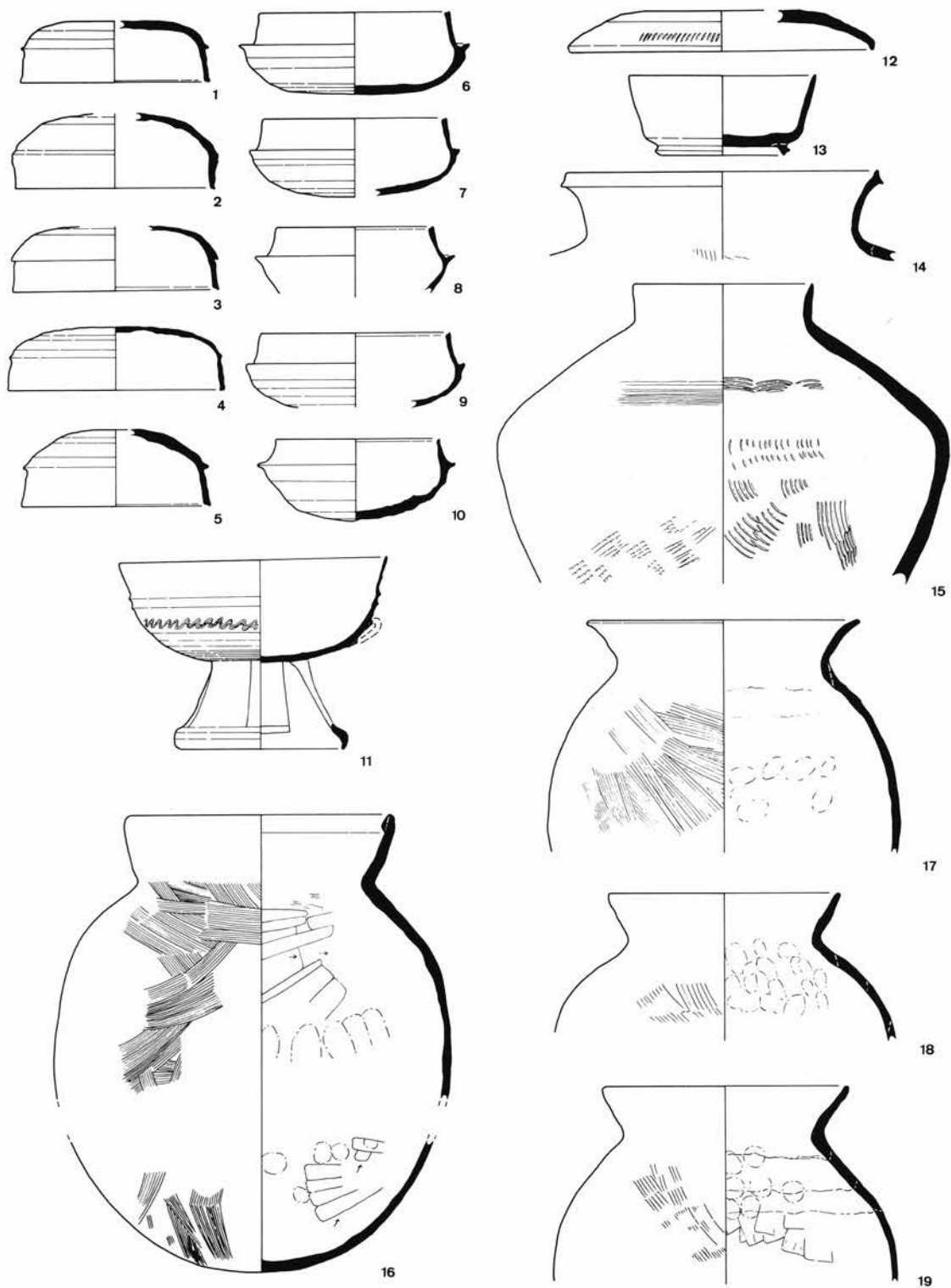


L=165.0m



井戸跡 S E 9015

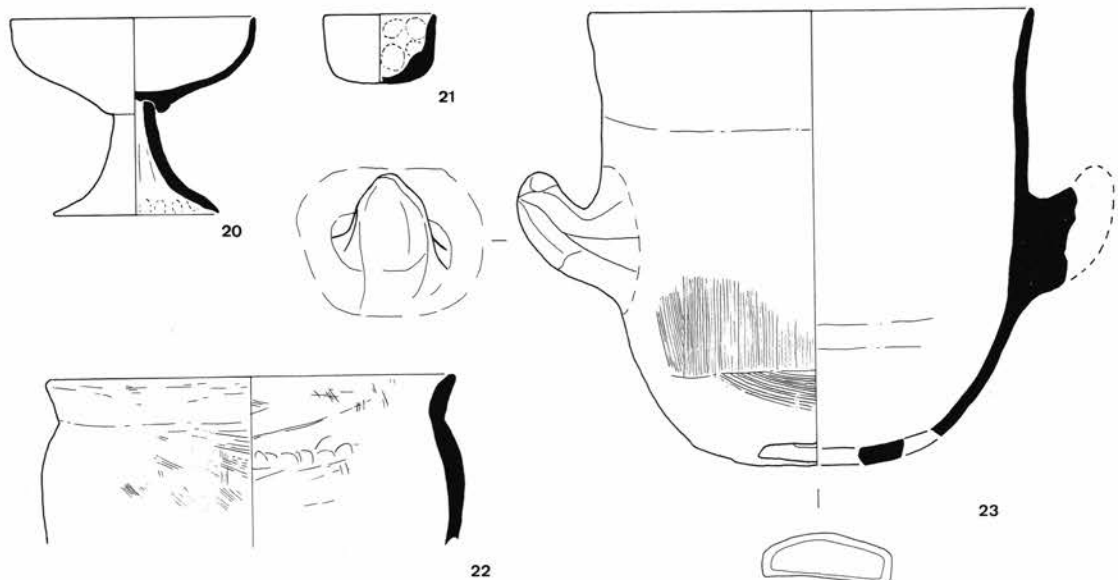
SE9015実測図



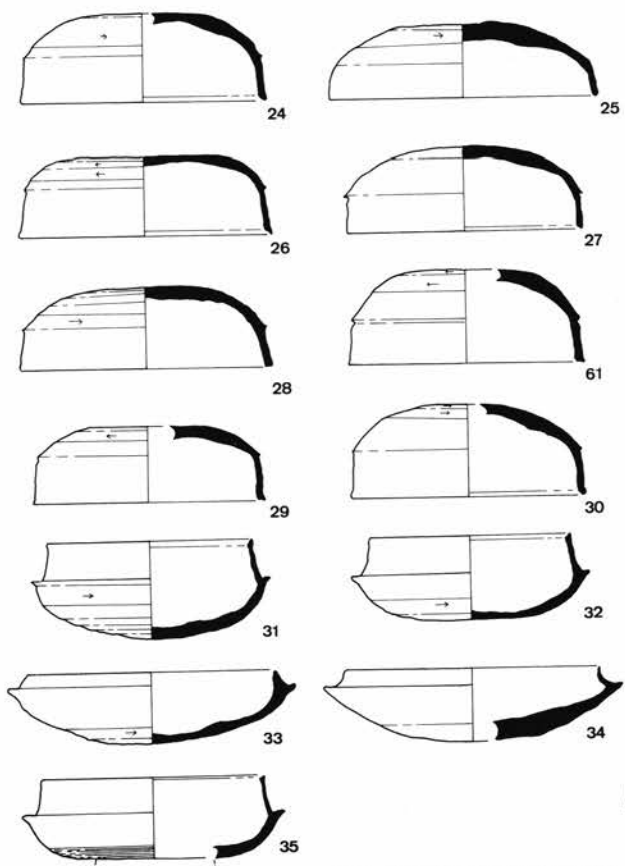
竪穴式住居跡 S H 9003 出土遺物



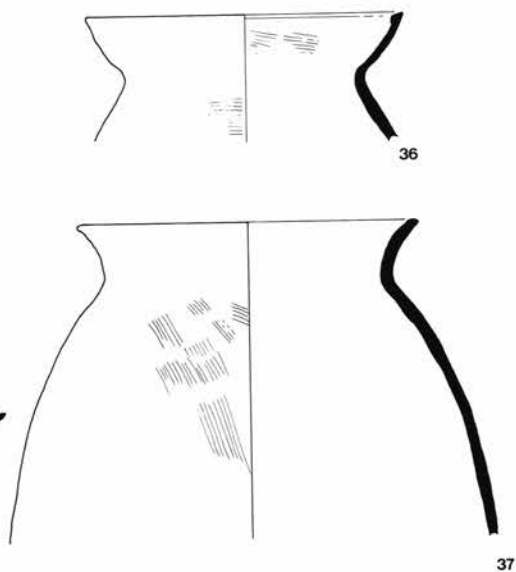
SH9003出土遺物実測図 (1)

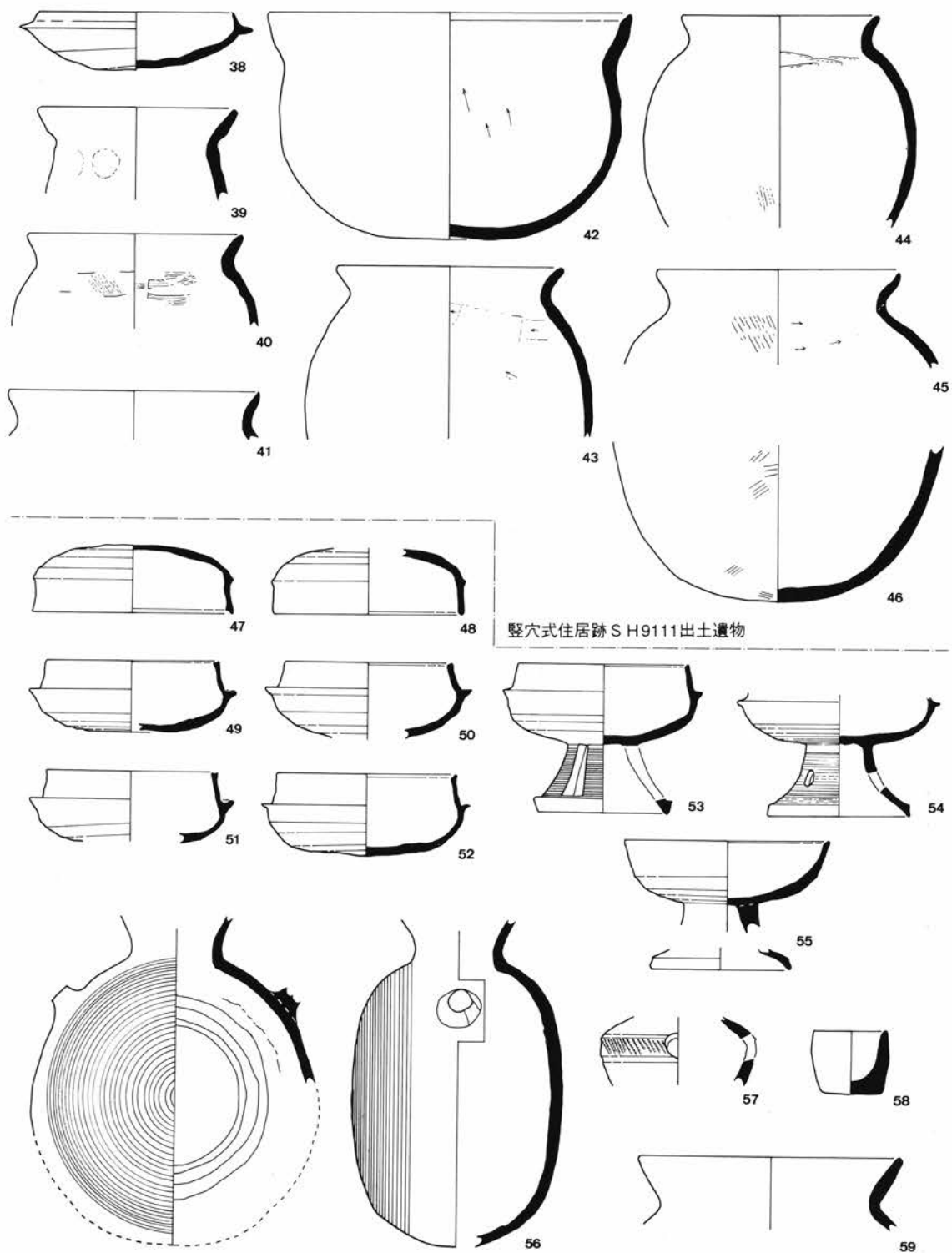


竪穴式住居跡 S H9003出土遺物



竪穴式住居跡 S H9122出土遺物



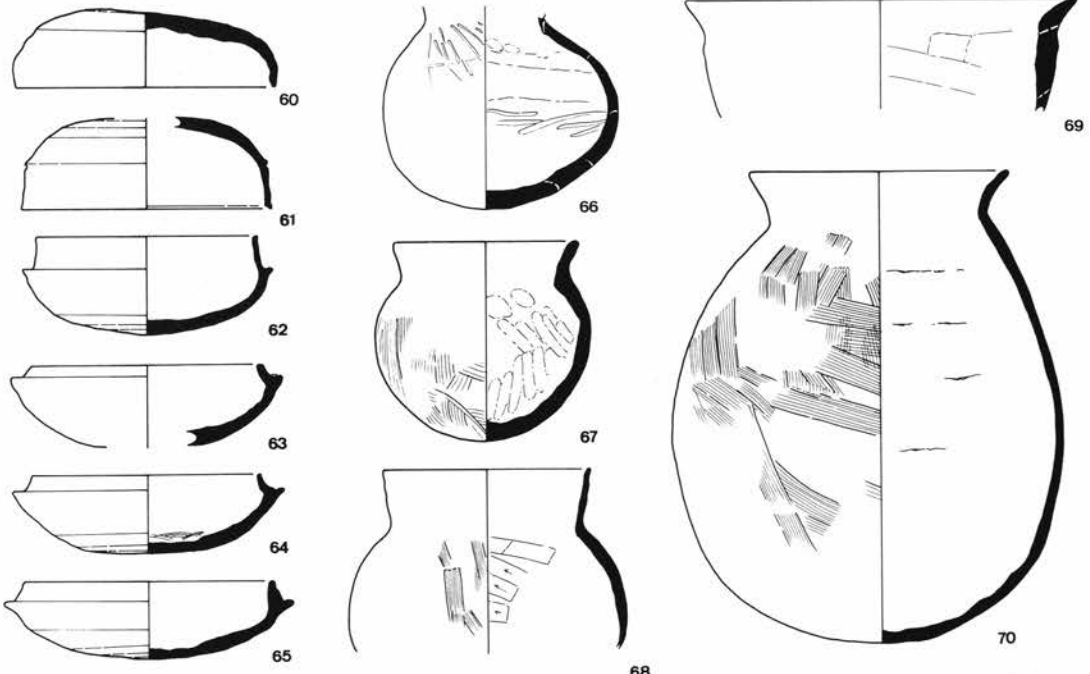


竖穴式住居跡SH9111出土遺物

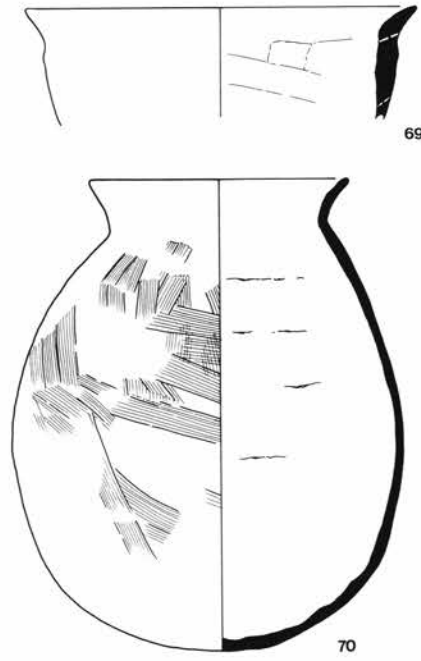
竖穴式住居跡SH9121出土遺物

SH9111・SH9121出土遺物実測図

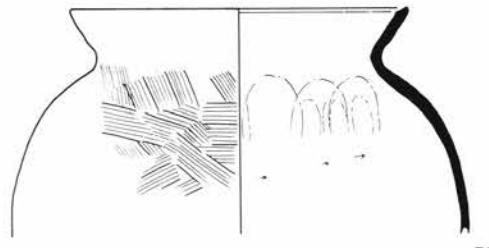
0 10cm



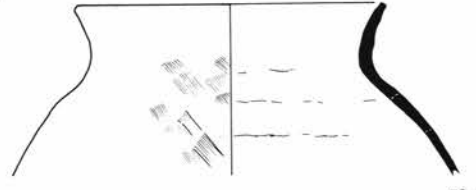
69



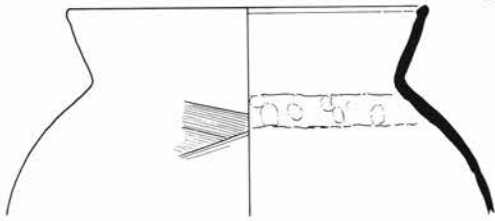
70



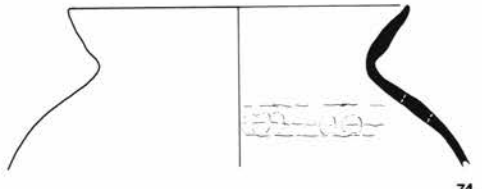
71



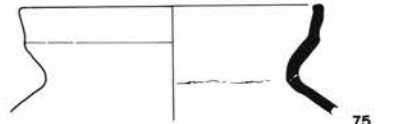
73



72



74

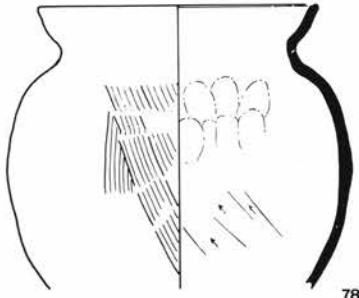


75

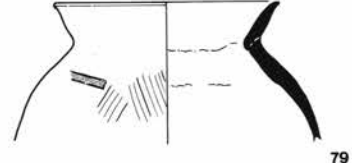
豎穴式住居跡 S H9128出土遺物



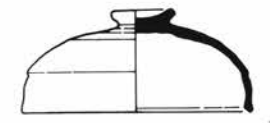
76



78

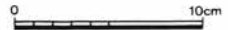


79

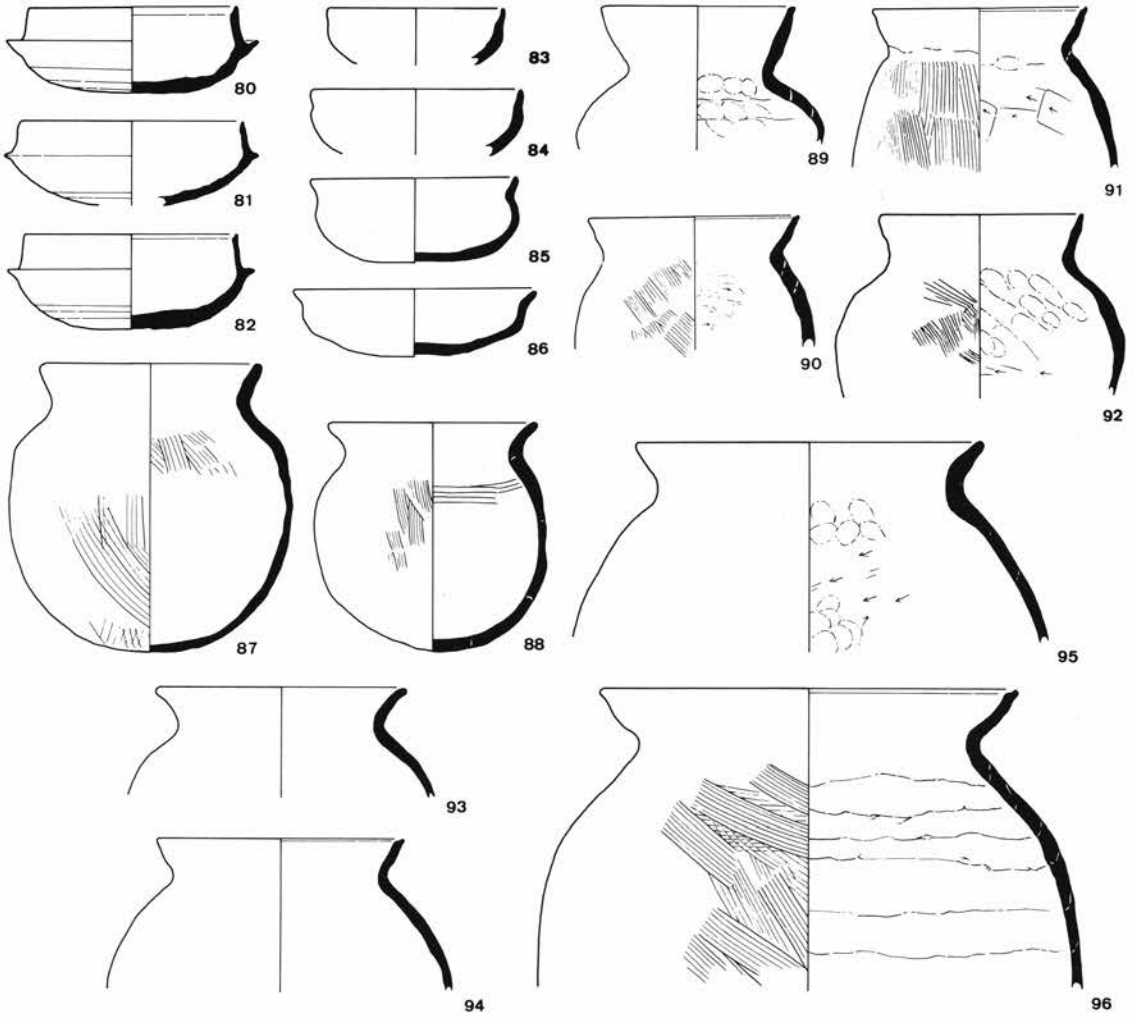


77

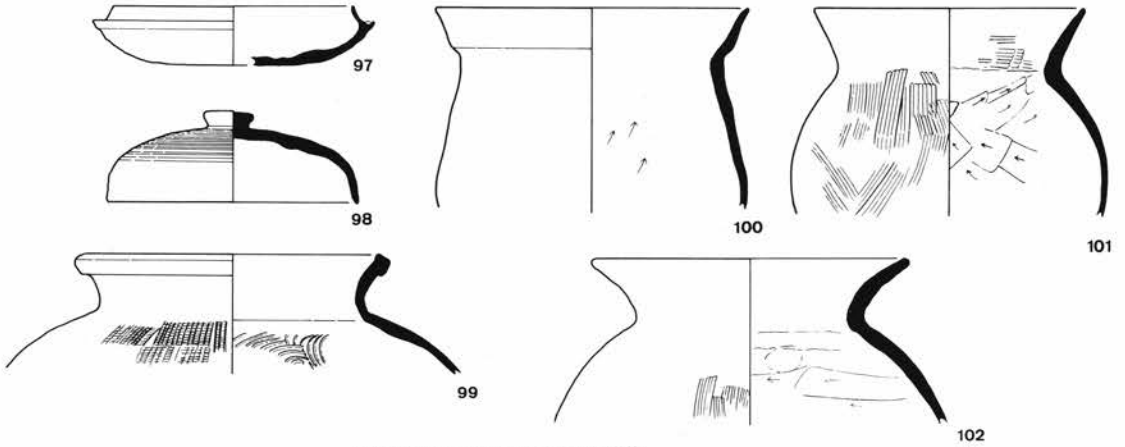
豎穴式住居跡 S H9113出土遺物



SH9128・SH9113出土遺物実測図

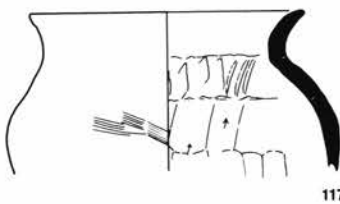
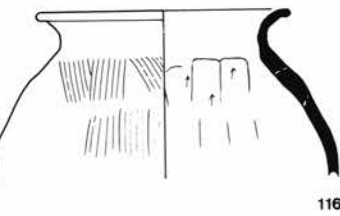
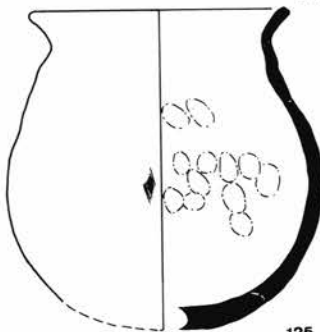
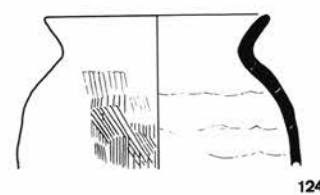
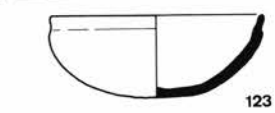
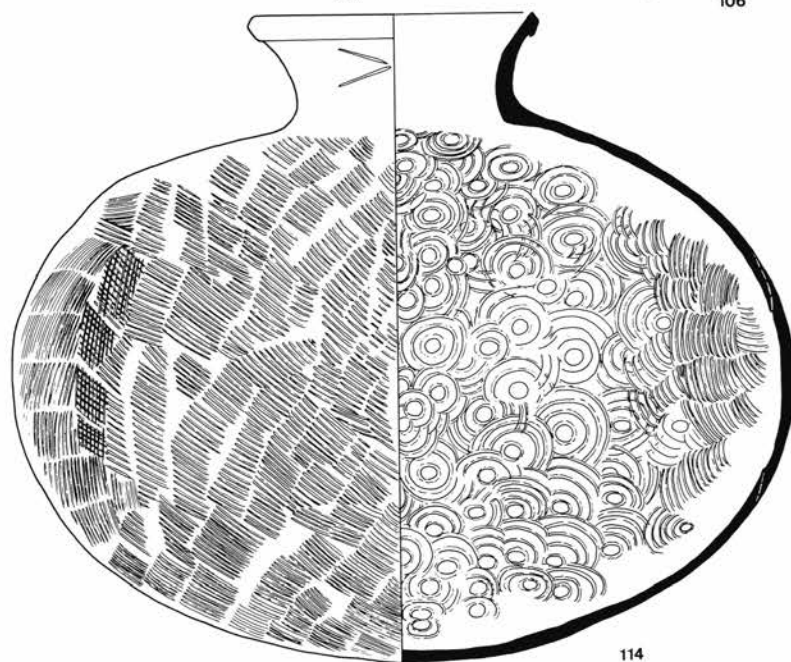
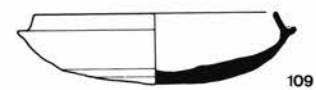
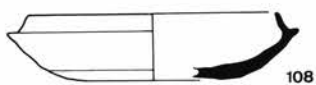
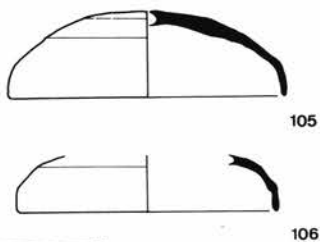
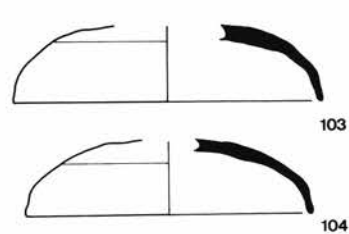


竪穴式住居跡 S H9112出土遺物



竪穴式住居跡 S H9116出土遺物

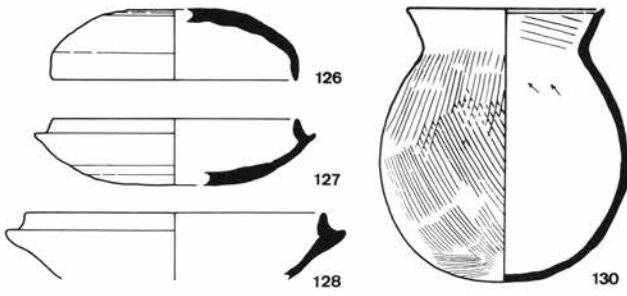




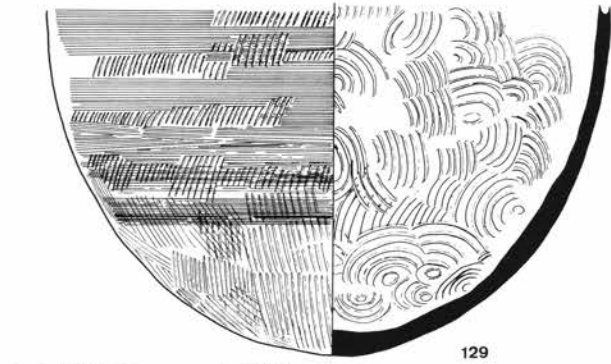
竪穴式住居跡 S H9118 出土遺物

竪穴式住居跡 S H9203 出土遺物

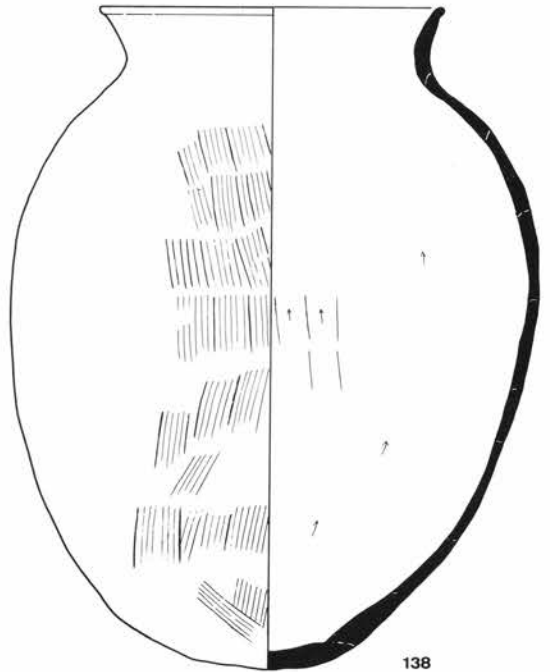
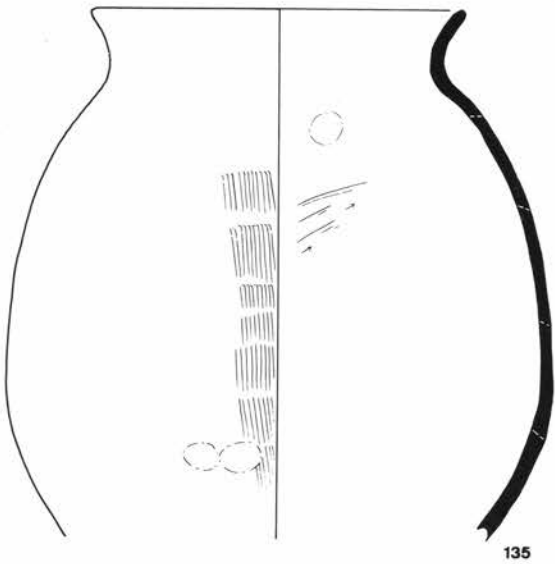
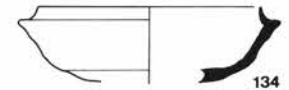
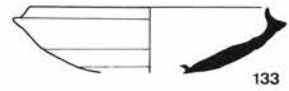




竪穴式住居跡 S H9205出土遺物

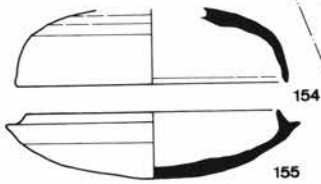
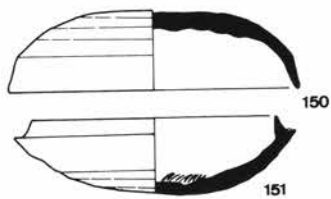
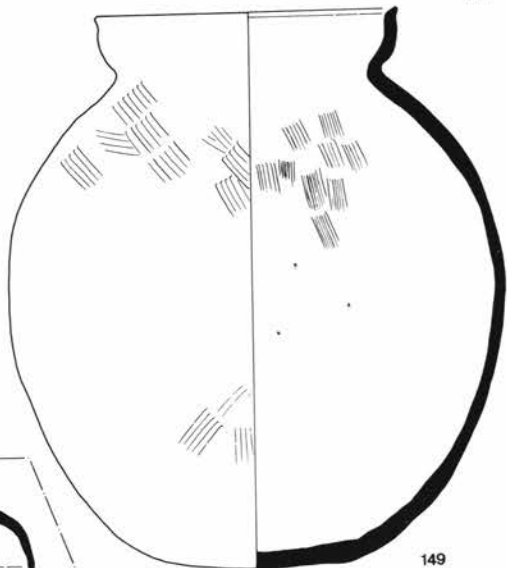
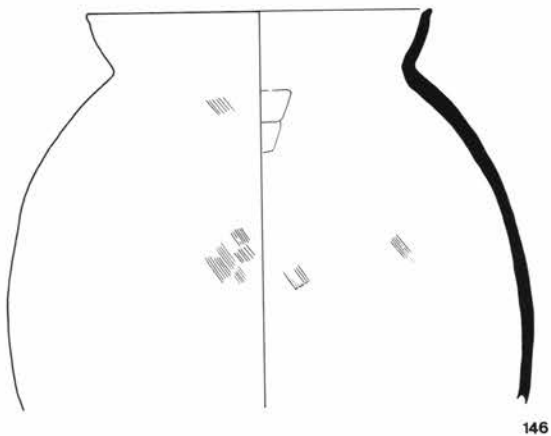
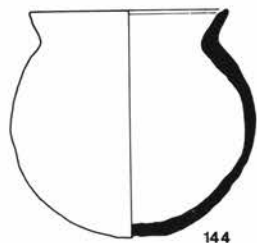
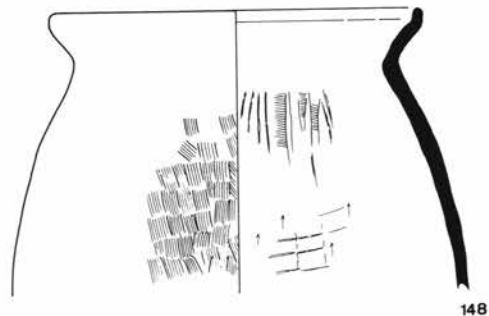
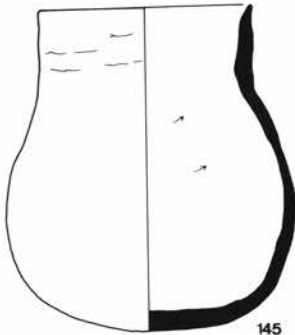
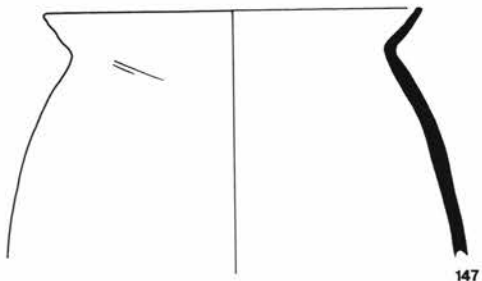
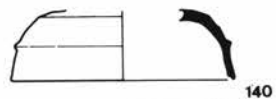
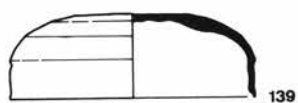


竪穴式住居跡 S H9201出土遺物

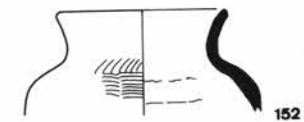
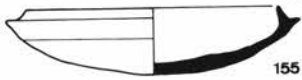


竪穴式住居跡 S H9204出土遺物



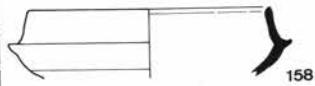


豎穴式住居跡 S H9140 出土遺物



豎穴式住居跡 S H9117 出土遺物

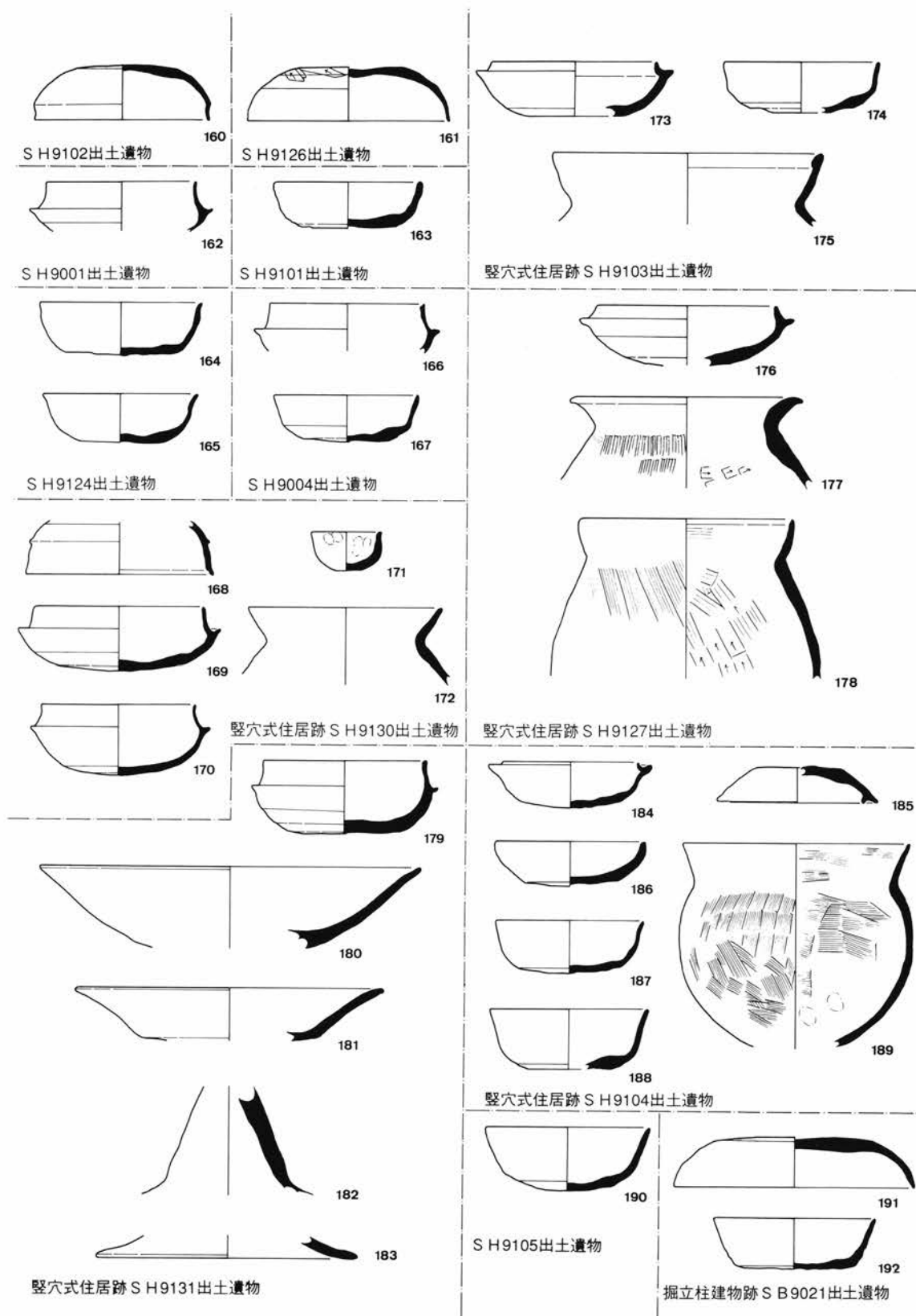
豎穴式住居跡 S H9141 出土遺物



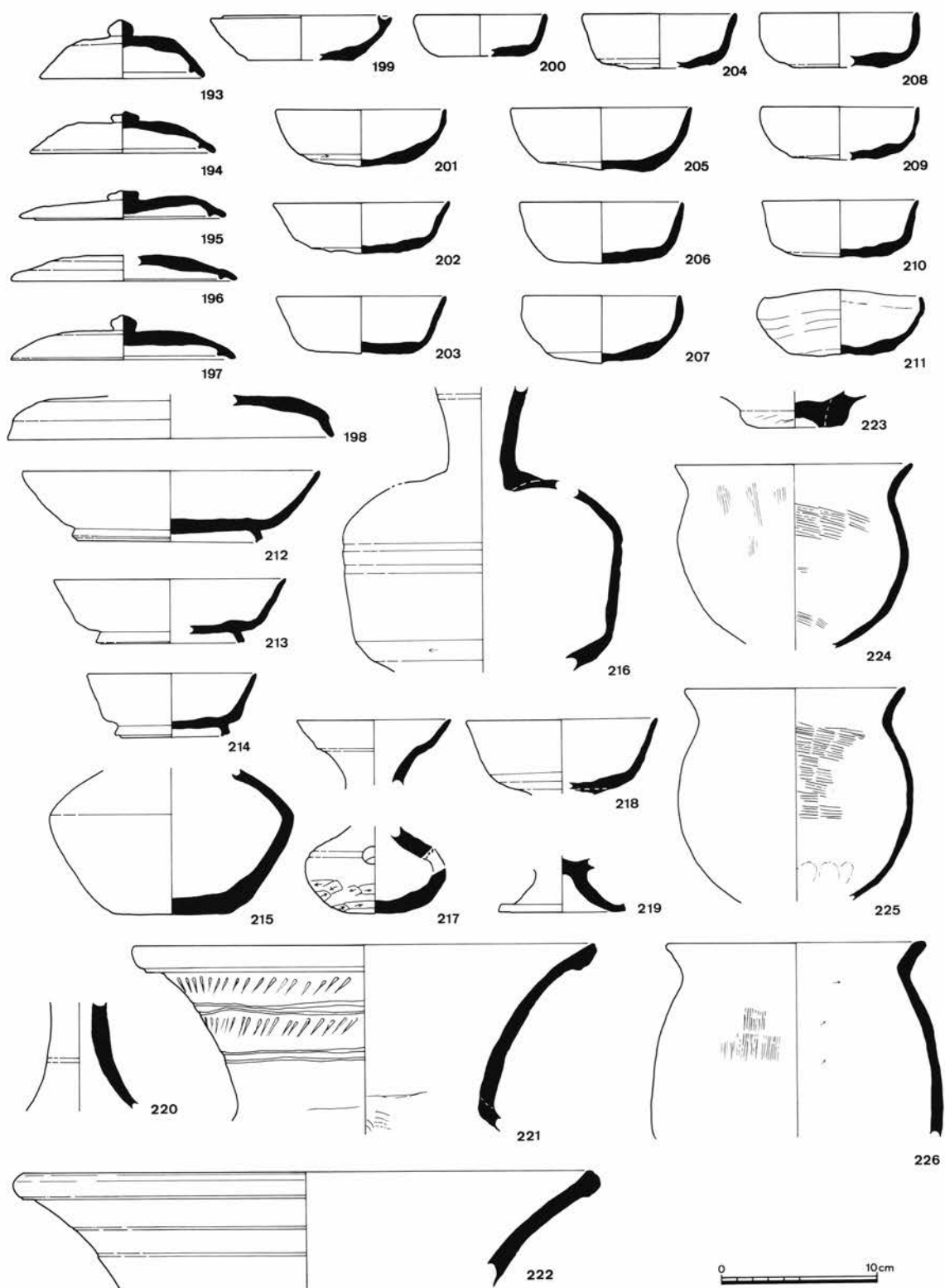
豎穴式住居跡 S H9115 出土遺物



豎穴式住居跡出土遺物実測図 (1)

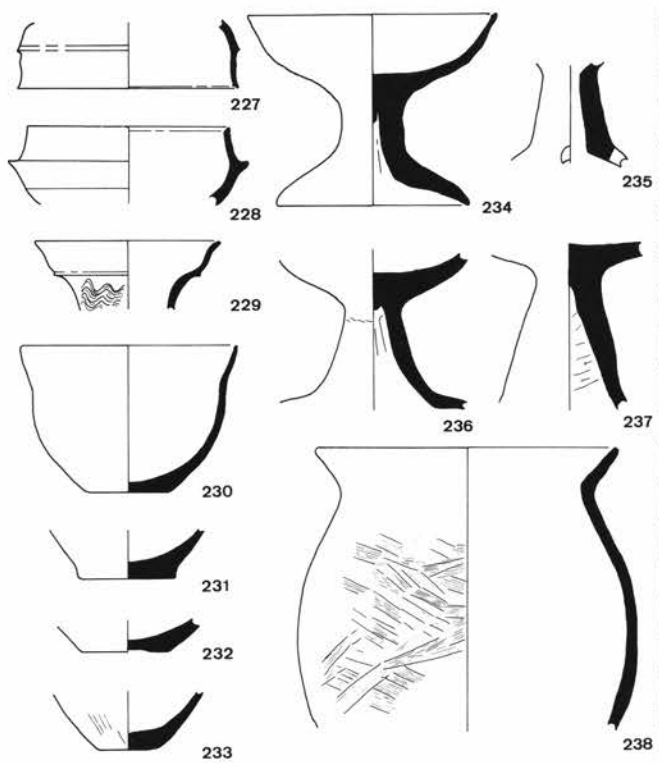


0 10cm

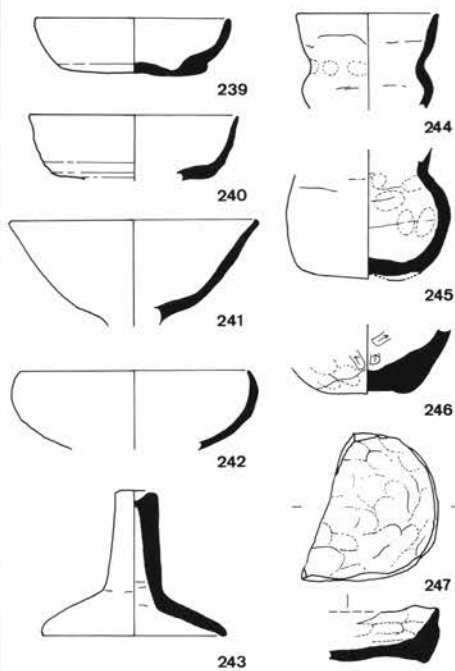


土坑 S K 9006 出土遺物

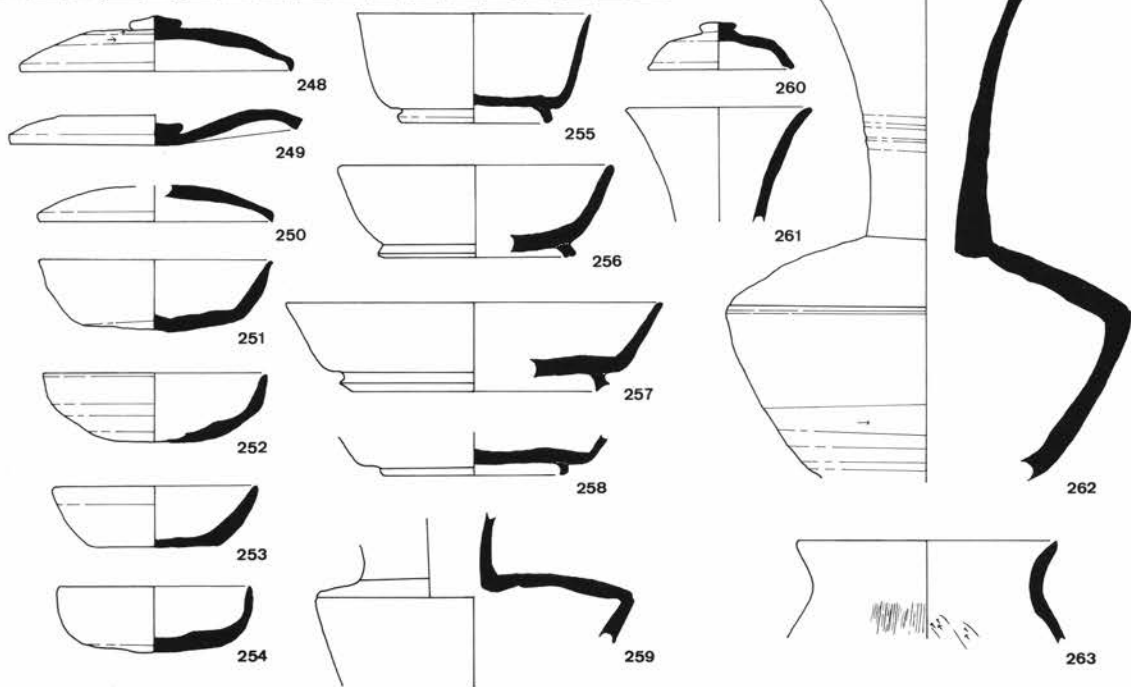
SK9006出土遺物实测图



竪穴式住居跡 S H9002出土遺物

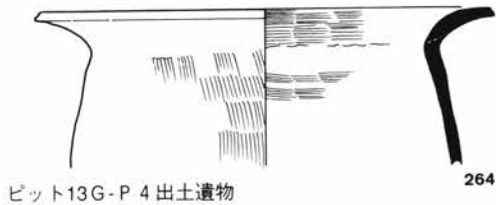


竪穴式住居跡 S H9106出土遺物



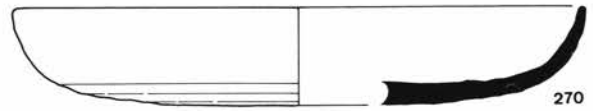
井戸跡 S E 9015出土遺物



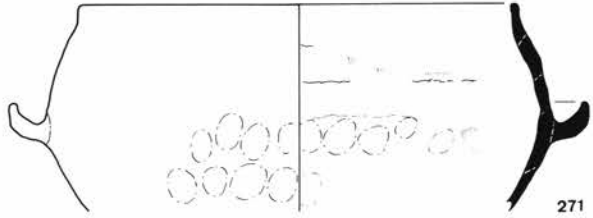


ビット13G-P 4 出土遺物

264



270



271

土坑 S K 9011 出土遺物



265

S K 9139 出土遺物



272



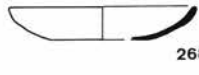
273

土坑 S K 9137 出土遺物



266

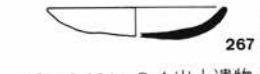
ビット18 I - P 5 出土遺物



268



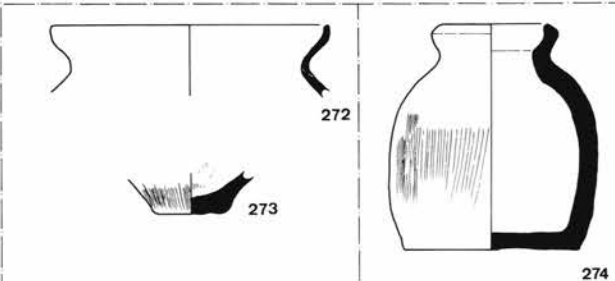
269



267

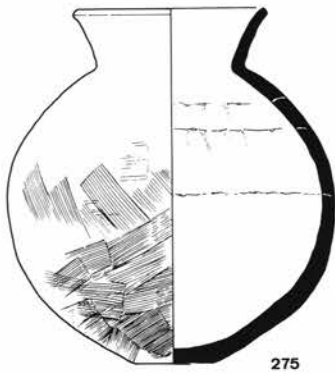
ビット22h-P 4 出土遺物

ビット22g-P 2 出土遺物



274

21 トレンチ 出土遺物



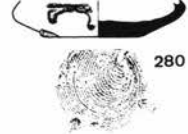
275



276



278



280



277



279



281



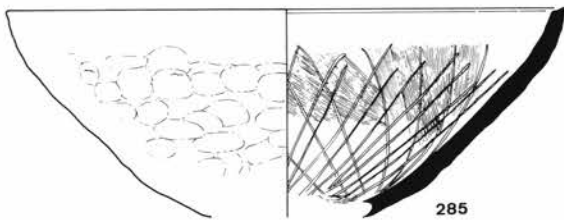
283



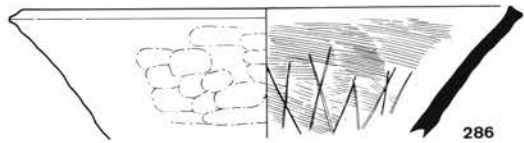
282



284



285



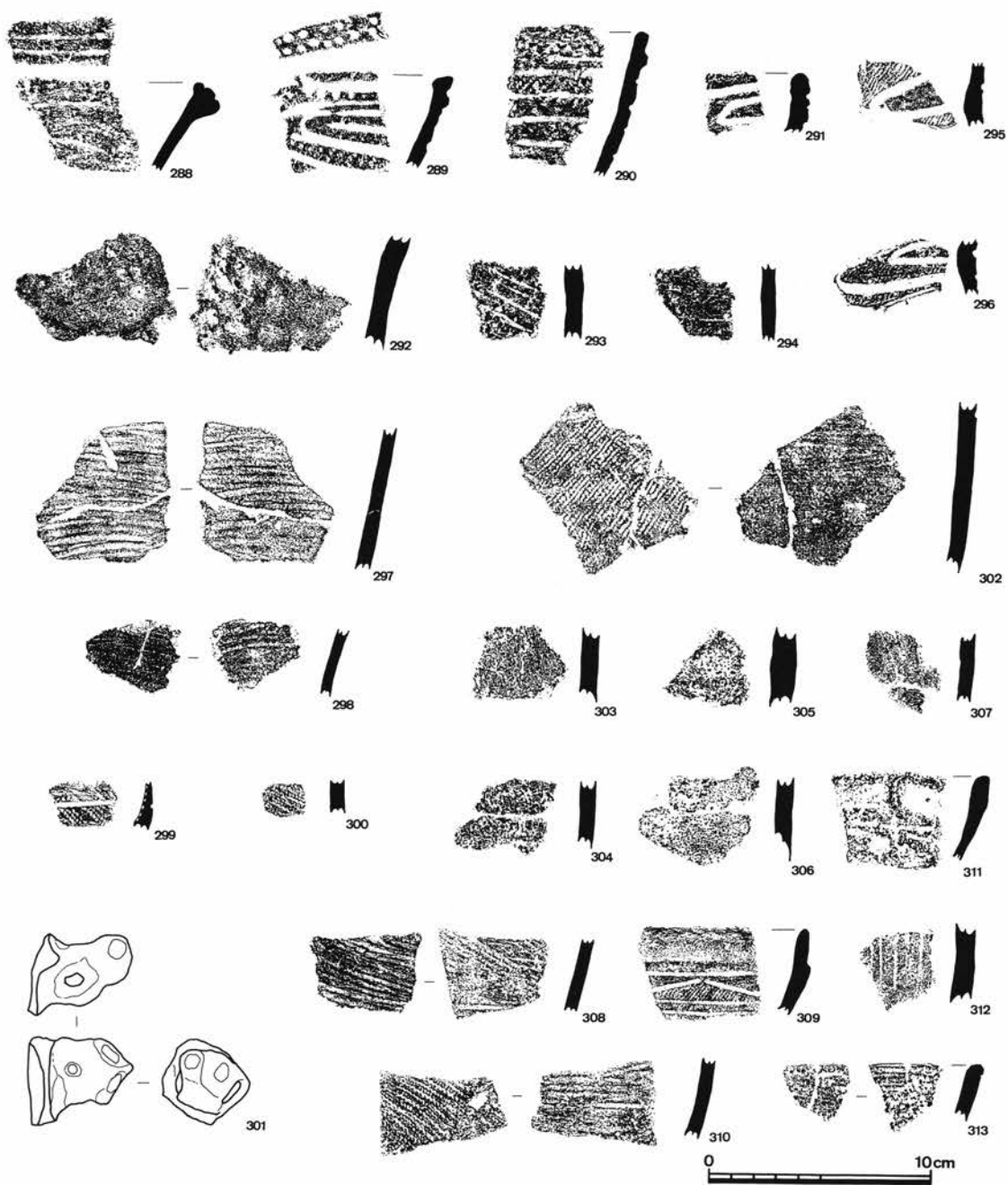
286



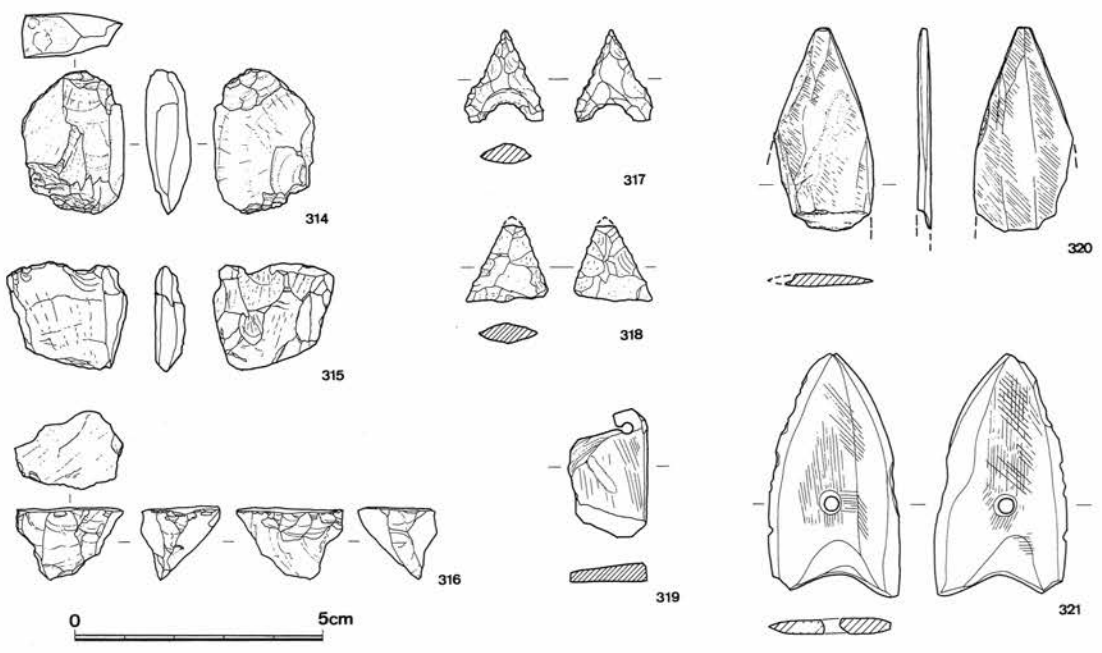
287

22 トレンチ 出土遺物

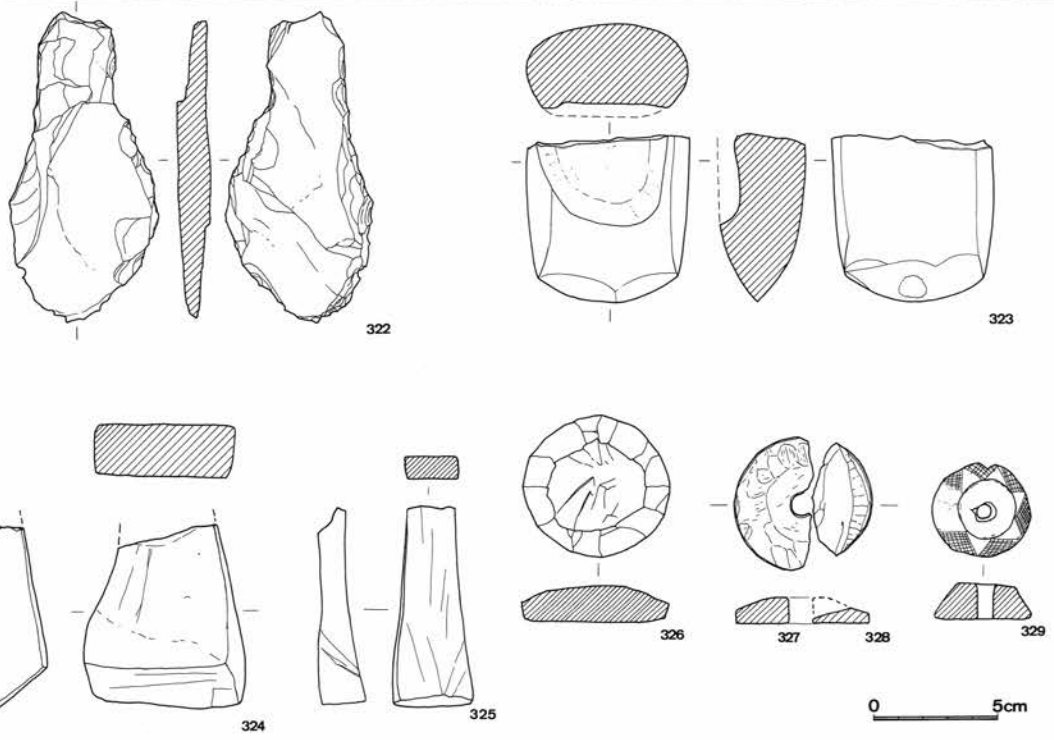




繩文土器拓影

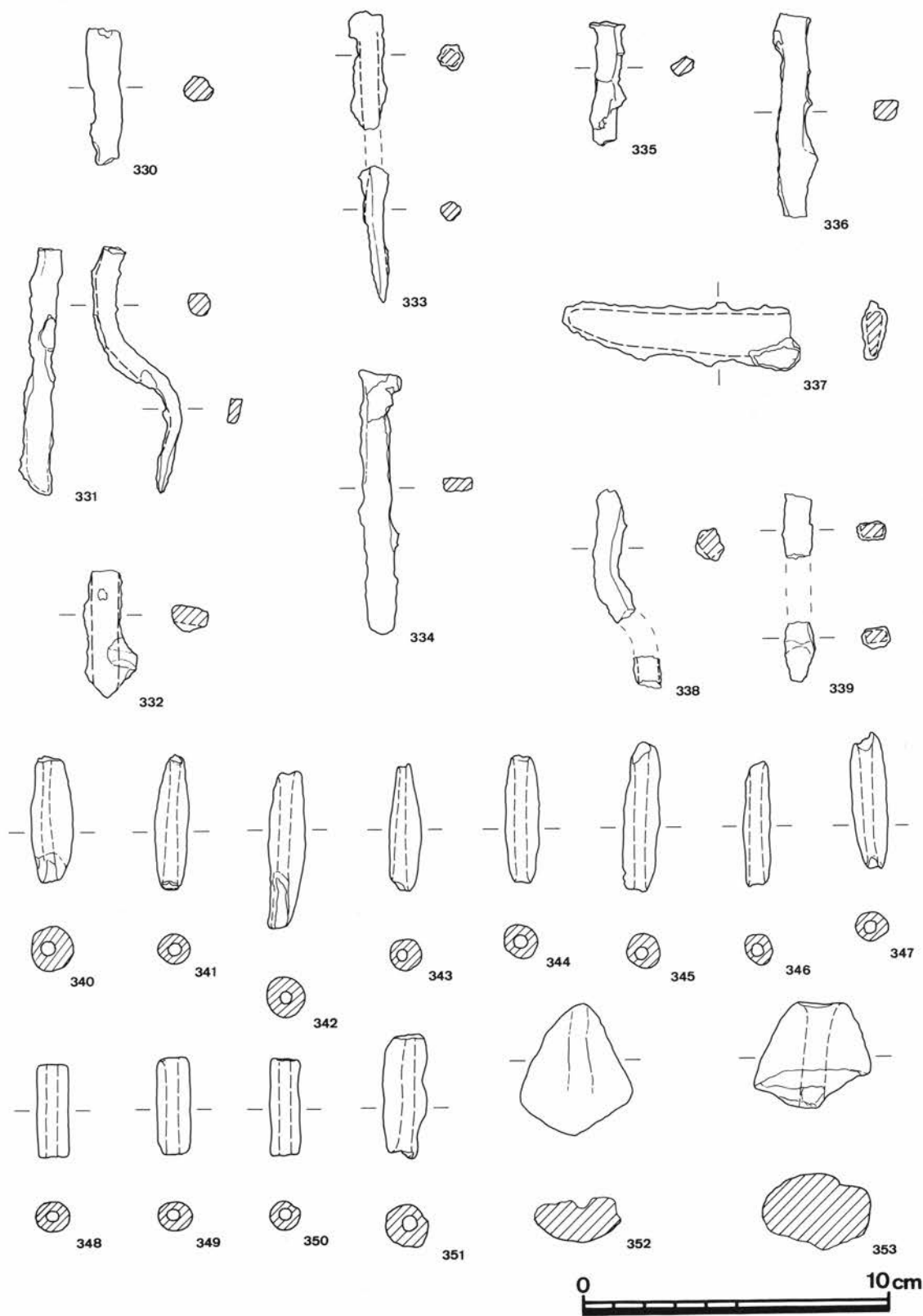


0 5cm



0 5cm

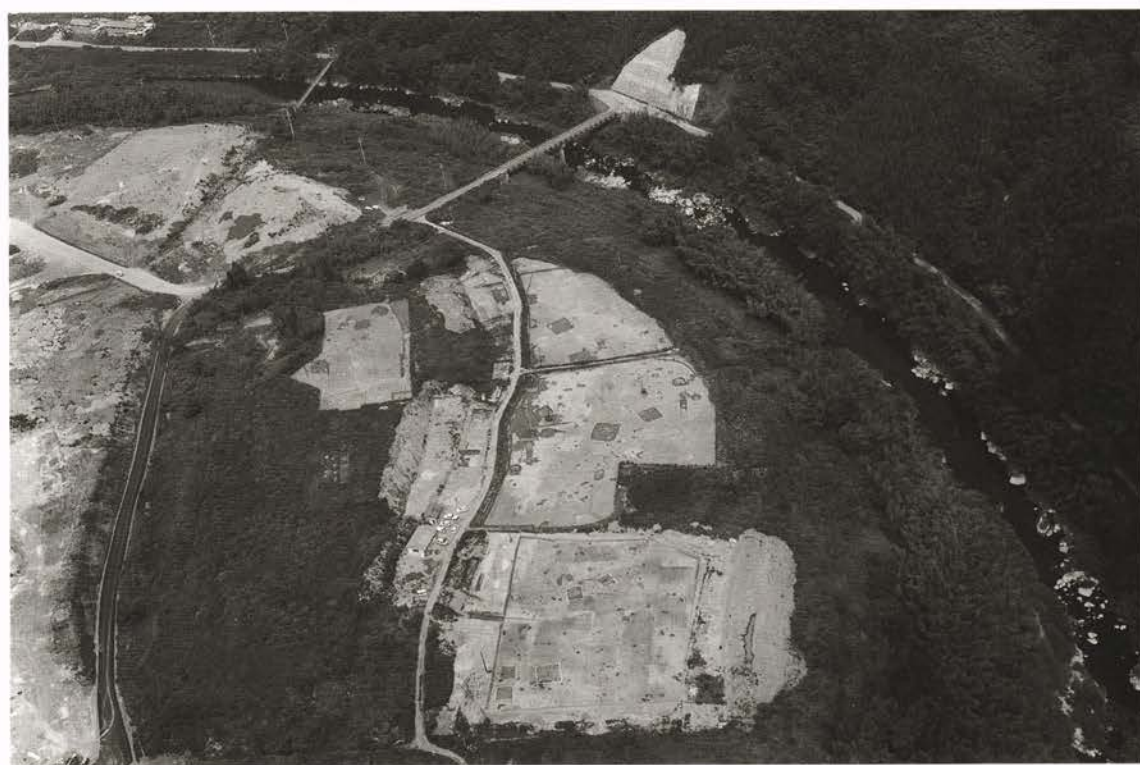
石製品実測図



鉄製品・土錘実測図



(1) 空中写真 (南西から)



(2) 空中写真 (南東から)



1次調査区・2次調査区空中写真（南東上空から）



(1) 調査前風景（西から・天稚神社を望む）



(2) 調査前風景（南東から・集落を望む）



(1) 第2次調査検出住居跡（北から）



(2) 竪穴式住居跡SH9001（南から）



(1) 竪穴式住居跡SH9002 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡SH9003 (西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9004 (南から)



(2) 竪穴式住居跡SH9005 (北東から)



(1) 第3次調査区遠景（北西から）



(2) 竪穴式住居跡SH9101（北から）



(1) 竪穴式住居跡SH9102 (北西から)



(2) SH9102竈 (北西から)



(1) 竖穴式住居跡SH9103 (南西から)



(2) 竖穴式住居跡SH9104 (南西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9106 (南西から)



(2) SH9106竈 (南西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9111 (南から)



(2) SH9111竈 (南から)



(1) 竪穴式住居跡SH9112 (西から)



(2) SH9112竈 (西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9113 (南から)



(2) SH9113竈 (南から)



(1) 竪穴式住居跡SH9113・SH9115 (西から)



(2) 竪穴式住居跡SH9115 (南西から)



(1) SH9115竈検出状況（南西から）



(2) SH9115竈（南西から）



(1) 竪穴式住居跡SH9114 (南東から)



(2) SH9114竈 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9116 (南から)



(2) 竪穴式住居跡SH9117 (西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9118 (西から)



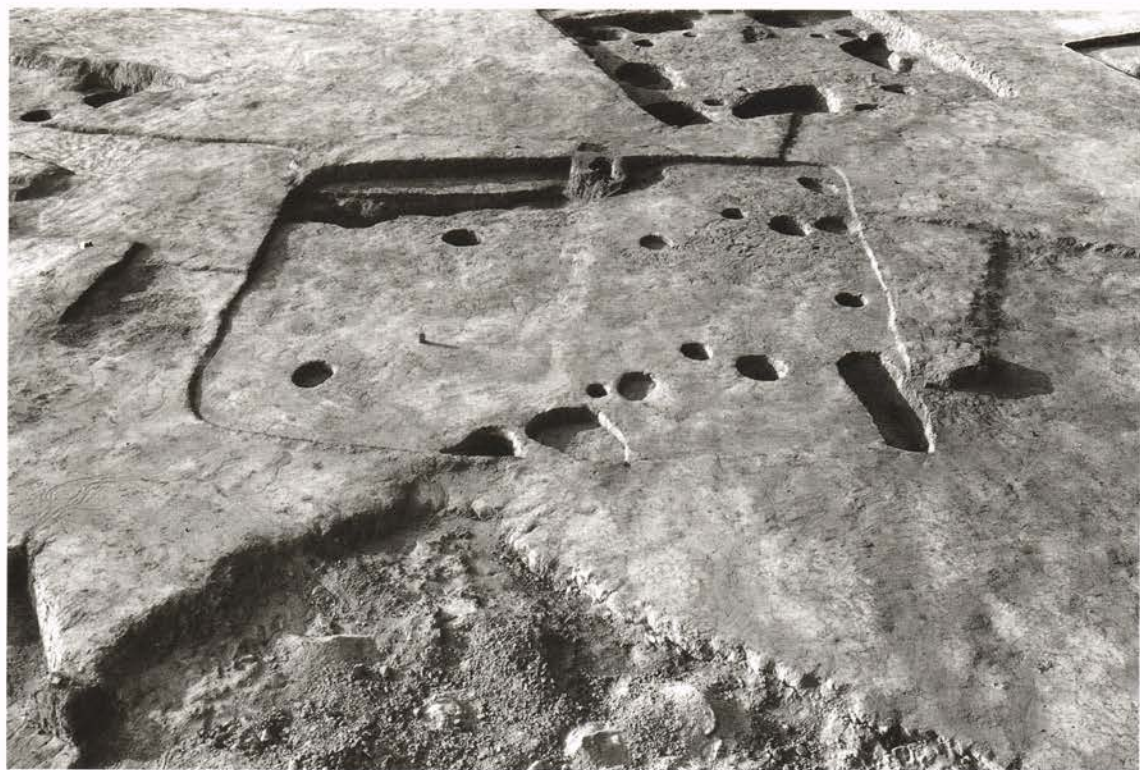
(2) SH9118竈 (西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9122 (南東から)



(2) SH9122竈 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9127 (南東から)



(2) SH9127竈 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9128 (北東から)



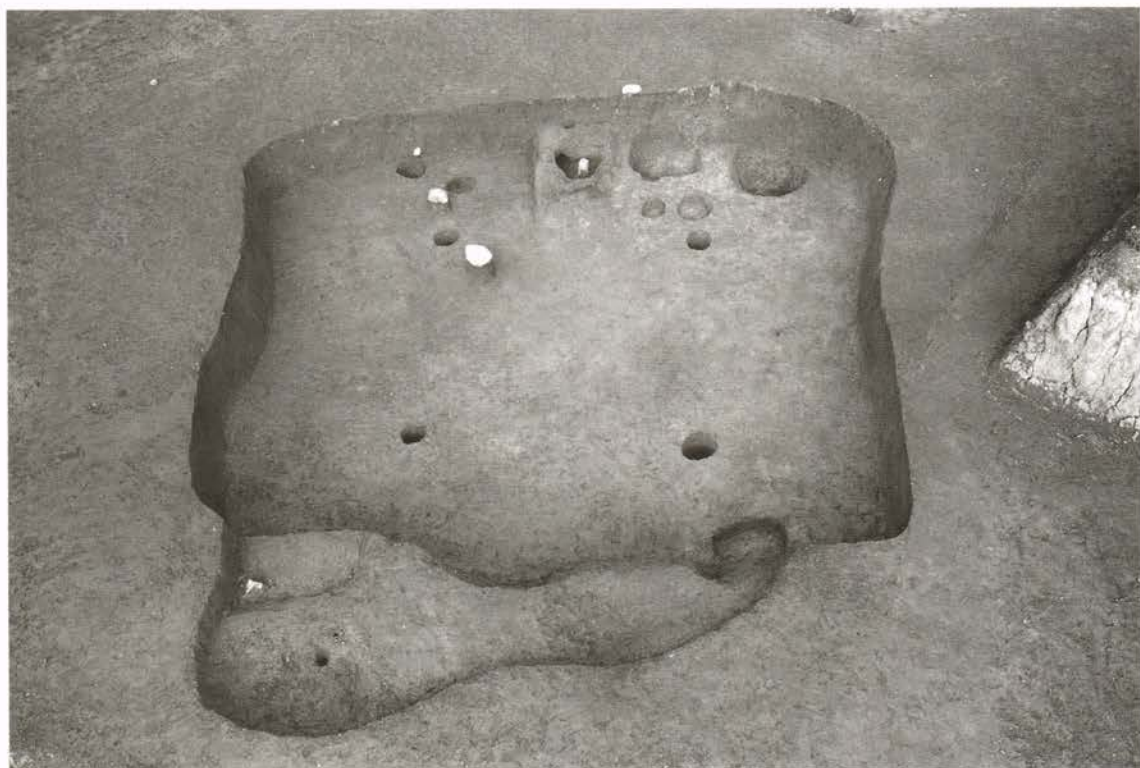
(2) SH9128竈 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9130 (南から)



(2) SH9130竈 (南から)



(1) 竪穴式住居跡SH9140 (西から)



(2) SH9140竈 (西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9141 (東から)



(2) SH9141竈 (南から)



(1) 竪穴式住居跡SH9105 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡SH9119 (南東から)



(1) 竖穴式住居跡SH9120 (南東から)



(2) 竖穴式住居跡SH9121 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9123 (南から)



(2) 竪穴式住居跡SH9124 (北西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9125・SH9126 (東から)



(2) 竪穴式住居跡SH9131 (北西から)



(1) 4次調査区全景 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡SH9201 (北東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9202 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡SH9203 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9204 (南東から)



(2) SH9204竈 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡SH9205 (南から)



(2) SH9205竈 (南から)



(1) 条里状地割り調査トレンチ（北から）



(2) 掘立柱建物跡SB9021（北西から）



(1) 掘立柱建物跡SB9022 (南東から)



(2) 掘立柱建物跡SB9023 (南東から)



(1) 掘立柱建物跡SB9221 (南西から)



(2) 掘立柱建物跡SB9222 (北西から)



(1) 井戸跡SE9015上層（北西から）



(2) 井戸跡SE9015中層（東から）



(1) 井戸跡SE9015下層 (南東から)



(2) 井戸跡SE9015完掘状況 (南東から)



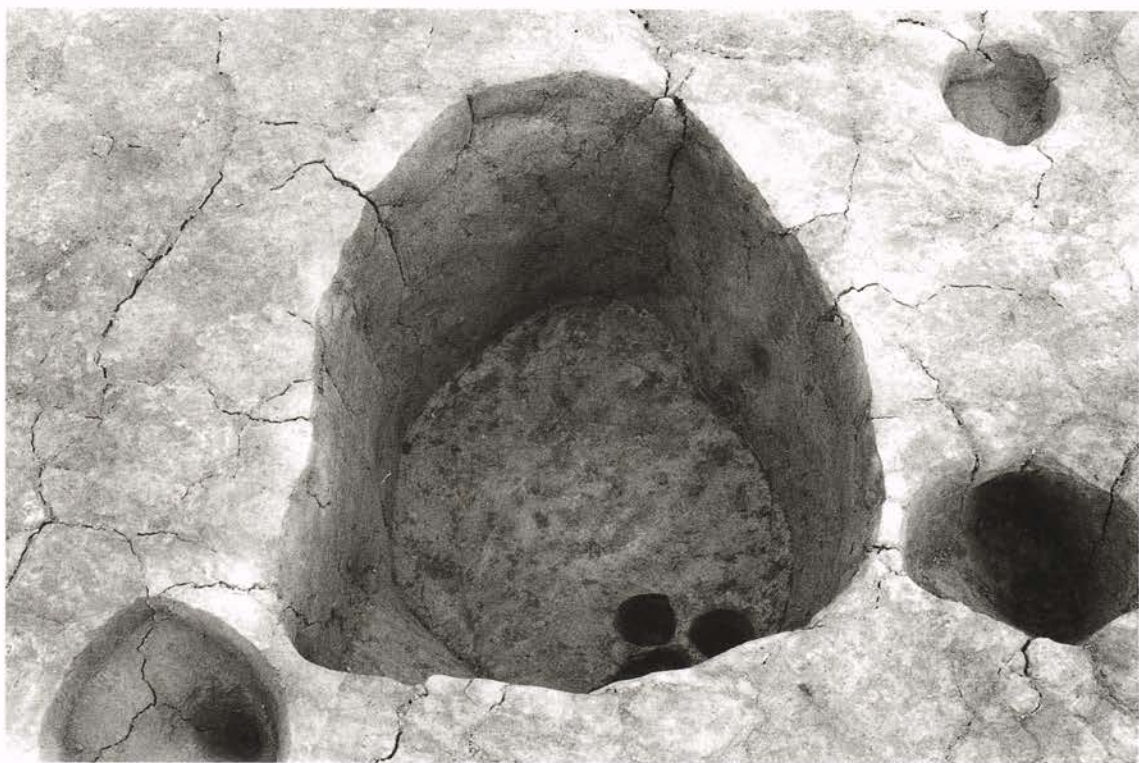
(1) 土坑SK9006・井戸跡9015（北東から）



(2) 土坑SK9011（北西から）



(1) 土坑SK9129 (西から)



(2) 土坑38d-SK10 (西から)



(1) 土坑SK40j-P4 (南西から)



(2) 土坑35e-SK4 (西から)



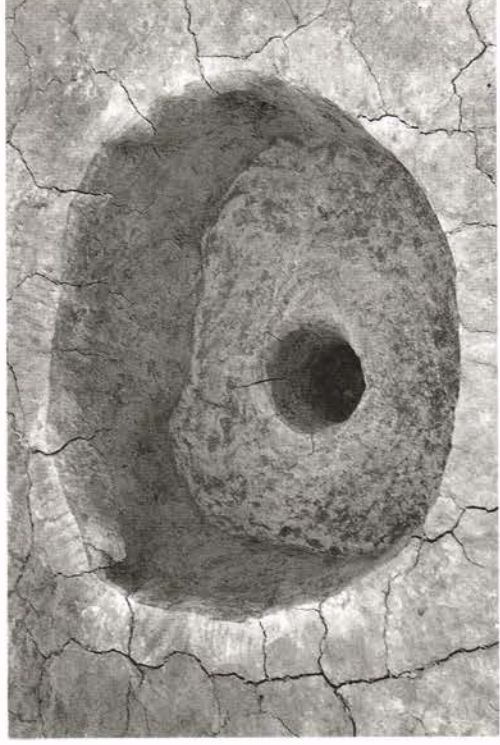
(1) 陥穴復原風景 (南から)



(2) 陥穴遺構SK40b-P2 (南東から)



(3) 陥穴遺構SK40b-P1 (北から)



(4) 陥穴遺構SK41b-P9 (南東から)



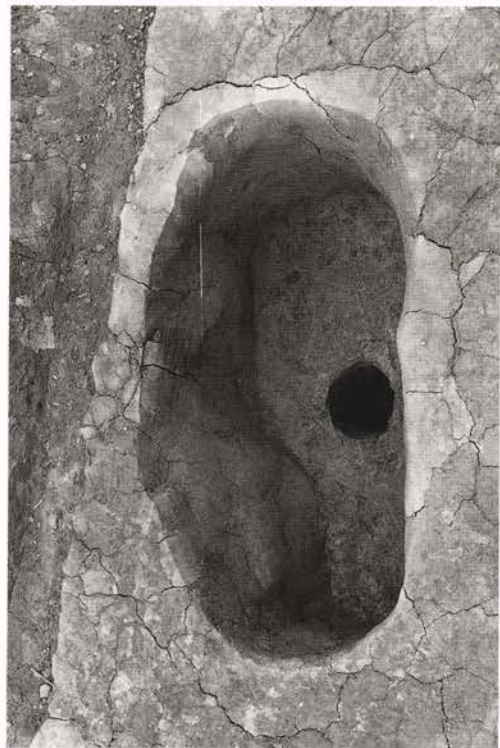
(1) 陥穴状遺構SK36i-P2 (東から)



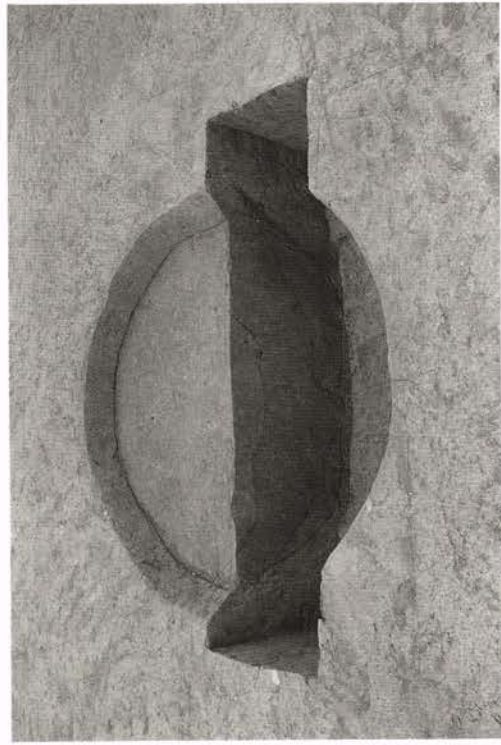
(2) 陥穴状遺構SK37i-P3 (北西から)



(3) 陥穴状遺構40a-SK3土層断面 (東から)



(4) 陥穴状遺構40a-SK3 (北から)



(1) 陥穴状遺構SK46i-P1土層断面 (南から)



(2) 陥穴状遺構SK46i-P1 (南から)



(3) 陥穴状遺構SK40h-P7 (北から)



(4) 陥穴状遺構SK40h-P7 (東から)



(1) 陥穴状遺構41d-SK1 (南西から)



(3) 陥穴状遺構SK42e-P2 (北から)



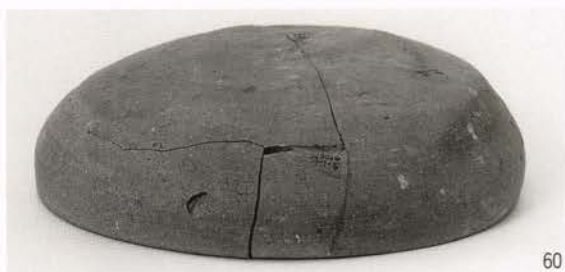
(2) 陥穴状遺構SK42b-P2 (南から)



(4) 陥穴状遺構SK42h-P1 (南西から)

















207



211



204



203



218



212



214



225



224



190



251



252



253



248



249



255



274



260



262



275



266



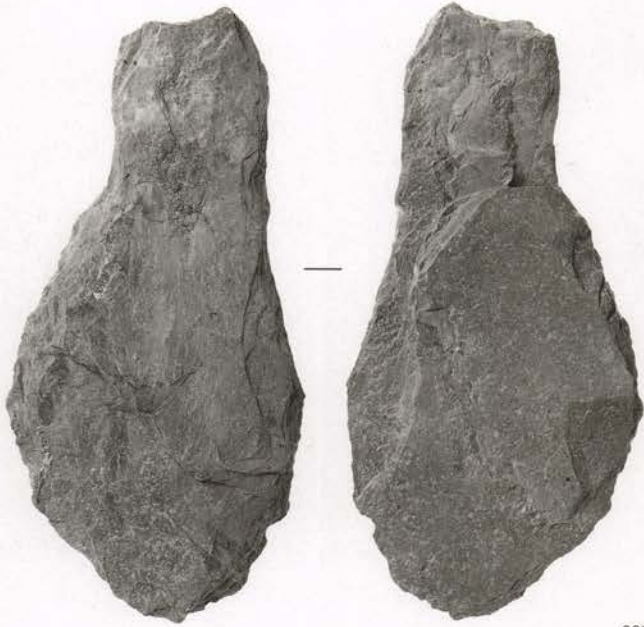
276



269



288~313



322



315



314



316



317

318

縄文土器・石製品 (その1)



325



323



324



321



319



320

328



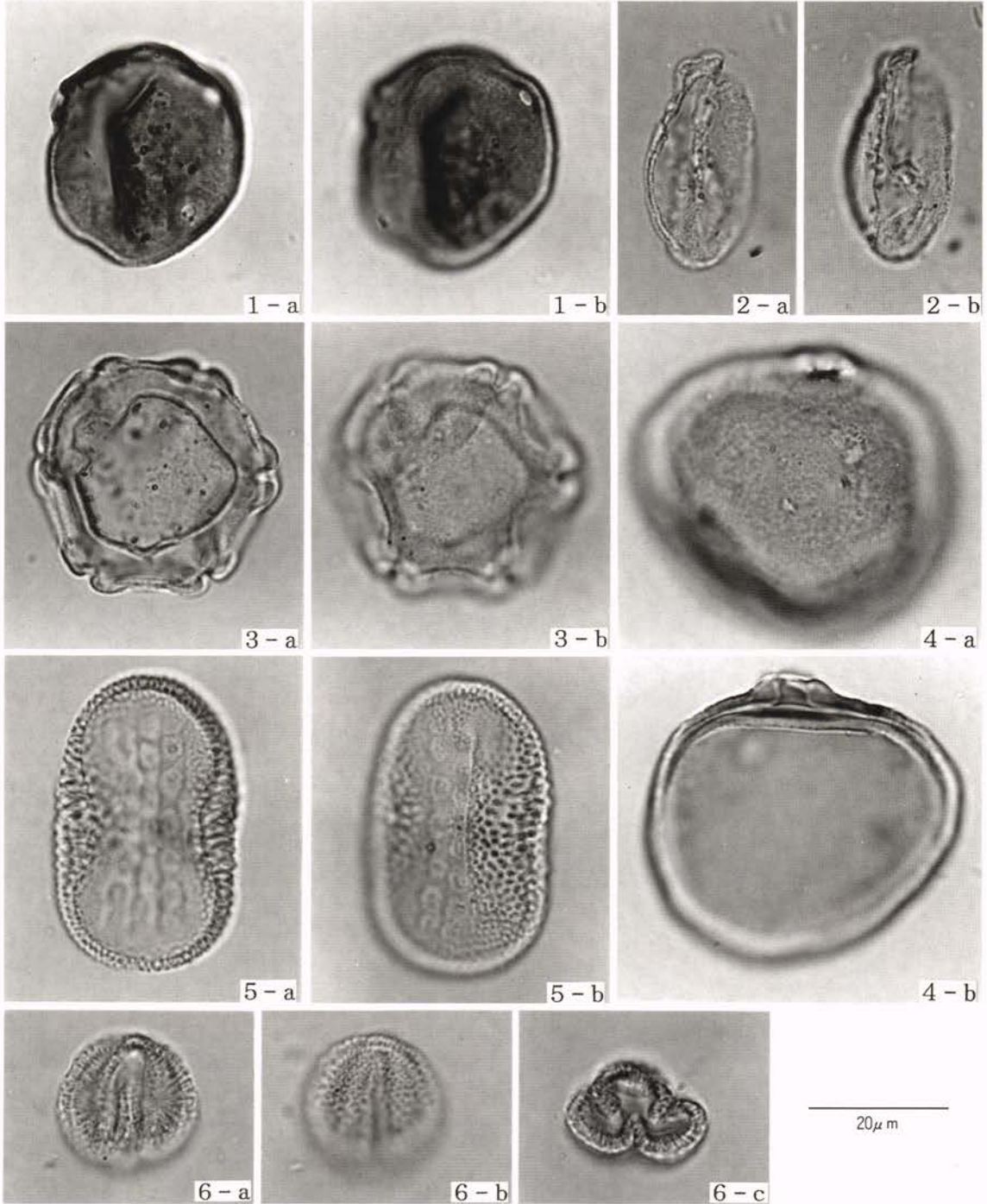
329



326



327



天若遺跡の花粉化石

- 1 : クマシデ属—アサダ属 PLC.SS 1027 試料SH9106
 2 : トチノキ属 PLC.SS 1025 試料SH9106
 3 : ハンノキ属 PLC.SS 1023 試料SH9106
 4 : イネ科 PLC.SS 1028 試料SH9106
 5 : キツネノマゴ属 PLC.SS 1030 試料SH9117
 6 : アブラナ科 PLC.SS 1026 試料SH9106

京都府遺跡調査報告書 第20冊

平成6年3月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel (075)441-3155 (代)